391-60
1200600668633

×
複写

始

西鶴の研究

文學士　鈴木敏也著

Nishiwa

序

奇警な觀察、輕妙な行文で元祿時代の世相人情を描寫した西鶴の浮世草子が、國文學上に於ける一大産物であることはいふまでもない。但し飽くまでも定規に律せられない奔放洒落な性質は動もすれば淫靡な文字を列ねて憚らぬのである。之が爲に其の書は博く人に讀まれぬのであるが、文藝研究者はどうしても、之を逸してはならぬ。本書の著者鈴木君は德川文藝史の研究に熱心な人で教鞭を執る傍、常に孜々として其の研鑽に努力せられ、曩に雨月物語の評論註釋を著されたが、今又其の研究の一端を洩して、本

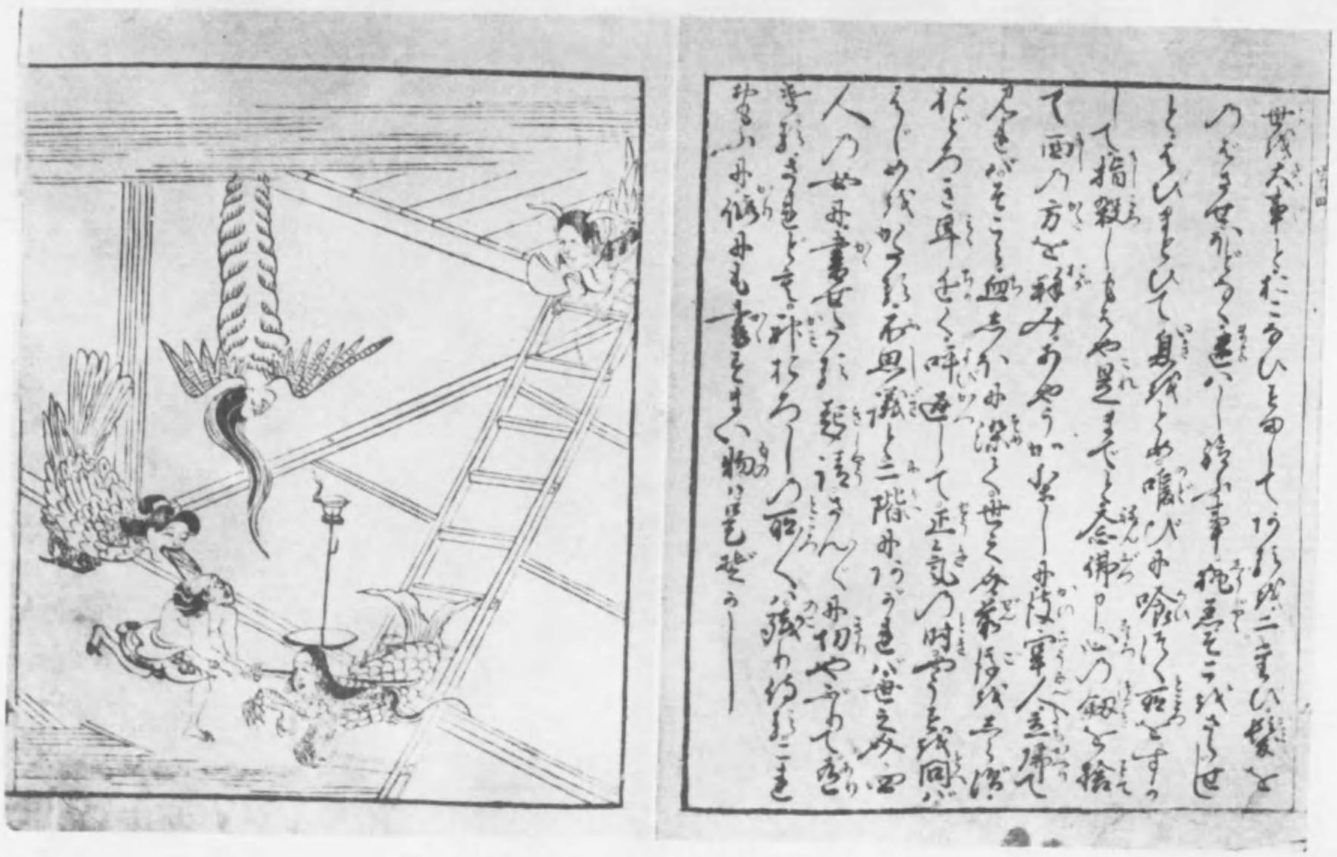
391
60
I種
W
1200600668633

書を成されたのである。余は君が研究の日に進むを喜び、尚續々其の蘊蓄を披瀝せられることを望むのである。因つて一書を題した。

大正九年二月

芳賀矢一しるす

井原西鶴小伝



『好色一代男』　夢の太刀風

序言

本書は井原西鶴の全創作に亙り、先づその基調によつて分類し、次にその主要なるものをとつて一々論評を加へ、最後にこれを總括したものである。從つてその前後に於ける思潮に就ては僅かに文藝史上の元祿時代を概觀しただけに過ぎない。よつて一般の趨勢を知るため、こゝに當代小說界の傾向を略敍しようと思ふ。

わが近世文藝史上には二大盛時がある。一は元祿享保を極點とする上方文學であり、他は文化文政を中心とする江戸文學である。而してこの中間に介在する明和安永の交は、所謂文藝東遷期である。

これを作品の上から云へば前者は浮世草子の時代であり後者は讀本の時代である。更に作家に就て云へば一は西鶴を以て代表され、一は馬琴を以て代表される。私はこ

の讀本の時代（洒落本や滑稽本もかなりに盛んではあつたが）たる江戸文學を今こゝで說かうとはしない。たゞ西鶴の藝術が文壇の核心をなして居た前後の狀況のみに就て考へたい。

私はこの上方文學の基調に想到するとき、極めて大體から見て「現實謳歌の文學」と呼ぶのを最も妥當とする。凡てが現世の憧憬であり惝怳である。所謂うき世の讃美と味得とにその全生命を賭した姿である。

この期間、凡そ百五十年に行はれた、小說界の變遷推移の跡を辿つて見ると、次のやうに區分し得ると思ふ。

一、前期、假名草子の時代、（寬永から延寶まで凡五十年）

二、中期、浮世草子の時代、（天和貞享から元祿享保まで凡五十年）

1、浮世草子の建設、（西鶴の全盛期）

2、浮世草子の轉機、（西鶴沒後の趨勢）

3、浮世草子の新彩、（八文字舍本）

三、後期　文藝東遷期、（元文から明和安永まで凡五十年）

前期は近世小說の黎明時代であり、中期は極盛時代である。而して後期は卽ち江戸文學の曙光に當り、上方文學の側から云へば浮世草子の衰亡期（元文以後の八文字屋本は僅かに文壇に餘喘を保つ有樣であつた。或は書肆の名によつて吉文字屋時代と云つた方がよいかもしれぬ）であり、一方讀本の萠芽期でもあつた。

かく西鶴の出るまでには、泰平の風が吹きそめてから五十年であつた。長い戰亂の惡夢から覺めた慶長元和の頃から、學術の復興につれて文學の分野も日ましに春めいて來た。然しその創作は未だ室町末期の御伽草子の亞流で、純然たる前代繼承のそれに過ぎなかつた。女物語としての恨の介、薄雪物語、花の緣。稚子物語としての藻屑

物語。仇討物の堀江物語、寺社縁起を主材とする宮戸川物語はその重なものであるが、いづれも單純な戀を絡んだ幼稚な物語草子の類であつた。

しかし一方には宗教的色彩を帶ぶ濃い流れがあつた。痛ましい現實の姿を曝露した。戰禍の悲哀を、しみ〴〵と體驗した人々の中には、この無常と轉變との理法を衆生に教示せんと試みたものが居た。その作には三人法師物語の系統をひく七人比丘尼、小倉物語があるが、鈴木正三の二人比丘尼、因果物語の二篇はその代表的作品であらう。

教法弘布の目的小說と共に啓蒙訓誡の教訓的作物のあるのは、時代から考へて當然の事である。如儡子の可笑記は遠く徒然草の顰に倣つた隨筆風のものであるが、對象の世界から見て浮世草子の俑をなしたと云はれて居る。山岡元隣の小巵、誰が身の上もこの部類に屬する。

武門から佛道に逃れた人の中、當代の作家としての第一人は淺井了意であらう。教訓物としては堪忍記、本朝女鑑があり、特に浮世物語の遊蕩的色調と滑稽的風趣とには浮世草子の先驅たるの感がある。又旅行文學としての東海道名所記は竹齋草子の影響はあつても、遙かに洒落本と呼應し、わけて膝栗毛を起した功績は決して僅少なものではない。然し了意の名を永久に鏤刻したものは御伽婢子及びその續篇狗張子である。この怪異小說は半ば支那稗史の飜案であるが、この種の超自然的風格は長く近世文學の一要素を形成した。風を望んで怪異系の百物語、御伽物語は踵を接して起り、かの讀本の源流の一は必ずこゝに搜らねばならない。

この外、時代と密接なる交渉を把持する軍記物が、數量に於てかなりの場面を占めて居るが、文學的評價に至つては極めて低いものである。

西鶴の現れたのは恰度この頃である。天和二年に好色一代男を出してから爾來十年間、時に應じてその取材を異にしたが、その創作的生涯は浮世草子の建設にあつて上方文藝の極盛期に終始した。かくて彼がこの世を辭する元祿六年には、既に文藝思潮

の旋回期が初まつて居た。而して、その一轉機が行はれる頃卽ち元祿寶永から享保にかけての創作界の主潮は好色本、事實小說、敎訓小說、及び怪異小說の四種を出でなかつた。

「好色本」の流れには、先づ一代男の影響を蒙つた類本を見た。浮世榮華一代男、風流吳竹男はその重なるものである。わけて和漢遊女氣質、（榮華世繼男）は女護島へ渡つた後の世之介を敍し、更にその遺孤の一生を述べ、近松の國姓爺との關係をも偲ばせる特異の作品であつた。しかし、これらは、むしろ惡寫實中心の作で、頽廢せる時代の裏面を語るものである。これと全然基調を同じくするものに、女性中心の作品たる「傾城草子」がある。當世乙女織、色縮緬百人後家はその尤なるもので、多少享保期の「氣質物」への橋渡しの感がある。かく好色本の遊里情調を遵奉するものと同じ境地にありながら、古典と結合して著しく傳奇的色彩を帶ぶ一群の創作があつた。前の傾城草子と相對して「風流草子」と呼びたい。御前義經記、女大名丹前能、風流今平家等はこれである。取材と構想との新奇と巧緻とによつて一生面を開いたが、底を叩けばこれもまた現實謳歌の好色本にすぎない。而してこの古典に所緣を求むるの風が、こゝに源氏物語の俗語譯を生じた事も注意すべき現象であらう。

巷の噂、辻の聞書を小說の題材とするは當代に初まつた事ではない。西鶴の五人女の如きはまさしくこれである。たゞ事實を仕組んで一篇を作成するの風がこの頃に至つて著しく人目を惹いたのである。

時代の享樂と淫佚とを背景として「心中物」（諸國心中女、風流夢浮橋、心中大鑑、新色五卷書等）があり、平民の勃興につれて驕奢と歡樂とに惑溺した結果、零落となり破產となる榮枯の世相はこゝに「榮華物」（榮（からなし）大門屋敷の淀屋事件、御入部伽羅女の大黑屋事件、傾城竈昭君の茨木屋事件、椀久一世物語の椀久等）を生じた。更に社

會の中樞たる武士の眞諦を語るものに、「仇討物」（石井兄弟龜山仇討を題材とする東海道敵討元祿曾我、赤穗事件の傾城武道櫻）の現はれたのは自然の勢である。而して、この復仇の義が淫蕩たる時代の姿繪に結びついた時、こゝに不義密通を源因とする女敵討なる社會現象を生じた。この特殊世相を題材とする作品「女敵討物」（京縫鎭帷子、熊谷女編笠、亂脛三本鑓等）を忘れてはならぬ。

教訓小說にあつては立身大福帳、子孫大黑柱、日本新永代藏等を數へる事が出來るが町人生活を對象とする點に於て西鶴の町人物の系統にあるものと云ふ事が出來る。しかしこの種のものは作品の本質上遠からずして文學の埒外に逸し、修養書心學の方面に流れ去つた。

更に怪異小說の方面を見るに御伽婢子以後有力なる分野を占め、西鶴にも少なからぬ感化を與へたが、その後も縷々として絕へず、遂に英草紙となり繁夜話となり、雨月物語を起して後世讀本の一大要素を作つた。

要するに西鶴歿後の小說界に大なる作品はない。卽ち作家として當時を代表する北條團水、西澤一風、錦文流、都の錦、靑木鷺水等、いづれも大器あるものではなかつた。たゞ在來の浮世草子に慊らず常に新味を出さうとして、努力した形跡は認められる。構成の複雜と取材の擴張とはその結果であつた。しかし一世を劃すべき何物の收穫もなくして享保期に入り、遂に江島其磧をして「氣質物」創始の功を收めしめた。しかしこれも仔細に檢すれば西鶴の摸倣改竄の痕が歷々として指摘せられる。氣質物を浮世草子の一新彩と云ふも單に構想上に止まり、眞個の新文學は江戸時代を俟たねばならなかつた。

以上の簡單なる記述さへ、大方に對しては旣に蛇足かも知れない。しかし西鶴の名

の喧傳せられて居る割にその作は讀まれて居ない。從つてその評價も甚だ的確を缺くやうに思ふ。祖國文學の開拓のために此の一小著が幾分でもこの方面の陳呉たるを得ば幸である。

大正八年冬

廣島の寓居にて

穗華

凡例

一、本書は「現代謠歌の文學」なる名稱の下に、上方中心時代の小說を取扱つた中から、西鶴の部分だけを抽き出してとり纏めたものです。

一、從つて小說史としての推移の跡や、西鶴の史的地位を見るに不備な所が出來ました。其點は卷頭の「序言」によつて缺陷の幾分を償ひたいと思ひます。

一、且、時代の背景を眺める上にも甚だ慊らないと感じますがこれは卷末の「西鶴年譜」を幾分かの參考として頂きたい。

一、西鶴年譜とは云ふものゝ、西鶴の事蹟はほんの附けたりに過ぎませぬ。私はこれによつて當時の學藝界の消息を知り、彼此對照してある興味を惹起し、多少なりとも時代の影を髣髴し得ればそれで澤山だと思ひます。處々に加へた學藝以外の事項や西歐文學に關する二三も、興味から來た添書なのです。

一、云ひ落してはないない事は「西鶴の研究」と云ふ題名です。御覽の通り彼の小說だけを取扱ひました。それ故「人としての西鶴」にも「俳人としての西鶴」にも觸れて居ません。又創作でも一日玉鉾のやうな紀行や、三所世帶や眞實伊勢物語のやうなものはわざと遠慮致しました。

一、作品には直接ぶつかつて行つて自分で捉へ得ただけを纒めたのにすぎませぬ。大方の御叱正を願ひます。中には恩師藤村博士の御話に啓發されて、それから發足した點も多々ある事を誌して、感謝の意を表します。

一、最後に本書の刊行に關しては、序文まで下すつた、芳賀先生を初め、西村眞次氏及び同窓の友、文學士石山徹郎君にいろ〳〵と御面倒をかけた事を明記して茲に御禮を申します。

著者しるす

西鶴の研究目次

第一章　序說――文藝史上の元祿時代　三

第一節　革新文學

所謂元祿時代――目覺めたる近世日本――時代の影――自由精神の勃興――學術と文藝――文藝思潮の旋回期――革新文學の三巨人――芭蕉とその傑境――巢林子とその藝術――巢林子と西鶴――三人の人生觀照。

第二節　浮世草子の意義と傳統　一〇

現代謳歌の世相――うき世の意義――低級なる享樂趣味――今樣とうき世――浮世草子の名稱――遊里に關する記錄――細見評判記の轉化――「たきつけ、ゑくぼ、けしすみ」――其內容と文章――「浪花鉦」――種彥の解說――「諸分店蓙」と「鼻粟鹿子」――一代男のある挿話と其出典――その他の特殊文藝――西鶴が浮世草子の徑程――浮世草子の稱呼と八文字屋本。

第二章　小說家としての井原西鶴

第一節　俳諧師から小說家に　一六

西鶴の閲歴——俳諧師としての彼——彼の俳諧と浮世草子と——その內實的關係——小說家となりし素因——外因と內因。　一六

第二節　作品とその轉向　二〇

創作年表——作品の分類——好色本——武家物——町人物——その他の創作——轉向とその時代——その動因——外界の刺戟と內的衝動。

第三章　西鶴の創作　一、好色本　二四

好色本の意義——好色とすき心と耽溺と——時代の反映と享樂——泰西近代文學の頽廢的色調との差異。

第一節　「一代男」梗概　二五

「好色一代男」の世之介の一生——時代的區劃——前紀——幼年及び少年時代——遺傳的早熟——中紀——十八歲以後——遊蕩を中心とせる漂泊者の手記——戀の冒險者——地方色と境遇とを背景とせる女——後紀——三十四歲以降——遺産相續——大盡として——女護島へ。

第二節　「一代男」評論　四一

一代男の構想——その批評——ヰタ・セクスアリス——長篇小說としての缺點——無脚色の小說——人間の記錄——背景描寫の濃彩——興味中心の作風——遊里描寫——時代の享樂的方面——大夫品定め——元祿遊蕩兒の理想——情趣の味得と歡樂の飽滿——好色本の粹人と人情本の蕩兒——時代の實相——小說としての明暗兩側面。

第三節　「一代男」の古典準據說に就て　五六

一代男と「源氏物語」——全般的類似——部分的類似——類似の限界——佐々博士の說——西鶴の學殖——「伊勢物語」との交涉——古典準據說の極限——貴族文學と平民文學との距離——光源氏と世之介——その女性關係の相違——事實上の粉本——一代男の中樞。

第四節　「二代男」と「三代男」と　六五

創作の動機——「好色二代男」の構想——「諸艶大鑑」の名——背景の過重と作者の閲歴——情話の二様式——その一、無脚色の小話——説話核心の移動——短篇小説として の缺陷——内容と頽廢的氣分——取扱の範圍——その二、脚色ある小話——一代男の世界と二代男の世界——寫實と想像——二代男の超自然的分子——二代男の淋しみ——「好色三代男」の構想と特質——幻滅の悲哀——男性を主人公としたる好色本——年代と價値。

第五節　「一代女」梗概　七四

女の世界——梅津河畔の好色庵——色懺悔——公卿の亂——初戀——浮き川竹に——廓の全盛——榮枯一炊——朽ちゆく身——淪落の女——たはぶれの歌船——女の身過——浮氣の袖——漂浪生活——どん底へ——皆思はくの五百羅漢——發心。

第六節　「一代女」評論　八四

一代女の第一印象——淪落への徑路——頽廢の人——境遇と性格變化——内面的推移の描寫——外的變化——理想的肉體美——肉の衰へ——流れの女としての閲歷——其取扱ひ——脚色上の不備と特殊的場面の興味——同一筆法の反覆——場面の不統一——局部的描寫の妙趣——生活不安の暗愁——美の誘惑——小説と風俗史料——一代女の價値——西鶴の創作過程——説法的口吻——女主人公と自己觀照の寂しみ

第七節　「五人女」梗概　九四

五種の短篇小説集——事實の藝術化——(一)、お夏清十郎——戀の湊——花隆の獅子舞——無實の罪——お夏狂亂——笠がよう似た——(二)、樽屋おせん——鞘宮筋の伊勢詣——新世帶——意地と戀——(三)、おさん茂右衛門——姦の關守——運命の戯れ——戀の漂泊——粟田口——(四)、お七、吉三——火の車——常香盤の鈴落ちて——雪の夜——少しの烟——惜しや姦——(五)、おまん源五兵衛——つれ吹きの笛——衆道——戀のさせた男姦——めでたき戀。

第八節　「五人女」評論　一〇一

五人女の主要情調——その脚色——「お夏」の戯曲的構成——その長所と短所——「お七」の宿命——「おせん」の構成上の缺陷——「おさん」の脚色——弱き女の一生——部

分的妙所――「おまん」に於ける興味――五人女の特徴――悲哀感――道徳の影――教訓的口吻――通俗趣味――粋な神様――基調との不調和――ふざけた人生觀照――結論。

第九節　「五人女」に現はれたる戀と元祿の女性　一二三

肉より戀へ――初戀の女――春の目覺めのお七――あるかなきかのとげ――おりん――お夏――おまん――西鶴の描ける戀の娘――成女の戀――意氣地――わがまゝ――おせんとおさん――精神的洗練の缺如――元祿の女――瀰漫せる遊女的素質――世相の半面。

第十節　「五人女」の史實と同一題材の作品　一二九

五人女の題材と出所――巷の噂――お夏の事實――戲曲に現はれたるお夏――近松の「獄念佛」――小說に於けるお夏――唄物のお夏――お夏の容姿と「亂脈三本鍵」の挿話――おせんの事實――唄物のおせん――「事實譚」のおせん――おさんの事實――近松の「戀八卦柱暦」――「心中大鑑」の石津屋事件――おさんを描いた西鶴と近松――「醜染浮名の色衣」――お七の事實――「天和笑話集」と「江都著聞集」――唄物と戲曲とに見えたお七――この種の數篇……事實の美化――おまんの事實と實疑――近松の「薩摩獄」――小唄及び俗謠に於けるおまん――戲曲の方面――記錄と年代――西鶴の題材取扱法。

第十一節　「本朝若風俗」の世界と其情趣　一三五

色相世界の轉換――「男色大鑑」の名稱――その序文――女道から衆道へ――轉換の素因――官憲の壓迫と改眼――衆道に對する武士の感想――在來の稚子物語――戰爭と平和――小姓と若衆――「本朝若風俗」に於ける二つの世界――武邊の念友と歌舞伎の踊子――念友と道義――その一例――武士氣質の一面――武家物の特例――若衆生活の情趣――風俗の精寫――小說の背景の强調――作の前半と後半との差異――史的觀察から――念友より若衆へ――武士の墮落――若風俗の文章――支那故事の濫用――その效果。

第十二節　好色本の世相と性欲描寫　一四六

描かれたる世の姿――二個の對象世界――遊里と市井――情慾の交錯――緩和せられた「性」の生活――遊里情調――刹那の氣分――好色と戀愛――好色生活と性欲――遊里と當代の階級制度との關係――遊里の制約――意地となさけ――了解と同情――わけの聖――粋への道――市井に於ける戀の一群――戀愛生活の一面――作品に對する俗衆の興味――核心的要素の圏外――西鶴の性欲描寫――物語風から印象的に――人情本との比較――性欲描寫の價値――「世界の醜化」と西鶴との距離――「眞」の文學と遊戯的文字――所謂てんがう書――輕佻浮華の態度――性欲描寫は疣贅なり――その他の諸問題。

第四章　西鶴の創作　二、武家物　一五七

武家物としての三篇――武家物の基調――創作過程の變化とその原因――自然の徑路

第一節　仇討を中心とせる「武道傳來記」　一五八

復仇の觀念――復仇の意義――その動機――傳來記に現はれたる復仇――その原因と意氣地――曲解せられたる武士の體面――原因としての戀愛關係――傳來記に於ける敵役――仇討に對する邦人の美的幻影――傳來記の構成――その一例「身體を破る樂書の團扇」――仇討の解釋――西鶴の仇討觀――皮相的見解――武家物を通じて見た西鶴の素性――作家と作品との内的關係。

第二節　「武家義理物語」と道義的觀念　一六九

義理物語の中心思想――所謂武家の義理――情念の抑制――自己滿足の法悦――取扱はれたる説話――悲壯美――内容と形式との軒輊――調和せるもの丶例――「約束は雪の朝飯」――義理物語に現はれたる武士の多數――近代武士の身持――對象となれる時代――尚古癖――過去憧憬とその素因――西鶴の武士觀――武士の本領と遺傳及び個性――不徹底な節義の觀念――その例――穿き違へ の武士道。

第三節　武家物としての「新可笑記」と其特質　一七九

「新可笑記」と云ふ題名――題材とその色調――中心思想の缺如――變化ある題材――内容と形式との矛盾――特質――支那臭味――故事成語の引用――缺陷多き作品。

第四節　武家物の對象と西鶴の人生觀照　一八三

剛と柔とのディレンマ――そこに囁く武士の詩――頽廢せる武士と念友――個人中心の態度――狹義なる道念――念友から買笑に――武士の惑溺と作者の悪辭――西鶴の色眼鏡――武家物作者としての西鶴の弱點――言論と事實――武士を解せざる人――武家物に挿入せる女房氣質の敍述――巧妙の筆致――核心との不整――武家物と超自然――當代迷信の半面――西鶴の怪異觀――因襲的觀察――武家生活と怪異――後世の讀本。

第五章　西鶴の創作　三、町人物　一九二

町人の世界――作家の閲歴と作品との關係――西鶴の平民生活――町人物としての作品。

第一節　「日本永代藏」に現はれたる町人の處世法　一九四

階級制度の世――町人の理想――分限に至る道――長者丸の處方――當代の經濟思想――蓄財と散財――時代と貨殖の法――所謂才覺――商人の心機――一種のマキアベリズム――作品に現はれたる勸懲的氣分――教訓物としての色調――反道德臭味と眞摯なる教訓味――嚴肅なる道念の外――實用主義の處世法――町人生活の契機。

第二節　「世間胸算用」に於ける町人生活の一面　二〇四

胸算用の世界――大晦日を背景とせる町人生活――蓄財家の大晦日――誇張の可笑味――分限者の修業――貧民の大晦日――生活難と世相のいろ〳〵――困窮の素因――大晦日に對する貧民の策略――活社會の照覽鏡――胸算用の小話と構成上の不用意――長所――印象的描寫。

第三節　「本朝町人鑑」の主調　二〇九

町人鑑に現はれたる「機會」――商機の捕捉と才覺――偶發的機會――善根の應報――町人の心掛――教訓的色彩の顯著。

第四節　「生」の欣求と二面生活　二一三

町人の理想――時代の拘束――自由鄕の翹望――幕初の成金と元祿町人――頽廢的世相――ゆくべき路――物質的欲望――町人の信條――理想と現實――矛盾の悲哀――勤勉と歡樂――二面生活の破綻と融合――理想鄕――町人物と好色本との世界――生

の欣求とその態度――野暮と粋――二面生活の憧憬者――狹斜の讃美――一般町人と西鶴。

第六章　西鶴の創作　四、教訓物、その他　二三

好色本から教訓物へ――教訓物執筆の動機――外因としての法令――町觸れと三日法度

第一節　教訓物としての「本朝二十不孝」　二三

二十不孝の名稱――「孝」をすゝむる一助――「新因果物語」の名――各卷に於ける特殊な基調――全般から見た二樣の色彩――現實と非現實――第一の例――平凡な因果關係――偶發的因果關係――第二の例――「孝」の道念の稀薄――特殊なる構成を有する說話二三――對照による「孝」の描寫――善玉惡玉――二十不孝の教訓味――作品の長短――明側――構成上の巧緻――その例――暗側――武士氣質の描寫――その例――創作の態度――五十老爺の分別顏。

第二節　「近代艶陰者」に於ける回避的生活　二三九

近代文學と回避的傾向――近代艶陰者の回避的生活――市隱――自ら勞して自ら食ふ――超俗と變人――その一例――艶陰者の意味――艶の一字――社會相の一面――編述の體裁――不統一――特質の一たる智的要素――引例――理致と情味――文章上の諸要素――生硬なる筆致――全體としての印象――貞享三年と云ふ年――最後の批評

第三節　「懷硯」の對象たる奇談異聞　二三九

懷硯の內容――その賦彩――世話物と怪異譚――世話物の世界――平民の墮落と愚昧――武士の意氣――武士ならぬものゝ氣魂――「案內知つての昔の寢所」と「エノック・アーデン」――世話物に見ゆる教訓――怪異譚と因果の理――單なる奇談――懷硯の二色調と文學思潮との關係――「懷硯」と「筆の初ぞめ」。

第四節　裁判物としての「本朝櫻陰比事」　二四五

櫻陰比事の出典――認序による推斷――取材に對する興味――裁判物に通ずる一特質――罪と罰との外に――法官の威力――類型的說話――單純なる說話構成――事件を醸せる動機――作りものゝ感――中心興味の闡明――「嵯峨のかくれ家」――その系統

——京傳の「優曇華物語」——潤一郎の「祕密」——探偵趣味——總評。 一四

第七章　所謂西鶴本に就て　二五三

西鶴本とは何ぞ。

一、「置土産」——その內容——町人生活の系統——蕩兒の心情——好色本よりも町人物と見る理由——置土産の特殊相——作者に就て——「置土産」と「風流門出加增藏」。

二、「世の人心」——續留の一部分——町人生活の一面——處世法の具體的記述——基調の不統一。

三、「俗つれ〴〵」——描かれたる世相——頽壞と惑溺——卷末に對する質疑。

四、「萬の文反古」——その內容——繰返された題材——低級墮劣の人々——形式上の特質——書簡體——篇末每の附書——說話者の說明——その藝術上の價値——作者に就て。

五、「名殘の友」——二つの主調——俳人の逸話と落語系統の說話——機智と哄笑——

園水の序。

六、「諸國噺」——その內容——百物語の系統——綿細の筆致——憨ふざけの文脈——西鶴と見らるべき可能性——その他の作品——西鶴本出版の動機。

第八章　西鶴が創作の藝術的價値　二六八

第一節　文學的內容としての諸要素と其特質　二六八

西鶴の創作過程——全作に漂る現實的傾向——元祿町人の時代精神——淫蕩と貨殖——經濟問題——人性問題——生の悅樂——超自然的要素——作者の信念と時代の風尙——智的要素——その取扱ひ——人事的要素——現實の姿——感覺的要素——その一面——性交の直寫——彼の缺點——禁慾問題——現代に於ける西鶴の讀者——飲蛇的方策——總括。

第二節　西鶴の文章(形式より見たる特質)　二七九

在來の文章——西鶴の文章——その特質——局部的特質——助詞省略——短句法——省筆——以上の諸點とその效果——摸倣者——全般的特質——印象的筆致——寢式印

象――古典の引用とその奪胎――暢達自在――幽艷なる哀調――その例――景情雙絶――纖細巧緻――風俗資料――藝術の所縁と對象――道行ぶりの文――小説中に於ける律語の價値――ウイット――警句――敍事に挿入せる主觀的語句――文法上の缺陷と創始的文章――文章上の破格とその限界――人稱の桁外し――自他の混用――對象の世界と情調――西鶴の文章の總和的評價――近松と西鶴との比較。

第三節　批判の聲　三〇三

所謂批評なるもの――當代の評判――「元祿太平記」の評言――「西鶴冥途物語」の敍述――「御前御伽婢子」の文言――以上は内容批判にあらず――「燕石襍誌」に於ける馬琴の批評――明治時代の批評――島村抱月の西鶴論と當時の批判――西鶴に對する批難の要點――好色本の部分的章句――一部の西鶴讃美者――現代に於ける西鶴の飜案物――西鶴の價値――時代の人。

補遺　西鶴の摸倣　三一五

一　「一代男」の類本とその末流

二　當代の教訓小説に於ける西鶴の反影　二二九

三　江島其磧が作品に現はれたる西鶴の詞章及び説話　三三四

附錄　西鶴年譜　三五七

目次終

西鶴の研究

鈴木敏也著

第一章　序說（文藝史上の元祿時代）

第一節　革新文學

萬象は流轉する。歷史の流れは暫くも止まらない。わけて藝術の野に湧き出づる心の泉は、改元とか爲政者の更迭とか云ふ、人爲的區劃を以て律することは出來ぬ。こに元祿時代と云ふも十六年間のそれを指すのではなく、その前後數十年間に於ける推移の跡を謂ふのである。

一番槍の手柄話に向ふ疵叩いては霜置く雙鬢を振はせたのも既に昔語りとなつた。啓蒙の世は五十の歲月を疊んで過去のあなたに流れ去つた。江戸幕府の礎、漸く固うして枝も鳴らさぬ時津風、泰平の民は玆に擊壤鼓腹して現代謳歌の聲を擧げた。空には匂ふ星のあや、地には亂るゝ花吹雪、若き近世日本は目ざめたる瞳を凝らして、新しき道程を辿らんとする。

時代の影は道ゆく人の肩に落ちる。世相の概觀はこれを他にゆづる。吾人はたゞ當時に於ける純文學の姿繪の二ひら三ひらを眺めたい。

元祿の世は、自由精神の下に因襲打破の行はれた時代である。國學に於ける契沖東滿の活動、儒學に於ける仁齋徂徠の首唱は暫く措く。純文藝に於ける俳諧の芭蕉、淨瑠璃の近松、浮世草子の西鶴は、此の新機運に乘じて立つた三つの巨像である。而してこれらは皆中流以下の階級の人であつた。彼等は慣習に囚へられず、在來の拘束をうけず、自由奔放の意氣を以て、自己の天地を開拓するに最も好都合の地位にあつた。思ふがまゝに、感ずるがまゝに、さながらの姿を世上に放下したその人生觀照の態度には、狐疑もない猜忌もない、阿諛もなければ顧慮も入らぬ、たゞその生命は革新と獨創とにあつた。洵や和歌を超えて俳諧が起り、謠曲が衰へて淨瑠璃を出し、古風な物語は亡びて浮世草子の全盛をば來したのである。

山路の曉には梅が香をしめ、野分の夕べには盥に雨をきく。風流の初めは奥の田植唄、馬ほく〳〵、夏野ゆくわれはさながらの繪であらう。四十五里の波上に銀河横はれば、不破の關屋は荒れて美濃路の秋は深い。象潟の雨、三井寺の月、ゆきくれてかる宿の藤、枯枝にとまる鴉、到る處に天地有情の面影がある。かくて五十一年の夢は枯野を駈け巡つて、一代の風韻はこゝにをはる。自然詩人、芭蕉松尾桃青が詩美は、個性よりも普遍に、人事よりも自然に、活動よりも靜寂にあつた。

貞門から談林と次第に展開して來た俳諧は、芭蕉によつて正風の眼が開かれた。正風とは自然の核心を攫むの謂ひである。彼は初め北村季吟に學び、次で流行につれて談林を弄んだ。しかもそこに詩的飽滿は得られなかつた。詩の本義を尋ねて、自然の祕鑰を握るまでには、幾度か轉々反側した。古池の一句に、轉迷解悟したと云ふその閑寂の境地に、一味の妙諦を攫得するためには、如何ばかりの懊惱を重ねたであらう。李杜の風格と、西行の詩情とは、彼のためには啓蒙の指針であつた。白樂天の平淡と

寒山子の禪機とは、彼がための陳呉であつた。かゝる先人を踏臺として到達し得た俳道の箴言は、さびしをり或は不易流行と云ふ。寂栞は幽寂冲澹の詩境であり、不易とは千古不磨の美に對する憧憬である。而して流行は卽ち流轉の意であつて、時代と共に推移するの謂ひである。一面至醇なる詩的情緒に固執すると共に、他面には匆忙たる世態の波に搖らるゝ元祿思潮への融合である。換言すれば、彼の新文學樹立の裡には、自己の憤に薫育した內的素因と共に、又この外的素因をも認められるのである。

鬱勃として蕩搖する新時代の思潮は、目覺めた人を動かさずには置かない。此の淸新の氣風に乘じて起つた彼も亦時代の子と云はねばならぬ。たとへ彼が活社會の大勢たる現世的歡樂や、陶醉的情趣を對象としなかつたとは云へ、時代の一面と密接な交渉を保つて居た。豪華なる世相に乖いて、自然にかくれ閑寂に親しんだ態度は、たまたま時代を超越して居たかの如く解釋せられるけれど、革新文學の一旗幟は、かの因襲打破、新趣樹立の時代精神と合致するものと謂ふを妨げない。

集林子近松門左衞門が自己の天分を赫奕たらしめたのも、亦多くの焦慮と蹉跌とを繰返した後であつた。彼は弱年京に出で、後一條家に仕へた。淨瑠璃に筆をとつてからも、猶容易にその驥足を伸すことが出來なかつた。貞享二年に大阪道頓堀竹本座の座附作者となつて、竹本義太夫が天來の美音と提携した時、彼の詩筆は初めてその適所を得たのである。個性發展はこゝに滔天の浪を擧げた。古淨瑠璃の世界はあまりに狹かつた。謠曲の舞臺は典型に繫がれてゐた。靑空に向つてその朗らかな麗音を奏でるためには、その殼は破らなければならぬ。かくの如くにして、當代の人々の胸懷に泌み渡つた三弦樂の旋律は、悲惻にして凄艶であつた。

あるは落葉の雨に、「笠がよう似た菅笠が」の哀音を奏で、あるは霜夜の鐘に、一あしづつに消えてゆく露の命を歌ふ。こゝに糾はれたる運命の下に、戀ならぬ戀に朽ちゆく弱者の群があれば、かしこには歡樂の惡夢に魘されて、思はぬ罪に血を流す爛壞の

人がある。紺碧の海を背景とする水郷の戀は、白熱の愛を語り、夕風寒き川波には義理の柵にかゝる、散りゆく花の骸を示した。彼の描いた世相は、悉く痛切なる現實の姿である。たとへ所謂時代物なる作品が大半を占むるとは云へ、歴史の假面を冠つた世話物に過ぎない。こゝに描かれた忠臣も孝子も、美人も節婦も、その素質に於て、その態度に於て、はた擧止動作に於て、一面から見れば、宛然材木屋風に三谷草履の若旦那か、さもなくば投げ島田に大振袖の町娘である。史實の影にかくれて、忠を描き孝を描き節義を描いた間から、時代の匂ひは高く迸ばしる。一般の俗衆相手と云ふ理由はあらうが、アナクロニズムはこの點のみでも當然の行き方であつた。時代物既に然りである。巷の噂、市井の聽書たる世話物に、小にしては上方情調、大にしては時代思潮が顯著である事は、もとよりそのところであらう。然し彼が着眼は單に元祿時勢粧のみに限らない。むしろ人心の奥底から湧き出づる情の泉を汲んだのである。古今を問はず、東西を限らず、人間の有する情感性の機微に觸れたのである。而してこれに絡ますに時代精神たる「義理」の觀念を以てしたのは、たゞ〳〵彼が元祿的色調の熾烈なる大詩人となり得た所以である。然し彼をしてます〳〵偉大たらしめたのは、不滅不易の人情の解剖にあるのは云ふまでもない。

翻つて小説史上に於ける西鶴を考察すれば、革新の意義は强烈であるが、しかしその觀照的態度は人世を圍むに「元祿」なる一個の枠を以てした。巢林子の如く壁にきりこむ鏡の裏に、清も映つし濁も映つす、廣大な影像は認められぬ。さりながら範圍が狹いだけ、時代の色彩はかれに比してむしろ濃厚熾烈である。

思ふに、自然美にありては、芭蕉はこれに沒頭し、巢林子及び西鶴は單に眺めて過ぎた。しかし人事美にあつては前者まづ眼を閉ぢ、後の二者は爭つてこれに牴觸した。たのだ巢林子は底に横はる源泉を汲まんとし、西鶴はたゞ刹那的の幻影に眩まされて、「時代」の攫得にのみ努力したのであつた。

第二節　浮世草子の意義と傳統

現代謳歌とは此の時代に於ける普遍的モットーである。一般の民衆にとつては古代憧憬も支那崇拜も、無意義であり不必要であつた。たゞひたすらに現世を欣び當代を讃美する。そこに彼等の生命がありて存在の意義があつた。

この對世間の態度が卽ち現代謳歌であつて、換言すれば浮世のよろこびである。浮世とは憂き世と云ふが如き穢土困厄の佛敎的思想とは別趣のものである。「うきに浮いて慰み、手まへのすり切も苦にならず。沈み入らぬ心だての水に流るゝ瓢簞の如くなる、これを浮世と名づくる」(淺井了意、浮世物語)その浮世である。泰平の世を心長閑に暮すのんきな世界である。浮いた〳〵の安逸な世界である。その中に、時代の欣求した低級な享樂主義が含まれて、狹斜の事情、遊里の痴態が自らその重要題目となつたのは自然の徑路であらう。

浮世とは卽ち現代の謂ひで、平安末期の今樣と同意義である。此の言葉が當代の逸民に歡迎せられたのは豫想外であつて、浮世狂の耽溺から、浮世笠、浮世囊、浮世楊枝の日用品に至るまでこの名稱が冠らされた。かくて市井の風俗を紙絹に寫せば浮世繪となり、坊間の出來事を筆にすれば浮世草子となる。浮世草子とは卽ち寫實小說の意に外ならぬのである。

活社會を寫實する風は旣に寛永の可笑記に見え、明暦萬治の頃には遊女の名寄せとか遊里芝居の細見、評判記の類やらがつき〳〵に現はれた。しかし遊里に關する記錄も遠く寛永十九年刊行のあづま物語にあらはれ、萬治三年版の吉原鑑は旣にその體を具へて居た。これらは細見風のものであるが、斯かる方面から漸次時代の實生活を活寫するの芽が萠して來た。この徑路に當る一二重なものを擧げるならば、延寶五年の「たきつけ」「もえくゐ」「けしずみ」とて三卷各標題を異にしたものがある。作者は書中の文字によつて堺の住人とだけは分るが何人か詳にしない。

たきつけは老若二人の通客が島原歸りの途上、廓の粹話をする、その聞書である。それから四年經てその折の話柄を批判する體になつて居るのがもえくゐ。最後のけしずみは西の京に行ひすます尼僧が、遊女であつたそのかみを思ひ出で、問はるゝがまゝに手練手管を語ると云ふ趣向である。卽ち細見記の範圍を脱して何等かの脚色を備へんとする傾向が覗はれる。卷末の「うれしきもの」以下、隨筆體の部分は正しく淸女が枕草子の流れを汲んだもので忌憚なき筆を此の社會の裏面につけて居る。

内容の一端を示せば

さみだれの晴間なき頃、詫しげにたれこめて夏の行末も知らぬ身に、獨り住む垣根の草も露けく、菅むしろの轉寢も、じく〳〵として、降り暮したる空の景色もたゞならず、打蔽ふ雲のはれて、夕暮の寂しさもつねよりは慰めがたくて、心の月も曇りがちなる折ふし云々（もえくゐ）

かくの如く全く中古文の典雅にかくれて色道の粹を說かんと試みたるものが此の一篇である。本書の名は、色道大鑑、好色二代男、眞實伊勢物語等の好色本系にしば〳〵引用されて居るのを見ても、如何に珍重せられたかゞ察せられる。一方狹斜趣味の修養書であつたと共に、好色本へ一歩近づいたものと云ふ事が出來る。

猶この特殊文藝の俑をなしたものとして、浪花鉦を擧げねばならぬ。

浪花鉦六册。一名諸分店颪。刻梓の年號ある本末見。延寶六年寫本色道大鑑の引用に見えたれば當時の書なるべし。大阪新町の事を書きたるものなり。西鶴作とあるは後人の彫り入れしものなれば、これは信じ難し、されども實に西鶴歟。猶考ふべし。或人曰予が藏書「なには鉦」は古く摺りたる本にて左の如く年號あり、延寶八年申三月、水月庵迷色居士かな序、一生軒不埒後序、文中に作者の名、西入庵無底居士と見えたり。卷尾に洛下南華軒の跋あり。（柳亭種彦、好色本目錄）

これによつて大體は想見せられるが、現在の諸分店颪には後序、作者、跋等はないが省いた痕が丁數によつて揣摩される。又元祿七年の好色罌粟鹿子は異名同書で迷色の名も見える。思ふに原本浪花鉦が幾度か改題しては重版せられたらしく、最後の「雲

井月」の章に「今世間に尊がる鐵眼」の文字も見え、色道大鑑にも引用されて居るから、少なくとも西鶴の一代男以前卽ち天和二年より前の刊行である。

その內容は大阪新町に時めく遊女の名をかりて、口說手管を、問答體に敍した廓話である。系統としては吉原鑑の後を趁つた形跡がある。かの一代男卷の七で白刃の下に悠々と投節を歌つた俠妓高橋の話は、本書梅の部の身の代の章に粉本が求められる。たゞしこゝでは新町の高橋と田舍侍との粹不粹のいきさつに過ぎない。かかる後世文學との關聯は詳細に調べたら他にも發見せられるであらう。

この外、寬文前後のものと思はるゝ錦木、延寶六年の色道大鑑（畠山箕山作）、天和二年の戀慕水鏡等、所謂粹咄し、色の諸分、艶書の作法、戀の諸相に關した遊里趣味の雜書が多く現はれて居る。

かう見て來ると好色本へは、唯一歩の距離である。下地は旣に出來上つて居る、材料は旣に整つて居る。文學の領域に入るのは一擧手一投足の煩に過ぎない。而してこの時代の風尙と讀書圈の傾向とが、遂に西鶴をして所謂浮世草子の創設者の名を克ち得るに至らしめた。

かくて西鶴一流の戲作を中心として、浮世草子の名は喧傳せられたのである。

更に浮世草子の名稱に就て一言すれば、

傾城色三味線、又は曲三味線、禁短氣の類の慰みの書各〻樣の注意に入り、八文字屋はこれより浮世本、評判本の名取りのやうになり（其磧）

と云ひ、

八文字屋自笑が浮世草子の編者に江島其磧と云へるあり、よく世の情を述ぶ（翁草）

と云へるを見れば八文字屋も亦浮世草子の圈內に包蓄されて居る。むしろ後世では浮世草子と云へば八文字屋本を直ちに聯想するやうになつて居る。稱呼の如何はいづれにもせよ、どこまでも現實描寫の意義から踏み出しては居ないのである。

第二章　作家としての井原西鶴

第一節　俳諧師から小説家に

井原西鶴は寛永十九年に生れ元祿六年を以て歿した。其の五十二年の生涯は、豪奢なる元祿の時代精神が次第に高まり來る順潮にあつた。新たに活躍し初めた町人が、潑溂たる元氣と寛濶なる襟度とを以て、肉の歡樂の理想境に沈湎し、豐烈廉爛の零圍氣に包まれんとする時機であつた。彼は全くの時代の子であつた。當代を以て無上最善のものとし、これに親みこれに昵み、現代人の生活に熱烈なる同情と鋭利なる省察とを拂ひ、こゝに現世謳歌の第一人者となり了せたのである。

彼は浪華鎗屋町に住した（俳諧奇人傳）。初め鶴永と呼び後に西鶴と改めたと云ふ。延寶五年に館林宰相綱吉の女に鶴姫の誕生があつて、同じ八年には宰相の將軍宣下があつたので、元祿三年鶴の字を諱むことゝなり、西鶴も亦西鵬と改めた（嬉遊笑覽）。

明暦の頃、西山宗因の門に入り談林風の俳諧を學びそめたのが文壇に於ける第一歩であつた。かれが俳諧師としての盛名は非常なもので、詞藻富贍、意氣縱横の概があつた。或は住吉社頭に一日二萬三千句を吐き散らして一世を驚倒せしめ、或は阿蘭陀西鶴と罵られて、群雀噪々とやり返す意氣軒昂たるさまは、斯般の消息を語るものであらう（俳諧水滸傳）。しかし俳壇の風雲は動きはじめた。革新の氣運は刻々に蕩搖を迫つた。西鶴は機智を誇る俳諧師、如才なき點者、さては大盡の腰巾着としては（元祿太平記）適當であつたかもしれないが、十七字の裡に安住して、天地自然を娛しむ至純なる詩人としての性格には缺けてゐた。彼は閑寂な境地を味ひ得る芭蕉に比べてはあまりに俗である。又近松のやうに人生の奥に潛む第一義の心的活動を攫取するにはあまり浮調子である。彼はまさしく、伏めや唄への歌吹海の、亂舞醉態の間に、現はれた世相のさま〳〵を寫生し且誇張したのに過ぎぬ。要するに彼の好色本はその俳諧を散文で行つたまでゞある。檀林の俳風は正風樹立後の目から見れば、甚だ通俗趣味に富んで

居た。わけて西鶴にあつては、その取扱の範圍は狹斜趣味を中心として、著しく町人生活に接近して居る。敵派の言をかりて云へば、放埒極まるもので、投節、操、情死、巾着切、置綿、暗物、すあひ、手管、夜店通、揚屋風呂の如き語彙を初め、遊女俳優の名を讀み入れる等（大矢數、一目千本、五百韻參照）遊蕩的氣分が强烈に浮出してゐる。されば彼の俳風と好色本とは單に形式の差異で、內面的關聯には極めて密接なものがある、これを超越的詩歌たる俳味から、俗臭紛々たる浮世草子へ突發的に急變したと思ふのは、正風以後の俳句なるものに囚はれた謬見であらう。

思ふに、彼が俳諧より小說への橋渡しには、別に深い意味があるとも思はれない。處女作一代男の如きも夫子自ら娛しむべきもので、昵懇者二三子以外、他に示すつもりではなかつたらしい。然るに唯漫然と筆を下したものが、思ひの外に世評を博したので、半ばこれに煽動せられて、こゝに俳諧を棄つるに至つたのである。一代男が宗因歿後に初めて出たと云ふ、外的現象の裏には、舊師を憚る遠慮もあつたのであらうが、それのみとは斷ぜられぬ。所詮時機が來たのである。偶然の機會が機會を作つたのである。

斯くの如く、彼が浮世草子作者として世に立つた素因には種々あらうが、これを總括して見れば、內外二面に分つことが出來る。

一、外因としては、一方寬文から延享にかけて已に遊女野郎に關する著作があつて、文學には今一步と云ふ境まで押進んで居たし、他方には俳諧水滸傳に云つて居るやうに、宗因歿して後、談林の生命は一に西鶴にかゝり、しかもその詩才が正風の敵でないのを自覺しては、生存上適當な避難所を求める必要があつたこと。

二、內因としては、彼の享樂趣味卽ちその遊蕩生活から得た、直接經驗の回想が中心となり、且大矢數等で詞藻上の自信を得、しかも描寫法としては、散文がはるかに便宜なるを思ひ、かて〻加へて、處女作の世評が豫想外に高かつたこと。

これ等、前後の事情が相纏綿して、遂に散文作家として天稟の才を、十分に發揮すべき舞臺を見つけたのではあるまいか。

次で現はれたこの種のものは名と慾との二人づれであつたことは云ふまでもない。

第二節　作品とその轉向

西鶴が一代男に筆をとつた四十一歳より、歿年五十二歳に及ぶ前後十年間の創作は、二十餘部に亙つてゐる。今年代を追つて列記すれば次の如くである。

好色一代男	天和二年。	四十一歳
好色二代男（諸艶大鑑）	貞享元年。	四十三歳
好色三代男	貞享三年。	四十五歳
好色一代女	同	
好色五人女（當世女容氣）	同	
近代艶陰者	同	
本朝二十不孝（新因果物語）	同	
男色大鑑（本朝若風俗）	貞享四年。	四十六歳
武道傳來記	同	
武家義理物語	同	
懐硯	同	
日本永代藏（新長者敎）	元祿元年。	四十七歳
色里三所世帶	同	
新可笑記	同	
本朝櫻陰祕事	元祿二年。	四十八歳
一目玉鉾（西鶴回國道の記）	同	
眞實伊勢物語	元祿三年。	四十九歳

世間胸算用　元祿五年。五十一歳
西鶴置土産　元祿六年。五十二歳歿後
西鶴織留　元祿七年
西鶴俗うれ〴〵　元祿八年
萬の文反古　元祿九年
西鶴名殘の友　〃
西鶴諸國咄（大下馬）　〃

元祿六年以降の諸作は、歿後門弟によつて出版せられたもので、わざ〳〵西鶴と但書したのを見てもこの消息は覗はれる。これ等のなかには名を西鶴にかりた僞書もあるらしい。この點は暫く措いて、その創作年表を通覽するに彼が絶頂は貞享の末、元祿の初にあつて、その傑作もこの二三年に出て居るやうに思はれる。而して大體の上から三段の變化が認められる、卽ち第一に好色本、第二に武家物、第三に町人物、卽ちこれで、敎訓物がその間に挾まつて居る。この轉向には、卽ち好色本に對する官權の壓迫とか、讀書社會の倦怠とか云ふ外界の刺戟もあつたが、他面には自己を知るの明ある作者が、內部的更新に基いたものがあらう。

以下その代表的作物に就て、一々論評を下し、その文章に就ては更に一括して後章に述べやうと思ふ。

第三章　西鶴の創作

一　好色本

天和二年、俳諧の衣をぬぎすてた西鶴は、こゝに好色一代男を公刊した。在來の假名草子とは内容に於て、はた形式に於て多大の懸隔があるやうに見えた。世人はその新彩に驚異の眼をみはつた。喝采と歡呼とは彼の周圍に豐する計りに擧る。作者自身も亦訝り異しみ、且は自己の路が開けたかのやうに雀躍した。油の乘つた彼は、こゝに於てか矢繼ぎ早に同じ好色の二字を冠した數種の著作を公にしたのである。

好色とは何をか意味する。平安朝に慣用せられたすきごゝろの意味であらうか、或は現代に流用せられる耽溺の義であらうか。言語にも時代の影がつき纏ふ。年を距つるこれらの語は、緊密に同意義とは云はれない。かの貴族生活に於けるすきごゝろには、單なる漁色以外に自我をたてた對世間の態度が偲ばれる。耽溺の裏には、身も心もうちすてゝ酒色に浸潤して、一切を放下した肉の歡樂の匂がする、「好色」に至つては、性慾追求が眞の目的であるかの如くにして、しかもそれを超越し、「戀」より生ずる情趣を味ひ盡さんとする心意氣が見える。從つてかの粹とか通とか云ふ領域に蹈みこまずしては、眞個の好色に牴觸することは出來ないのである。されば地女としての面白味、はた遊女を圍繞する狹斜の情調を嘗めつくしてこそ、初めて所謂「色道の行者、わけ知りの聖」となり得るのである。

かるが故に西鶴の好色本に於ける肉慾描寫は、作者が好奇心の曝露と、俗衆牽引の方便とを背景とする戀の諸わけであつて、人間の性慾生活を赤裸々に描いて、そこに現實曝露の悲哀を暗示すると云ふ、深い洞察と想見とがあるわけではない。西歐に於ける近代文學に親昵する者が、たま〳〵兩者に共通點のあるを見て、同樣の解釋を下さんとするのは、たゞ皮相の類似に眩惑せられてその眞相を誤まつたものである。

第一節　「一代男」梗概

一部八卷の「好色一代男」は、前述の如く天和二年に生れいでた。骨子は世の介なる一個市井の遊蕩兒を點出して、その閲歴せるラブ、アドヴエンチュアの記錄五十四場を連鎖せしめたものである。大體から見て主人公の生涯は、

前紀、（出生より十七歳まで）。遺傳的早熟の一種の畸形兒としての彼、

中紀、（十八歳より三十四歳まで）。前後忘却の遊蕩生活に沈湎せる拗當せられし、どら息子としての彼、

後紀、（三十四歳以後）。父の死によりて莫大なる遺産を相續せる大盡としての彼、

右の如くに階段があるやうに思はれる。但しこゝに注意すべきは、一代男は決して脚色結構を以て組織せられた小說ではない。はなれ〳〵の小話が名の同じき一人の男によつて年代順に繫がれて居る計りである。この點に關しては更に後章に論ずるところがあらう。

前紀、「櫻も散るに嘆き、月は限りありているさの山、爰に但馬の國金掘る里のほとりに、浮世の事外にじて色道一つにねてもさめても夢助と、かへ名呼ばるゝ」男と、さる遊女との間に生れた世之介が「四つの年の髮置、袴着の春も過ぎて疱瘡の神祈れば、あとなく、六つの年經て、明くれば七歳の、夏の夜の寢覺の枕のけて」小用に立つと、次の間の女中が心得て手燭ともして迎る上り廊下、お足許大事とさしつける灯吹きけして近くと仰せられる。「暗くてお危うございますと云へば戀は暗と云ふ事を知らぬかと左の振袖引いて乳母は居ぬか」。これを戀の手初めとして五十四年間に戯れた女の數は三千七百四十二人、小人七百二十五人の多きに上つた。

八歳の時、手習師匠の許に弟子入の日、手本紙さゝげ、好みの文書いて下されと云つて、師匠を驚かしたが九歳の時には、銀見習として母方のゆかりの家に預けられた。五月四日の事、木下闇の夕まぐれに、仲居の女房が人あらじと油斷して行水して居ると、世之介、四阿の棟に上つて遠眼鏡で明らさまに眺めて居る。拜めば顏しかめ指さして笑ふ。匆々上つて來ると、袖垣の陰から女を呼びとめ、今夜人靜まつて後、切戸

あけて、わが云ふ事を聞けと云ふ。思ひもよらずと云へば今見た事を沙汰するといふ。女も是非なく芥人形、起上り、雲雀笛など取添へてやると、これはお前に子を生ました時、泣あやすものにしようとて膝枕する。

かくて念者狂を覺えたのが漸く十歳。伏見撞木町の遊女を身受して山科に圍つたのが十一歳。十二の秋には兵庫の風呂屋者に戯れ、十三の春には八坂の茶屋女の空涙に嗾かされる。（以上、卷一）

十二の頃から聲も變つて大人恥かしくなつた世之介は、漸次耽溺生活に馴れて來た。十四歳の「折しも時は秋の半、から竿の音のみ里の童、ねぢ籠、雨蛙の家などして、塵塚よりなた豆と云ふものいと可笑しく生下る」里に二十四歳の飛子に戯れ、十五の春は、石山詣の折、美しい後家に挑まれ、やがて生ました子を棄てる。貞女を口說いて割木で眉間打破られたのは初冠の十六。十七には、奈良木辻町に固めの誓紙、漆判の朽ちぬまでのさゞめ言がある。

中紀。これより地方に於ける遊里描寫と主人公の戀の冒險とは、いよ〳〵精細の境地に入る。かくて十八の冬、商用で江戸へ行く事となる。これまで近畿に限られて居た舞臺はこゝに於て展開された。杉の葉白き關路の雪を拂へば、二日目の泊りは坂の下、泊々にある程の色よき袖を重ねて東海道を江尻まで來る。その夜、この宿に若狹若松とて姉妹の美形ありと聞き、もはや江戸には行かぬ氣になり、二人を手に入れて喜ぶ中、路用が乏しくなる。うどんを手馴れつゝ細々と烟を立てゝ居たが翌年「蚊の聲を聞き雪も見て後、二人の女は花園山の下里に、まことの髮剃りて世に捨てられ、たのみし人に捨てられ道心となつて」居た。

世之介淺ましき姿となつて江戸に着く。去年來彼の行方を尋ね詫ぶる一家の心配を聞きながら、持つて生れた病は癒えず、深川、築地、目黑、品川と江戸界隈を、おちもなく漁つて歩く。この事いつか京の親許に知れて勘當の身となる。そこで昔使つた番頭の才覺により、ある長老を賴んで谷中の寺に入る。「心もすむべき武藏野の月より外に

友もなき吳竹の奥深く、すい葛畫顔の花蹈み染めて道をつけ、草葺の假屋」に珠數つまぐつて居たのも一日二日、何かなと思ふ折節、十五六の香具賣が來る。こゝに世之介亂れそめて小者狂ひを初め、頭もいつしか散切に撫でつけ、法衣は雜巾となつて、臺所には、白雁の胴殼、鰒汁の跡が見えるやうになつた。十九の年もかくて暮れる。庵を捨てゝさる山伏と芳野までの道伴となり、難波に落ちついては鯨細工、耳かきの賤しい身過ぎにも例の心は衰へず、八方を漁るうち怪しい婆の子なる、怪しい娘の異な所に氣をつけて入婿となる。（卷二）

こゝも暫し、編笠引かぶり古扇かざして、よるべなき浪の夢、謠うたひとなつて迷出でたが、ある遊女屋の手先となつて、瀬戸の海の船泊をつぎ〳〵の旅姿。天野川、磯島、三島江、神崎、鞆を經て小倉に入り、下關、中津の風俗を見つくし、大阪に立戻つて乳母の妹の家に厄介になる。こゝは密賣の中宿で、「よろず懸帳埒あかずの世之介」と罵られながら、二階に忍び、くどり戸の鳴る度に胸を抑へ耳を塞ぎて、恐ろしき大晦日の夜を送り、若戎々々と賣る聲に漸く春の心地になつた二日目、こゝを逃れて再び旅に出る。まづ鞍馬山へと志し、さる社頭に怪しい夢を結び、それから大原の雜魚寢に赴き、村の若者をだしぬいて、その里の美人を盗み了せ、下賀茂の邊に隱れ住み、忍ぶうちこそ面白の、花の都近くに一年餘は暮した。二十六の六月の末、米櫃寂しく紙帳も破れ近きに、これも置去りにして佐渡の金山さして浮かれ出た。越後の出雲崎に舟がゝりして居る間にも、寺泊の傾城町に土臭い田舍女の味を知り、佐渡に渡り又引返し、魚賣となつて北國の山を越え、出羽領に入り酒田の浦についたのは二十七の春であつた。こゝでしやく干瓢など云ふ賣女に戯れて居るうちに、淸し女の鈴打鳴らして來た縣巫子に馴れ、常陸の鹿嶋に辿りつき、わが身は神職となりすまして居たが、女の腹がむつかしくなつたと聞いて奥州へ逃れた。ゆく〳〵浮れ女を見つくし仙臺から鹽釜に入り、舞姫の男あるのに手を出して見現され、片小鬢を剃り落されて行末知らずになる。（卷三）

「二十八の年は出來心にて人の女を戀ひて一命あぶなく片輪にもなる程の事ありぬべし」と、過ぎし極月の口占少しも違はず、剃り落されし頭かくして、信濃路に入り追分に旅寢の夢を結ぶ。かくて曙の道を急げば、近き里に强盗が入つたとて、人改めの新關を据えて手負を嚴しく吟味して居る。世之介の片鬢、言ひわけ立たず獄に繫がれる。荒くれ男の中に交つて、淋しい辛い日を送るうち、狹間から見れば隣りの部屋に優しい女が居る。連れ伴ふ男を憎んでの果と聞いては、かの心むら〳〵と起り、天井の煤を楊枝に染めて、しば〳〵思ひを通はし命長ければと契る。そのうちに御法事の牢拂があつて危き身を遁れ、女を負ふて筑摩川を渡る。折しも霰降る夜で女を山もとの柴車の上に下し置き里人に粟飯貰つて歸る途、世之介樣と女の泣く聲がする。驚いて走りつけると四五人して「大膽なる女め、命助かりなば宿に歸るべきを何國いかなる奴がつれゆくぞ、思へば憎し打殺せ」とわめく。世之介とりついて詫びれば、さては此の男めがとて打ち重つて打つ程に息が絶えた。

梢の雫自然に口に入りて眞の氣を取直し其の女やらぬと起上れば影も形ちもなく車はありし人の寢姿、是非今宵は枕を初め天にあらばお月樣、地にあらば玉霰を玉の床と定め、おれが着る物を上に着せて、さうしてからと思ひしに、悲しや互の心ばかりは通はし、肌がよいやら惡いやらそれも知らず、惜しい事をしたと四邊を見れば、黄楊の水楯落ちてあり。油臭きは女の手馴れし紀念ぞ是にて辻占を聞く事もがなと、咀づたひの陰道を行くに、鐵砲に雉子の雌鳥懸けて、獨言にさても脆き命かな雄鳥が歎かうと云ふ、身にひきあてゝ悲しく、其の六七日も野を家となして尋ねけるに霜月二十九日の夜、自と心の闇路を迎り、人家稀なる薄原に篝火の影。

仄かなるを見あてに行けば、百姓らしい二人の男が墓を掘返して居る。人の足音を聞いて隱れるのに怪しく思ひ、その仔細を詰り問へば、上方の傾城町に賣る爪黑髮を身過のために取ると答へる。さてその死人を見ればわが尋ねる女。これはとしがみつきわれ故と泪にくれて身悶へすれば、「不思議や日を見開き笑顔して問もなく、もとの如くなりぬ。世之介二十九までの一期、何思ひ殘さじと自害せんとするを、二人のもの

いろ〳〵押止めて歸る。分別所なり」。(卷四)

三十の折、最上の寒河江に知邊があつて尋ねる。ある日主人の留守にうつ〳〵とまどろむと、「二階より頭は女、足鳥の如く胴體は魚に紛れず、浪の磯による聲して世之介樣我を忘れ給ふか、石垣町の鯉屋の小萬が執心、思ひ知らせんと云ふ、枕脇差、拔うちに手應へして失せぬ。後の方より、女の嘴を鳴らし我は木挽町の吉介が娘おはつの心魂なり、二人が仲は、比翼と云ふて、思ひ死さした其の恨にと飛んでかゝるを、是も忽ち斫りとめぬ。庭の片隅より、長二丈ばかりの女、手足楓の樣に見えしが、風の吹きかゝる聲して、これは高雄の紅葉見に族かされて、一期の男に毒をかひて汝に思ひ換へしに、早くも見捨て給ひぬ次郎吉が嬶、見知つたかと嚙つくを組伏せて討止めぬ。この時目眩み氣勢もつき果て浮世の限りと思ふに、又空より十五間も續きし大綱の先に女の首ありて逆樣に舞下り、われこそ上の醍醐邊に身を法衣になし後の世を大事と行ひすましてありしを二度髮を延ばさせ程なく迷はし給ふ事執着そこを去らせじ」と這ひ纏ふを刺止める。主人が歸つて見ると世之介は前後不覺に血潮の漂ふ中に倒れて居た。驚き呼びさまして仔細を問ひ語り、さてはと二階に上つて見ると四人に書かせた起誓文が、さん〳〵に切り裂かれて居た。

三十一の男盛りには、さる大名の奥女中に芝居見の折挑まれ、その翌年には加賀の國に大供して盡京に上り舞子遊びをする。かくて此の道の修行いよ〳〵深く、切貫雪隱、忍戸棚、空寢入の戀衣、浮世の引入、印の立眩、湯殿のたゝみ階子等のみそか遊びを知る。かゝる惑溺の境に入浸りつゝ、三十四の折は、泉州佐野で磯臭い女を驅催し小舟多くならべて沖に出たが、「折ふし空は水無月の末、山々に丹波太郎と云ふ雲恐ろしく、俄に白雨して神鳴臍を心がけ落ちかゝる事間なく時なき」大荒の果は、吹飯の浦に打上げられる。こんな命がけの遊をして堺まで來ると、親父が死んだとて、國々に手を分けて世之介の搜索最中であつた。そこで早乘物に乘せられて、久し振に昔の住家に歸つた。「いづれも泪にくれて、煎豆に花咲く心地して、何をか惜むべしとて諸々

の藏の鍵渡して、年頃淺ましく日を送りしに替り」心のまゝに費へと二萬五千貫を渡された。

世之介の放浪生活はこゝに一段落を告げる。

後紀。親の遺産によつて大々々盡と囃されてからの彼の生活は、全く元祿通人の理想鄕であつた。宛も三十五歳、この時を仕たい三昧に暮す。鞴祭の夕暮、七條通りの小刀鍛冶の弟子に對する名妓吉野の仕打が、情の道に叶つて居るのに惚れ込み、「揉みたてるやうに身受して祝儀取急ぎ、檜杉折の山をなし島臺の裝ひ相生の松風、吉野は九十九まで」と囃される。かく宿の妻は定めても、世之介の腰は定まらず、大津に室津に堺に宮島に遠征を試み、はては宮川町の念者にまで戲れる。（卷五）

かくして三十六から逢つたのは、この頃の世に時めいた幾多の名妓太夫であつた。「食ひさした袖の橘の契あるを親方に堰かれ、その年の雪見月、積る廣庭の柳に赤裸にて縛りつけられ、重ねて相見る事これでもやめぬと責められても、逢ふまじきとは云はず、五七日の食を斷」つた三笠「白綸子の二布引裂き右の小指を食ひ切り心のまゝ書きつけ」今日を限りと舌咬切るところへ、世之介聞きもあへず死出立で驅込む。

「生玉の御池の蓮葉、毎年七月十一日に刈る事ありて、汀に小舟を浮べ、鎌の及音に驚く鯉鮒、泥龜の騷ぎ鴨鳥を追廻し罪も神前に忘れ果つる」その日、松の木蔭に時雨の雨が濡れかゝる、掛るとと流行唄に拍子を揃へたは、世之介初め五人。東南の島崎に居流れて、大夫の雨夜ならぬ品定めをする。衆口期せずして、新町の「夕霧より外に日本廣しと申せどもこの君、この君」と一致する。世之介これを聞いて堪へ兼ね、作病してこの座を辷り出たが、その後は雨の夜も風の夜もこの意叶ふまではとて通ひつめる。「その年の霜月二十五日、さも閙がしき折節、今日こそ忍べとの御內證、さる揚屋に例より早くお出あつて待ち給ふこそうれしく、上する女と心を合せ小屋敷に入りて語りぬ、如何思召しけん炬燵の火を消させて折柄はげしきに之を不思議に思ひ乍ら數數譯もない事して與ある所へ」その日の敵役が來たので炬燵の中へ隱される。かの

男不審して立つ時、何のわけもなき手紙持つて夕霧が臺所の方へ走り出る、男追ひかけ、見せよ見せぬとの爭のうち、世之介は辛くも逃れ歸る。これは三十七の時。

三十八から四十二の厄年に至るまでには、島原の藤波、浮舟、初音、江戸吉原の吉田、野萩、などの遊女との戀のいきさつがある。或は「切らせし髪の延び縮みて、飛上りて、物云はぬ計りの」執着や、匂ひはかづけものゝ怪しき音を取はづし「如何にも放き手は此の大夫ぢや」と思ひ切つての潤達振。さては生田川のそれならぬ、女をして「二人男は車の兩輪、因果の廻轉、此の種ゆかしさいとしさ、此の上に身がな二つ欲しい」と暎たしめし穩かな鞘當等が織込まれて居る。（卷六）

初雪の亂れ酒に日を暮した夕、高橋は客からの迎に一旦はその方の茶屋に行つたが、客の性急なのが癪に障つてすぐ戻つて來る。「世之介戀は互と思ひ、太夫を諌め、是非行けと申せば、今日に限つて日本の神ぞ〳〵行かぬと申す、よく〳〵分別極め、よもや先にても此の儘に措かじ、掴みに來る時、腰半分切つてやつて頭は此の方に置くかと申す、如何にも覺悟と世之介に彈かせて、さても命はと投節」。その座にかの大盡、刀拔き放ちて飛込めど、目もやらず聲も慄はせぬ豪膽さ。親方馳せつけて「今日は誰方へも賣らぬとて高橋の髻取つて宿に歸りがけ世之介樣さらば」の一聲。こゝに心强き張があれば又、「白綸子の袷に狩野の雪信に秋の野を描かせ、之によそへて本歌公家衆八人の銘々書」の裝束好みの女から、さては大角豆飯の茶漬に干鱈の捲り喰ひ、「その後、手もとにありし百錢ぬきて心覺えに目の子算用する」卑しげなる女までも居る。年中は約束濟の全盛の太夫に盜逢ひの忍ぶ戀。口添ふる酒輕籠に二階と下とのやる瀨なき逢瀨。新町の宵闇、島原の後朝、この里の色の諸別に紋提灯の瞿麥、今に替らず世之介が五十五の冬も暮れる。（卷七）

耽溺生活の長い月日に、遊びの種も盡きるであらう。車三輛の上に花氈敷かせ、太夫は一樣に「水色の鹿子、縮緬の投頭巾きて、四人づゝ二挺に乘り、樽折重肴枕箱、燭臺に大蠟燭たて」朱雀から大宮通を曳かせ、果ては「小田井の道の風林の松、夜寒の

もてなしに京より幾つか布團持たせ草の戸に置炬燵」のだゞら遊び。又は、仕立屋の十歳と云ふ馬鹿者が人と江戸吉原の小紫は初會から振る、いや振らぬの爭から實地ためしに江戸に下るとて暇乞するに、世之介附添つて遙々と下りいろ〳〵に肝煎する。

かく、京、大阪、江戸と三都を往復して、たわけの數々を仕盡したが最後の豪遊は五十九歳。長崎丸山に於けるそれで、「先づ銀函を下し送り、思ふ限りありとて金銀洛中に蒔き散らし社壇の建立、常燈を點し、役者子供に家をとらせ、馴染の女郎はその身自由にしてとらせ、毎日使ひ崩せどもまだ殘る所の内藏何かすべき」とて、その年の八月十三日京を出立した。さて亂れ遊びの大振舞の後、持つて行つた長櫃十二棹の中より取出したのは太夫の衣裳人形、京で十七人、江戸で八人、大阪で十九人。長崎中の目をさまして都に返つた。

「合せて二萬五千貫、母親から隨分使へと讓られ」てから二十七年、心春なる譯知りの世之介も、もう本卦返りの六十となつた。廣い世界の遊女町悉く眺め廻り、今は浮世に思ひ殘す事もない。親はなし子はなし又定まる妻もない。さりとてこれから急に有り難い道に入る心は微塵もない。「淺ましき身の行末、何になりとも成るべしと寶を投棄て、殘りし金子六千兩、東山の奥深く埋めて、その上に宇治石を置きて朝顔の蔓を這はせて、」さて同じ心の友七人を誘ひ合せ、難波江の小島に新しき舟造らせ好色丸と誌し、緋縮緬の吹貫に戀風孕ませ、女の責道具夥しく積込み、伊豆の國より日和を見すまし、行先は女護島とて天和二年神無月の末に行方知れずになつた。（卷八）

かくの如き閲歴の下に好色一代男世之介の生涯は、その結末を告げて居る。

第二節　「一代男」評論

一篇の小説の梗概を述ぶるには、單に話の筋を辿るのみでなく、その匂と色とを移すのが通則である。一代男の叙述するに當つては、此の方面を移植する事が出來ても筋を辿るに困難を感ずる。

多くの批評家は口を揃へて云ふ。西鶴の作品は一代男のみならず、その全般に亙つて脚色結構のない斷片的說話の連續である。而してこの篇の如きはその特色の最も鮮明なるもので、唯主人公が同一の名によつてのみ鎖がれて居る。要するに說話の發展上何等の內質的因果關係が搆成せられて居ない。

或は連歌的と呼び或は櫛齒式と稱するのはこの謂ひに外ならぬ。洵に八卷五十四條に亙る五十四の說話は、世評の如く離れ〴〵である。然し全然この斷片的說話の集合かと云ふに吾人は多少の異議が唱へたい。さきの梗概に於て期間の區劃をたてたのも、この用意に基くのである。特に前半にあつては、事件の發展、說話の進行が認められる。卽ち世之介なる一人物の并タ・セクスアリスは、ある程度まで漸層的に運ばれて居る。其の前紀に於て十歲の成人とも云ふべき世之介が「同じ友だちと交はるにも、紙鳶のぼせし空をも見ず、雲に懸橋とは昔天へも流星人とや、一年は一夜の星、雨降りて逢はぬ時の心は」との思ひ遣りは、さながら春の目覺の靑年を思はせる。これは强ちに一種の精神病者若くは色情狂として取扱はずとも、六十年の好色生活に沈湎した主人公の異常なる生立として認むべきで、作者がある一種の偉人を夢想し、其の最初の記錄を如何に取扱つたならば、最も適當に表現し得るかを考察した結果、かゝる超自然的非凡的人物を點出したと見ればよい。この取扱の適否は別問題として、この異常兒の實生活を見る時、その陶醉的行爲の發展は無理なく進行して居る。尤も比較的の議論ではあるが、前紀に於ける世之介は單なるつなぎではないと云ひたい。しかも斷片的との評言のあるのは、世之介の描寫に輕重錯綜する敍述上のむらにあると思ふ。これが後紀、卽ち勘當を免されて所謂大々盡になりすますやうになると、全然同一人物が單なる傀儡として存在してる感が起る。具體的に云へば、絕へず出て來るのは世之介のみで副人物たるものは一人もない。たとへ名前が出ても、その場限りに消え失せて、說話構成に何等の關聯も生じない。時には世之介は却つて傍觀者の地位にあつて、他の粹人遊女が當面の人物たる場合もある。從つて一代男を一篇の小說をし

て見る時は、非常な缺陷があると云はねばならぬ。即ち筋のない物語、結構脚色を無視した小説と云ふ事になる。

然らば、筋に重きを置かぬ短篇小説の集合と見たらば如何であらう。かくの如き見方が既に不合理の譏を免れまい。然しこの作品の性質上、この鑑賞的態度を以て臨んだ場合、その結果はどうであらう。

ある評家は次のやうに云つて居る。

一代男は無脚色なる小説として立派に存在の權利を持つて居るのみならず、最近半世紀の小説界に於ける新傾向と照し合せると、西鶴の作には大分近代を豫想したらしく見える所さへある。近頃の小説には日本西洋に通じて短篇物が流行して來た。これと共に新しい試みとして無組織、無意匠、無脚色が行はれて來た。一代男は殆ど無組織にして斷片的のものである、色道修行の閲歴の中、深く感銘した印象を片端からぽつ〳〵書いて行つた風のものである。馬琴は西鶴を評してその文は物を賦するのみにして一部の趣向なしと云つた、當時の學者の眼にはこが如何にも飽き足らぬ點であつたらうが、今日から見ればむしろ先見ある活きた試みと云つてもよい云々。

私はこの所論に對する卑見を述べつゝ、短篇小説としての一代男を眺めたい。此の論者は全然短篇小説としての價値を認め、更に無脚色の敍述は即ち現代小説の先驅たるの觀あると共に、立派に存在の意義があるとして居る。一體、無脚色な現代小説に價値があるとて、直ちに無脚色の小説は凡て價値があるとは云はれまい。この論理上の錯誤は暫く措くとしても、一代男の脚色趣向の不統一と、現代小説の所謂人世の斷片を放下して、現實の姿を髣髴せしめるものとの間には大いなる徑程がある。試みに一代男のどの篇を抽き出して見ても、最も鮮明に浮き出して居るのは、小説としての中心思想よりもその背景である。たとへ遊里描寫が人間生活の一端であつても、單にその敍述だけでは色里案内記と何等異る所がない。意義ある小説、渾然たる藝術品として取扱はるるには、少くとも中に閃めく骨子、即ち人間の活きた記錄がなけらねばなら

ぬ。一代男五十四條の中、果してかゝるものが存在して居るだらうか。「身は火にくばるとも新町夕霧が情の事」や「その姿は初音、島原右は高橋の事」には多少その面影が見られるが、これとても世之介なる一代男を、腦裏に留めて味へばこそ、そこに油然たる詩味風韻が湧くものゝ、一篇を切離して考察するなれば、その間には大いなる溝渠が入こんで來る。その他の場面の多くは、完全の獨立を保持する事が出來ないので、大體論としては人物の活躍も情趣の共鳴もなく、唯、徒に精緻なる描法の獻立に、時代の影を趁ふのみである。かの有名な『形見の水櫛』の段で世之介の死を思ひ止る分別には元祿世相の一面たる積極的氣分が現はれ、寒河江の宿の『夢の太刀風』の怪異は、現實的な浮世草子には水に注した油の感じはあるが、時代の迷信が知らず〳〵落した片影であらう。而して、その人々に噲炙する所以は、むしろ文章の魅力に歸因すべきと思ふ。

かくの如く西鶴の描いた一代男は各說話として見るも不備の點があり、全體としては支離滅裂の譏りを免れない。かう論じて來ると西鶴の處女作たる一代男は、價値の甚だ少ないものとなる。私はさらにこの暗側面を惹起した素因に就て攻究して見たい。

一代男の卷を追ふて點檢すれば、主人公世之介の個性は、漸次曖昧模糊の度を增して來る。初期に於ては折角異常兒として、また色道の天才として特述せられたものが、年代を重ねるに從つて遊蕩兒としての普遍性を帶ぶに至つた。この一事は既に世之介の存在の意義を沒却するものである。これに反して遊里洞房の描寫は次第に詳細濃厚の度を加へて來る。これ正しく主人公とその背景との取扱上に、主客顚倒の珍現象を生じたものと云はねばならぬ。特に後紀に於ては甚だしくこの態度が現はれ列所の遊里と數多の遊女との風俗習慣、姿態特技は、妖艶にして明麗なる彩筆の下に鮮やかに浮出して居るが、主要なる主人公の影は極めて薄い。その結果、年代順に配した各場面の一を抽出して、他の場面と入換へても何等の不合理を感じない。具體的に

云へば、初期は例外として、その他數十の好色談を孰れの年に振り當てゝも如何なる場面に割り付けても、そこに矛盾撞着は生じないのである。しかし場面とそれに附隨した描寫とは切放す事が出來ない。換言すれば世之介三十五歳の出來事を、三十六の時とするも三十七の時とするも、乃至は四十、五十の時とするも不都合はない。又その場所を吉原とするも島原とするも難波とするも、何等の破綻は來さない。但し吉原に於ける情趣、島原に於ける氣分はその地獨特のもので、交互に變換させる事は出來ぬ。この背景過重の奥には作者自身の動く姿が見える。これは作者の興味中心主義の創作的態度が、小説構成上の主要部分たる人物事件を離れて、知らず〳〵背景のみに意を用ふるに至つたものである。而してこの方面に於ける興味は、とりも直さず作者の人格風尚を語るもので、彼が幇間的俳人として遊里に入浸つた半生を物語るものであらう。

さりながら、この遊里描寫だけを取つて見れば巧緻精細なる名品を以て許す事が出來る。而してこれを圍繞する雰圍氣、時代の實相は、最も鮮明に描き出されて居る。この點は卽ち一代男の長所であつて、かの西鶴崇拜者の渇仰の一因はこゝにある。

遊里描寫に於て第一に注意すべきは、啻に三都のそれのみならず、足跡殆ど全國に普き事である。この方面に於て一代男は旅行文學の體を備へ、且遙かに後世の洒落本の俑をなして居ると云はねばならぬ。かく都鄙に於ける當時の狹斜の巷を描くと共に、遊女の品目の等差をも忘れなかつた。大盡時代にあつては多く一流の太夫を點出したが、放浪時代にあつては幾多の下等な賣女を筆にした。しかのみならず地女にあつては、處女、人妻を初め御所女、屋敷女等の各方面に亙り、當代に於けるあらゆる女の階級を網羅した形ちである。作者はかゝる肉の歡樂に陶醉するのを現世に於ける無上の悅樂としたらしく、その風習慣例に浮身を窶して細大洩さざらんと力めた。『木綿布子も假の世』では坂田の濱の惣嫁を描き、『一盃足らいで戀里』では島原の水揚の定めを語り、『一夜の枕物狂』には大原のざこ寢を敍し、『晝のつゝ狐』には京の手だ

て宿の踊子を說いた。かゝる背景が各篇毎の主要部分を形成する程、作者は全力をこに傾倒した。從つて時代の享樂的方面は濃厚な色彩を帶び、更に個人に關する趣味嗜好をも書きとめんとした。試みに生玉社前に於ける太夫品定めの一節に聞け、

今日の暮までの慰み、入日も背山に傾き、惜しきは今少しの年前小作りなるこそ思ひ所、顏美しく氣高く、心立も賢し。大橋は背高く麗しく目附涼やかに口附賤しく道中思はしからず、座につきての有樣歌詠まぬ小町に等しく、志は弱々として諸事禿のしゆんが知惠を貸すぞかし。お琴は不束なる貌、いやらしき所、それを好く人もあり、萬賢過ぎて欲深く、道筋の種物一つの歎なり、一座の捌終に怪我を見つけず、何處やらによき風儀備はりぬ。朝妻は立延びて腰附に人の思ひつく所もあり、脇顏美しく鼻筋も差通つて氣の毒はその穴黑き事、煤掃の手傳かと思はる、されど花車がつて濕藉しく、少しすんどに見ゆる時もあり、何れか太夫にして嫌とは云はじ。朔日より晦日までの勤め、家内繁昌の神代以來又類なき御傾城の鏡、姿を見るまでもなし、髮結ふまでもなし、地顏素足の尋常、はづれ綽かに細く態格好しとやかに、肉のつて眼光ぬからず物ごし好く、肌雪を爭ひ、床上手にして名譽好にて、命とる所あつて飽かず、酒のみて唄に聲よく、琴の彈手、三味線は得物、一座のこなし、文面氣高く長文の書手、物も貰はず物を惜まず情深くて手管の名人、これは誰が事と申せば五人一度に夕霧より外に日本廣しと申せども此君此君と口を揃へて賞めける。

作者の聲は時代の聲である。吾人はこれによつて元祿の遊蕩兒が眼に映じた理想的遊女の面影を見る事が出來る。

而して白及の下に、情人の膝を枕にして悠々と投節歌ふ意氣を尊び、「少し足らぬ人を睹にして遣はしけると、さながら見えますによつて。先樣の人憎さも憎し、あんな男に逢ふて取らせました」の俠氣を喜ぶと共に、「出ても座敷に上らず築山の景色を樣子ありげに見渡し、何時となく手水つかひて、その一炷裾に留めて返る」の用意、「命を捨つる程になれば道理を詰めて遠ざかり、名の立ちかゝれば了簡してやめさせ、暮は義理をつめて見放し、身思ふ人には世の事を異見して、女房のある男には恨むべき程合點させる」心づかひを讃嘆した。かゝる里に理想を求め、かゝる境遇の女を崇敬す

るのは、時代の考慮なしには解釋し得ざるところである。江戸幕府執政期に於ける遊廓は唯一の社交界で自由戀愛の醗酵地であつた。されば幾多蕩兒の群が、享樂生活の對象として、こゝに生の愉悅を味ひ、肉の歡樂を求めんとしたのは自然の勢である。故に彼等の遊女觀は、今日の道學先生乃至は救世軍一派の見解とは霄壤の差がある、否むしろ別問題である。彼等が遊廓を喜見城と號し遊女を生菩薩と稱したのは、幾分の誇張と矜持とはあらうけれど、大體に於てかく考察し思惟して居たのである。而して作家西鶴の如きはその第一人である。こゝに於てか此の世界の描寫には多大の興味と感激とを以て臨んだので、正しく時代思潮に棹した結果、元祿時勢粧の一面を的確に把持したのである。かの「亭主床をとつて蚊帳釣かけてこれへと由す程に、夢見よかと入りて汗を悲しむところへ、秋まで殘る螢を數多包みて禿に遣はし蚊屋の内に飛交して水草の花桶入れ」たる情趣や、「春めきて空色の御肌着、中には樺繻子に落梅の散らし、上は緋緞子に五色の切附、羽根、羽子板、破魔弓、玉光を飾りて、形には注連繩、柊葉、思葉數をつくし紫の羽織に紅の絎紐を結下げ、立木の白梅に名を鳴く鳥を宿らせ」た風俗は、いづれ花柳界に於ける繪姿の一ひらと見るべきであらう。

かく遊里全體から生ずる情調が、中心として存在するがために、主人公はあれども無きが如く副人物に至つてはむしろ名のあるのが却つて可笑しい程である。故に前述の如く脚色の結搆布置とか、人物の性格運命は度外視せられ、世之介なる一の代名詞を冠らされた粹人の偶像を樞軸として、幾多の歡樂鄕が渦卷いて居るのである。

私は先きに背景が主要成分として取扱はれて居ると云つた、又背景は卽ちこの戀の歡樂鄕で、多くの場合は遊里である事も述べた。然らば此の遊里描寫に必然附隨して來る肉の描寫は如何であらう。西鶴に現はれた肉欲描寫に就ては好色本全體を通覽する必要上、後章に讓る。今こゝではこれだけの事を述べて置きたい。世之介は單なる性欲追求者でもなく、女の肉に憧るゝ色餓鬼でもない。遊里に瀰漫する一種の氣分に憧憬する享樂兒である。女性その者から生ずる情趣に沈湎し得るデカダンである。又執

着のない思ひ切りのよい男である。梗概に顧みて明らかなるが如く、子までなした女も、命がけで得た美人も、これこそはと大金を擲つて宿の妻にした遊女も、悉く弊履の如く打すてゝ、飄然、色道修業に上る彼は、全く恬淡寛濶の人であつた。勿論性格描寫の小説でないから心理的の矛盾錯誤は敍述上に見えるけれど、一連一鎖、現はれ來る數十の場面は、彼が樂天洒脱の性情の一端を洩さゞるはない。これが又所謂粋道の一面であつて「わけ知りの世之介」と讃美せらるゝ所以であらう。「わけの聖」と稱へられた作者も亦「瞿麥の揃浴衣、皆捌髪となつて下帶もかゝず八文字屋の二階に上りて騒げば、一町鳴をやめて可笑しがる」九人男の遊び振りを賞め、「揚屋の見世より太夫、慰に金を拾はせてお目に懸けると、服紗をあけて一歩山を移してありしを、小坊主に申付けて雨の如く表へ撒く」さる大盡の遊興を、「金捨てゝ人に嗤はれ」と嘲笑して居る。かゝる粋と野暮との別れ路に、隱微なる神經の顫動を感じ得たのが元祿粋人の身上であつて、この點は文化文政時代の人情本に現はれ來る蕩兒の群とは大に選を異にして居る。この情趣、この氣分を燦烈なる色彩の下に描き出さんとした作者の努力は、知らず〳〵小説の主人公としての個性を忽にするに至つた。されば背景過重の結果は、こゝに因をなしたと云ひ得やう。もしそれ、問題となるべき如何はしき閨房の祕事の敍述に至つては、たとへ、わざとらしい筆の跡が認められるとは云へ、背景描寫の餘技に過ぎないと思ふ。但しこの點に就て、一代男とその他の好色本とに差異のある事、及びその原因等は更に語るべき機會があらう。

とにもかくにも、時代の實相を强烈な太い線で描いたが爲に、その對象として題材に上つた遊里の狀態は鮮明に反映して居る。その代り一篇の小説としては散漫な、斷片的なものとなつて了つた。この點が批判の立脚地如何に因つて賞讃の叫びともなり、非難の聲ともなるであらう。この明暗兩側面の分界線は、前述の如く中心的構想と背景との主客顚倒にあると云はねばならぬ。以上の理由に據つて一代男に對する毀褒貶をいづれか一に歸する事は出來ない、爬羅剔抉の結果、その長短を明示するの

が穏當の批判である。

第三節　「一代男」の古典準據說

一代男が源氏物語を粉本としたとの說は、古く且廣く行はれて居る。しかしこれに就て考察すべき餘地は猶殘つて居るやうに思ふ。先づ兩者の類似の點を基礎とし、更に作者の學殖をも顧みなければならぬ。類似の點は全般的、部分的の二つに分ける事が出來る。前者にあつては構想上に關するもの、後者にあつては說話分子を指す事になる。

源氏物語が主人公光源氏を中心として、桐壺から夢の浮橋に至る四十四帖、これに薫大將を中心とする宇治十帖を加へて、五十四帖の戀物語から成る事は今更改めて云ふに及ばない。而して一代男は世之介を核心としてその一生を七歲から六十歲まで、年々の記錄合せて五十四條を以て成立して居る。彼の一帖とこれの一條とには、その取扱に非常の差異があるにしても、小說を構成する目次の概數は同一である。その上、中心思想として用ゐられた題材は等しく戀愛を基調とする一個の男子の情的生活である。平安朝と元祿期との年代の差から生じた時代思潮の變遷、王朝貴族と近代平民との現實生活に挾まれた趣味風尙の相違、これら時處の問題を離れて考ふる時、そこに現はるゝ二つの小說は、概念的にはた外面的に著しい類似が認められる。吾人は暫くこの提示をそのまゝとして先へ進まう。

次に部分的類似の方面は如何。

この點に關して詳細に指摘したのは、水谷不倒氏（列傳體小說史）である。その意見をこゝに略說すれば、『口舌の事ふれ』の章で、世之介が男ある舞姬を唆かすの條は源氏が夫ある空蟬に戀するに似通ひ、『因果の關守』以下にはかの夕顏の宿の哀史を思はせる。特に『夢の太刀風』の物怪は廢院の夜の凄愴を聯想し、『形見の水櫛』の女の死に際し「二十九までの一期何思ひ殘さじ」とて自害せんとする世之介には、夕顏の死に

際して「生き留るまじき心地すれとて、いとゞしき朝露に何處ともなく惑はるゝ」源氏の君の面影を忍ぶと云ふのである。

かくの如き局部を拾へば生玉社前の「太夫品定め」は源氏の雨夜の品定めの蹈襲と見られ、「髪きりてもすてられぬ世の後家」はさながら六條の御息所であらう。更に多少場面を擴大するも、世之介が偏辟の放浪は源氏の須磨、明石に當り、少年時代からの性の衝動は兩者ともに共通である。

小場面、小局部の類似を求めたなら猶多々あると思ふ。しかし共に一個の情的生活を描き、その戀の場面を數十に亙つて羅列するならば、その間に類似暗合のあるのは已むを得ない事であらう。要するに準據と云ひ類似と云ひ、更に摸擬飜案と云ふが如きは程度の問題である。從來の文學史家が多く源氏摸倣說を稱へたのは、此の大體から見た論斷であらう。故に部分的類似よりもむしろ全般から見て同じ匂ひ、等しい氣分が漂つて居るとだけで止むべきものと信ずる。

佐々醒雪氏は次の如く云ふ。

一代男の著作は勿論一時の戯れであつたらう、決して大抱負があつたと思はれない、その構造は或は源氏物語に擬する考へであつたかもしれぬ、當時湖月抄も既に上梓せられ且源氏の梗概めいた假名草子も澤山に出版せられて居るのみならず、俳人間には源氏と云ふ名は廣く喧傳せられて居る。だからその名は必ず西鶴の耳朶に觸れた事であらう。彼は恐らく源氏を通讀した人ではない、否々彼の學問は百人一首徒然草謠曲位で三代集にも精通しては居なかつたであらう。果して源氏に擬するつもりであつたとしても、源氏物語は光源氏と云ふ人の一代の情話が年を逐うて記してあるものだとのみ信じたであらう。その他の點に於ては一代男は毫も源氏物語には類似して居ない。（近世國文學史）

右に於て論者は大體としてある類似を認むると共に、西鶴の學殖にまで論及して居る。この點は穿ち過ぎた感があるけれど、當代作家の一般の傾向から見ても、西鶴自身の俳諧及び散文の諸作を見るも、その學識の甚だ深からざるものがある。中にもそ

の殁後幾何ならずして無學文盲と嘲られ、幇間俳人と貶せられ、その無識の實證を擧げられた數々を顧みると、源氏物語なぞは恐らく通讀しなかつたかも知れない。しかし彼の長唄「春日野」を見ると、若紫や榊の卷の和歌を引用して居るから、評判によつて覗見ぐらゐはしたらしくその結果、ヒントを得て一代男の筆をとつたとの想像も立つのでさる。

伊勢物語との關係を偲ばせるのも、源氏準據説と同樣の理由がある。伊勢物語は人も知る如く、風流詩人在原業平の自敍傳を假りて和歌を骨子とした戀物語である。一條一條きれ〴〵で、しかも主人公と目指されるは同一人物である。この構成と一代男との類似は、むしろ源氏物語よりも密接であらう。さりながらこれもまた大體の論議に過ぎない。

要するに一代男の古典準據は、細心精緻の攻究に委ぬべきものでなく、唯漫然たる印象の記錄である。人心の機微は時として他の覬覦を免さない。所謂ヒントなるものの陶冶される識域は、神祕にして不測である。されば一代男と伊勢源氏との類似は、極めて大まかな推理であつて、その間に類型的題材が存在するだけこゝには後代文學の弱味がある。

併し一代男の眞價はこの類型的題材の有無にあらで、それに盛り上げた內容の實質にある。

源氏物語がその對象を、平安朝の宮廷生活にとつたと同じ意味に於て、一代男は近世史上、新たに勃興した町人の市井生活に求めた。かれは櫻かざして春の日永を、戀と哀に終始した大宮人を中心とし、これは青樓の不夜城は杯を啣んで、金と色とに沈湎した平民を舞臺とした。かゝる差異は正しく時代相を語るもので、作家の人生觀照の立脚地は同一である。この點に於て、結果即ち作品に現はれた世態に相違はあるものゝ、根柢に於ては渝らぬ心の流が認められる。されば此の二作品の距離は、內的要素、即ち主人公の性格とか、自然人物の描寫表現と云ふ方面にあると云はねばならぬ。

光源氏の性格をこゝに詳敍する要はない。彼は時の帝の寵子として、美貌と才學とを兼備した圓滿具足の完人であつた。しかもその生活は望月の缺けたる事なき理想鄕にあらずして、煩悶も執着も、寂寥も悲哀もあつた。彼は一方に、歡樂の夢圖かなる花やかさを味ふと共に、儘ならぬ浮世の姿をも感得した。所謂、ものゝあはれを切實に躰驗した人であつた。さればその一生に纏絡する女性との交渉は、波瀾あり曲折あり、流るゝ水の渦を卷き白を沸し瀨を作り灘をなすが如く、生の悅樂も哀愁も、照應により葛藤によりて、解けつ絆れつ進んでゆく。夕顏、葵の上、未摘花、明石の上、六條御息所、花散里、紫の上を初め幾多の女性は、見えざる緣の絲に操られて、梅と匂ひ櫻と綻び、さては秋の野の千草の亂れに、かつ咲きかつ散つて、五十四帖に、紅紫繚亂の花の錦を織り出して居る。單に女性のみならず、男性には頭の中將を初め、許多の殿上人が經緯となつて、くしき運命の路を辿つて居る。かくの如きは一代男には見られない現象である。世之介は徹頭徹尾、色道の修行者である。肉に沈湎し性に陶醉して、何等の內省も顧慮もない。たとへ幾分の本能滿足萬能主義でない素振があるにしても、漫然と肉の世界の氣分に浸潤して、その情趣を享樂せんとする態度が見える。この故に源氏の君が、一度契つた女は終生見棄てず、六條院の對の屋に美的生活を現出して、親子、夫妻の關係に人生の至醇なる情味を汲まんとしたのに反して、世之介は單獨的行動を恣にして、偶ま得た子さへ棄てゝ顧みない全然捨て情である、行當りばつたりである。作者が力を極めて寫し出した、三笠、夕霧、藤浪、御舟、吉田、高橋、野萩、小紫等、三都に於ける一代の名妓も、後朝（きぬぎぬ）の鐘の音と共に袖を分てば既に路傍の人である。此の樂天的な刹那主義の行動は、延いて一代男をして斷片的無脚色の小說たらしめた大原因である。要するに源氏物語の女性關係を一貫するは愛と涙とであつて、一代男に終始するは肉と戲れとである。

かく異同の兩面を考察する時、一代男に於ける古典準據說は唯その概觀に止まり、直接粉本となつたものは寧ろ前に述べた浮世草子の傳統に在る諸篇である。而して此

の一篇を左右する原動力は、寛大濶達にして樂天洒脫、自由奔放にして無拘束な元祿の世の、油の乘つた時代精神に存在するので、これを小說に加味したのは作者の創意として認めてやらねばならぬ。

第四節　「二代男」と「三代男」と

一代男に於て豫期以上の喝采を博した西鶴は遂に純然たる戯作者として立つ事となつた。彼は先づ世人が一代男を讃美する素因に想到した、而して花柳界の細微なる描寫が、如何に當代の俗衆に迎合せられたかを看取した。この自覺を以て第二の作品にとりかゝつて出來上つたのが好色二代男である。一代男を去る事正に二年、貞享元年初刊を公にした。

一部八卷、各卷五篇から成る。この四十篇は一代男の如く同一人物によつて繫がるものでなく、それ〴〵讀切の小話として見らるべきものである。而して全篇を背負つて立つべき二代男なる人は、一代男世之介の十五の折、さる後家に生ませた忘れ形見で、襁褓に卷かれて京は六角堂の門前に捨てられて居た男である。ある夜の夢に女護島の美面鳥が來て、父が色道祕傳の卷物を袂に投入るゝと見た。この男、京育ちの

美貌の上に父の血を享けて遊蕩に日を暮す。ある時、類を以て集まる誰彼と出口の茶屋に腰かけて、朝歸りの客の批判に興じて居るとき、そこへ來かゝつたくにと云ふ此の里の古狸婆を捉へ、「語らすると聞くにようも〳〵諸國の諸分覺えて、永き日の西の國に入るまで」聞流したと云ふのが、此の物語の發端である。又最後の章に二代男が、一生の惡所の供養に、二十五人の太夫の姿目前に現はれて、仕度三昧の二十年の夢を語つて居るけれど、その間に介在する幾多の色沙汰は何等二代男とは關係がない。發端に於て全篇の趣向を語つて居る通り、悉く話の聞書、巷の噂から成立して居る。この點に於て一代男の構想とは大に趣を異にし、二代男の題名も適切を缺き、むしろ別名たる諸艶大鑑の方が内容にふさはしいと思ふ。

これらの小話を通覽するに、ある一個人の歡樂を謳歌すると云ふよりも、元祿期に於ける情趣生活を中心として花柳界の敍述するを喜ぶの風がある。かの一代男に於て作者の興味が背景過重の態度に出た事を指摘したが、二代男にあつては一層この傾向を明確に曝露して居る。但しこれにあつては、一貫した主人公を有しないために、かれに認めたやうな不合理は浮上つて來ない。さりながら短篇小說としての缺陷は、一代男と規を同じうする事は言を俟たぬ。

この紅燈趣味狹斜情調を中核として渦を卷く風俗習慣は、或は聲々に傳つた廓の噂として、或は一條のエピソードとして、凡てが作者の直接に見聞した廣義の意味に於ける閱歷を語るものである。而してこの實生活の反映とも見るべき、かず〳〵の情話は、大體二樣に分たれる。卽ち脚色を有するものと有しないものとの二つである。數量の上から云へば一體に廓を包む氣分に力を集注した結果、脚色あるものゝ方が少ない。然らば脚色のない筋の通らぬものゝ多い理由はどこにあらうか。この點は二代男の目錄を見たものゝ誰しも直ちに氣付く事であり、更に内容を驗してその想像の謬らざるを悟るのである。その例を擧ぐれば次のやうである。

誓紙は意見の種（第一卷第二）

一、江戸大阪初床仕懸の事
一、雨の中宿に女郎の難義工む事
一、新屋の小太夫古今類なき志の事
釜を琢く心底（巻六巻第四）
一、京は銀でも自由させぬ事
一、初物だしおくれの事
一、三野丹州庭働きの事

右の如く各篇は各三つの項目に分たれて居る。中には説話構成上、相關聯したのもあるけれども、多くは虹の七色の次々と變つて行くやうに、一つから他に移つて居る。所謂連歌式で聯想上肯定せらるべき點は認められながら、いつの間にか姿態の異なる分子が現はれて居る。こゝに於て一篇には二三の目的が存在する、この核心の分裂は二代男の各篇が短篇小説としても、一代男以上に雜駁を以て見らるゝ原因であらう。

かゝる不統一なる短篇中に取扱はれた材料には、著しく靡爛した風趣が含まれて居る。或は三都の花街を比較し或は遊女氣質の變遷を敍し、又は遊女と禿との關係を語り揚屋の言葉癖を述べあげる。陀々羅遊びの大盡を描くかと思へば、紙子一枚の果に全盛の昔を偲ぶ時代の子を寫し、「湯漬飯の早喰、肴重箱には山椒の皮ばかり殘し手洗ふては自然に乾上らす」裏面より見たる太夫の自墮落さ。勘當せられた息子の、迎ひの者に逢ふや「太夫は無事か、親父は懲りたか、母は泣いて居らるゝか」のどら氣質。それが昂じては「河竹丸と云ふ小船に、八疊釣の紋紗の蚊帳、乳緣、緋緞子四角の唐總、匂ひ玉靡かせ、和國美人揃の枕屏風、高蒔繪の書棚を飾り、替帷子の數を見せかけ、大振袖の腰元、御前樣近き風俗して、茶臺の通ひ、軸簾の中には、大勢あると見えしが琴三味線の音もなく御手が鳴ればあひ〳〵と云ふ聲ばかりして此の奥ゆかしき川遊び」となり、更に進んでは「四つの隅に炬燵を四つ切りて同じ色なる蒲團をかけ足さしこみ枕は一つ所へよせて御話申す」の頽廢的場面となり、「裾なしの大夜着、兩

方の袖を四つ附け、長さ一丈五尺の白天鵞絨、さながら雪の富士動くが如く、留木の烟立ちならぶ」官能の世界となる。取材のとり〳〵千姿萬態の技巧はあるが、いづれ蕩兒の眼界以外に一歩も踏み出しては居ないのである。

飜つて脚色あるものを觀るに『惜や姿は隱れ里』の如き、遊女がその情人のために怨みを報ずると云ふ、純然たる仇討系統に入るものもあるが、多くは喧々たる遊里洞房の痴語情話に過ぎない。『一言を聞く身の行衞』に於ける五音の占や『忍ぶ川は盥が越す』に於ける心中立等はその適例であらう。

見來れば二代男に現はれたる題材は、既に一代男に於て取扱はれたるところのものである。太牢の珍味も重なれば飽く。明媚なる山河の姿も馴れては詩情を動かさない。西鶴は同じ世界の同じ材料を幾度か使用した。新涼の香は失せて陳腐の臭ひが鼻を打つ。敍述に於て、或は精細を認めらるゝ、箇所が絶無ではないが、二度の勤の譏は免れない。而してこの缺陷は吾人をして直ちに西鶴の天分に想倒せしめる。卽ち現世謳歌の聲と共に、寫實の大旆を飜して浮世草子の壘に據つた彼は、既に〳〵想像力の缺如を物語つて居たのである。直接經驗以外、彼には何物をも把握するところがなかつた。詩人としての天分を、最も富贍ならしむるファンタジーの翼は、彼に發見する事は出來ない。千篇一律、幾度か實驗圈内に圓周を劃してぐる〳〵と廻つた。結果は思索の凝固となり想泉の涸渴となつて、遂にはこゝに永住する能はざる破目に陷つた。併しこれは猶後年の事、吾人はまだ二代男に就て言及すべき一箇條を餘して居る。

それは超自然分子の混淆である。尤も一代男には夢の太刀風のやうな怪異が認められるけれど、それは唯一の例外であつた。然るに二代男には著しく現はれて居る。「朱雀の狐福』に見えた狐は、島原の内證を見通し、『心魂が出て身を燒印』の太夫は一念凝つて瓦となる。くづれ橋にろくろ首が出れば、越の立山の谷陰には相對死の面影がまざまざと見える。わけて『反古寺尋ねて思ひの中宿』に描かれた女の執念の恐ろしさ。「折節は十二月九日、怪しからず高砂を吹き上げ、浮島が原も松騷がしく、木枯の

森の邊は五色の雲立重ね、名山も推量に眺めしに、海原の朝日、紅の浪わけて空も靜かに山も仄かに煙を見つけし時、井筒の情委にて面は雪を爭ひ、われを見つめし眼差、」日夜この生靈に附き纏はれ「人には語らず思ひなして後は痩せ衰へて、自ら限りも知らるゝ時、家に木葉埋み、火宅は今と燒けにける。武藏にありし井筒もその日その刻眠るが如く」死んだと云ふ。かゝる思想は怪異小說の系統に屬すべきもので、現實的な浮世草子には適切を缺くのみならず、全般の整齊調和を破壞するものである。さればこの超自然的記述の多ければ多い程、浮世草子としての意義は滅却されるものと云はねばならぬ。一面から見れば、かくの如き緣遠い文學的要素の補助を求むるだけ、作者が思想の涸渴、想像力の貧弱を語るものである。而してこの背景には文壇の一方に縷々として命脈を絕たなかつた怪異小說の一派を、認識しないわけにはゆかない。

以上の諸點を總括すれば二代男は一篇の小說としては、既に構成上の破綻があり、短篇小說としても篇中に二三の說話上の頂點を有して不統一に陷り、しかも題材は一代男の糟粕を嘗め、加ふるに現實主義を裏切るべき超自然分子をも交へて居る。かくて二代男は遂に一代男の風下に立たねばならなかつた。

貞享三年に於ける好色三代男も亦前作の亞流であつた。夢介なる男が、とある山里の庵に辿りつき、その庵主に「汝、色道にふける事多年、世に一代男二代男と呼ばれしも皆傾女にのみなづみて、方便の情に身體をうち、親の諫め、世の譏をも顧みずその外に未だ眞實の戀あるを知らずばあるべからず、いざ此方へと手を引いて一間へ入り、東西南の障子を開けば諸國好色目の前に現はる」これを書きとめたのが三代男の物語である。從つて內容も離れ〴〵の六十二條から成つて居る。

この作の特色と云ふべきは在來の遊里から脫却して、更に題材を市井の男女に求めたところにある。併し此の場所の相違は、皮想的な形式上の差異であつて、現はれ來る人物は、悉く遊蕩兒的の町人と、遊女化したる町娘とである。從つてその間の葛藤も、戀愛でなくて肉欲である。卽ち生の衝動に嗾かされて、惑溺の淵に沈みゆく幻滅

の悲哀を語るもの、これ三代男の骨子である。

要するに一代男、二代男に描寫せられた世界をば、更に市井の出來事として三代男に繰り返したに過ぎない。かく男性を中心とした好色本は常に同一圏内を旋回した傾向が認められる。從つて西鶴の作として見れば、二代男は一代男に劣り、三代男は二代男に劣り、樣によつて胡盧を描けども、藝術の殿堂とはます〳〵遠ざかる。果然浮世草子の創始者西鶴は沈滯に甘んずる男ではなかつた。彼はこゝに於て創作上の立脚地に一革新を敢てした。

第五節　「一代女」梗概

貞享三年、作者として西鶴の道程は一回轉した。男の眼に映じた女の世界は、こゝに女の睫の間から見た男の世界となつた。好色一代女に描かれた元祿世相は如何なる反應を呈し來るべきか。吾人をして暫く梗概の筆を執らしめよ。

京に近い梅津川の畔、北山蔭に、「女松むら立ち萩の枯垣疎らに笹の編戸に犬めぐり道の荒けなく、それより奥に自然の岩の洞靜かに片庇を下して軒に忍草、過にし秋の蔦の葉殘れり、東の柳の下に筧音なして任せ」水も情ありげなる境に、洒板(しやれいた)の額かけて好色庵と記せるを、路蹈み迷つた當世男二人、ゆくりなくも尋ねあてゝ、「三輪組み髪は霜を梳り、眼は入方の月影かすかに天色の昔、小袖に八重菊鹿子紋を散らし大内菱の中幅帶、前に結べる」庵主の老女から聞く一代の懺悔物語。話のいとぐちはこゝに解ける。「母は筋こそなけれ、父は後花園院の御時、殿上人の交り近き人の末々」と公卿の血を引く女主人公は、幼い頃から大内に宮仕へして、華奢な事どもを見聞したが、早くも十一の夏の初め生心(なさけごころ)ついて、さる方の青侍と戀に落ちる。或る朝ぼらけ事露はれて、男は宇治橋の露と消え、わが身は獨り生殘つたが女心の淺ましくも月日と共にその面影も忘れがちとなつた。かくてその頃流行した八人藝の舞姫の群に入つた。この間は、母親の附き添ふためか間違ひはなかつたが、そのうち川原町に出養生する、さ

る西國方の大名の夫婦者に愛せられ、やがてはその子の嫁にもと思ひ込まれたが、寂しき寢覺に殿を嗾かして、「さても〳〵油斷のならぬ都」とて、又親里へ戻される。その後さる國主が繪姿をもととして、これに叶ふやうな女をとの品好みに首尾よく應じ一世の艶姿と歌はれたが、殿の身に障る事あつて思ひの外にお暇が出る。ある年の秋、櫻紅葉を見に行つた折、「つらきは浮世、あはれや我が身、惜まじ命、露にかはらむ」と袖乞の女の歌を聞いて、あれが名ある太夫のなれの果と指し笑つたが、「人の因果は知れ難し、我も戀しき親の難義、人の頼むとて何心もなく商賣事請に立つた」ため、五十兩の方にとて島原に身を沈めたのは十六の秋。美貌と素性とが鼻にかけて、我が儘の振舞が多いので、全盛の花やかな生活も、たゞしばし、客は次第に落ちて行つた。（卷一）

「自慢姿ほどもなく報の種」となつて、天神に落ちた日、越後の大盡の目に止つたが、廓の慣はしに大盡の身として天神を買ふわけにもゆかず、女はみす〳〵玉の輿に乘りはぐる。かくては「末々も腰をかゞめず、樣づけし人も殿になり、座附も上へはあげず口惜しき事の數々に」太夫であつた日を回想しては、胸をさすつて暮すうち、頼みをかけた三人の客もそれ〴〵の不仕合に音訪も絶える。折柄病に罹つて昔に變る窶れ姿に、黑髪薄く朝夕の鏡も見捨てるに至つた。そのうち又一段下つてかこひになされる。客種の落ちるのは云ふまでもなく、「太夫天神まで勤めしうちは、さのみ此の道とても憂きながらうきとも覺え」なかつたが、今の路の悲しさたとへやうもなく、此の里にも居たゝまらず新町に鞍替したが、こゝに二年勤めて後、淀の川船に乘つて再び古里に歸つた。

京に歸つた彼女は、小作りを德に御寺小性に身をやつして、寺々を廻り、墮落僧の弄び物となつて居るうち、ある寺の大黑に住込んだ。馴るれば人燒く匂も白菊と云ふ伽羅にかはらず、佛名書きすてた反古に鍋の包燒して朝夕を送る。風梢を鳴らし芭蕉葉亂るゝ夕、うたゝ寢の夢に魘されてからは、とかく無用の居所と、着物の下かべに綿を含ませて、身持らしく見せかけ「月重なり何時を定め難しと云へば、長老驚き早

く里に行きて無事になりて歸れと、布施のたまりを取り集めて」出すを、その儘うけとりて又歸らず。彼女は次に手習師匠と化けて女筆指南の貼紙やさしく、身のいたづら、ふつとやめて何の氣もなかつたがある男に戀の玉章の代筆を頼まれ、いつとなく亂心と窓よりなつてわれから戀を持ちかけ、「五月雨の降り暮していと蕭やかに藪雀飛入り」灯火むなしく闇となるを幸にわがものとする。（卷二）

手習師匠をやめて後は大文字屋といふ呉服屋の腰元となつた。「人手をとれば上氣をし、袖にさわれば驚き、座興とふにもわざと聲を擧げ」てまんまと素人女になりすまして、奥近く神妙に勤めて居た。しかし持つて生れた浮氣の蟲に、主人を手中に丸めて本妻を離縁させようと企み、山伏を頼んで調伏するに至つた。然るに人を咒はゞのためしに洩れず、却つて我が身に當り、いつとなく秘めし事を口走つて狂ひ出る。今日は五條の橋、昨日は紫野と夢の如く浮かれて欲しや男、男欲しやと踊小町の昔を今に唄つて歩いたが、ある日稲荷の鳥居の邊にて正氣づく。淺ましき女心の、今更に恥かしくなつて江戸に下る。

かくて、さる方の表使となつたが、淺草の下屋敷に蹴鞠の催されし日、局女蔕を初めお末女に至る三十四五人が車座になつて、それ〴〵の恪氣話を更闌くるまで語り耽つた。こゝに女の執念嫉妬の恐ろしさ淺ましさの數々をまのあたり見せられて、「此の御奉公にも氣懲りし、御暇申し請けて、出家にもなる程の思ひして、又上方に」歸つて來た。歸つては來たものゝ、何よりも先きに身に迫るものは生活問題である。そこでさきの覺悟もどこへやら、今は出舟入舟の亂るゝ川口に、黑髪剃つて歌比丘尼の群に入り、いやしきたつきにその日を送る。これも暫し、髪の延びると共に「當世の下島田、惣釣と云ふ事を結出し、さる御方へ御梳にみやづかへ」する事となつた。此の家の奥方、地髪極めて薄く髱いくつかとりつけて房々と結上げ、緣組してからこゝに四年、時に丹那樣夜更けのお歸りにも、空寢入仕かけ口舌の種とするものゝ、さすが髪とられては戀のさめ際に悲しく、云ひたい事もこらへて居るとの打あけ話に、いとしさま

さり影身になつてお爲め大事と盡して居るうち、奥様「わが髪のわざとならず長く美しき猶み玉ひ、切れとは迷惑ながら主命是非なく見苦しき程になしけれども、それもまた昔の如くなり易し、額を薄くなる程拔捨てよ」との仰せに、暇を乞へば暇は出さで苛責が募る。そこでいよ〳〵腹を据えかね、雨の日のつれ〴〵に殿も女交りに琴の遊びの宵、猫にけしかけて奥様の御髪に搔付させた。この企ては首尾よく當つて、御契も薄くなり遂に離縁となつて里方へ歸られた。そのあとの淋しさにつけこんで、われから濡れかゝり望をとげる。（卷三）

此の奉公をやめて難波津は横堀の邊りに住んで、大家の嫁入の介添をして緣組の裏表隈なく眺めたが、又江戸に移つて、針の動くのを幸に御物師となつて、ある館に住込んだ。ある時若殿様の下着の繪模様から亂れ心になつて、堅氣の奉公の何となく、淋しく、本郷六丁目の裏店に下つて、萬物縫仕立屋の看板を掲げた。自由の身に如何なる男とでもと思ふ折ふし、無用の女舊衆ばかり尋ねて來るにいら〳〵し、館にあつた日のゆかりによつて越後屋と云ふ呉服屋へわたりをつけ、その店のものを縫つたが、思はくあつて借錢かさませ、懸取に來た白鼠の堅人を手玉にとる。次にはよる年に從つて身を持下し、茶の間女となつて宿下りを樂しみ、時には七十の老仲間を弄んだが、江戸にも飽いて泉州堺に赴き、こゝでさる隱居の註文に應じ妾奉公のつもりで上つたが、思わく違ひの女隱居で、それがまた男のまねを好み來世は男に生れたいとの事であつた。（卷四）

此處を去つて都の茶屋者となり、祇園八坂で簾越しに色聲かけて淺ましい身過をするうち、次第に萎るゝ戀草にも、蓼喰ふ蟲があつて門前町の下屋敷に園者となる。こも亦障る事あつて、風呂屋女となり一歩々々と暗がりに落ちてゆく。その間に出養生とてある醫者の許にあつた折、知合となつた、五條筋の扇屋に望まれて、お内儀様の名隱れなく、店には客の絶間もない。大商家の主婦として、彼女の運命は順路を見つけたやうであつたが、持つて生れた水性と、今までの境遇が禍して、店に來る若者と

出來逢ひ遂に追出される。それから後は、或は西陣の絲繰となり、或は寺の隱居の弄び者となつて生活の道を講じて居たが、又難波に下つて蓮葉女の群に投じ、自墮落な月日のうちに秋田の客を生捕つて一代見棄てじと誓紙を書かせ、國許の首尾惡しとていろ〳〵詫ぶるを堪忍せず、腹がむつかしくなつたとの難題着せ、遂に二貫目を强請する。（卷五）

暗物女、ふたせ女、舟まんぢうと轉々する。いづれは白粉と眉墨とに姿をやつす、たはれ女である。一度は伊勢路に下つて、定めぬ旅に果敢ない日を送つたが、「老の浪たつ戀の海、津の國の色所」新町に又立歸つて、遣手奉公をする。しかし女郎の內幕を知り過ぎたが却つて住ふにくゝなり、玉造の町はづれに明日をも知らぬ露の命を託した。折から近隣の女どもの暮向に不審をうち、よく〳〵聞けばこれもまた同じ浮世に、夜發とて恥さらしの商賣人。「そなたの姿なら、浮々と暮し給ふは愚なり」といはれ、六十五歲の皺を紅白粉に塗りかくしての世渡り。彼女は正しく人生のどん底に落ちて來た。

「萬木眠れる山となつて、櫻の梢も雪の夕暮とはなりぬ」。花はまた咲く折もあらうに人の身のはかなさ。生れの里の戀しくて又もや都に歸つた。ある日大雲寺に詣で、五百羅漢の堂をさし覗き、「心靜かに見とめしに、皆々逢馴れし人の姿に思ひ當らぬは一人もなし。過ぎし年月浮き流れの事ども一つ〳〵思ひ廻らし、さても勤の女ほどわが身ながら恐ろしきはなし、一生の男數萬人に餘り、身は單つ、今に世に長生の恥なれや」と身悶へし、後世の程も恐ろしく路傍の池に入水せんとするを、昔のよしみある人に留められ、「死は時節に任せ、今迄の虛僞、本心に返つて佛の道に入れ」とすゝめらるゝ儘に、萱葺の草の庵たてゝ念佛の明暮れ、音訪るゝ人あるに任せて「われは一代、女なれば何をか祕して益なし、胸の華開けて、萎むまでの身の事」の長物語はこゝに終る。（卷六）

六卷凡て二十四章。標題割書は前の作と多少異にして居る。例へば卷頭の章

老女の隱れ家。　都に是汰沙の女尋ねて
昔の物語聞けば
一代のいたづら
さりとは浮世のしやれもの
今もまだ美しき。

の如く一編の內容が想像せらるゝ程度に書きとめてある。

第六節　「一代女」評論

一代男から眼を轉じて一代女を繙くに、その差は單に男女の立場を異にすると云ふばかりではない。吾人の第一印象は卽ちこれである。

かの一代男の世之介の情趣生活には、一場面限りの興味にそゝられて說話發展の力弱く、一篇の小說としての存在が疑はれた。從つて某なる蕩兒の某所に於ける色道沙汰がわけもなく雜然と並列せられ、一個の人間が生涯の記錄としては慊らぬふしが多かつた。こゝに於て背景過重の缺陷は明らさまに曝露せられ當初に於ける多少の脚色をも蔽ふに至つた。然るに一代女にあつてはまづこの點に於てかなりの距離が認められる。

一代女は名の示す如く女一代の閱歷を語るものである。しかも痛ましい淪落の女の懺悔錄である。境遇と云ふ外的生活と、性と云ふ內的刺戟とを經緯として、知らず識らず人生のどん底へ落ちて行く薄命の哀史である。彼女は人生の第一步に於て蹈迷つた人間であつた。花やかに浮々した宮廷の空氣は、その春の目覺を早からしめた。しかも持つて生れた淫蕩の性格は、事に觸れ物に應じて刺戟せられ、果敢ない初戀の面影をも忘れはて、狂蝶の花に戲るゝ如き性欲生活はこゝに開かれた。彼女をして遊里の情趣に浸潤する機會を作らしめなかつたならば、或はかほどまで肉の歡樂に沈湎す

る事もなかつたらう。しかし一度蹈近んだ廓の氣風は、容易に拔けなかつた。この里を離れてからの彼女が、幾度か手に觸れた幸運の鑰を失つたのも全くこれがためである。而してこの廓氣質の裏には、止むなき性の衝動が隱れて居た。彼女は明らかにそれを認識して居た。そこに抑制せんとして、能はざる人間の弱味と性の悲哀とがある。

かよはい女の一生を貫いて、生命の中心たるものは戀である。併し一代女に縺はるは肉であつた。彼女の性愛は、遣瀨ない戀の思ひでなくして燃え上る性欲の炎であつた。强烈なる媚藥の香りと、靡爛した官能の匂とに生を託して、一足毎に奈落の底へ墮ちてゆく、此の頽廢人の面影には、一代男に現はれたやうな樂天洒落な輕い調子は見られない。「世には一生の間に男一人の他を知らず、緣なき離別に後夫を求めず、無常の離別に出家となり、かく身を固めて哀樂離苦の道理知る女もあるに、我れ口惜しきこゝろざし」と、拂へども攻め來る煩惱の炎に身悶えする姿態には、自己觀照の痛ましい暗愁が認められる。かくて頽れゆく己が心に見入りながら、境遇が習性を作り、習性が境遇を作つて、情に絆さるゝかと思へば意氣地も相應に强く、手練手管の色の諸分は勿論の事、詐欺奸譎を初め、はては女の淺はかさに咒詛もすれば强請もする。嘗ては「數々の通はせ文を、物言はぬ衞士に賴みて燒きすてさせし」內氣娘は、こゝに至つて海山千年の莫連女として現はれ來つた。

かゝる性情の相違、卽ち內的變化は個人の罪のみでなくて、此處に導いた社會的意義がある。作者が力を用ゐて描いた、人生の暗黑面に伏在する種々の境地と、折々の言葉のはしに洩れる內部衝動とは、この方面の徑路を首肯せしむるものがある。併しこの心的過程の推移にはまだ〳〵備らない點が多い。もとより心理小說として臨むべき作品ではないけれど、女の一生を辿る內容に照應しても、外界の影響刺戟に微動する「內部の搖ぎ」を明示せざる不滿を感ぜしめる。その素因は一場面の情景を描寫するに、女主人公を中心として描いて居ないからである。換言すれば圍繞する境地として

描かずして、唯漫然とある場面を紹介的に記述し、而して後、宛も筆のつてなるが如く彼女も亦此の場面に居ると云ふ事を報告するに止まるからである。この問題に就ては、更に一代女の短所を一括する時に言はうと思ふ。

これに反して、外的變化卽ち移ろひゆく肉の衰へは鮮明に描かれて居る。一年さる大名が妾を抱ゆるとて「年紀は十五より十八まで、當世貌は少し丸く色は薄花櫻にして、面道具の四つ不足なく揃へて、目は細きを好まず眉厚く鼻の間忙しからず次第高に、口小さく齒並あら〳〵として白く、耳長みあつて綠淺く、身を離れて根まで見えすき、額はわざとならず自然の生へどまり、首筋上のびて後れなしの後髮、手の指はたよわく長みあつて爪薄く、足は八文三分に定め、親指そつて裏すきて、胴間常の人より長く、腰締りて肉置遲しからず、尻付ゆたかに物越衣裳つきよく、姿に位備はり心立おとなしく、女に定まりし藝すぐれて、萬に昧からず、身はほくろ一つもなきを望み」とあつた時、取繕ろひなしにこれにも優ると、媒人をして驚嘆せしめた艶姿あり し最初から、荒んだ生活の幾年月に「色は作れど筋骨たつて鳥肌に觸りて人の聞くをも構はず、彼女は賃でもいやと云はるゝ」衰殘の日に至るまで、その折々浮かれ男を驕弄するだけの容色を保ちつゝ、幾度か作者をして「皮薄にして小作なるは女の德」と叫ばしめた底を叩けば、移ろひゆく鏡裏の影に、殘色を果敢なむ哀愁が覗はれる。

一代女の主人公の如きは、流れの女には珍らしからぬ――たとへ素性に特殊なものがあつても、――閲歷のもので、恐らく作者は現實界に於て一二の模型を發見し得た事であらう。西鶴がかう云ふ方面に人物を求めたのも彼が創作の立場として最も妥當な處置である。尤も一代男も二代男も共に、そのモデルを現世に求めたであらう。この間にかくあれかしの理想的風格が想見せらるとは云へ、多くは實世間の大盡の描寫である。然らば此等の諸作は同じく寫實小說として、等しい印象を與ふべきに、實際に於て讀者の感興の自ら異るものは何故であらう。それは前項に述べたやうに、人物と

背景との關係が主因をなして居る。卽ち前二作にあつては、遊里描寫が中心的興味となつて居るのに反して、これは常に女主人公の境遇を重要視して居る。この點がとりも直さず他に比して、脚色上優れた地歩を占め得るとの感を抱かしめる。しかしこれとても比較的の論で、一代女の結構はさほど優越のものではない。全般から云へば脚色構想を蔑ろにするは、西鶴が創作上の通弊であつて、この作の如きにも一二の缺點を指摘し得るのである。

さきに、心的過程に關する敍述の不備が構成上の缺陷に關聯すると云つたのもその一つである。卽ち脚色を輕んじた結果、背景に全力を注ぎ、延いてはその冗漫を來した。『世間寺大黑』に於ける僧院の內幕や、『石垣戀崩』以下に現はれた茶屋女の生活はその一例であらう。精細にして隱微なる描寫ではあるけれど、やゝもすれば中心人物を忘れしめ、全篇の上に弛緩を與へる。かくの如くある特殊の社會を描くに當つては、必ず風俗習慣をば委曲をつくし詳細を極めて敍述した後、「さてわれも云々」と主人公に結びつけて來る。而かもその方法が絕えず繰返されては、折角緊張した情緒も、時を經た蕎麥のやうにのびが來るのである。

場所の不統一も、亦缺點として擧げ得ると思ふ。長篇にあつて地方を異にするは必要條件として認められるけれど、何等の因果關係も豫知もなくして濫りに場面を動かすのは、徒に亂雜を來すのみである。例へば『身替長枕』の章で、大阪の事を敍しながら次の『墨繪浮氣袖』ではいつの間にか江戸になつて居る。突如としての變化も、ある場合には效果もあり興味もあるが、西鶴の行き方は全然藪から棒で讀者をして呆然たらしめる。

此等の諸點が、多少の結構を具備しながら、猶無脚色の作品との評を享ける所以であらうと思ふ。

かく明暗兩側を眺めた後、猶一言附加すべきは局部的描寫の妙所である。わけて女主人公が太夫職から漸次天神、圍(かこひ)と落ちゆく經路と、それに對する懺みと悔とは、心ゆ

く計りに描き出されて居る。その他、よるべなき生活の不安と暗愁との間に挾まれた、美の誘惑と悅樂との敍述もこの作者獨特の壇場であらう。難を云へば心理に入らずして狀態を敍し、人物を描かずして事實を示した事で、これはむしろ小說としてよりも、風俗資料として珍重さるべきではあるまいか。この事は西鶴全般にも適用さるべき評言と信ずるのである。

要するに一代女は脆い女の一生が、ある程度まで彫刻的に浮出して居る。一代男が勇往邁進の積極主義を以て一貫して、よく元祿の時代精神を語つて居るのに對して、これは人間の記錄として證認せらるべき强味がある。而して元祿の世相をも少なからず捕捉する事が出來る。たとへかれに浮世草子の嚆矢たる榮譽があるとしても、創作としての價値は一代女に多いと云はねばならぬ。

最後に附記すべきは西鶴の創作的態度の變化である。一代男にあつては全く他を顧慮せずして思ふがまゝを書き散らす風に見えた。然るに二代男三代男と進むにつれて、對世間の思考が常に作者にあゝ掣肘を加へたらしく、小說中往々にして讀者を豫想する字句に逢着する。これは一代男には見られない現象であつた。中にも一種の淋しみと云はうか、一面から見れば敎訓的とも云ふべき傾向が現はれて來た。二代男の末章に「これ世の中の浮かれ男に、物の限りを知らしめんためなり」とか、「四十より內に留る事を覺らずば、揚錢の淵に沈む事眼前なり、手前にある程叩きあげて、旣に廻向の金のない段に俄かに止めるも見苦し」と云へるは、その適例であらう。又一代女の終局に、大雲寺の五百羅漢に詣でゝこし方を追憶し「胸に火の車を轟かし、泪は湯玉散る如く忽ちに夢中の心になりて、御寺にあるとも覺えず伏轉び、」はては入水せんとまでするに至る一段を初め、各所に散見する悔と惱の小暗い心の影は、從來に見られなかつたものである。この自己觀照の寂しみは、五人女に於てます〳〵濃厚な色彩を帶びて來る。猶閨房の祕事を描く事も次第に穩かに且控へ目になつて來た。この

事に關しては後に讓る。

第七節　「五人女」梗概

好色五人女も亦貞享三年に版行せられた五卷物の小說である。以前の諸作が時代と密接な關係を保ちながら、人物は多少のモデルはあつても、架空的と云ふを憚らないものであつた。然るに五人女にあつては凡てが事實である、當代の社會記事の艶種である。故に吾人のこゝで取扱ふべき問題は、この事實を如何なる程度にまで藝術化し得たかと云ふ點にある。評論に入るに先だち五人女の面影を覗ひ、更にその事實に就ても穿鑿の筆を進めたいと思ふ。

五人女は凡て五篇、(各篇毎に五段に分る)、それ〴〵說話を異にする五種の短篇小說集である。

一、お夏清十郎。「戀を闇夜の書の國、室津にかくれなき男」があつて名を清十郎と云つた。生れつきの美貌と柔和な性質とが仇となつて、女のために勘當をうけ皆川と云ふ遊女と情死を企てたが、自分のみ生き殘つて檀那寺へ預けられた。清十郎こゝを逃れて知己をたより、姫路にゆき但馬九郎左衞門と云ふに奉公する。九郎左衞門の妹お夏は、遊女から清十郎への文を見て「誠こめし筆の歩み、これなれば傾城とても憎からぬものぞかし又男の身にしては」と何時になく清十郎を思ふやうになつた。尾上の櫻咲いて花は見ず人に見られにゆく頃、獅子舞の折、二人は遂に深い戀に陷ちて了つた。人目のあるに、逢瀨も儘ならず、二人は駈落して上方へ志し、さる港から船旅をとつたが、乘合に物忘れしたものがあつて手間どる中、追手に捕へられた。座敷牢に檻禁せられた清十郎は、一心に女の上を思ひ煩つて居たが、「一日の長き事世に飽きつる身やと舌に齒をあて目を塞ぎし事千度」であつた。清十郎の不幸はこれのみでなかつた。折から但島屋の內藏の小判七百兩紛失のために、無辜の罪科を負せられ「哀れや二十五歳の四月十八日」に若い生命は斷たれたのであつた。この七百兩は置所が違

つて居て、後になつて車長持から出て來た。

お夏は何も知らない。唯清十郎戀しと物思ふ時、里の童袖ひきつれて「清十郎殺さばお夏も殺せ」と歌つてゆく。心にかゝつて姥に尋ねると返事はしないで涙をこぼす。「さてはと狂亂になつて、生きて思ひをさしよよりもと子供の中に交り音頭を取つて歌ひける。皆々是を悲しく、さま〴〵とめてもやみ難く、間もなく涙の雨ふりて、向ひ通るは清十郎ぢやないか、笠がよく似た管笠が、やほんはゝのけら〳〵笑ひ、美しき姿いつとなく取亂して」狂ひ出でた。かくて清十郎塚で自殺しようとするのを、止められて正覺寺に入り「十六の夏衣けふより墨染にして朝に谷の下水を結びあげ、夕に峯の花を手折り」讀經に餘念がない。但馬屋も發心してかの金子で清十郎の供養をしたと云ふ。

二、樽屋おせん。おせんは難波天滿のさる家に奉公する至つて物堅い女であつた。樽屋はおせんに戀してしるべの女に媒を頼む。この女萬事を心得て、おせんに折折樽屋の噂話をしてその心をひき、遂に二人を伊勢參宮の抜參りに誘ふ。ところが同じくおせんに戀する男が道伴れとなり、いろ〳〵邪魔をしたが歸り路に京でこの男をまいて仕舞つて、二人はとう〳〵夫婦になる。これが話の前半である。こゝに麹屋長右衛門と云ふ男があつて、亡父の年忌の法會を營むとて親戚近隣を招く。近所の主婦達は大勢來て料理したり膳部を拭いたりして居た、そのうちには樽屋のおせんも居た。長右衛門は取かたつけて居るうちに、偶然棚の入小鉢を落したが、その下に仕事をして居たおせんに當つた。「うるはしき髪の結目忽ちとけて、主これを悲しめば少しも苦しからぬ御事」と云ふ。麹屋の内儀これを見て「そなたの髪は今のさきまで美しくありしが、納戸にて俄かに解けしはいかなる事ぞといはれ、」事實を話してもきゝ入れず、一日中物に當り散らしおせんを疑ふ。おせん「思へば〳〵憎き心中、とても濡れたる袖なれば」と長右衛門に戀をしかけ、事露はれては、潔く鉋の尖に胸を刺して死ぬ。男も捕へられた。

三、おさん茂右衛門。京の大經師某はおさんと云ふ美人を迎へ夫婦中睦しく暮して居た。姿も美しく心も素直なおさんは立派な若女房であつた。所が夫は所用あつて東の方へ下向した、留守は長年召使つて居る、實體な茂右衛門と云ふ若者に任せて置いた。出來事はこの間に起つた。女中のりんが茂右衛門に戀して、許さるゝまゝにおさんに艶書の代筆を願んだ。茂右衛門も初めはりんを、冷笑して居たが、代書の文言に絆されて、時を約する迄に至つた。おさんは座興にりんと寢處を換へ、茂右衛門を驚かしてやらうと計つた。多くの女中は帚はたきを持つて、おさんの聲のするのを待構へて居た。夜は更けて女中達は、舟を漕ぐ。おさんもいつとなく眠りに落ちた。覺めたとき己が姿を顧みて、夢でない事を知つた。「よもや此の事人に知れざる事あるまじ」と、却つて意を決して男に事實を告げ、二人は都を捨てゝ近江の湖に入水すると見せかけ、漂泊の後、丹後切戸の邊に身を隱した。然るに毎年丹波から來る栗商人の口から端なくも洩れて、中に使した女中の玉と三人栗田口の露草と消えはてた。「今も淺黄の小袖の面影見るやうに、」名は殘り傳へられた。

四、お七吉三。天和年中の江戸大火に本郷追分の八百屋八兵衛も類燒した。娘お七は母につれられて旦那寺の吉祥寺に避難した。ある夕、母が念佛に餘念なき折、お七がふと、寺の長緣の方を見ると「やごとなき若衆の、銀の毛貫片手に左のさし指にあるかなきかの棘の立ちけるも心にかゝると、暮方の障子を開き、」大に困つて居る樣子。お七は母に呼ばれて拔いてやつてからは、急にその人が忘られなくなつた。名を聞けば由緒正しき浪人の果、小野川吉三郎といふ。かくて雨上りの神鳴凄き夜「淺からぬ戀人戀はれ人」となつて、吹上の板の木、朝風はげしき明方、あかぬ別れをしたが、火事の事、一先づ治まつてお七も寺を去らねばならなかつた。

二人は別れたが、戀はます〳〵募つた。下女の情に文通して、時には雪の宵を、板橋邊りの里の子に扮して男の忍ぶ事さへあつた。けれどお七は何となく物足りない。どうかして戀しい人と朝夕相見て暮したい、あの大火の折の樣にと、過ぎし昔の初戀

の日を忍んでは、少女心の矢も楯もたまらず「ある風の烈しい夕暮、いつぞや寺に逃げゆく世間の騒ぎ思ひ出して、又さもあらばや吉三郎殿に逢ひ見る事の種にもなりなむと、よしなき出來心にして惡事を思ひ立つこそ因果なれ、少しの煙たち騒ぎて」重い罪はお七の上に課せられた。「ゆく春の日の入相の鐘つく頃、品かはりたる道芝の上の邊にして、其の身はうき煙」となつた。吉三郎はこれを知つて舌食ひきらんとしたのを、人々に異見せれて出家となつた。

五、おまん源五兵衛、時花歌源五兵衛は、薩摩鹿兒島の者で異性に對するよりは、明けくれ若道に身を窶して居た。念友であつた少年に死なれて、文月十五日古郷に立出で、墨染の袖を着る身となつた。おまんはかねゞ〳〵源五兵衛に戀して居た。自ら少年に扮して男に近づいたが遂には眞の戀となつた。「頭は一年、衣をぬげば昔に代る事なし」と、源五兵衛も還俗しておまんを宿の妻とした。かくて父の遺產を得て巨萬の富を蓄へ、「何とぞつかひへらす分別出でず、是は何としたものであらう」に終る。

第八節　「五人女」評論

官能の高き匂に、熾烈なる肉の香を偲ばしめる從來の好色本は、五人女に至つて異常の色彩を加へて來た。「性」の問題が、單なる性欲から脫離して、戀愛關係にまで進んだ事、卽ちこれである。一代男以下の諸作に現はれた兩性間の交渉は、內部生活の衝動に動かされて、ある一個人が飽滿を期する行爲そのものであつて、凡てが積極的撫斬的で、その間に何等の顧慮も省察もない。情欲の遂行には、あらゆるものを犧牲にして憚らぬ、大びらな行動が伴つて居る。然るに五人女にあつては、優しさといちらしさとの奥に、世を憚り人を憚る內氣なところがある。こゝに所謂好色の範圍を脫した戀の面影が見える。

吾人はまづこの前提の下に、五人女の脚色を論じ更にそれに依つて誘起せらるゝ諸要素を尋ねたいと思ふ。

五人女に於ける五篇は、おまん源五兵衛を除いて、他は悉く悲劇的分子から構成せられて居る。お夏お七の若々しい戀の二曲は、おせんおさんの如き成女の戀の物語を挾んで、四篇四様とり〴〵の趣を成すと共に、全體の配置の上にも妙味が認められる。

お夏清十郎の物語の結構には、かなり深い注意が拂つてある。戀の大湊、室津に於ける清十郎の耽溺を序曲(インライツング)として姫路に來るべき因を作り、こゝに紆帶(くけ)よりあらはるゝ文に思ひつく、都まさりの女を點出して、遂に小袖幕の中なる濡場の漸層(スタイグレンング)となり、更に駈落の頂點(ヘッヘンポイント)に達し、紛失金の轉向(カムヤエア)となつて、世にはやり唄聞けば哀れなる戀の破綻(アウフレエヒング)に終る。說話の進行は一歩々々と展開して、その戲曲的色彩が著しく感興を引く。たゞ冒頭、清十郎と皆川との心中沙汰の精寫は、全篇の緊張を毒する疣贅と云ふべく、又戀の大破綻を齎す清十郎の刑死が、「但馬屋の內藏の金戸棚にありし小判七百兩見えざりし、これはお夏に盜みとらせ、清十郎とりて逃げしと云觸れて、折ふし惡しく、此の事ことはりかね」しためと、事もなげの筆つきは餘りにあつけなく思はれる。これらは繁簡よろしきを得ない叙述法で、全般の脚色から見て、締釘が一本、あらぬ處に打込まれた感がある。もしそれこの一篇に於ける遊里描寫の如きは、作者が此の方面に有する異常なる興味に歸因すべきもので、彼が癒すべからざる病弊であらう。

お七吉三の一篇も亦、同じく戲曲的趣向を有するものである。若き世の果敢ない戀に、花のやうな一生を破り、そこに男女の區別こそあれ、戀人の一は刑死し、生殘つたものは墨染の袖を、浮世の風に曝す悲しい宿命は、全く同巧異曲である。たゞその微細に亙る叙述から、吾人の享ける情調は自ら差別があるけれど、大體の脚色は同じ道程を辿つて最後の悲劇に流れこむのである。

更に樽屋おせんの物語を眺めると、これにはその布置に於て大なる缺陷がある。それは中心說話の分裂と云ふ事で緊密な一致がない。具體的に云へは、おせんと樽屋との馴れ染めに久七の横戀慕を加味した場面が四齣に亙つて詳叙せられ、しかも作品の中軸たるべきおせんと長右衛門との不義の場は、輕々として四五行を以て叙し去られて

居る。かくの如き不調和は短篇小說として存在の意義がないもので、かの一代男以下の諸作に見えた連歌的叙述の筆癖が、計らずもこゝに曝露したのであらう。强いて此の一篇を生かさんとならば、「取あつめて物數二十三、銀二百目付て送られけるに、相性よく仕合よく夫は正直に頭を傾け細工すれば、女はふしかね染の島を織り習ふ、」おせんの新世帶と共に、一方久七が「八橋の長と云へる運葉女を女房にして、今見れば柳小路に鮮屋をして世を暮し、せんが事つい忘れける」と云ふ、世間並の色戀沙汰の結末で筆を收めたならば、こゝに、人生の一斷片が明瞭に投出されたであらう。然らずば樽屋との事件をば全部割愛して、麹屋事件のみを取扱ふべきであつた。かの「死別れては七日も立たぬに後夫を求め云々」以下數行の文字に、世上の女が浮氣から隱し男すると云ふ、社會現象の類推を以ておせんの姦通を豫知せしめんとした、後段への渡し込みも、あのまゝでは無力であり、且效果の薄いものである。

猶、前段にて媒の女をしておせんの主家に飛込ましめ、今樽屋が戀の叶はぬために生靈になつて居るのに出逢つたと、あらぬ狂言の一幕を演ぜさせるのは、おせんを手に入れる手段としては、あまりに不自然ではあるまいか。

これに反しておさん茂右衞門の奇しき運命は、結構布置に於て優越したものと云はねばならぬ。冒頭に於ける姿の關守の一齣は、稍々煩雜の譏を免れないが、女主人公の美貌艶姿を鮮明に印象する點に於て、巧妙なる方法と云ふべきである。又、夫の留守の淋しさを紛らす手段として、下女を弄の材料とし、惡戲が昂じては身の程をも忘れ、遂に偶發的事件によつて不義の女となるこの間の徑路には、閨怨を嘆く艶女の風格も明らかに浮出して見える。而して犯罪後の彼女は、愚蒙にして柔弱なる女の本體を曝露し來つた。かのおせんが、罪現はるゝや胸を刺したが如き意地は彼女に見られない。「此の上は身を捨て命の限り名を立て」と男を嗾かして家を出て、淵畔を放浪しては入水の狂言を演じ、遠く丹後に逃れたのは、全然活きんがために凡てを顧慮せざる、熾烈なる「生」の執着である。こゝに終始せる態度には、人間としての彼女を觀

取する事が出來る。丹波路に於て茂右衛門が叔母の家に立寄り、答へに窮しておさんを妹と云ひ、その結果叔母の一人子岩飛の是太郎と云ふ醜男な獵師の妻に懇望されて逃げ出す挿話は、緊張した情緒に弛緩を與へる方便として效果のあるものと思ふ。最後の「上の立聞」の齣に於ける都返りの段は、わざとらしい風趣はあるが、凡俗の心理として强ちに排斥すべきではない。しかもその叙述は、よく人情の機微を捕捉し得て拍案の興がある。而して栗賣の口から結末の破綻に急轉直下するあたりは、矢張り事實を模範としたゝめか、最も自然に運ばれて居る。脚色とこれに伴ふ情趣の點から見れば、この一篇は蓋し五人女の壓卷であらう。

最終のおまん源五兵衛は、最も拙劣なるものである。それは喜劇的題材たるためのみでない。源五兵衛と前後二人の念友との契と、次いで現はるゝおまんとの戀とは、わかれ〳〵の說話であつて、全然一代男の世之介の如く、同一主人公の情史の記錄に過ぎない。思ふに作者の興味は、おまんが男裝して女嫌ひの源五兵衛に近づくあたりにあつたのであらう。要するに、斷片的好色本の餘波がこゝに現はれたのである。

大體としての小說構成上の布置脚色は、上述の如き狀態を示す。吾人は更に五人女一篇をとつて他の好色本との異同を研究したい。

從來の作品に見られなかつた特徵としては、第一に悲哀の增加である。この傾向は一代男には全く見えず、二代男三代男と進み、一代女に至つて漸く認識せらるゝに至つた。けれどまだその程度は甚だ微弱なものであつた。然るに五人女に現はれた悲哀暗愁の色は、各篇の主要情調として動かすべからざる力を見せて居る。尤も題材そのものに聯關しては居るものゝ、叙述の方面に於て著しく感傷的な色調を帶び來つた。わけて若き戀の破滅を描くあたりは、特にこの感じが深い。梗概に引用したお夏狂亂の場を初め、「惜しや十七の春の花も散り〳〵に、郭公まで總鳴に卯月の初めつかた最後ぞとすゝめけるに、心中更に違はず、夢幻の中ぞと一念に佛國を願ひけるこゝろざし、さりとては痛はしく、手向花とて咲遲れし櫻の今日散りし身はと吟じけるを、聞

く人一入痛ましく」見送る眼に映じたるお七のやつれ姿は、行文に音樂的旋律さへ加はつて何となくほろりとさせる情感的魅力がある。或は「これぞ戀の新川、舟を作りて思ひをのせて水沫の哀れなる世や」と云ひ、「さても〳〵取集めたる戀や哀れや、無常なり夢なり現なり」と云ふ。孰れも女主人公の盲目的情熱と、その悲慘な最後に專念同情して、かの淫蕩浮華な半面を全く忘れしめる。これ淨化せられたる情操の權威であつて、かくてこそ藝術上の美の崇拜は行はれるのである。五人女の讃美せらるゝ所以も實にこゝに在ると思ふ。

これが成女の戀になると、風に裂かれ雨に打たれて散る可憐な花の面影はないが、更に深刻なる人情の搖ぎが見える。こゝに於て悲哀は單なる嗟嘆嗚咽に止らずして、涙を離れた懊惱となり、諦めすぎての捨鉢となる。卽ちその裏面には、道義的觀念の萠芽が指摘せらるゝのである。

此の道義的觀念の發現も、在來の好色本には見出し難い一要素である。かの茂右衞門が京の町の忍び歩きに、十七夜の影法師に胸を冷やし、住馴れた旦那殿の町に入つて、私かに樣子を聞いては身を慄はし、四條河原に狂言を覗けば、これも「人の娘をぬすむ所。是さへ氣味あしく、ならび先きの方を見れば」おさんの舊夫が居る。「魂消えて地獄の上の一足飛び、玉なる汗を搔きて木戸に驅け出て」たなど、いづれか胸奥から閃く道念の光でないものがあらう。又おせんが飽に伏して仆れたのも、逃れ難い罪過の自覺に外ならない。

道義的觀念の仄見ゆるに關聯して、敎訓的口吻は著しく目にたつやうに思はれる。男を見向きもせぬ堅氣の女を叙しては、「後には此の女に物いふ人もなかりき、これを識れど人たる人の小娘はかくありたきものなり」と云ひ、世に操なき女の多きを誡めては、「世に神あり報あり隱しても知るべき人、恐るべきは此の道なり」と澄ます。或は淸十郎を失つた原因の金が、思はぬ所から出たのに當つては、「物には念を入れべき事」と仔細らしく、或はお七の戀を叙して、「油斷のならぬ世の中に、殊更見せさに

きは道中の肌付金、酒の酔に脇差、娘のきはに捨坊主」と勿體ぶる。かゝる説教的言辭の隨所に發見せらるゝは、上述の悲哀感及び道義的觀念と共に、作者の創作的態度に一轉化を來した例證である。しかし猶、在來の情趣氣分は依然として瀰漫して居る。例へば同じ教訓をなすにも、その神佛の口吻を借りたものは餘程俗に摧け、却つて粹坊主西鶴の風丰が、明らかに看取せられるのである。例へばお夏が別離の悲愁に悶えて、室の明神に祈願を籠めた夜「老翁枕神に立たせ給ひあらたなる御告なり、汝わが云ふ事をよく聞くべし、總じて世間の人、身の悲しき時至つて無理なる願ひ、此の神がまゝにもならぬなり。俄かに福德を祈り、人の女を忍び、惡しきものを取殺しての、降る雨を日和にしたいの、生れつきたる鼻を高うして欲しいの、と種々の思ひ事、とても叶はぬに無用の神佛を祈り厄介をかける。過ぎし祭にも參詣の輩一萬八千十六人、いづれも大欲に身の上を祈らざるなし。聞いて可笑しけれど散錢なげるが嬉しく、神の役に聞なり、此の參りの中に唯一人信心の者あり、高砂の炭屋の下女、何心もなく足手息災にて又參りましよと拜て立ちしが、小戻りして私もよき男持たして下さりませと申す、それは出雲の大社に賴め、こちは知らぬ事と云ふたれども、得聞かずに下向しけり云々」を見よ。宛然たる酸いも甘いも嚙みわけた叔父貴の説法ではないか。かくては、町娘を諭すと云ふよりも、むしろ冷笑するやうで、全く社會觀が輕い浮調子で述べられて居る。泰平の逸民にはかゝる浮薄な洒落な態度が歡迎せられたであらうけれど、作品そのものに立入つて考へて見れば、ふざけすぎて、眞面目に煩悶する少女の心情に同化する事は出來ない。卽ち感興を阻害して、情緒の涸渴を持來すばかりである。特に茂右衛門が切戸の文珠堂の夢の告に「汝等世になきいたづらして、何處までかその難を逃れ難し、されども返らぬ昔也、向後浮世の姿をやめて惜しきと思ふ黑髮切り出家となり、二人別れ〳〵に住んで、惡心去つて菩提の道に入らば、人も命も助くべしと有難き夢心に、末々は何にならうと關はしやるな、こちやこれが好きにて、身に替へての脇心、文珠樣は衆道計りの御合點、女道は嘗てしろしめ

さゞるべし云々。」に至つては、神佛の取扱ひをも全然茶化してかゝつた西鶴の現實趣味、現世的態度の遊戯的分子を、極端に曝露したものである。一方に道義的觀念を基調とする、迷へる者への歸趣を示しながら、直ちにこれを反古にして居る。もし、おさん等が飽くまでも肉に纏綿する心情を描かんとならば、神佛を傀儡視するには及ばぬであらう。このあらゆるものを茶化してかゝる傾向は、國民性に基く日本文學の一要素ではあるが、この場合、叩けば生血の迸るやうな切實な人生の一面を描くに當つては、甚だ不穩當な道化ぶりである。

この輕い、多少ふざけた人生觀照の態度は、好色本の通有性である。清十郎が姫路に居る時、お物師腰元抱姥下女とり〴〵に思ひを寄せるあたりや、おせんが樽屋久七と共に伊勢參宮の途次、泊り〳〵に於ける描寫の誇張的筆致は、此の一面の發露に外ならぬ。而して各篇に於て、失戀の男女が多く佛門に歸依するのは、思ふに事實の典據であつて西鶴の創意ではあるまい。それ〴〵作者の說明があるにも拘らず、何となく因襲的行爲をそのまゝに取扱つたかの如き感を惹起するのは、そのためであらう。

要するに、五人女は二三誹議すべき點はあるけれど、結構脚色を具へたる短篇小說の體を成す點に於て、先づ優秀を示し、且內容にふさはしい感傷的情趣の橫溢した、新味に富む作品と云ふ事に歸着する。

論じ來つて吾人は未だ一大要素に觸れて居ない。それは本節の冒頭に提示したもの、卽ち五人女に現はれたる戀である。西鶴の創作過程より云へば、肉より戀への問題である。

第九節　「五人女」に現はれたる戀と元祿の女性

好色の範圍を脫して戀の面影が見える。私は五人女を評論するに當つてこの提撕を敢てした。今此の問題に向つて更に一言を試みようと思ふ。

こゝに云ふ肉とは性欲を意味し、戀とはそれを離れた異性間の情愛を指す。而して

後者は時にその道程として性欲に趨る場合をも含むのである。換言すれば肉は自己の性欲の飽滿のみを追求して、對象たるべき人物の心身に考慮しない。しかし戀にあつては、自己及びその戀人は一團となつて大なる「我」を形成し、その精神肉體の兩生活に終始するものである。

この見解によつて、五人女に現はれた兩性關係を眺めると悉く戀と稱へ得るもので、一代男や一代女等に於けるもの、卽ち肉の享樂とは大に趣を異にして居る。然らば五人女の戀は如何なる狀態に取扱はれて居るか。先づ初戀の描寫から始める事とする。

初戀と見るべきは、お夏、お七、おまんの三人である。而して、この情趣の最も饒かに漲つて居るのは、お七のそれである。吉祥寺へ退轉の頃、折ふしの夜の嵐をしのぎかねた宵、貸してくれた着替の中に、「黑羽二重の大振袖に梧銀杏の並べ紋、紅うらを山道の裾取わけらしき小袖の仕立」があつた。「お七わが年の頃思ひ出して、いかなる上蔦かと逢ひ見ぬ人のなつかしく、」更にあるかなきかのとげに、胸もいつしか亂れそめる隱微の消息は、よく此の般の契機を闡明したものである。かくて「私は十六になりますと云へば、お七わたくしも十六になりますと云ふ、吉三郎かさねて長老樣が恐やと云ふ、おれも長老樣はこはしと云ふ」幼い戀の口說となり、雪の夜の情宿に、「灯の影に硯紙置いて互に書いて見せたり見たり」する、忍ぶ戀の憂さ辛らさも充分に汲みとられる。而してある日、「風激しき夕暮、いつぞやの寺に逃げゆきし」を思出して、この戀、火事あらばとの出來心は、唐突にして幼稚に過ぐる嫌ありとは云へ、まゝ事めいた初戀の悅樂には、此の不自然の痕跡も蔽はれよう。「鈴の森に松風ばかり殘つて、その日の小袖、群內縞のきれ〳〵」は、詩のやうな戀の結末としては、あまりに悲慘である。わけてそのしんみりした行文には嗚咽の聲さへ傳ばしめる。

茂右衞門に對するりんの戀も眞面目なものである。茂右衞門が炙を据えて貰つた時、据え落したのを「据手の迷惑さを思ひやりて、目を塞ぎ齒を喰しめ堪忍せしを、

りん悲しく揉み消して、是ゝり肌をさすりそめて、いつとなくいとしや」と思込む徑路は、機微に觸れた精細の叙述と言はねばならぬ。

かゝる初戀には、結ぼれた悩惱と、迸る情熱と、堪へ得ざる羞恥とが伴つて來る。お夏は次第痩せにあたら姿も替りたゞ聲を聞き合つてのみ樂しみ、お七は思あまつて書きしるし、おまんも亦苦しさに堪えかねて、男姿に身を窶して山の庵に尋ね入つた。かくて靈犀一點春を解して後は、蕭然として一は狂亂となり一は放火犯を構成するに至る。たゞおまんの圓滿なる解決に至つては、兩親の粹による一例外である。

かくの如く、愼ましい娘の戀は、時にあつて迸騰し、面に烙印を押す如き熾烈なる熱愛となる事は、古往今來、變るなき人生の事實である。西鶴の描ける戀の娘は、その悅樂の日にあつて、多少陶醉的情調に惑溺する傾向はありながら、一旦破滅の淵に陷つては、淡い陰影に鎖されて、遣瀬なき惱みの色と濡れそぼつ哀愁の韻とによつて、沈痛な美の諧調に浸潤して了ふ。

更に、分別もあり世故にも馴れ、所謂才覺あるべき成女の戀を眺めやう。おせんは有夫の身である、しかも同棲するまでには一かどの苦勞があつた。この人妻としての彼女が、長右衞門と不義に陷つた徑路はどうであらう。たゞ、あらぬ濡衣に憤激した片意地である。「とてもぬれたる袖なれば、此の上は是非に及ばず。あの長右衞門どのに情をかけ、あんな女に鼻あかせん」との張魂である。その最後こそ潔いものがあつたけれど、戀の動因には不純の色が見える。即ち嫉妬深い女を妻とせる長右衞門に對する同情が、「格別の志、ほどなく戀」となつたのである。おさんにあつては、偶發的事件のために身を誤まつたのであるが、その素因は夫の留守に於ける非常識な惡戲にある。しかも一旦身を汚すや、「うれしや命に代へての男ぢやもの」と飄然氣をかへて、逃れ得るだけは逃れようとした。かゝる女性の心理的過程には、純然たる人間の通有性を認むると共に時代精神を看過する事は出來ない。おせんが貞操を犧牲にして恬として顧みない意地も、おさんがたゞ一向に生を惜み肉に執するのも、凡て所謂元祿女

の眞相を語るものである。卽ち女房氣質に加ふるに遊女氣質を以てした、當代女性の心的現象を表明して居るのである。

思ふに、一代男に現はれた遊女高橋の寬濶や、小紫の任俠や、吾妻の心意地や、さては一代女の情と意地と名聞との戀の諸分に、想見せられたる遊女氣質は、また一般の元祿女性の半面ではなかつたらうか。換言すれば、元祿期に於ける女は、人妻と云はず町娘と云はず、幾分の遊女的氣分に浸染しては居なかつたらうか。史實は暫く云はず、西鶴に現はれた女性には、凡てこの風格が認められる。人の娘はかくありたきものと、褒め者であつた利發女のおせんすら、たゞ柔和な女ではなく、かの張意地が潛んで居た。おさんが自ら招いた奇禍の原因も、所詮は愼ましからぬ行爲から起つたのであつた。又お夏が文殼を見て、「女のあまねく思付くこそゆかしけれ」と思ひつくのも、おまんが中剃した男姿で戀人の跡を慕ふのも、さては「常香盤の鈴落ちて」夜半の靜寂を破る時、目さめた飯焚女のお七に對する仕こなしも、お七が新發意を賺す洒落な態度も、一としてこの遊女らしさの發現でないものはない。

以上、述べ來つたところを總括すれば、五人女に現はれた戀は、それが少女にあつても成女にあつても、とり〴〵の品があるけれど、共に元祿世相の半面が、一抹の刷毛によつて鮮やかな色彩を呈して居る。さりながら西鶴の好色本に取扱はれた凡ての色戀沙汰から見れば、五人女の戀は、毒々しい蕁麻の臭ひや、赤薊の匂ひの中に、たゞ一本の雛罌粟が、その深紅の花苞を擡げて、薫りの高い芳香を放つて居るやうな感じがする。

第十節　「五人女」の史實と同一題材の作品

嚴密な意味に於ける創造は、人間の身として或はなし得べからざる事であらう。一作品の創作過程に於て、作家の意識に立入つて見れば、そこにある事實と模型との存在する事は否み難い。西鶴の多くの作品も此類である。特殊社會を寫すに當つてたゞ

漫然と筆を下したのでなく、種々の自己省察と直接經驗とがその黒幕に隱れて居る。しかし五人女に至つては、作家が執筆の動機としては、明らかにその史實を指摘する事が出來る。換言すれば此等の題材はあまりに顯著なる坊間の出來事として、當代の人々に噂炙した事件である。而して此事件たるや、單に巷の噂となり西鶴の筆に上つたのみならず、徳川期に於ける幾多の文學者によつて取扱はれ、むしろ戯曲化された傳説的人物として、市井の間に最も馴染の深いものである。たゞ一作家の腦裏を濾過せらるゝ度に、その表現に異つた基調があるのは云ふ迄もない。

繪團扇のそれも清十郎にお夏かな。この戀の二人が文學に現はれたのは、五人女が初めであらう。その後寶永二年十一月竹本座の狂言に笠物狂と云ふのがあり、次で寶永六年正月二日同じく竹本座でお夏清十郎五十年忌歌念佛が近松巢林子の筆によつて上場せられた。この五十年忌と云ふ事から逆算すれば、清十郎の刑死は萬治三年に當り、且五人女の「哀れや二十五の四月十八日にその身を失ひける」とあるによつてその月日をも知る事が出來る。猶「その頃は上方の狂言になし遠國村々里々まで二人が名を流しける」とあるのを見れば、既に西鶴の頃歌舞伎に仕組まれた事がわかる。

近松の歌念佛は多少五人女と趣向を異にして居る。姫路の米問屋但馬屋九左衞門の娘お夏は、手代清十郎と相愛して居た。戀敵なる同じ手代の勘十郎が下手代源十郎と語つて、主人に讒訴し清十郎を追はしめる。清十郎は勘十郎を殺さんとして誤つて源十郎を殺し、出奔して長崎で捕へられ、刑場に臨んで自殺する。お夏は尼となつて男の菩提を弔ふと云ふのである。卽ちクライマックスに殺人と云ふ犯罪が行はれて居る。且五人女では舞所の變つて居たと云ふ金子事件も、こゝではお夏から預かつた金が清十郎の所持品中にあつたので窃盗の疑をかけられる事になり、而して櫻狩の花見の幕の濡場は、近松では夏の短夜のはかない契となつて、家人に發見せられる事となつて居る。本來の性質上、淨瑠璃たる歌念佛が五人女に比して、遙かに精緻な技巧と濃艶な律語とによつて戯曲的發展を盡して居る事は云ふまでもない。然し初戀の娘心の遣瀬

ない思を叙したものとしては、或は五人女の優越を思はせる。かく多少の距りはあつても、大體の筋は共に當時の巷談から遠く離れて居ない。主要人物の年齢にも變りなく「清十郎殺さばお夏も殺せ」の歌も「向ふ通るは清十郎ぢやないか」の唄も共に取入れて、ほろ〳〵と崩づれ落ちる牡丹の花のやうな戀に、滿腔の涙を灑いで居る。

その他、唄物の方面では半太夫節のお夏笠物狂や一中節のお夏清十郎沖中川を初め、小唄物には例の菅笠の條を歌つたものが多い。

又小說の方を眺めると文化六年に京傳の風流伽三味線、文化七年に馬琴の常夏草紙があり、下つては文化十四年志滿山人に魁對盃があり、天保十一年、種彥に緣結月下の菊がある。小說ではないが坪內逍遙の振事劇お夏狂亂も亦同一說話を取扱つたもので、序言によれば五人女の系統に屬するものである。

猶、お夏說話に於て一言すべきは、享保三年版の亂脛三本鎗に見えたエピソードの一である。この作は西澤一風の著で女敵討に關する三つの巷談を集めた者である。その第四卷に、ある士が女敵を尋ねて備前片上在の、とある辻堂に休んで居ると、前の道を二人の馬子が高話してゆく、とかく美しい女はいろ〳〵の事件を惹き起すと云ふ事から、併しそうも云はれぬ、不縹致でも片上のお夏を見よ、あれこそ日本に名ゐ流せし播州姫路但馬屋お夏がなれの果、手代清十郎とせゝくり合ひ、舉句のはてにお夏をぬすみ出し、大阪へ立退きしが主人の娘を誘拐せし咎逃れず、遂に現はれ二人共姫路へ引戻され清十郎は首刎ねられ、お夏はいたづら者と浮名立ち、嫁入の口なく、二人の親はころりさんしやうみそ、兄弟なければ誰一人、とりあぐる人もなきの涙、身すがら此片上へ引越し、生れながらの後家となり、茶店を出して旅人の足をやすめ茶の錢とつて渡世とす、當座はお夏が茶屋として囃せしが、次第につむりの雪山をなし、したぢの惡女に寄る年の額の皺もより來るや、行くも來るも脇目して立寄るものなし……今語りし但馬屋お夏の事は國元まで風聞の女、道筋なれば立寄ちむと互に語るうち、片上につきたり、爰よそこよと見るうちに、但馬屋といへる書つけ、まづ休まんと床几に腰をかくれば、七十計の老女、ある程腰をかゞめ旅人茶をまゐれとさし出す手、鷲くまだかの如し、湯行水もいつしたやら知れず、頭に油つけず櫛の齒入れぬは鼠の巢に等し、そな

たは姫路のお夏とやらか、老女興さめたる顔ふりあけて、旅人何を云はします、それは昔々の名、今更聞くも恨めしと少し恥づる顔、そうづ川の姥より釣錢取る俤、人間世にある時ぞかし、さしも名高きお夏も寄る年の情なく、かくまで衰ろふものか……。

三本鎗は五人女より更に後年の作ではあるが、事實としては取るべき點が多くあると思はれる。しかしたゞ何となく、彩華眼を奪ふ錦繪に馬糞でも塗られたやうな氣がする。これは傳說を美化せんとする人情の常を、裏切られた不快感に基くであらう。萬治三年にお夏が十六であつたとすれば、享保三年は七十四に當る。作家一風が、この頃老衰したお夏を目擊したか、或は人傳てに聞いたのかは不明であるが、とにかく彼女の近狀を知り、馬子の口を假りて、その感慨を洩らしたのであらう。

次に、樽屋おせんの事件は大阪天滿の話で、本文の通り貞享二年正月二十二日の夜の出來事である。文學に現はれたのは五人女以前には見當らない。深刻な女性心理の機微を覗ふべき好材料でありながら、一般に心理的描寫に疎かであつた時代の事として、作家の興味を惹く事もなかつたのであらう、西鶴のこの作の如きも評論に述べたやうに、甚だ慊らないものである。寶永七年扇德の編した松の落葉第二卷第六に半太夫節として樽屋おせん狂女跡なる一曲がある。長いものでないからこゝに引用する。

狂亂あと。年の齡は二八ばかりの若き人、世には類も夏山の、茂みが陰に木暗れし、君の行衞はいづくぞや、知し召されて候はゞ、敎へて給へや人々と、聲を擧げてぞ泣き給ふ、手をとりて悲しき事をかぞいろに、過ぎ後れつゝ數ならぬ、うき身のよるべ涙川、袖の柵ひまなきに、思ひ重なる年月の、千代に八千代に玉椿、變らぬ色を賴みつゝ、かけし情も在原の、昔男か光君、薫の中將夕霧より、猶まさとしの戀しやと、聲をあげてぞ嘆かるゝ。雨を凌ぐやみのゝ國、笠の雫垂井の宿、泪ながらに立出でゝ、初めて旅をしな川に、暫しなじみの君とわが、つかれの袖を濡れて乾す、山路の菊の露のまも、忘ればこそ中々に、思ひ出さん宿もなし、あら怨めしのわが身やと、倒れ伏してぞ泣き給ふ。

これによれば五人女のそれとは大に行方を異にし、且歌詞上の制約と、因襲的修辭と

によつて、樽屋おせんと云ふ町女房が何となく宮廷の上臈の如くなつて居る。又西澤一風編の小唄本に垂井おせんと云ふのがあるが、それは狂女跡の一節「垂井の宿、泪ながらに立出でゝ」以下より神奈川に至る海道を詠込んだ道中振である。かの垂井とは樽屋の語呂からの思付であらう。

この外、享保か元文頃の版本、宮古路豐後の唄本「音曲都大全」の中に樽屋おせん、二重帶昔噂と云ふ一段物の淨瑠璃がある。これによればおせんは「寄邊定めぬ川竹や、流れのうき身うけられて、天滿のはし〳〵噂ある、樽屋長右のおかもじは、人の指さす伊達女」で、長右衛門の女房であつた者が、情夫の道具屋八郎兵衛と駈落する事になつて居る。

おせんの事件は、市井にありふれた題材ではあるが、當時の口の端に上つて未だ噂の消えぬ頃、西鶴の筆に潤色されて、いろ〳〵の唄物を起したのであらう。而して中井浩水氏の疑はれた事實譚卷二十九に寛政頃の出來事としてあげた攝津高槻に於ける巷談、樽屋おせん切籠曙は、これにヒントを得た假作物語か、單に同名と云ふに過ぎなからうと思ふ。

おさん茂右衛門事件は「貞享二年五月兩人牢舍の上追放」と某所にあると「近松之研究」の戀八卦杜暦の條に見える。某書とは甚だ攫み所のない書き方であるが、五人女の冒頭に天和二年云々とて、大經師某が祇園會に通りがゝりの女の品定めをした末、おさんを迎へ「夫婦の語ひも深く三年が程も重ねける」とあるのを信據すれば、事件突發は貞享二年に當る。而して西鶴の執筆はその翌年で、大體は事實に據つた事と思はれる。こゝにまた寶永元年版の好色心中大鑑卷三に「袈裟御前の裏表」と題する一章がある。大阪立賣堀三丁目の石津次郎兵衛の妻おさんは次郎兵衛の弟市郎兵衛に思ひを寄せて居た。然るに市郎兵衛は下女の玉に心があつてその媒をおさんに頼む。おさんはお玉の寢所に伏して思ひを遂げ、後は互に兄の目を窃んで不義の快樂に耽つて居た。半年計り經つたある雷雨の夜、事露はれて二人は兄に面責せられ、隙を見て咽掻切

つて相果てる。心中大鑑は全く當時の社會記事的巷談を蒐集したものであるから、思ふに、こゝにも大經師事件と類似したものがあつたのであらう。女房おさん下女お玉と云ふ名の符合は、有りふれた名であるから暗合とも云はゞ云へ、矢張り作意の痕が認められる。思ふにこの編者が、世間に對して多少遠慮もあり、事件の類似から思付いて、人々に喧炙せる五人女の大經師に見えた人物の名をそのまゝ借りたものではあるまいか。換言すれば似通つた事件が二つあつて、名を流用したと云ふ事になる。

而して近松の大經師昔暦は、恐らく石津屋事件に刺戟せられ且五人女の踏臺とし、これに彼が獨得の戯曲的才能を以て、複雜なる人事的葛籐を結合せ、あの運命悲劇の一篇を組上げたのであらう。人心の奥に流れる情緒の機微と、人間の根柢に繙る道念の閃めきと、これを操つる宿命の絲の巧みに縒り合せた點に於て、西鶴は遂に近松の敵ではない。因にこの大經師昔暦は近松の十七回忌に戀八卦柱暦と改題して居る。

後年江戸末期に至つて、墨川亭梅麿が朧染浮名の色衣と云ふ四冊物の合卷を作つた。これら同一題材の比較研究は、興味ある問題ではあるが今は暫くこれを避ける。

お七の事蹟は天和笑話集や江都著聞集（馬文耕著）に其の實歴なるものが詳しく出て居る。これらによれば丸山本妙寺の火事は、天和元年の事で八百屋一家の身を寄せたのは吉祥寺でなく、小石川の圓乘寺である。又お七の戀人は吉三郎と云はず、山田左兵衛と云ふ小姓であり、吉三郎とは吉祥寺門前に住む無頼漢で、お七の戀を知つて度々強請し且放火教唆も彼にあると云ふ。併し江都著聞集も果して正確であるかと云ふに頗る疑はしい。この事に關しては三田村鳶魚氏の芝居と史實に詳しい考證がある。これに據れば、お七の刑死は天和三年三月二十九日であり、戀が芽ぐみ初めてから三年目、數へ年の十八歳、法名を秋月禪尼と云つて小唄にあるやうに法華宗ではない。且所謂吉三は出家して諸國遍歴の後七十の高齢で死んだと云ふ。穿鑿はともかく、大體の筋に大差なくこの巷說に近い事實があつたに相違ない。しかもたゞ後年のものには法廷に於ける年齢問題とか、奉納の扁額の事とか、後人の想像と附會とに傳說

化せられた痕跡があるので、却つて五人女の記事に事實らしい點が多く認められる。

寶永の頃、本芝三丁目清水治兵衞刊行の小唄集に小姓吉三八百屋お七祭文と云ふのがあつて「五人女の三の筆、色も變りて江戸櫻」とあり、末段には「問ふも語るも一昔」と見える。これによれば、五人女以後貞享三年から寶永までの作であらう。寶永元年紀海音が淨瑠璃八百屋お七歌祭文はこの頃流行した祭文から作意したのである。還魂紙料によれば、寶永五年の春には歌舞伎狂言には仕組まれて居た。更に下つては享保十七年に八百屋お七戀緋櫻と云ふのがあるが、これは海音の作と同一物で、時に應じて外題だけ變へたものらしい。この外延享元年に爲永太郎兵衞の潤色江戸紫、安永二年菅專助の伊達娘戀緋鹿子がある。宮古路豐後の正本で年代未詳の四時花雙娘では、八百屋久兵衞の娘にお市お七の二人があつて、脚色上別趣を呈して居る。且お市丈助の情死が主となつて、お七はむしろ脇をつとめて居る（お市丈助の道行は江戸の町名を讀込み、多くの淨瑠璃が上方の地名を羅列したのと、よい對照である）。

歌舞伎の方面を見るに寶永五年堺町中村座でこの年に死んだ中村七三郎追善とお七の二十七回忌とを兼ねて名題を追善彼岸櫻とし、中將姫京雛と云ふ狂言の中に仕組んだのを初めとして、その後幾度か種々の外題の下に演ぜられた。猶稗史には安永頃にお七吉三松竹梅物語があり、明治になつては、坪内逍遙のお七吉三がある。これはお夏狂亂と同じく所謂振事劇で、新しく試みられた樂劇の一であつた。

翻つて思ふに、西鶴の作は事實と僅か三年しか距つて居ない。江戸の事件を上方の西鶴が綴るまでには、何等かの材料がなければならぬ。卽ち巷說やその頃の讀賣とか繪雙紙にでも據つたものか、とにかく西鶴の作は文藝史上、お七を詩材としたものの翹楚と云はねばならない。

大正の御代の初めの年、春も暮れ方の頃、小石川の場末のある社の前を通りかゝると、折からの緣日で雜沓を極めて居た。その中に人波に圍まれた覗眼鏡（うつしめがね）があつて、戀娘八百屋お七の文字が特に目を引いた。二三日前、大學の講堂で關根正直博士が演劇

史の講義の折、「一高出身の方は居ませんか、お七の二百年忌が近づきましたから誰か發起して一高の文藝部で紀念祭をやつてはどうです。丁度あの八百屋のあつた所が構内になつて居ますから」と、笑ひながら云はれた事など思出して、未だこんな興行物が人氣を集めるのかと驚くよりも、お七の美しく強い戀を考へずには居られなかつた。歐洲に於ける幾多の詩人達は、かうしたロマンチークな戀に共鳴して、その想像の翼を伸し美の國詩の郷に遊ばうと繰返し〳〵試みて居る。俳人子規も好きな女としてお七を第一に擧げて居たやうに思ふ。「所は駒込の吉祥寺」の哀音は、あの咽ぶやうな三絃樂の旋律に伴れて、如何に多くの人の涙を誘つたであらう。

最後に、おまんの事實に就ては關根只誠翁が元祿九年八月の事と云はれて居るが、五人女の創作年代から云つても、時代錯誤がある。近松のお萬源五兵衛薩摩歌（元祿十七年）の初めに「はやり小唄も時につれ、時の昔とどこへゆく、寛文年中の頃かと」云々の文句の方が正しく思はれる。この作は、五人女のおまんがお目出度く終つて居るのと大に趣を異にし、兩人は情死を遂げながら、黄陳と云ふ長崎の名醫によつて蘇生する事になつて居る。かの流行唄は普く街頭に傳播したらしく、西鶴も近松も共に用ゐて居る。松の落葉第四には源五兵衛踊として

高い山から谷底見れば、薩摩源五兵衛は目にたつ男、のほほんにほ、しやれた鬢つき茶筌髪、寢て又起きても茶筌髪、ずんと凹んだ塗笠、おまんは何處へ、播磨の明石へ蛤踏みに〳〵、蛤々ふみに、ぐり〳〵舟にの、此舟に乘せた源五兵衛、きり〻と廻つてのぞんだ、播磨の明石へ、蛤踏みに〳〵、蛤々ふみに、ぐり〳〵舟にの、此舟に乘せた源五兵衛、一万八千たから藏、ゑい〳〵や、ゑい〳〵代のさかえ。

の詞章があまり、また

高い山から谷底見ればお萬可憐いや布さらず。

の歌謠は、人々に膾炙して居る。これらを見れば唄物としてはかなり廣く行はれたらしい。

然し戯曲小説の方面では、西鶴、近松の外には外題年鑑の寶永六年四月八日の條に切狂言として、おまん源五兵衛葦分船の名が見える計りである。かの春花五大力に源五兵衛やおまんの名の見えるのは説話上、何等の關聯はないにしても、薩摩と云ふ國名と、この人名との間には一種の制約が出來上つて居るやうに思はれる。

述べ來つて傳奇作書後集(下)、中興世話年代記を見ると、お夏の事件は寛文元丑年。おまんの心中は寛文三卯年。お七の火刑が天和二戌年。おさんの刑死が貞享元子年とある。一二年の相違があつても、大體に於て差異はない。

かくの如く五人女の凡ての説話は、當時の事實に基因して居る。而して西鶴は此等の巷談を取扱ふ上に、近松の如く義理と人情との葛藤に着眼して社會悲劇の根柢に立入る事なく、たゞ聞くがまゝに感ずるがまゝに、普遍的の戀愛を目安として詩筆を馳せた。深い省察も鋭い内觀も伴はない。たゞ自然の姿を有りの儘に打出した。彼の作品の小説としての强味はこゝに在る。しかし元祿女の通有性たる浮華が濃く、遊女化せられた女の面影が何よりも深く感銘せられる。

第十一節　「本朝若風俗」の世相と其情趣

其創作的態度に多少の變化はあるにしても、西鶴が一代男から五人女までの道程を一貫するは、兩性問題とこれを圍繞する圈内を出でなかつた。然るに五人女を著した貞享三年には、既に一轉向が認められる。かの本朝二十不孝の如き教訓物はこれを具體的に説明したものである。而して翌四年には、男色大鑑を著はした。名の示すが如く女色一方に傾いた從來の傾向に徴して、全く目先を換へたものと云はねばならぬ。本朝若風俗はその別名であるが、吾人は男色大鑑の名のあまりに大びらなるに僻易して暫らくこの別名を用ゐて置く。

日本紀、愚眼に覩げば、天地初めて成れる時、一つの物なれり、形葦芽の如し、是則神となる、國常之尊と申す。それより三代は陽の道ひとりなして衆道の根元を顯せり。天神四代よりして

陽陰みだりに交りて、男女の神いでき給ひ、何ぞ下髪の昔、當流の投島田梅花の油臭き、浮世風に撓へる柳の腰、紅の湯具、あたら眼を汚しぬ。是等は美少人すくなき國の事、隱居の翫びの類なるべし、血氣壯の時、詞を交すべきものにあらず、總て若道の有難き門に入る事遲し。

西鶴がこの書に序したのは右のやうである。全然衆道念友のために萬丈の怪氣焰を擧げたものと云ふべきで、昨日まで女道の極意に達した粹人の面影は、忽焉として隱蔽されて了つた。此態度は、單に目先を新たにすると云ふ事以外に、他の外部的影響、卽ち當局の好色本に對する方針が與つて力ある事と思ふ。當時の法令は所謂三日法度であり且內容を精査するのでないから、たゞ改題によつて禁壓を逃れる事も出來た。好色本の差止めは貞享三年と云へば二代男を諸艶大鑑、五人女を當世女容氣、二十不孝を新因果物語と改めた消息も窺はれ、後年又男色大鑑に別名を冠したのも首肯せられる。

一體、男色大鑑の名は爲政者の忌諱に觸れる事がなかつたらうか。これには一種の因襲的氣分が、自から問題の解決となり得ると思ふ。卽ち女道を優柔とし男色を剛健とする戰國の遺風が、一般武家の頭腦に浸み渡つて居たのである。江戸幕府の初期にあつては、まだ殺伐の氣分全く去らず、衆道と云へば荒けなく力み、言葉にも角を入れ、兄弟の契り念友の親しみと云ふにも、腕を引き股を突いて眞心を示す風習は、先入的思想となつて武士の間に默契せられて居たのである。さればこそ、好色本禁止に當つて西鶴が直ちに念友の剛を描かんと試みたのではあるまいか。

飜つて思ふに、龍陽分桃の事たるや近代に初まつたのではない。夙に緇流の間、武門の中に行はれ、これが文學に現はれては稚子物語の一流派を生ずるに至つた、(遠くは鎌倉時代の烏部山、松帆浦、江戸初期には藻屑物語等がある)。本朝若風俗も亦此系統を汲むものではあるが、その題材は當時の聞書である。而して念友の剛とは相對的のもので、女道の柔を俟つて初めて云ひ得るのである。この自然に乖反する不倫の行爲は、長い戰陣の間に於ける欲求や、ある不自然な禁欲者流の衝動に基いたものであつ

たが、漸次相互間の交際を中心とする、一種の情緒氣分を味得せんとするに至つた。嬌艶なる若衆風俗を圍繞する空氣は卽ちこれである。諸侯に前髪の小姓があるのは、もとより、淸淨を標榜する寺院の庭にも兒小姓を養へば、市井には媚を賣る野郎が居る。嘗ては蘭燈の灯影も艶な洞房の情趣を傳へた筆は、一轉して綠の前髪に、露の滴る風情を寫さうとしたのである。元祿の町娘のいぢらしい戀と、町女房の遣瀨ない思とを描いた硯は、意地と情とに轉倒する元祿武士の一面と、紫の色に驕る野良風俗とに染められたのである。若風俗八卷四十條の物語は、凡てこの豪華と妖艶との色調に彩られて居る。

本朝若風俗を繙くものが先づ氣付くのは、二樣の世界に截然たる區劃を認め得る事である。卽ち武邊の念友關係を叙したものと、若衆歌舞伎の踊子、野郎の賣色を描いたものと、この二つの世界である。前者は戰國の遺風として、そこに義があり信があり意氣地があり、これを染むるに生々しい鮮血の色を以てし、後者は嬋妍たる媚態を盡すうちに、情と張と心意氣とが潛み、これを包んで白粉と伽羅の香が高く迸る。此の前後相異なる二つの實相は、第五卷を限界線として雙方に分れ、明確に浮出して居る。

今前者に當る武家の念友關係を通覽するに、多少の差異はあるけれど、概ね一定の典型に當塡るやうである。卽ちある二人の武士が衆道の契あるところに、第三者が橫戀慕し、こゝに果合となり或は變じて仇討の形式をとるのである。而して彼等の行動を操つるものは、節義と云ふ道念に外ならない。この道義的觀念は、とりも直さず彼等の生命であり信條である。試みに『身替りに立名も丸袖』を取つて見やう。

「加賀笠きたる姿や誰れ、金澤に若道盛り人あるが中に野崎專十郎」と云ふ美少年があつた。城下から四五里も遠い山里の竹島左膳と人知れず契つて居た。然るに今村六之進と云ふ武士、專十郎に思初めて數通の文を投入れたが取合はない。「然れども武士の申懸けしを此儘にはやめ難く、程なく至極になつて左膳と念頃を尋ね出し」押して

我物にしようとした。專十郎思ふやう、六之進打果すは容易であるがこゝが分別と思案して、私かに六之進の許を尋ね「此程の御心遣ひ外に聞くにあらず、竹島左膳免れぬ難儀申かけ口惜しき一つ、又は心ざし誠なき男」なれば人知れず討つて貰ひたい、さすれば我身は任せようと言入れ、いつも四つの時分、榎木原の在郷道を通るから辻堂の前で夜の編笠をしるべにと相約して歸つた。六之進敎への通り待伏し一刀の下に斬倒して後、心急くまゝに、玉笹の中に入れば「たよりなき聲して、我はかくなりゆきても左膳殿堅固なれば」と云ふ聲に驚き、小者に忍火打たせ死骸を見れば專十郎であつた。六之進男泣して世上が知らねばとて長へて嬉しからずと、小者をして左膳の門を叩かしめ、主人六之進と專十郎とは衆道の交がある。然るに必懸りは貴方であるとて今宵打果きんとて今こゝへ來る。私は不理盡と思ふから一旦諫めたが、却つて殺されそうになつたから逃れて來てお告すると言はしめた。左膳初めは奇怪に思つたが、外に出て見ると此方に來るのは正しく專十郎、「大振袖の忍姿、惡くやと計り思込み物知らずと一打に枯木の蔭に切伏せ」篝火に見れば六之進であつた。かの小者を引出して仔細を糺せばいづれも涙、「某長へて益なしと死腰に骸かけて今年二十八の秋の末、夜の紅葉を及に散らし、はかなや朝は露となりぬ」。

かく一貫せる思想は義の一字である。義があらゆる紛擾の解決者である。『藥はきかぬ房枕』（藻屑物語と同一題材である）に於ける采女の追腹も、『玉章は鱸に通はず』に於ける天神の松原の助太刀も、『なぶり殺す袖の雪』の笹之介の所業も、詮しつむればこの觀念に外ならない。かゝる武士氣質は犧牲的精神の遂行によつて、自己滿足を感銘した時代の道念と共に、雄健豪華なる元祿武士の一面を語るものであつた。

併し、本朝若風俗の前半に於ける武士の念友が悉くこの色調を以て終始すると云ふ事は出來ぬ。中には『情に沈む鸚鵡觴』の如き全くの女物語や『待ちかねし三年目の命』の如く女物語を主として結末に衆道を附加したるものを初め、平和なる念友關係、單なる戀の執着を叙したものも散見せられる。もしそれ女嫌の旗頭とも稱すべき

『詠めつゞけし老木の花の頃』に於ける主人公の主張に至つては、卷頭の『色は二つの物爭ひ』に見ゆる女若兩道優劣論の鼻意氣の荒さと共に、たとへ西鶴が信念でないにしろ、たま〳〵以て作者の文藝上の卑近なる遊戯的精神が曝露したものである。この蔽ふべからざる遊戯的態度は、こゝに又武家を離れた若衆野郎の世界を描くに至つた素因と見るべきである。後半に現はれた世界は全く一代男以下に詳叙せられた花柳社會の他方面に於ける綿密なる觀察錄である。

「脇塞げば雨ふり、角入るれば風立ち、元服すれば落花よりは情れなき」若衆の果敢なさよ。麗色は移ろひ易く美貌は保ち難い。壺打の楊枝に齒を磨き、鑷(けぬき)に漸く濃くなる髭を拔きながら、二つ折の髮高く結上げ、濃艶なる大振袖に紅の脚布ひら〳〵と閃めかすさまは、宛らの遊女である。彼等の住むは、愉悅の園であつた。媚と笑と、酒と色とに暮れてゆく歡樂の巷であつた。而してそこに意地があり義理があつても、その背後には、矢張りこの世界になくてはならぬ情の絲が絡まつて居た。「朝は谷より水を掬ひあげ夕は落葉を集めて行ひ澄す」高野の山住も、「春待つ雪の梅あたら蕾を散らして月やむかし」の難波の夢も、「楊枝一本のなづみより五年に亘る」放浪も、いづれも戀がさせる無常であり哀愁である。觀來れば若風俗は單にこの特殊社會の情趣を傳へんとしたもので、かの遊里描寫と全然規を一にすると云はねばならぬ。而して「女道あるによつて鈍けし人種つきず、願くは若道世の契りとなし、女絶えて男島を改めたし、夫婦喧ひ聞ず恪氣收まり靜かなる時に逢ふべし」と云ひながら、かの往々にして衆道に縺るに少女の戀を以つてしたもの、卽ち『命乞は三津寺の八幡』『江戸から尋ねて俄坊主』に於けるエピソードの如きは不用意中に作者の興味が露はれたものであらう。

かゝる意味に於て、此の作品の後半は他の好色本の世界から一歩も蹈出して居ない。本朝若風俗の一篇、その說話に多少の脚色はあつても、要するに「風流なる美少、玉繰笠に淺黃紐の仕出し、つと髮染の大振袖、ぬき鮫の大小、とり廻しのさゝや

かなることなし、左手に山吹の婀娜花をかざして靜に豐かなる、人間とは思はれず、姑射の神人牡丹に化すかと疑はる」る小姓の容姿を述べ、「とり〴〵の身振り、先づ竹中の淺黄の返し、下着の中は紅鹿子、上は鼠繻子の紋付、白羅紗の羽織に小鳥づくしの唐衣の裏をつけ、八所染の胸紐解て白柄の長柄のぬき出し、左に少し身をひねり座し、笑へる口元のゆがむに尙しほらし、藤田は白小袖の上に我名の色を含ませ、紫縮緬の二つ重ね、なほまた羽織帶までも同じ色の帽子蕭やかに身を固め、息づかひまで自然の若衆に具はれり、袖岡は黄なる肌着に青茶樺茶の島揃ひ、ぼつとしたる容氣、さながらの女の如し、光瀬は白き下着に薄色の中形、縫分縞のうね帶、萌黄袋うちの柄絲、なで角の金鍔、髪結ふ樣も一際目立ちてぬるき所なく、人の好ける風儀あり、外山は紅の色濃く白地に墨繪の東海道」と當時京の三條の勤子の粉粧を叙し、「一代歌舞伎若衆を買ふ事もしらずして暮し、内藏の片隅に積重ねられ幾年此金世間のおもしろき事をしらず、そのまゝ朽果つるを銀も口惜しかるべし」とて、華美清艶の若衆風俗の詳叙によつて、此の社會現象を紹介せんとするのが作者の本意であり作品の身上であると思ふ。しかし創作は風俗資料たり得るけれど風俗資料そのものではない。從つて文學的價値に於ては、この傾向の著しい若衆風俗を描いた後半は、この色彩の稀薄な武家氣質を叙した前半に比して、遜色があると云はねばならぬ。

更に史的觀察の立場から見れば、後半は在來の好色本の一變體に過ぎないけれど、前半は繼いで來るべき武家物への道を啓示して居る。而して若衆に昵み野郎に遊ぶ武士の面影は、太平の暈蒸した頽廢的氣分が、此の社會的位置ある優秀な階級に向つて、漸次瀰漫してゆく爛壞の悲哀を物語つて居る。

最後に附言する。本朝若風俗の文章はその他の好色本に比して伯仲の間にあると思ふ。その情趣は處々に引用した數節によつて掬し得るであらう。たゞ首肯し難いのは隨所に散見する支那故事の引用である。これは新趣を出さんとする努力の外面的發露で、この作品の基調の上にさしたる效果はなくむしろ文情の整齊を攪亂するに過ぎぬ

ものである。

第十二節　好色本の世界と性欲描寫

華やかな灯影を慕つて辻駕籠が走る。朱の衣桁に掛けた襠に、絹行燈が映えて、焚きこめた伽羅が淡く香る。有明の月の白くかゝる柳蔭には、後朝の淋しさか、ゆく水に眺の入る男がある。しと〳〵と降る春雨の晝を、遣瀬ない三味の忍音のはたと途絶えて、紺暖簾の隙から白い片頬が見える。白壁の並倉の間から、堀割の水を見せる中二階に、緋鹿子の袖を亂して若い娘が欷歔り上げて居る。凡ての顧慮と逡巡と眞實とが却けられて、そこに放縱と惑溺と愉樂とが殘る。好色本に現はれた世界はまさにこれである。

今、好色本の對象世界を見るに二個の世界がある。一は花柳界で一は素人筋である。而して肉の耽湎靡爛を訴ふべき花柳の巷には、性欲の旨動のみにあらざる賦彩を呈し。純然たる戀愛關係に終始すべき市井の情事には、思ひがけなくも强烈なる官能の香が迸る。この異なる境地から感得する異なる情調は、やがて兩者を一抹の同じ刷毛に彩る結果に終る。然し此斷案を提示するには猶一通りの解說を必要とする。

一代男、一代女等の代表的好色本に現はれた人物の行動、說話の構成を通覽するに、その核心は云ふまでもなく性欲そのものである。しかもこれを圍繞するある氣分によつて、特異なる情調が滲み出して居る。この一種の氣分が、凡ての好色本を性欲に猪突旨動する事なからしめた。むしろ人間の性欲生活を包むに薄絹を以てし、それがために熾烈なるべき肉の香を幾分軟げて見せた。かの局所局所に描かれた閨房の秘戲に關してはこゝに云ふ性欲生活とは自ら別趣のものである。

然らばこの氣分なるものは何かと云ふに、遊里を中心とする社交的圈界卽ちこれである。彼等が遊蕩生活は、單に性欲滿足のためではなく、狹斜に於ける慣習風俗から生ずる情趣に入り浸つて、充分にそれを體得感味するにある。されば、苟くもこれを

味得し得べき境地ならば、刹那々々に移つて行かうとする傾向がある。これがために、或は同時に二人三人の女性に接觸し、或は二人三人の男性に交り得るのである。しかも、これに伴ふに自己本位の行動を以てする。この點は好色と戀愛との分界線であつて、好色は常にピヤノの鍵盤に觸れて走る指先から、音譜が流れ出づるやうに、多くの異性の間から、情緒の旋律を見出さうとして居る。かく好色的生活は、性欲とは、不卽不離の境にあつて、強ちに肉に執せず、たゞ自己の生活全部を擧げて遊廓なる一社交界に投ずるのである。かの世之介の後半生の如きは、この態度の最も明晰に現はれたものであらう。然らば花柳の巷以外に、かゝる世界は見出されなかつたらうか。これには時代を考慮せねばならぬ。社會上の階級制度が、內實はともあれ、外面的には、動かすべからざる形式主義を最上權威として臨んだ時代である。從つて自由鄉はこの遊里以外に認められなかつた。しかし遊里に於ても、絕對な氣隨氣儘は免されない。こゝにも一種の制約がいつの間にか生じて居た。この點は元祿期の特殊な機運に包含せらるゝ所であつて、凡てが消極的逃避的であつた德川文明の一面が窺はれて面白いと思ふ。この遊里に於ける制約とは、とりも直さず花柳界獨得の氣分である。換言すれば、あらゆるものが物質の下に蹂躙せらるべき此の廓に於て、決して金錢が萬能ではなかつたのである。卽ち遊女の身にしては、己れに敵するものには飽くまでも强く、己れに與するものにはあくまでも弱い。張りの裏には脆い女の情けが潛む。「此の男嫌うて振るにはあらず、かしらに粹顏せらるるによつて、此方からもむつかしく仕掛」けるのである。一旦は振つたけれど、男の情に心和らぐ折、ふと「浮名出づる事のうたてく、」そのまゝに起別れた「情より名聞」の念や、「いかなる粹もいやとは云はぬ」手練や、「客からのつけ次第にして做る」氣位や、「少し足らぬ人を瞎にして遣はせし先の人」憎く、何の見所もない男にわれから解けし、俠と情の縺れ絲。かゝる間に、この世界特有の禮讓と因襲とが生じて來た。此の境に身を處して、そつのない了解と圓滿な取捌を以て、遊蕩的空氣を十分に味ふのが所謂粹であり通である。通と云ひ

粋と云ふ、いろ〳〵解釋はあらうけれど要するに、譯知りの聖の意に外ならぬ。このわけ知りの聖と云ふものは、性欲を輕視し情趣を尊重するの二大條件を體得したものに限る。好色の理想を求めて進むものは、遂にこゝに到達しなければならぬ。

好色本に描かれた幾多のシーンは、凡てこゝに至るべき道程を示したものである。卽ち好色本に現はれた世界は、この卷軸に達すべく繰展げられた幾枚かの繪姿である。客と遊女、遊女と遊女、客と客。この三巴を圍繞して、幇間があり遣手あり禿がある。而してその相互間から生れ出づる粋と野暮と、張りと情と、猜みと慾、とあらゆるこの世界の氣分を一團として、そこに遊里なる特殊的社會が浮上つて來る。

浮華淫蕩を好色の生命とすれば、實意獻身は戀愛の眞相であらう。好色本に現はれた市井の情事を一瞥するに、此處には部屋住と箱入娘とが居る。世話女房と分別男とが居る。花街柳巷に於ける兩性問題が、大びらで浮調子で白晝公然たるに引き換へ、こゝには、考慮と羞恥と細心とが常に繞つて居る。たとへ情熱の迸發があつても、願みがちな愼ましさがある。こゝに於て、その描かれた世界は、好色特有の世界、卽ち遊里とは基調を異にする戀愛生活の一面であらねばならぬ。五人女の世界は卽ちこれである。作者が冠らすに好色の二字を以てしたのは、好色と戀愛の區別を認知しなかつたのか、或ひは全然懸念しなかつたのか、若しくは賣らんが爲めか、いづれにせよ妥當を缺くものがある。さりながら描き出された女性は、既に指摘した如く孰れも遊女化せられた人妻であり町娘である。しかも好色本全般に亘つて最も世の視聽を聳てつゝあるのは、赤裸々たる性欲描寫で、强烈なる色調を漲らして居る。これがために基調の差別は認められず、却つてこの特異な一面に於て、鮮明なる印象を形成して了つた。謂はゞ核心的要素ならぬものが、民衆のために重要視せらるゝの結果を生じて居る。

然らば西鶴の性欲描寫に對する態度と、その意義は如何であらう。

性欲描寫の最も甚だしく現はれて居るものは、勿論一代男である。前述の如く一代

男は元來、所謂「てんがう書き」であつて。執筆の當初にあつては、對世間の考はなかつたらしい。たゞ自己體驗の一端を書きつけて、自ら娯むか同じ遊び仲間の誰彼に見せて、互に哄笑の材料とする位の程度のものである。二代男三代男と順次年を距てるに從つて、この傾向が少くなつたのは對世間の顧慮の挾まれた消息を語つて居る。しかし一代女に於て多少逆行した形跡が認められるが、一代男に比べては甚しく控目と云はねばならぬ。而して五人女は略〻一代女と同程度ではあるが、描寫の上に多少の差異がある。要するに性欲描寫の中樞は一代男一代女及び五人女の三篇であらう。

この三篇を通覽するに性欲描寫の筆致は全然同一でない。即ち物語風から漸次印象的になつて居る。的確なる精寫から、隠微なる省筆に進んで居る。但し印象的と云ひ省筆と云ふも比較的の言葉で、これによつて讀者の享受する感じは、畢竟卑穢猥雜の譏を免れない。唯後世の人情本に見るやうな、挑發的な思はせ振りの多い筆法に比べて、大膽であり奔放であり無遠慮であるがために、却つてそこに穉氣と無邪氣とを伴ひ、その結果或ひは澁面を招き或ひは哄笑を購ふ計りである。もし或論者の云ふが如く、人生の活圖を描くのみに專心したものとすれば、何を苦んでか紅閨翠帳の秘事を明叙し、加ふるにかゝる場合に於けるある一個人の擧止動作性癖まで報告する必要がどこにあらう。かくまで立入らなくとも元祿の空氣は、市井と遊里とのいづれを問はず、鮮明に描き出す事が出來るのである。事實上、好色本に描かれた世界は、此の點に於て既にある程度まで效果を收めて居るのである。殊更に赤裸々な本能生活を暴露して、そこに幾何の收穫を附加へやうとするのが抑もの心得違ひである。今かりにかゝる肉欲描寫の部分を全部抹殺しても好色本の價値は毫も傷けられない。唯その結果として、或一特質――善惡の問題は別として――を失ふ計りである。かの省略のまゝな流布本（例へば有朋堂文庫中の五人女）を繙いても一篇の情趣は十分に攫取せられる。これによつても思半ばに過ぐるであらう。

もしそれ西鶴が性欲描寫を以て、在來の慣習的迷妄を破り、人間の假面を剝いで、

その裏に隠蔽されて居る眞相、卽ち獸性を白日の下に投下して、そこに人類の本體を眺めやうとする、所謂「世界の醜化」(Verähsslihnung der Welt)を暴露する態度である と云ふが如きに至つては、近代科學に基く機械的唯物的人生觀の色眼鏡を掛けた見方であつて、西歐の近代文學、及びわが現代文學の一部にも當塡るけれど、西鶴にとつては全くひいきの引倒しである。元祿の世に於ける平民勃興を背景にした西鶴の作品には、たとへ當代人の頽廢的傾向が見られても、それは後人の道義的批判であつて、作者自身も、この自由にして奔放、放漫にして豪奢なる、陶醉的生活の大渦卷に卷込まれた男である。この色と酒と亂舞から目ざめで、最もらしい口吻を洩らしたのは猶後年の事、好色本執筆當時は――漸次歡樂の悲哀の影が濃くなりまさつて行つたとは云へ――まだ〳〵若い生の愉悅と肉の飽滿とに、醉ひしれた靑樓の夢醒めやらず、そのかみのうら若さを、顧みがちの足どりも憚かならぬ樣であつた。從つて好色本に於ける官能的筆致は、全く彼の遊戯的精神に基いた氣まぐれと面白半分のいたづら書きである。一代男に於けるてんがうが五人女まで絕えず頭を擡げたのである。故にかの性欲描寫のいづれの場面を取出しても、近代文學に於けるそれの如く、嚴肅な氣分も起らず眞率な情味も掬する事が出來ぬ。從つて人生の裏面に潛む醜の戰慄を示す文明批判の態度は、藥にしたくも見られない。のみらず、その蔭にはどうだ面白からう、こんな事もあるんだぞと云ふ作者の薄笑が見え透いて居る。卽ちこの場合に於ける彼の人生觀照はきはだつて輕佻浮薄の趣が深いと云はねばならぬ。

これを要するに、人生の斷片として、人間記錄の眞相として、近代文學に重要せらるゝ性欲生活の一面たる肉の描寫は、西鶴の好色本にあつては全く疣贅の感がある。もし彼にしてかゝる卑猥の文字を避け、作者獨特の省筆[illegible]あたならば、必ずや別途の方面に於て一特質を加ふるを得、更にその作品を九鼎大呂よりも重からしむるものがあつたらう。

猶當面の問題としては、性欲描寫と關係して西鶴本に對する禁賣があり、進んでは

文藝と道德との關係がある。これらは他の問題と共に一括して西鶴の全般を通過した後に讓らうと思ふ。

第四章　西鶴の創作

(二)武家物

本朝若風俗に於て、創作過程に一轉向を現はした西鶴は、同じき貞享四年に武道傳來記八卷武家義理物語六卷を著し、次でその翌年、卽ち元祿元年には新可笑記五卷を上梓した。この三編は悉く當代の知識階級を占むる武士を對象としたものである。こゝに於て本朝若風俗に現はれた一面、卽ち武士の念友を精叙すると共に、更に彼等が生命であつた意氣節義、これを高調した復仇、及び一般の武家生活を描き出した。この期間に於ける彼の創作は年表に示すが如く、これらの武家物ばかりではない、故に漸次好色本の色彩から遠のいて行つたと云ふを妥當とする。その原因は既に述べたやうに、外部の壓迫と內部の動搖とにある。又いつまでも同處に彷徨停滯して居るには、彼は餘りに機を見るに敏であつた。

春に驕る花の雲がそよ風に誘はれて、殘る紅も薄れてゆけば、見上ぐる梢には若葉

の光が鮮かに映る。やがて翠滴る森に霜が置いて、一葉ちり二葉ちり、さてはちり〳〵に散り敷いて、淋しい木立が秋空に冴える。花やかな色懸沙汰を去つて、豪快な武家物語を綴り、更に引締つた才覺を命とする町人の世界に移つて行つた西鶴の路は、まさにこの移りゆく自然の姿であつた。

以下武家物語三篇に取扱はれたる諸問題に抵觸して攻究を進めて行かうと思ふ。

第一節　仇討を中心として見たる「武道傳來記」

武道傳來記八卷三十二話に亙る中心思想は、云ふまでもなく仇討である。仇討即ち復仇の觀念は、もと憤怒嫉妬猜忌怨恨等の情緒より現るゝもので、その心的要素は憤怒と同じく自己保存の要求に基き、反抗的であり進取的であり破壞的である。即ち自我の活動及び幸福の沮礙せられた時、反撥的の行動がこれに伴ふ。たゞ純然たる憤怒の情緒と異なる點は、身體上或は精神上の侵害に對して直ちに反撥するのではなく、强弱の上から云へば比較的弱く、且熟考する餘裕があり、侵害以上の程度、少なくとも同等の害を報酬的に返して、自我の滿足を得んとする行爲である。故に復仇は一に熟慮的憤怒、或は容知化せられたる憤怒と呼ばれて居る。されば復仇的行爲、即ち仇討となつて現はれるまでには憤怒その他の情緒から發足する。

而してそれらの情緒を喚起するには、それ〳〵の素因がある。この素因そのものは、仇討の動機であつて原因ではない。所謂仇討なるものゝ打手は、常に第三者であらねばならぬと云ふ條件を具へて居る。故にこの動機は第三者の心的過程を示すもので、仇討なる事件とは自ら別問題である。即ち仇討に於て普通原因と呼ばるゝものは、第三者の親近者の身邊に起つた事件で、第三者は血族或はその他社會上の關係によつて、この渦中に捲込まれたものである。武道傳來記の仇討に於けるこの關係を通覽するに、親子の關係にあるもの十二件を初めとし、兄弟にあるもの七件、念友たるもの四件で、他は種々の社會的關係によつて成立して居る。

此の事件を惹起する原因は各〻その色調を異にするが、要するに瑣細なる家常茶飯事である。而して大體から見て、今二三の項目に分類する事が出來る。

一、意氣地。これには物爭ひ、口論、陰口、風評によるものが總括せられる。その物爭ひ口論なるものは燒香の席順の爭ひとか、(野机の烟くらべ)。駿馬をわが手に入れやうとする根膽とか、(播州の浦波皆返り討)。或は路上のすり違ひに挨拶した、せぬの爭(不斷に心懸の早馬)。或は人魚が居た居ぬの論(吟味は奥島の袴)とかで、互に意地を張通して遂には及傷に及ぶのである。又陰口や惡風評によるものは、海上に大蛇を見て震え上つたり(大蛇も世にある人が見た樣)。百物語の末、庭を走る犬をつきとめて世の嗤笑を招き(炬燵も歩く四足の庭)。或は烏の暴れ食ひの席で、食べないのを見て、一人が烏をまゐらぬ人は五百八十年も生殘りて見給へと、くりかへし〳〵言つたと腹を立て(行水で知るゝ人の身の程)。大百足を切つて噂の種となつた矢先、友達が心安立から途中で藤太殿と聲をかけたとて憤る(新田原藤太)。凡てその結果は劍を拔合つて血腥い慘劇を演ずるのである。而してこゝに仆れた武士の子なり弟なり妻なり或は友人なりが亡き人の亡魂を慰めむとて復仇的行爲をとるのである。

かくの如く、仇討の原因なるものは極めて單純である。尊き幾多の人命を賭する大事件としてはあまりに輕卒である。事實を惹起する動機には、生來の短氣もあらうが、彼等の意氣地なるものは、武士の體面を曲解した一種の形式主義に囚へられたもので、刀の手前と云ひ一分が立たぬと云ふも、所詮は自制なき刹那の私憤にすぎない。又陰口風評なるものも、浮薄多辯の譏を免れぬ。要するに、洗練せられざる武士氣質の横溢と云はねばならぬ。從つて直情徑行は、むしろ粗野暴慢の色調を帶び、仇討の二大要素たる怨恨と雪恥とは甚だ光彩の鮮かならぬものとなつた。作品にかゝる陰影を殘した理由は那邊にあるであらう、これには西鶴の取扱つた材料及び對象たる時代に就て述べねばなるまい。(本章第四節參照)

二、戀愛關係。こゝには兩性問題のみならず衆道に關するものをも含む。その主要

情緒は嫉妬である。やむなき愛の執着と、さり難い戀の妄念とが、痛切にその身に迫る時、嫉妬の情は勃然として頭を擡げて來る。さればこゝには叶はぬ戀の怨みがある。遂げ得ぬ思の悲しみがある。あるは一度得た愛の破綻がある。かゝる境遇に心の平和を傷けられて、常規を逸するものは女である。しかし武道傳來記にはこの世上の恒例に反いて『毒藥は箱入の命』に於ける女が、失ひし戀の妬みに毒饅頭をすゝめる一編を除いては悉く男である。臣下の妻に横戀慕して、夫を遠く使に出し置き、その留守に我が者にせんとて却つて手痛く拒絶せられ、庭前の櫻にしばりつけて弄殺にする『我が命の早使』の磯部頼母の如き、猜むものゝ奸計ともしらず密夫ありと聞いて一時の情にかられ愛妾を引出し、紅の恥かくし一重となし、兩の爪剝ぎて証を立てさせ、更に「指を切れとありし時、いかに命が惜しきとてその身になりては何か詮なし、さりとは〳〵畜生に劣れり、此の一念外へはゆかじ、心まかせと首さしのべし」を手討とせし『女の作れる男文字』の隨夢の如きはその甚しいもので、共に武士らしからぬ蠻行と云はねばならぬ。又おのが情婦のかくし男と噂ある人に、後妾が似て居たとて拔討にした『踊の中の似世妾』や、思ひの叶はぬ意趣晴しに、戀敵を闇討にせる『思入れ吹く女尺八』や、嫁の容色が豫想以外に醜くかつたとて、猛り狂ひ、媒人を斬ふせる『見る人顔に宵の無分別』等に於ける主要人物の行爲は、輕舉妄動の極と云ふべきである。かくの如きは前に述べた意氣地と同じく、武士としての修養もなく自省もなく、何等情操に鍛錬を經て居ない、たゞ市井の一匹夫と異なる所なきものの所爲である。

衆道念友に關する及傷事件は約十篇を數ふる事が出來るが、その原因は以上と大差なく、戀の意趣を基調として、いづれも浮薄輕卒と云ふ人格上の缺陷にある。かく武道傳來記一編に現はれた仇討の主因は甚だ上調子なもので、人生の第一義に活躍する深刻な意義を有するものは極めて少ない。凡てが皮想的色彩の下に蔽はれ、眞個の武士は描かれずして、二本差した猪武士か、然らざれば腰ぬけ者がうよ〳〵して居る。

更に、この原因から仇討そのものに移ると、こゝには多分武士らしい意義と情念とが認められる。しかしこれも「仇討」を一個の美的行爲とする因襲的觀念が、濃厚な背景をなす事に因つて生ずる幻影に過ぎない。作者も亦仇討を以て、一種の制約（コンベンション）の下に取扱つたかの感がある。從つて生々した武士の面目襟度は鮮明に映つて來ない。義氣俠勇を主因とした數篇に於ても、わざとらしい雰圍氣に包まれて月並臭が鼻を打つ。

次に、說話の布置賦色は如何と云ふに、比較的複雜な構成分子を有して居る。しかし此の種の短篇ものであるが爲めに、內容の複雜なるに從つて、梗概的叙述に偏した傾向がある。のみならず一說話中に挿まれたエピソードが、かなりの分量を以つて居るので、全體から見れば記述に精粗が出來て、均齊調整を缺くの結果に陷つて居る。或はこのエピソードが主要な部分を占めたり、時として仇討と云ふ核心が挿話中に繰込まれたりして、說話全體の統一を破壞して居るのも見うけられる。

今、『身體を破る落書の團扇』の梗概を叙してその一般を示し、且そこに描かれた事件によつて、當代に於ける仇討の意義に論及しようと思ふ。

阿波の德島に奧田戸右衞門と呼ぶ三百石の武士が居た。一人娘は京育ちで、美人の譽が高かつたが、肝入る人があつて篠田文助を婿と定めた。家中の若侍は岡燒半分に水祝を大々的に行はうとした。ところが水祝の儀は先年法度となつて居たので、大目付に吟味されて沙汰止となつた。然るに水祝の道具のみはその以前、已に運ばれたが、その中に落書の大團扇があつた。その筆蹟が千塚林兵衞に似て居る。文助は外の人さへ心外に思ふに林兵衞は從弟である。それにこの擧に參じて、しかも落書するとは憎い仕方と腹立してやまず、ある夜その家に尋ねて仔細とはず打つて捨て、そのまゝ立退いた。團扇の書は林兵衞でなくて杉森某であつた。杉森は事の起りは、我れからと思ひ、この上は文助打つて林兵衞に手向せんと何處ともなく立出でたが、大阪で病のために仆れてしまつた。林兵衞の子林太郎は當時二歲であつたが母の一念に成長して十一歲となつた。而して讀書の道しるべとて攝津の金龍寺に上つて三年、十四の春を

迎へる。こゝに金龍寺の麓の里に兼田自休と名乗る散切髪の男が居た。ある年の正月、この山寺に上つて己が從弟千塚某が不慮の災にあつてから、十三回忌になるから法要を頼むと申込れた。林太郎は折から薄茶を運んで此の物語を聞き、さてこそと小脇差抜いて飛びかゝつたが引伏せられた。皆が立騒ぐを、自休は押とめて汝は林兵衛の悴であらう。十三年目であるから今年は十四才と思ふ。十五になつたら、此方から名乗つて打たれてやらうと思つて居た、今日こゝで逢ふは幸であるとて、林太郎の劒を持添へわが腹を刺通して相果てた。林太郎その首を物に入れ母の居る備前に歸つた。岡波に殘つた文助の後家はこれを聞いて、林兵衛後家の家に夫の敵と斬込んで來た。林太郎出づるを、母は引とめて、互の女勝負に文助の後家を引伏せて、「女なればとて道理を聞分け玉へ、夫打たれて恨を云はゞ自らこそ此方へ申すべけれ」と、言葉をつくして諭した。こゝに互に恨を晴らして二人後家は尼となり、林太郎も名を道林と改めて佛道に入つたとの事である。

短篇小説の資材としては道具立の多い方である。而して説話の材料は萬遍なく整頓されて居る。この點は武道傳來記にあつて、有數の部類であらう。今、自分がこの一篇によつて考察したいのは、當代の仇討に對する解釋である。仇討とは言ふまでもなく親近者の遺志の繼續的行爲である。然るに文助の後家の行動はたとへ訓戒によつて悟入したとは云へ、たゞ單に死なる結果のみを見て對象者に何等かの報復を與へんとするにあつた。かくの如きならば、復仇は常に交互に、しかも永久に行はるべき性質を有する。實際當代の仇討なるものを見るに、原因の如何に係らず、先に討たれしものゝ子弟が、當然とるべき手段の如く考へられ、且つ決行されて來たやうに思ふ。武道傳來記に於ける幾多の説話は多少の潤色と想像とはあらうが、多くは世上の聞書の蒐集である事は論を俟たない。こゝに於て論旨はむしろ仇討の根本問題に入らねばならぬ。しかしこゝには殊更云ふを避け、更に範圍を縮めて西鶴が取扱つた仇討はどれ程までに藝術化されて居るかに就て眺めたい。

惜しい哉。西鶴は單に巷の噂として執筆したらしい。この點は好色本に於けると同一の態度である。かの好色本にあつては、事件の多くが自己體驗の範圍内にあつたけれど、仇討にあつてはむしろ縁遠い彼岸の世界の出來事であつた。好色本からの逃避者は武家物の住人ではなかつた。街頭の立噺、消閑の夜話として充實した内容、生命ある中心はエキスし去られて殘るところは餘滓に等しい。彼は敵討の噂そのまゝをたゞ文章のあやを以て書きとめたのである。これがために武士の本體を描かずして、皮想を叙する結果を齎し、又武功を中心とする犧牲的精神、獻身的行爲を包含した武士の世界、即ち「忠」と云ふ大宇宙を忘れて、單なる個人的行動の小宇宙に跼蹐せねばならなかつた。

かくの如きは、仇討をば一種の慣習性を帶ぶ美的幻影として、漫然取扱つたと共に、西鶴が武士なるものを充分に了解し得なかつた事に歸すべきである。而してこの一事は、更に彼が素性をも語るものと思ふ。ある書に西鶴は平太夫と呼んだ名前から見れば、武家の馴れの果で、時代がも少し早ければ大阪に立こもるか關東に走るか、二つの一つを撰んだであらうとある說には甚だ首肯しかねる。彼が平太夫との通稱にも明確な實證はないし、又名ばかりによつて素性を定める事も出來まい。傳記の曖昧なる彼の如きは、作品によつて推理するより外はない。

武道傳來記に現はれた手際に從へば、彼は決して武士階級の空氣を呑吐した人とは思はれぬ。たゞ市井の閑人が、屈託のない春の小窓に、折々傳へられた茶話を綴つたに過ぎないのである。彼が前の好色本、また後の町人物に比して、著しく見劣せらるゝのは、實生活の距離そのものに歸すべきと思ふ。この點は武家義理物語に於て更に證明せらるゝのである。

第二節　「武家義理物語」と道義的觀念

武道傳來記を閉ぢて武家義理物語を繙くに、その間何等の著しい差異は認められない。辿るは同じ森の下道でありながら、櫟林から楢の木立に移つた位の感じである。

前作に於悉く仇討のカタストロフを取つたものが、こゝには多分趣を異にして題名の如く義理の賦彩が強く現はれて居る。

説話の總數は六卷に亙つて二十六話ある。その内、義理なる道德的觀念を核心として一篇を構成するものは四分の一に過ぎない。その他に於てはこの觀念はむしろ客體である。卽ち意氣地嫉妬を主要分子とする女道、念友、及び喧嘩口論の物語で、全然傳來記の蹈襲と見らるべきものである。但し凡てが及傷の慘禍を惹起せずして、そのあるものは考慮により自省により圓滿な解決を結んで居るのは、そこに幾分の變化が認められる。

今、武士の義理なるものを見るに、自然の心情に乖離した禁欲的行爲である。利己主義の圈内を脱却した犧牲的精神の發露である。故にその行動は、儒教思想に涵養せられた一種の美的幻影であるに拘らず、緊張せる道義的觀念によつて、嚴肅なる氣分に誘はれる。所謂義理なるものゝ權威は、この情緒を惹起する所にある。從つてこの氣分情緒の誘起如何が、これら義理物語の價値を定むべき唯一の規矩準繩となるのである。婚約の娘が疱瘡のためにあたら美貌を失つたので、その妹を遣はしたところ、義によつて先約を違へず、强ひて姉娘を向へた。『瘊子はむかしの面影』の主人公、明智光秀。己が子と、托せられし友の子とを伴れての東路の初旅に、大井川の出水に逢つて、はしなくも友の子を流し向岸に上つた己が子に因果をふくめ、直ちに同じく流れに投せしめ、それをせめてもの詫のしるしとした『死なば同じ浪枕とや』の神崎式部。邂逅り合ひながら、主の使の道すがらであり、剩へ仇は急病にて路傍に惱むのを見て、藥を與へ後日を期して別れ、仇をして慚愧せしめ『御父樣をうつたる處にまかりて自害仕るなりとゞめをさして給はれ』と訴へしめた『後にてぞ知る戀の闘討』の千塚藤五郎。いづれを見ても抑制によつて自己滿足の法悦を味はんとした人である。道念の盃を飲み干してそこに無限の慰藉を求めんとした人である。而してこの思想が女性に移つては、或は敵同士の二人に馴染を重ね、仇討の場にかけつけて自及せる『身がな

二つ二人の男に』の遊女となり、或は新婚の夢の暖かなるうち、殿に殉死した夫に殉死する『人の言葉の末みたがよい』の小吟となる。これらの説話は悉く讀者をば道義の園に誘致して情意の葛藤に投じ、依つて起る悲壯美の色調に、感激の涙を強ゆる底の物語である。近松の描いた心中悲劇の世界が、人の心をそゝる所以と全く同一基調と云はねばならぬ。然るに、以上の諸篇に於て讀過一番その情趣に抵觸する事は出來るけれど、全く浸潤して個中に彷徨する事は出來ぬ。勿論半ば音樂的なる淨瑠璃と比較する事は出來ないけれど、こゝには胸を引きしむる强さも、涙を誘ふ力も見られない。尤も形式上の原因、即ち短篇小說と云ふ點もあるが、主要なる素因は描寫の恬淡なると、記述の梗概的なるとにある。特にこの點は傳來記と似通つて居る。更にこの效果に就いて附言すれば、內容と形式とが、はなれ〴〵になつて居る爲に豫期の情緒は喚起されない、換言すれば題材が嚴肅であるに拘らず、叙述の方面が內容にふさはしくない冲澹洒脫に走つて居るためである。自分は上述の理由によつて、武家義理物語の歷卷としては、この點に於て渾然たる融合を見せた、『約束は雪の日の朝飯』の章を擧げたい。

「石川や老の浪立つ影は恥かしと讀みすてゝ、賀茂の山蔭にかくれし丈山」の草の庵に、小栗某なる人が尋ねて來た。「心にかゝる山の端もなく、梢に落葉して冬景色のあらはなる月を、南おもての竹緣につい居眺めながら」語つたが、此の客つと立つて、これから備前の岡山にゆくと云ふ。それならば「又いつ頃か京歸りと聞けは命あらば霜月の末にといふ。然らば二十七日はわが心ざしの日なればこれにて一飯必ず」と約して別れた。たよりもなく日は暮れて「十一月二十六日、夜降りし大雪に、寃汲むべき道もなければまた人顏の見えぬ曙に、丈山竹箒を手づからに、心はありて心なくも、白雪に跡をつけて蹈石のみゆるまでと思ふ折ふし、外面の笹戸を音訪し、嵐の松かなと聞耳立つるに、正しく人聲、」開くれば破紙子一つの小栗某が立つて居た。此の寒空に何として上り給ふと聞けば、約束の一飯食べに罷りしと云ふ。「それよ〴〵と、鐵

に木葉燒き付け、柚味噌ばかりの膳を出せば喰仕廻て、その箸も下に置きあへず、又春までは備前に居て、西行の眺め殊せし瀬戸の暮、唐琴の夕暮、ひるねも京よりは心よし」とて急いで下つて行つた。

飄逸にして活淡なる隱者の風丰が躍如として居る。しかもその奥には、犯し難い道念が熾烈な底力を以て潛んで居る。武家義理物語の如き形式の短篇集には、尤も適切なる題材であると思ふ。然し篇中の過半を占むるは「武道傳來記」一流の物語でかくの如きは、「近代は武士の身持、心の修めやう格別に替れり。むかしは勇を專らにして命を輕く、すこしの鞘とがめなど云ひ募り、無用の喧嘩を取結び、その場にて打果し或ひは打手を切ふせ首尾よく立のくを侍の本意のやうに沙汰せしが、是れ人の道ならず、仔細はその主人、自然の役に立てぬべきために、其身相應の知行を與へ置かれしに、此の恩は外になし自分の事に身をすつるは天理にそむく大惡人、いか程の手柄すればとてこれを高名とはいひ難し」（武家義理物語卷三第一「發明は飄箪より出る」）と云つて居るやうに、嚴密の意味から見れば道義的觀念は稀薄であり、且つ不穩當のものと云はねばならぬ。

論じ來つて吾人は第一印象を取殘して居る。それは取材の時代と云ふことである。既に述べた明智光秀、石川丈山を初め靑砥藤綱の滑川事件、荒木村重や木村重成の臣、織田信長や石田三成の妾などと、史的人物を明記すると共に、東山將軍の時といひ姉川合戰の折といひ、多くは時代をも提示して居る。又明確に記述しないものでも、戰國より江戸開府當初に亙る事が推量せらるゝが多い。

たとへ色讀了解と云ふ事が缺けて居たとは云へ、武道傳來記では當代武士の半面を描かうとして居た。然るに義理物語にあつては、當代を離れて時代を遡つた。これは何を意味するであらうか。もし嚴密なる論斷を許すならば、傳來記の武士も決して當代の社會の實相ではなく、ある尙古的假面を透して見た世相である。かうした武家社會は、一種の想像世界によつて造り上げられた傀儡である。傳來記も義理物語も、要

するに皮相にあらはれた社會現象によつて類推した作り物である。然らば何故に實相に深く突込んで洞察しなかつたかと云へば、作者の素性性格の適不適が、こゝに反映したと云はねばならぬ。換言すれば、武士の心的生活を味ひ得ないと云ふ作者の技能卽ち內的要素と、理想的典型とは遠い當代武士に對する不滿の念、卽ち外的要素と、この二つが合致して過古憧憬、前代惝怳の途上に出て來たのである。この不滿の念とは當代武士が昌平の世に怯れて意氣の銷磨したのを云ふのである。氣節を尙ぶの風が失せて偏へに自利に趨つたのを云ふのである。勇往邁進の氣象が、小利口となり分別臭くなつたのを云ふのである。一言にして云へば、墮落し行く武士に對する嘆聲である。彼は町人の口をかりて、かうも云つて居る。古の武士は鷹揚で町人も大に利を得たが、今の武士は小賢しく利に敏く、町人も大利を得る事ができぬと。かうした現代武士の一面に絕望してその理想鄕を古に求めんとしたのである。然らば義理物語に現はされた戰國の武士は、果して理想的のものであつたかと云ふに決してさうでない。霧に距てられた物象は美しく見える。元龜天正前後に於ける武勳戰功の物語話柄は、時代の距離と共に、如何に詩化され美化されて傳誦せられた事であらう。かくの如く遠く眺めたる世相の幻影に眩惑せられたのが、當時の一般の氣運である。この風潮に影響せられて、西鶴の武家物は常に尊敬同情の眼を以て、その逸事武功を誌さんとし、その結果「武士」なる一階級に對して、抽象的偶像崇拜の色彩を帶ぶるに至つたのである。かくの如くにして西鶴は、武士の節義なるものを充分に了解して居なかつたやうに思はれる。例へば、ある卑賤のものが義に從つて行動する時、いつもその說明としては、條目正しき武家の零落したのとか、或ひは由緖ある士の子孫とか云つて、いかにもそれが磐石の如き根據であるかのやうな口吻を洩すのである。卽ち遺傳と云ふ生物學的原因を唯一のものゝ如く思つて居る。勿論この說明にも論據はあるが、あらゆる場合これでお茶を濁し得るものでもなく、更に一歩進んで云へば、個性は心理的方面より說かねばなるまい。この不徹底な節義に對する觀念は時々馬脚を露はした。

一例を擧ぐれば『申し合せし事も空しき刀』に於て、虐遇せられた二人の仲間が、主人を殺して立退く折、一人が出來心で金を取つて逃げる。それは約束に違ふと互に及傷に及ぶといふ筋がある。此の場合「信」に對する良心は働いて居るが、「忠」に對する大義は麻痺して居る。「さりとは無念、盜人の名をとる事、末代の恥辱なり」と感ずる男に、「用捨も常にかはりて使」はれたゞけで、譯もなく殺人の罪、しかも弑逆の大罪を犯す事が出來るのであらうか。たとへ事實あり得るとしても、武道の義理として擧ぐることは出來ない。かゝる穿き違への武士道は、要するに節義に對する了解の不徹底に歸因する。

以上は武家義理物語の中心思想たる道義的觀念と題材との關係、及びこれを圍繞せる武士的情緒に就て考察を試みたので、他の取殘された諸問題は武家物全體として論じたいと思ふ。

第三節　武家物としての「新可笑記」とその特質

新可笑記の名は直ちに如儡子の可笑記を聯想せしめる。可笑記は寛永十九年に出た假名草子で、諷刺の下に世態のさまゞを寸鐵的に叙述したものである。西鶴のこの作はその題名から見るも、かの可笑記を念頭に置いた事は確かである。而してかれは何の秩序もなく社會百般の出來事を臚列し、これは武家社會にのみ限つて居る。新可笑記五卷二十六話の各條の標題の下に、一々武士は何々の事と小書して居るのは、この消息を洩らして居る。しかしこれは單に皮相の觀察で、その多く描かれた事實は武家特有のものでなく、町人にも百姓にもあり得る事件である。たゞその可能性か武士の場合が多いと云ふに過ぎない。

新可笑記に取扱はれた題材によつて、大體の色調を省察するに、作者はこれに依つて對世間の態度を指示せんとしたのである。卽ち主人公の身分によつて、或は施政方

針となり或は單なる處世法の解説となるのである。『國の掟は智恵の海山』には、武士は發明に惡人しる事とて國司の巡見を語り、『兩方一度に神おろし』の話には、武士は越度も穿鑿の仕やうあて事とて裁判の仕方を説き、『炭燒く火宅の合點』には、武士は道理に命をとる事とる欲心を戒めて居る。又『魂よはひ百日の樂み』では、踏むべき女の道を讃へ、『書置の思案箱』では子に對する洞察を訓へ、『女敵に身替り狐』では武士としての寛濶なる襟度をくと共に、堪忍を本とすべき敎へて居る。この点に於て敎訓物としての色調がかなりに强い。かくの如く新可笑記は、一方武家生活の一面を語ると同時に、武士なるものゝ學識品性に關する涵養と修練とを説く。この敎養も亦先に述べたと同樣、武家にのみ限られたものでない。たゞその可能性が、武士の場合に多いと云ふに過ぎない。

以上擧げたところを綜合するに、この一篇が武家物としての意義は、比較的薄弱と云はねばならぬ。傳來記の仇討や義理物語の節義は、共に武家以外の階級にも認められる緊要なる事項ではあるが、その可能性は武家社會に比べて著しい徑程がある。この點はかの二作が武家物としての强味であり、新可笑記にあつては弱味である。又茲には、前二作を貫流するやうな中心思想がない。たゞ普遍的に必要なと思はるゝ、處世法に關するくさ〳〵の說話が雜然と配列せられて居るのみである。從つて思想の不統一が甚しく目に立つ。この思想の不統一と云ふ事は、かゝる短篇集の價値を傷けるものではない。むしろ一面から見れば變化があつて、倦怠を來さしめない効果がある。しかしこの効果あるべき變化は、この篇に於ては却つて雜駁の譏りを免れまい。

元來、隨筆體なる可笑記の遺鉢を享けた作品として、その取材に端睨すべからざるものゝあるのは當然ではあるが、添書に「武士は何々の事」と各說話を同一点に集中せしめやうと計つた形式から見て、こゝに矛盾があり撞着がある。卽ち全然廣く題材を社會現象に求めて、武家の天地に跼蹐する事なきか、然らざれば中心を圍繞する武家的色彩を一層强烈たらしむべきかであつたらう。このどちらつかずの方便が、全篇

の不醇と弛緩とを喚起したのである。

新可笑記の筆を擱くに當つて、猶省略すべからざる一條がある。それは全篇に瀰漫せる支那臭味である。好色本や他の武家物に於ても、一二の支那故事の引用は認められたが、それは洵に曉天の星宿であつた。然るに可笑記にあつては、單なる人名の羅列、故事の引用に止まらず、説話そのものに或は支那稗史の翻案ではないかと疑はるものさへある。これは充分新可笑記の特賣として明記すべき事項である事と思ふ。

具體的にその實例を示せば『一つ卷物兩家にあり』の章、及び『胸するゑし連判の座』の章に押入せられたる二三行の漢文は、西鶴從來の作品を見た眼には、先づ甚だ奇異の思を抱かせる。次で孟子莊子或は伍子胥の語句を引用せるのも、何となく柄にないとの感が起る。『死出の旅行約束の馬』には、東方朔の逸事と季札が劍の故事とを偲ばせ、『官女の人しらぬ炙所』には吳道子の話が思出される。猶『中にぶらりと俄年寄に』は高樓の扁額を書いて恐怖のために白髮になつた韋誕を、『取やりなしに天下德政』には二十四孝の郭巨を、又『船路の難義』には長明子が聯想される。而して作者自身も多くは、「かゝるためし唐土にも」とて啓示して居る。その他、還魂、離魂、夢の奇瑞も亦純粹の日本畑のものでない。文章に於ても以前の作品に此して著しく漢臭が認められる、「夫れ天地は萬物の逆旅、光陰は百代の過客」の如き成語はその一例である。

詮ずるに新可笑記一篇は、創作過程に於て既に不純の色調を呈し且つ內容形式と共に洗練の不足を物語つて居ると云はねばならぬ。

第四節　武家物の對象と西鶴の人生觀照

武家物の對象世界が、武士階級なる事は云ふまでもない。而して武士生活に於ける、智情意の確執と齟齬とによつて惹起せらるゝ仇討、及び武家思想の中心たる道義的觀念に就ては、もはや言ふを要しない。こゝには、豪快殺伐なる一面と、優柔不斷の他面とのディレンマに立つて、性格分裂の悲哀を痛切に味はつて一世界を眺めたいと

思ふ。西鶴の描いたのは、とりも直さずこゝに喘ぐ一群の武士であつた。

かゝる世界を最も明白に暴露したものは、念友關係に於けるそれである。質朴粗野を以て鳴る戰國武士が、この不倫的行爲は、たとへ人性上必然の要求に迫られたとは云へ、猶そこに頽廢的氣分を認めぬわけにはゆかない。まして元和偃武以後、世の太平につれて長劍の重きを嘆つ悠々たる元祿武士にあつては、既に世紀末の墮落沈滯を思はずには居られない。彼等の多くが、この不自然な情炎にかられては、國を忘れ君を忘れ、たゞ一片の性的衝動のために左右せらるゝが如く觀取せられる。しかも多くの場合、第三者の出現によつて、こゝに血腥い慘劇が演ぜられるのである。かの念友以外の感情衝突の問題の大多數も、亦些末瑣事の錯誤に基いて居る。かゝる社會現象は、果して錬磨せられた武士の情操の發露として、許容する事が出來るであらうか。吾人はむしろこゝに頽ちゆく武道こそ認め得るが、讃美すべき何物をも攫取し得ないのである。而して作者は、これに對して加何なる批判を下して居るかと云ふに、その創作的態度は物語る。これ義であり勇であり、はた意氣地であると。然れどもかゝる人生肯定は、常に自利我欲の影がつきまとふ。從つて彼等の所謂義も勇も意氣地も、極めて狹義なもので、人間活動の第一義と相去ること甚だ遠い。むしろ穿きちがへの義であり勇であり意氣地である。西鶴の武家物なるものゝ中心思想は、道義そのものを核心として居るから、この點を離れて論ずる事は不當であるが、今かりに道義の礎から離れて考へても、そこに眞の武士らしい面影は見られない。人は、唯だ花やかな仇討果合と云ふ場面に眩惑せらるゝなみで、深刻な人生味は認め得ない。むしろ因襲的法則に囚はれた趣味好尚の上にのみ活きる武士を見出すに過ぎない。此法則が生々しい人生の姿を假面せしめ扮裝せしめる。從つてそこに現はれる世界は、典型化せられたる假裝の世界である。舞臺に於ける、きつたりはつたりと大差のないものである。卽ち作者の洞觀は、この形式を傳ふるのみで、中味を赤裸々に提示する事は出來なかつた。こゝに幻影湮滅の悲哀がある。西鶴が武家に遠いのは、これによつて

も推し得られると思ふ。

西鶴の描いた念友關係は、更に買色的關係に墮して居る、卽ち若衆問題となつて、好色本の範圍に蹈みこんだ。この消息は男色大鑑が鮮明に語つて居る如く、常時の社現象たると共に、作者一流の卑俗趣味の暴露である。この點は、木登して隣家の祕密を覗き（傳來記卷四「無分別は見越の木登」）、姫君を守護する老士が風雨の夜、亂れ心になり（義理物語、卷「六表向は夫婦の中垣」）、或は仇討に出てたる者が遊廓に入浸つて刹那の戀に惑溺する（傳來記卷一「毒藥は箱入の命」）等、に見える如く、女色に關する記述と共に作者の惡癖が、この方面にも入込んで居る。且、彼の描く戀の場面は、武家物にあつても、悉く不義密通であつて、深窓の淑女も宛然たるうき河竹の流の女と、何等の徑程が認められない。（「思入吹く女尺」での契の場合はその一例である）かくの如き極端なる頽廢的情調は、偶々以て作者が武家方面の不適を示すと共に、凡ての對象を同一視する不明を語るものである。

現代謳歌とは、西鶴が人生觀照のモットーである。町人を眺め、遊里を觀る眼は、凡てこれであつた。而して武家を洞察するに當つても、平民社會と覗いた時と同じ色硝子が嵌つて居た。たゞこゝでは對象が異つたために、赤裸々の姿が彼の網膜の上に落ちて來なかつた。武家物の上に翳す陰影はこれである。彼は更に歷史の絲を辿つて、現代から離れようとした。その結果、多く取扱はれて居るは戰國及び幕初時代の逸話である。卽ち現代の武家の皮相のみを見て、その眞相を的確に把握し得なかつた彼は、前代憧憬の領域に蹈込んだのである。凡てが直下の觀察でなく眞髓の解剖でない。先きに指摘した如く作者の素性閲歷が、この方面の活躍を免さなかつたので、武家物作家としての西鶴の弱味はこゝに在る。

今これを具體的に說明せんとするならば、新可笑記に現はれた武士の心得とも云ふべき一條を見よう。

古は武士の身は何處を往家と定め難し。自分の事人の事にも義理の一命を捨つるも習ひそか

し。主人の御役にたち武家仕極の事に命を果つるも毛頭悔むにあらず。或は親類の禍、相役又は傍輩の中に是非もなき一味、少しの事に身を捨るなどさりとは口惜しき仕合、一分の理立難く其家を失ひける。その身分相應の所領を預り、我の事に命を果すは木石同事の心底なり。其働き勝れ相手大勢を討つて何の高名に成り難し。誠は自分の意趣堪忍して、主命の時進むを侍の本意と云へり。（四ノ三市にまぎるゝ男）

この引用に於て、一應武家なるものを了解して居る樣であるが、概念と心髓との間には幾多の距てがある。侍の本意なるものゝ假象は、模索し得たとしても、本體を攫む事は出來ない。果然、彼は所謂「木石同事の心底」のみを描いて武家の眞相の如く思つて居る。

これに反して、その女房氣質を敍するや、同じ抽象的敍述とは云へ頗る鮮明である。

惣じて女、世に有る時はその夫が心に隨ひ、姑にも恐れて孝をつくし、永く緣ある事を祈り萬の始末も心から大事にかけ、人にもよきといはれたき嗜み、下部に惡く當らず、世の業に油斷もさせず、朝疾く起きて髪結ふ形を見せず、夜の行水暗きを恐れ、夫の疑を休めぬ。女かく身を持つからは自然共家を調ひける。身代薄くなりては、男に殿もつけず、世の稼きをやめて下女と爭ひ、長寢のために病を作り、五節句にも髪頭を亂し、揃へる皿を九枚になし、諸道具手荒く、大黑柱にはぐろ吹掛け、敷居におしあて炙はしを削り、腰はりまくつて糸屑を包み、接木の初咲を用捨なく手折り、書院の軒端は洗濯物の竿もたせとなし、とても人の物となる賣家と住荒し、肴掛のするめも煎し茶の菓子に引裂き、何もなければその通りに朔日二十八日も精進して佛棚も書き出しの置所もなし、內證より其家を潰しぬ。

徵に入り細に亙り、迂餘曲折をつくして女性心理に突込んで居る。この兩者を比較すれば、彼の長所が那邊に存するか思半ばに過ぐるものがあらう。しかしこの場面は核心に對して不調和たるを免れないのは勿論である。

武家物を終るに當つて、猶その一特質として擧ぐべきは超自然分子である。この方面は、現實的色彩を以て一貫せる好色本にも散見したところで、その際吾人は當時の

百物語系統の影響なる事を指示して置いた。而して武家物にあつては、種々の奇怪事がかなりに多く取扱はれて居る。

今これを一々擧ぐるにも及ぶまい。化物屋敷に於ける妖怪退治、迷執の晴れやらぬ亡靈の姿を初め、夢の助太刀、戀がさせる離魂病。人魚も出れば百足も出る。西鶴が五人女卷二の冒頭に誌した。

天滿に七つの化物あり。大鏡寺前の傘火、神明の手なし兒、曾根崎逆女、十一丁目首しめ縄、川崎の泣坊主、池田町のわらひ猫、鶯塚の燃からうす、これ皆年をかさねし狐狸の業ぞかし。世に恐ろしきは人間化けて命をとれり。

の如き程度の不可思議の話柄は、それ〴〵の説話構成の中樞となつて居る。

西鶴は果して超自然に就て深い信念を抱懷して居たであらうか、またこの迷信に沈湎しないまでも、これに對して饒かな趣味を有して居たであらうか。想ふに彼にはこの信念も趣味もなかつたらしい。たゞ幽靈は出るだらう、狐狸は化けるものだらうと漫然と感じて居た位の程度であつたと思はれる。故にその創作中の超自然もたゞ摸倣であり蹈襲である。卽ち他の作家作物に現はれたものを、樣によつて胡盧を描いたに過ぎない。さればいづれも支那稗史の系統をひく御伽婢子（淺井了意著、寛文六年刊）一流の妖怪變化であつて、何等創意は求められぬ。

しかし御伽婢子が讀書圈に旋風を捲き起してから二十年、その末流は浮世草子以外に、勢力ある創作界の一現象として存在した、この百物語系妖怪談に於ける超自然分子は決して忽諸にすべからざるものがあつた。

武家生活と超自然！。この兩者を結びつけてその關聯に思ひ至る時、吾人の腦裏には直ちに、後の讀本の特質が閃くのを覺える。かく考ふれば文藝の道と作家の心とに絡む、人しれぬ因果の絲の微妙さを、今更感せずには居られない。

第五章　西鶴の創作　(三)町人物

好色物から武家物に移つた西鶴の筆は、再び町人物に移つた。しかしこの推移は全くの異境を開拓しようとしたものではなく、むしろもとの畑に歸つて來たのである。その故は町人物なるものが元來好色本と共に當代町人の全生活を成す、謂はゞ楯の兩面であつたからである。この町人の二面生活の意義に關しては、節を改めて說くところがあらう。

蠶つて武家物と町人物とを並べ、更に作者を添へて考ふる時、西鶴がよく自己の本領を了解して居た事を思はずには居られない。彼が武家物に臨むや凡てが傍觀的態度であつた。人種階級の差別が嚴然として存在する世にあつては、二本差の世界に素町人の覬覦は絕對的に免されなかつた。禁制の山は聳え立つて、高嶺の消息は雲の彼方にあつた。平民は武士の優越を讃美する事は出來たが、その境地を蹈む事は不可能であつた。從つて、その墮落頽廢を認めても、悲憤して積弊の打破を絕叫するやうな事は夢にも考へ及ばない。たゞ武士に對しては絕對の服從と仰望とがあるのみである。その內的生活から云へば、殆んど風馬牛の異つた世界に住む人類であつた。然るに、町人の世界を見た西鶴の態度は、全然これと選を異にして居る。こゝは自己の世界である。活々とした現實である。眼前にちら〳〵する凡ての人間は、同じ空氣の下に生息して居る。興味はこれに伴ひ實行が後に隨つて行く。作者は此世界に入浸つて、その情意の活働を十分に汲みとる事が出來たのである。心臟の鼓動を同じくする程、密接な抵觸はない。元祿町人の胸の響きは、西鶴の最もよく了解し得たところである。然らば彼の作品は如何なる色調を吾人に呈するであらうか。

町人物として彼の述作は、日本永代藏(元祿元年)、世間胸算用(元祿五年)及び西鶴歿後の出版にかゝる織留(元祿七年)の三篇である。このうち最後の織留は、門人團水の編にかゝるもので、着想文章共に凡ならず正しく西鶴の遺作と云はれて居る。且純然

たる町人物としては冒頭の二卷本朝町人鑑と題するものゝみで後の四卷は世の人心と題して一般の世態人情を描いたものである。

第一節　「日本永代藏」に現はれたる町人の處世法

峻嚴なる階級制度の下に壓伏せられて、しかもその地位に滿足して居たのが當代町人の一般狀態であつた。彼等の中にはたとへ武士の壓迫と掣肘とに多少の不滿と憤慨とを感ずる者があつたにせよ、現狀折破を絶叫するには餘りは無力であつた。絶對的權威を武士に認めた彼等は、更に自己の進むべき路を他に求めた。彼等は社會制度の改革に憧憬する代りに、町人としての出世、卽ち分限者たらむ事を熱望した。これが町人生活に於ける絶大の欣求であつた。日本永代藏の二十六話も、商機の利鈍を說き貧富の流轉を語つて居るが、要するに長者分限に向つての處世法に外ならない。失脚して師走に紙子を着る者も、時を得て千兩箱を並べる者も、所詮は町人としての處世方策の當否如何によるのである。

『煎じやう常とは變る間藥』（卷三第一話）に於ける長者丸の處方は、まさしく當代町人の理想鄕たる分限に到達する指針である。

△朝起五兩△家職二十兩△夜詰八兩△始末十兩△達者七兩

此五十兩を細にして胸算用秤目の違ひなきやうに手合せ念を入れ、是を朝夕呑込むからは長者にならざると云ふ事なし、然れども是には大事の毒斷あり。

○美食●淫亂●絹物の不斷着○內儀の乘物●全盛娘に琴●歌がるた○男子に萬の打囃子○鞠●揚弓●香會●連俳○座敷●普譜●茶湯●數奇○花見●舟遊び●日風呂入○夜歩行●博奕●碁●雙六○町人の居合兵法○物參詣●後生心○諸事の扱請判○新田の訴訟事●金山の仲間入○食酒●蓑好●心當なしの京上り○勸進相撲の銀本●奉加帳の肝入○家業の外の小細工●金の放目貫○役者に見知られ揚屋の近好○八より高い揚錢。

先この通りを班猫批霜石より怖ろしく口にて云ふも偖置、心に思ふ事勿れ。

われ〳〵はこれに依つた時代の觀念を大凡推察し得ると共に、蓄財の經濟的意義を了解して居なかつた事にも想倒し得るのである。唯溜める貯へるの一點張である。貨殖の道とは千兩箱と家藏との數量そのものゝ如く感じて居る。家職の大切なるを敎へ始末大明神の宣託と崇めたのは、此消極的方針の蓄財主義を標榜したのに外ならない。財政と金融との關係によつて生ずる諸問題とは全く風馬牛である。此ためこみ一方の處世法には悠々たる世相の一面が覗はれる。せつぱ迫つた生きんとする努力でなくして、たゞ分限たらんとする望み、卽ち財欲の上に築かれた望蜀的努力である。

かるゝ蓄積主義が處世法の一大信條のやうに描かれて居るが、紛糾した幕初のどさくさまぎれに一攫千金を贏ち得た成金の所作は、秩序整齊の途についた元祿の世に見出す事は出來ない。さりとて守成的儉約と云ふ消極的方針によつてその目的を達する事は不可能である。こゝに於て新事業新發明の積極的方針によらねはならぬ破目となつた。西鶴が繰返して云ふ「才覺」とは、此難關に處して蓄財の本旨を明らかにする唯一方策であつた。然らば才覺とは何う云ふ意義かと云ふに、よく人情風俗を了解するのである。人心の推移と社會の風尙とを明察する事である。相場の上下は勿論、天變地異に對しても豫知を有するのである。要するに知識技能の上に鋭敏なる觀察力と明確なる判斷力とを供へ、常に社會から一歩進まんとする努力そのものを云ふに外ならない。

永代藏に現はれた分限長者と呼ばるゝものは程度の差こそあれ、幾分なりともこの「才覺」を有した者である。藏前のこぼれ米を拾ひ集めて身代を興した女も、當座帳に迅速な商賣振を見せた三井(三越の先祖)も、死犬を黑燒にして肝の藥と賣歩いた男も、等しく彼の所謂才覺であつた。又若者二三人が、町内で評判の才覺爺の許へ身過の方法を聽きに行つたところ、いろ〳〵御談議の末

　　偖宵から今まで各々喞し玉へば最早や夜食の出づべき所なり。出さぬが長者に成る心なり。最前の摺鉢の音は大福帳の上紙に引く糊を摺らしたと云はれし(第二卷、世界の借家大將)

の如き、ある家の養子が舅姑の樂隱居するのをすゝめて

まづ夫婦衆は今日より毎談義ある寺詣りし玉へ、其下向に納所坊主に近より散錢ある程買ひ玉へ、世帶佛法二つの德あり、供の丁稚は道の間の外聞なれば浮世山椒をうけて小袋に入れ、法談の初まらぬ先に諸人の眠りをさましてこれを賣るべし、偖又供づれぬ參り衆の笠杖草履を談義はつるまで一錢づゝに預かれ云々（第六卷、見立養子が利發）

と云ふ。これらはいづれも商人の心機を穿つたものである。かくの如く、或ひは勤儉節約を生命として粒々として仕上げて行き、或は目から鼻へ拔ける機敏を以て巧妙に立廻つてゆく。

これらを一面として猶、他の一面がある。それは目的に邁進せんとするの極、目的のために手段を選ばない、經濟界に於けるマキアベリズムが描かれて居る常である。これは商業道德の發達しない時代にはあり勝ちの事で、現代にあつてもむしろ家事茶飯事として認められて居る。まして此觀念の幼稚な頃とて、西鶴は少からず此方面に深刻な穿ちを行つて居る。

例へば、菊屋と云ふ男、多くもない身代でありながら、初瀨の觀音の開帳を三度まで坊主共を籠絡し、遂にその戸帳を得て茶入の袋、表道具切に賣拂つて莫大の金をもうけ（世はぬき取の觀音の眼）、惠比須樣の風體して朝茶の店を始め大當りを取つた男、つい蓄財をあせり、茶の煎殼を買集めこれを交へて賣廣める（茶の十德も一度に皆）。而して前者は惡錢身につかず、元の杢阿彌となり、後者は天罰で狂死する。西鶴が此場合、かゝる後日談を添へたのは一方敎訓的意義に掛念した結果と思はれる。しかし大體としての情趣は、かうした商業上の掛引、才氣に多大の趣味と同情とを持つた點にあるので、勸懲的氣分は單なるつけたりの如く感ぜられる。作者自身の嗜好風尙が、その說話の上に最もよく現はれて居るのは『心を壘込む古筆屏風』の一篇であらう。

筑前國博多に住みなす金屋とか云ふ人が海上の不仕合、一年に三度までの大風に逢

つて商品を藻屑とし、召使には悉く暇出して、その日暮しの詫しい生活をして居た。ある日「見越の大竹より杉の梢に、蜘蛛の絲筋はへて、これを渡れば嵐に切られて中程よりその身も落ちて命も危かりしに、又も絲かけて傳へば切れ、三度まで難義に逢ひしに、終に四度目に渡り終せて間もなく蜘蛛の家を作りて、飛蚊のこれに懸るを己が食物にして猶々絲を繰返す」を見て、奮起して家藏を賣拂ひ長崎に下つた。しかし思通りにもならず「はかどらぬ算用捨てわざくれ心に」なつて丸山の遊女町に行き、逢初めたが、ふと枕屏風に目をとめ、「わけて定家の小倉色紙名物記に入りたる外六枚、見る程時代正筆に疑ひなし」とてこゝに欲心起り、この魂膽によつて明暮通ひ遂に貰ひ受け、上方に急ぎ上つてさる大名に獻上し、大分の金子申請けて大分限となつた。かの遊女はうけ出して願ひの男に緣づけてやつた。

この筋書の示す如く前半の蜘蛛はかのスコットランドの勇將の決意を聯想する題材であるが、それはともかく、一旦決心して鄕を離れ、遠大の希望を以て、當時般富の海市、長崎に出掛けるあたりは如何なる才覺で如何樣な大活動をなすかと刮目して俟たるゝところである。然るに一轉しては、すぐ自暴自棄となつて遊女狂を初め、再轉しては、詐欺的行爲を遂行する。永代藏が純敎訓物として取扱にくいのは、かう云ふ點にある。もしそれ最後の粹な仕打に至つては、作者自身の嬉びそうな事實である。

かくの如く、永代藏に現はれた處世法は、所謂「才覺」を中心とする商人の活舞臺である。長者になる心得を說き、世渡りのざま〳〵を描き、さては掛乞の仕方や借錢宿の魂膽を語るのも、一にこの才覺によつて蓄財の目標に邁進する道程の背景であり餘色である。從つてたとへ道念に抵觸するところがあつても、甚だ寬恕な態度を以て眺めて居る。この點は永代藏の把握せる極めて廣義な意味での敎訓、卽ち町人の處世上必要なる方策、たゞこれだけの意義を指示するものに過ぎないのである。

しかし中には、眞率にして謹直なる敎訓も絕無ではない。ある夜更、酢屋の門口を叩くものがある、下男が眼を覺して何用と聞けば、一文がところ酢をと云ふ。そこで

空寝入して了つた。翌朝主人がその下男に門口を三尺計り掘れと命ずる。不思議に思ひながら汗水になつて掘ると、錢がある筈だがないかと問はれる。「小石貝殻より何も見えませぬと申す。それ程にしても錢が一文もない事、よく心得て重ねて一文商ひも大事にせよ」と戒めた。又、伊勢海老、橙の高價なる年、「高直なる物買整へて是を飾る事何の益なし、天照大神も咎めさせ給ふまじ」とて車海老と九年母にてすまじ、「民家の女は琴の代りに眞綿を引き、伽羅の煙よりは薪の燃さしをばさしくべたるがよし」と云ひ、或は「隨分世渡りに粗略をする事勿れ、或長者の言に欲しきものを思はず、惜しきものを賣れとぞ、此心の如く稼ぎて奢のやむればよきに極る事なり、されば商ひの心ざしは根を收めて太く持つこと肝要なり」と諭す。さりながらこの教訓も、亦道念を基調とするものでなく細心なる實用的處世法に過ぎぬもので、西鶴が絶えず繰返す信條であり、且不易の箴言である。

然らばこの蓄財的努力を續けてゆく最後の目的は何であるか。これ富貴に憧るゝ念と、更に富貴によつて歡樂を克ち得んとする心に外ならぬ。換言すれば町人としての理想に到達した後は、好色の世界に遊ばんとするのである。即ち町人の二面生活を味得せんとするのである。かゝる理想境に進む徑路としてある點までは、ためこみ主義となり更に一轉して享樂のための散財となるのである。この間に財界の流轉と榮枯とが走馬燈の如く幻影を投げる。西鶴の町人物は、この世界の諸相を取扱つたものである。但し二面生活の道程と意義とに就ては、猶、後節に述べねばならぬ。

要するに、日本永代藏の中心基調は、實用的處世法の解說にある。具體的例證を以て才覺を敎へ、分限に至る方策を說いたのである。而して敎訓的色彩の全幅に滲透せるのは、この作品の本質が然らしめたのに外ならない。

第二節　「世間胸算用」に於ける町人生活の一面

世間胸算用を一貫するは大晦日を背景とする町人生活の一面である。この生活態狀

は自ら二樣の風趣を呈して居る、卽ち一は利發才覺によつて悠々たる年越をなし、一は福の神との緣が薄くて遺繰算段に眼玉を白黑させて居る。而してその取材の分量から云へば殆んど後者に屬するもので、或は生活難を訴ふる嘆き話となり、或は掛乞を追ひ歸す魂膽となるのである。

第一に擧げた利發才覺による蓄財家の大晦日は、一方から見れば吝嗇强慾の結果である。從つてその因果關係に何等かの破綻を生ずる時、一種の哄笑を喚起する。借金の催促するに方策が盡き、ある男の知慧をかりて、やつと返濟を得た老爺、知慧袋の男に御禮するとて「その時は紬一匹と申せしがこれにて御勘忍あれと白石の紙子二枚出して中綿は春の事」と云ひすてゝ歸つた話（銀一匁の講中。）又伊勢蝦一つが四匁五分と云ふ年の春、主人が紅絹を張拔にして海老を作り、二匁半で出來たと得意になつて居る處へ、此の家隱居九十二の媼さまが、此月の中頃に四匁で二つ買つて置いたとて出される。皆感心したが「二つは奢つた事と云へば、こちは當所のない事は致さぬ、定まつて午蒡五把、太ければ三把くれる人がある。それ程の物を返す」に、これ一つやれば得がゆくと云はれる。その上、親子でも算用合は屹度したがよい、その海老欲しくば五把持たして取りに來いとの事であつた（伊勢海者は春の紅葉）。この種のものは他にも見られるが例はこの位にして置く。誇張の痕もあるけれど此金錢に執する心持はとりも直さず分限者たるの修業であつて、世人のやきもきする大晦日に平然たり得る素因となる。作者がかく誇大の蔭にかくれ、滑稽の色調を交へながら、町人の處世要訣を說いて居るのは永代藏に於けると同一程度の敎訓味が覗はれる。

次に生活難を訴ふるものを眺めると、これはまた千差萬別である。擊壤壤腹の大御代と見える元祿の世相にも、この慘めな聲が聞かれる。「古き傘一本、綿繰一つ、茶釜一つ、かれこれ三色」で銀一匁借りてゆくのもあれば、「木綿頭巾、蓋なしの小重箱、五合桝、湊燒の盃、箒一つ」何かかや取交せ二十三品で一匁六分借りるのもあり、さては梨地の長刀の鞘一つに錢三百米二升强請する。小質屋の店先から見たさま〳〵の

年の暮はこれである。又師走二十九日伏見の下り舟に乘合の繰言を聞けば、いづれも變らぬ身過話。毎年姨に無心して居たに當暮はならぬと斷はれ、當の外れてぼんやりした男。四條の踊子に弟を賣らうとしたが、耳が小さいとて本子（ほんこ）にならぬとて、すごゝ〳〵戻る人。先年日蓮上人の筆蹟を所望されても賣らなかつたが、今年は金が入るので望みの人に持つて行けば、いつの間にか淨土宗になつて居て思わく違ひしたと一人云へば、前の男は、畫の中は寺社の繪馬を見て暮さうが、夜に入つて行く所もないと泣く。悉くさし迫つての嘆き話に滿されて居る。更に夜市の樣子を覗けば、こゝも亦大方は行きどころのない借錢負の顏色ばかりで、せり出す品々も「今宵になつて賣る程のもの、よくよくの事」と思はれる。これら貧困に陷つた原因を考ふるに、近代の痼疾たる物質的文明の壓迫とか、依つて起る貧富の懸隔とか云ふ根柢の深いものでなく、たゞ贅澤、放縱、怠惰、暢氣（のんき）と云ふが如き、所謂無才覺に起因するもの計りである。換言すれば、各自の勤勞努力によつて十分に免れ得べき性質のものである。

この生活難に關聯して一年の總仕舞のやりくりのつかぬ折、掛乞に對する方策は切實なる焦眉の問題であつた。西鶴の見た町人は如何にこの難關を突破したか。

或者はお茶屋に逃げ込んで酒に入浸つて居た。或者は狐憑の眞似をして貸方を追放つた。更に辛辣なのは納戸に隱れ、女房にもう歸る頃と云はせて居る中、豫め狂言を仕組んで置いた丁稚に飛込ませ、「旦那樣は筋松の中程にて大男が四五人にて松の中に引入み命が惜しくばと云ふ聲を聞き捨てにして逃げて歸りました」と云はせ、懸乞を欺くのがあれば、又「大晦日の入替り男」とて互に昵懇な亭主が入替つて留守とし、借錢乞の來る時を見計つてその家の女房に「御内儀、私の銀は外の買懸りとは違ひます、亭主の腸をくり出して埒を明くる」と云つて、まんまと懸乞の眞似をする。ほんとの懸乞共は之では中々濟みさうもないと諦めて歸るのである。これらは窮すれば通ずの非常手段で、いづれこれに類した窮策が弄せられた事であらう。從つて懸乞の方でも此猾手段にうかとは乘らず、門口の柱を大槌で打外して持つてゆくなど一層高飛車に

出るのもある。

要するに胸算用の一篇は、大晦日の夜を頂點として借方も貸方も智慧袋絞つての惡戰苦鬪を記錄したもので、町人生活の裏面を闡明する照魔鏡である。而してこゝに描かれた世相を裏返して見れば貨殖の路への指針である。卽ち永代藏をひつくり返せば直ちに胸算用となるのである。

飜つて胸算用一篇の構成を見るに、結構を無視する點に於て、他の諸作以上に其特質が著しくなつて居る。例へば一個の物語の中に核心的說話と思はるゝもの以外、或は斷片的叙述が配列され、或は插話の多くが入込んで居る。『餅花は年の內の眺め』の章をとつて見るに、先づ拂方の變遷を述べ、當世手代氣質を說き、漸く忠六なる者の話を持出して居る。又『奈良の庭竈』には蛸賣八助の話から一轉して、京の富大阪の厄拂三ヶ日の賣物を叙し、再轉して奈良の晒布の事から牢人强盜の話に終る。たゞ聯想によつて次々と現はれて來る處は、所謂連歌式で西鶴特有のものである。然し胸算用の長所はこの種のものになく、全く布置を有たぬ說話、卽ちある中心を點出してそれを圍繞する世界を叙したものであると思ふ。かの質屋から見た貧民生活、下り舟の世間話、夜市の狀況を初め、手習師匠から眺めた小供の才覺のいろ〳〵等は、町人生活を描き出す點に於て、鮮明なる印象の下に當代世相の一端を最もよく髣髴せしめて居る。

第三節　「本朝町人鑑」の主調

本朝町人鑑二卷九話はいづれも「機會」を覘つて居る。而して第一卷と第二卷とには、明らかに區劃が認めらる。卽ち第一卷に現はれた裝機は現實生活上、鋭敏な觀察と細心な用意とによつて、寄せては再び歸らぬ刹那的の機會を、迅速に捕捉して逃さぬ所にある。『品玉とる種の松茸』の主人公は七轉び八起きのせち辛い世の鹽に揉まれたが、「ある時宵に燒きたる鍋の下に、朝まで火の殘りし事、これは不思議と燒草に氣をつけ見しに、茄子の木犬蓼の灰故に火の消えぬ事」を知り、こゝに懷爐と云ふ物を

仕出して何萬兩とも藏入の奥は知らぬ身となつた。これは唯だ機會の前額に、垂れ下る髪をよく捕へ得たのである。緻密な省察によつて至るところに存在する事實を敏捷に活用したのである。又『所は近江蚊張女才覺』の内儀が、その初め米商賣せる折、わづか一升買する程の貧者には、利德かまはず斗よくして手廣う見せた。これがために評判とつて繁昌を克ち得、遂に分限の域に入り、近江蚊張の大商賈となつた。前者とはその道程に差異があるが、根柢に於ては同じく商機を見るの明があつたのである。これに反して、『古帳よりは十八人口』に於ける塗物屋は、親の代と比較して收入が激增して居るに拘らず、その家計が甚だ振はぬ。これは家政上の細心の用意と鋭敏なる觀察とに缺陷があつたゝめである。先代と當代との萬事に就て對比しつゝ、恂々として說く老母の繰言は、とりも直さず處世上一般の法策であり、現實生活に對する作者が峻烈なる批判である。

第二卷に入る、とこの機會なるものに異つた調子が加つて居る。卽ちいづれも偶發的事件としての色彩が强烈になつて居る。一家夜逃せんとする折、助けた猿が口中から虎のかたし目貫を吐出したゝめに、身代を特直した『保津川の流、山崎の長者』。物詣の途中ある少娘が、母を養ふたよりとて差出す絹を不愍と思つて買とつたが、それは唐織と云ふ珍寶であつた。賣主を尋ねても分らず、それより運が向いた『五日歸りにおふくろの異見』の後半。又ある鹽商人が踊の覗見した歸りがけ、百二十兩入の財布を拾ひ、落し主のさる手代に渡し、御禮として差出した五兩を「それはそなたの金子にあらず主人の物、我に分けらるゝ故なし」とて見向きもせず、手代は後から定まつて鹽二斗づゝ買つたので、だん〳〵仕合つゞきになつた『鹽賣のらくすけ』の話。いづれも慈悲、正直などの善根の應報として描かれて居る。こゝに於て比較的露骨な敎晦の意味が現はれて來た。

更にこゝに動く商人の群を眺めて見ると、大雪の日に大釜の湯を沸して我門の雪を消したので、店に買よるもの山をなして、一日に五十兩あまりの當座賣した『物當流の

すき』の江戸の小川屋があり、「寢てからは五文十文がのは賣らぬ」とその聲を聞いて、五文の餅賣らぬからは商事あり餘ると見えた、此處かせきて見たき湊と思ひつく大阪のさる町人がある。又、二人の手代を分家さして、その一人が十年經つても、分けぶんの二百貫より延びないので、多くの者が譏るのを、年寄や年頃の娘を持つた彼が、あれだけに持ちこたへて居るのはよく〳〵えらいのだと道理をわけて衆愚を戒めた『今の世の楠木分限』の主人がある。これらもまたある機會を把持して、これに留意し研精し細緻なる心づかひの下に、活き甲斐ある生を送らんとする努力そのものである。

要するに町人鑑は、商賈として一日も忽諸にすべからざる必要條件を體得し、現滅定めない機會を敏活に把握して、最後の目的たる長者分限に到達した實証をあげ、以て保導訓誡の資に供せんとした教訓的色彩の著しい作品である。

第四節　「生」の欣求と二面生活

公家は敷島の道武士は弓馬、町人は算用細かに針口の違はぬやうに手まめに當座帳付べし。（永代藏、卷四）

町人の理想は貨殖にある、百萬長者となつて自らの分野を獨占せんとするにある。時代の拘束は彼等をして知識階級に入るを免さなかつた。出でゝは街上に素町人なる罵聲を浴せられ、入つては店肆に叩頭して萬客に媚を呈す。彼等の住む世界はせち辛い世界であつた。不平不滿を訴ふる術を知らない彼等は、自らその自由鄕を開拓しやうとした。かくて算盤は放すべからざるたづきとなり、金錢はその全生命となつた。高級な現實生活の覬覦を免されなかつた彼等が、相率ゐて物欲に趨つたのは無理もない。彼等の多くは刹那の歡樂を追求して遊里に沈湎した。而して此享樂を恣にせんがためには、何はさて措き阿堵物が必要となつて來る。當代の一面を見るに幕初の平和

的事業として土木、建築、交通運輸が急激に着手せられ、所謂一代分限なる成金が多く現はれた。金持の子弟にどら息子が出來るのは天下の通則である。彼等成金の家の子も亦此類例に洩れなかつた。その思ひ切つた遊び振りは時代の子が羨望の的となつた。皆富豪憧憬と歡樂追求とは相關聯して町人の理想鄕たる二面生活の欲求を物語るものであつた。彼れはこれに依つて「生」を樂しまう、生活を豐富にしうよとする欣求の一念を飽滿せしめんとした。

ある年の秋、京勸進能の見物に、

銀十枚の棧敷を二軒とりて猩々皮の敷物道具置の棚をつらせ、腰屏風枕箱、其後の料理の間さまゞの魚鳥髭籠に折節の水菓子、次の棧敷に風爐釜を仕掛け割蓋の杉手桶に宇治橋音羽川と書附して並べ、醫者、呉服屋、儒者、唐物屋、連歌師など入交り、其後ろの方には島原の揚屋四條の子供宿、都に知られた末社、按摩取、兵法遣の浪人まで控へたり。棧敷の下は供駕籠、假湯殿、假雪隱何にても不自由なる事一つもなきやうに拵らへ榮花なる見物、此心何となく豐なり。（胸算用、巻三）

の豪奢は、當代町人が窮寐にも忘れ得ない理想の天國であつた。たとへこれ程のたゞら遊びは出來ないにしても、少しの儲目が見えると直ちに「その身は安樂にして物見、花見、女郎狂ひも相應」にするのである。又親方がゝりの手代すら「一日千金の色遊び、十分請取る銀あればその内に不足を拵へ、或は小判のしかけ、又は銀子請取掛を内では錢遣うて歸るなど」の私曲は朝飯前の事であつた。低級な彼等が情意の自由に任せて、われ先と趨る巷は此處であつた。町人の多くが物質的欲望にかられて、猪突的に悅樂を趁ふのは、生々した現實の姿であつた。しかし猶そこには一つの理想が附隨して居た。

人は十三までは辨へなく、それより二十四五までは親の指圖をうけ、其後は我と世にかせぎ四十五までに一生の家を固め遊樂する事に極まれり。（永代藏巻四）

とはこの間の消息を洩らしたものである。卽ち貨殖の道にいそしんで金錢の蓄積に努

力するのは若い間の事、是偏へに四十越してからの享樂のよすがとするのであつた。

かゝる解釋は町人の一般理想として認められたもので、五十阪を上りながら猶財貨に執着するのは吝嗇と卑しめられ、物しらぬ男と侮蔑せられた。しかし理想と現實とは常に併立しない。事實の世相を見るに飲めや歌への歌舞の巷の主人公は、いつも血の氣の多い若若で、金勘定に日も足らぬのは棺桶に片足突込んだ因業爺である。「大和に隱れない木綿問屋の息子」（永代藏卷六）も、「越前にかくれない年越屋の子悴」（同上）も共に父親の粒々辛苦の財產を一は遊蕩のため、一は虛榮のために粉もなく磨つて了つた。斯の如く一般の理想と社會上の事實との矛盾は至る所にある。この矛盾の反映は、卽ち生の欣求の悲哀となつて町人物の特殊調を構成して後る。矛盾せる二つの力が相對立する時、克つか敗けるか融合するか、此の三つの途しかない。在來の道德習慣に對して自我を立てる時、ゆくべき道は服從か、破壞か、協和かの孰れかである。融合協和を計るは平靜穩籍の易行道であるが、その他の二途に出づるものは、そこに痛ましい破綻を釀す。かの理想と現實との間に橫はる一大溝渠は之である。

町人物に於ける破綻も、この爭鬪に外ならない。それは町人の理想の根柢に接觸する問題で、致富の憧憬と歡樂の追求との間に生じた矛盾憧着卽ち是れである。この二大欲求の破綻の悲劇は、「京にかくれなき始末男、壹分の金拾ふて家亂す悴」を描いた『二代目に破る扇の風』（永代藏卷二）に最もよく描かれて居る。

この說話の主人公は「腹のへるを悲しみて、火事の見舞にも早く步まぬ」程の仕末屋であつた。然るにある日、封じ文一通を拾つた中に二分の金が入つて居た。正直な男で、宛名の人に渡さねばすまないと思ひこみ、わざ〳〵島原の花川と云ふ女郎を尋ねた。廓の入口で「此の御門は斷りなしに通りましても苦しうはござりませぬか」と云ふ程の律義者もい遊里のさまを目のあたり見ては思ひの外の浮氣が起つて、遂に耽溺の群に落ちてゆく。

これと正反對のは、町人鑑に見えた『油の國のかくれ里』である。伊丹の酒屋のど

ら息子が、ある青樓に遊んだ夜、隣り座敷のこそ〳〵話を耳にすれば、「是は、目出度や、金銀抓み取の内證、江戸の手代より申越した。關東筋大風吹きて、米俄上りなれば、これより大阪に下りて西國米大分買込み、あがり請けたらば、太夫根引にして、我等が奥樣にする事ぞ」と云つて居る。夫を聞いた彼は急に揚屋から飛出して早駕籠急がせて北濱につき、米の買占をやり油を買込んだ結果、一躍千貫目の長者となつた。此二話を對比するに、一は貨殖から遊蕩に、他は遊蕩から貨殖に、反對の徑路を辿るもので、二面生活の流轉を示して居る。

しかしこの破綻を外にして、財の蓄積と肉の歡樂との一致、卽ち二面生活の融合により、又若者の勤儉と中老の愉悅との遂行、卽ち理想的生活の實現によつて生ずる世界も絕無ではない。これこそ眞に町人が認めて完全とするユートピヤである。彼等の二面生活はこゝに於て最も徹底的に遂行せられたのである。

かくて彼等が完全なる二面生活の活畫は、町人物に於てその一面を展開し、更に他の一面は好色本に於て闡明せられた事を思はねばならぬ。好色本に於ける肉と、町人物に於ける財とは、町人の全生命を形成したその理想鄕の二大要素である。猶こゝに附言すべきは彼等の二面生活は、赤裸々であつて、奔放な大びらなところに特色がある事である。そこに何等の疑惑も逡巡も認められない。それが、耽溺の巷にあつても、勤勉の境にあつても同一の態度である。其處に道念と因襲とを放れた强味がある。而して之が爲に一方本能的となり自然的となる、而して此の本能と自然とは全然野生のものでなくて、包むに一種の情趣を以てした。之が彼等の身上であつて野暮と沒趣味と無風流を嫌惡し侮蔑して、どこ迄も花やかな情味に浸潤した粹と通とを標榜せんとするのであつた。

蠡つて思ふに、西鶴がこの二面生活の憧憬者であつた事は云ふまでもない。彼が、算用卷二の『尤も始末の異見』の章で主人が一人宿に居れば、「表ての若い者は八阪へ出かくる無分別をやめ、宵寐の久七は鰤包みたる菰ほどいて錢指を作り、たけは朝手廻し

惡しとて蕪菜揃へ、お物師は日絹野のふしを一日仕事程に取りける」とて、「その德一夜にさへ何程か增して年中に積れば大分の事ぞかし」と勤儉の道を說きながら、一轉して「今時の女、見るを見眞似に好き色姿に風俗を移りける。都に奧樣と云はるゝ程の人、皆遊女に取違へる仕出しなり。又手代上りの內儀はおしなべて風呂屋者に生き移し、それより橫町の仕立屋、縫箔屋の女房は、そのまゝ茶屋物の風義にてそれ〴〵身體の色を作りて可笑し」と女風俗の頽廢を說き、しかもこれを讚美するが如く、更に地女と傾城との身どり廻しを比較して前者の無粹を嗤夫し、更に「女郎狂ひする程のものにうときばなし、このかしこき奴が」、儲け憎い金を散らすのは、「よく〳〵面白ければこそなれ、爰分別の外ぞかし」と云つて居る。これ蓄財の必要と遊興の自然とを說破するもので、換言すれば町人の二面生活に對する絕對の肯定である。

かくの如きは當代町人の一般的傾向たると共に作者西鶴も亦この渦中に嬉戲する一人たるを語るものであらう。

第六章　西鶴の創作　(四) 敎訓物、その他

一代女、五人女を刊行せる貞享三年西鶴は本朝二十不孝五卷を著はした。この二樣の物語から享ける異つた印象は、直ちに何等かの消息をその間に憶測せしめる。卽ち浮華淫華なる好色本の世界から、眞摯なる氣分の比較的强い敎訓物に、一足飛に豹變したかの如き彼の態度は、單に讀者の倦怠を顧慮し且自己の天氣を他に現さうとしたのみではない。

浮世草子目錄（大久保葩雪氏編）の貞享三年の項に「本年遂に好色本差止めの命は當路の有司より下りぬ」とあるがその典據は詳にしない。而して筆禍史（宮武外骨氏編）にはこの記事を誤りとし禁止令を享保七年十一月となし、當時の出版物取締令卽ち「新版書物の儀に付町觸」なるものゝ全文をあげて居る。好色本に關するものはその第二條に當り

一、唯今迄有來候板行物の内、好色本之類は風俗のためにも不宜儀に候間段々相改絶版可申附候事。

とある。しかし享保七年以前に於ける禁令は絶對に否認すべきものであらうか。私は甚だ疑ふのである。既に好色本の條にも云つたやうに、當時の禁令は所謂三日法度で、その成文法の效力も甚だ怪しかつたのである。もし想像をゆるすならば西鶴の好色本は極盛期の貞享三年頃に一旦禁止に逢ひ作者は黙然他の世界に入つたのである。而して元祿期に見ゆる好色本類は、その後禁令の緩んだ期間に於て社會の要求と商賈の狡手段とによつて世に出たもので、玆に享保七年の町觸となつたのではあるまいか。吾人はこの推測を以て西鶴が創作過程の新紀元を定めたい。

第一節　教訓物としての「本朝二十不孝」

本朝二十不孝は題名によつて啓示せらるゝ如く支那の傳説二十四孝の反對に出たものである。その序文に「雪中の笋八百屋にあり、鯉魚は魚屋の生船にあり」とあるのはよく斯般の消息を示し、更に「生きとし生ける輩、孝なる道を知らずんば天の咎を遁るべからず、その例は諸國見聞するに不孝の輩、眼前にその罪を顯す、是を梓に鏤め孝に勸むる一助ならむかし」と云つて居るのを見れば、執筆の眞意目的の那邊にあるかを推察する事が出來やう。

今その二十の小話を通覽するに、後年新因果物語と改題した程あつて、凡て因果應報の理を以て貫かれて居る。この因果應報の由つて來る源には、編述上多少の用意がある樣に思はれる。卽ち第一卷には氣隨氣儘と云ふ惡念が認められ、第二卷には物質的欲望に刺戟せらるゝものがあり、第四卷にあつては忘恩を基調とする。然し全體として見れば、現實的のものと非現實のものとに二分する方が觀察上便宜と思はれる。

現實的のものとは、説話それ自身が市井に於ける家常茶飯事として認めらるゝものである。たとへそれが稀有の事件らしくあつても、そこに些細な超自然的陰影をも宿

さない。例へば入り變り立ち變り十八個所へ嫁入した我儘娘が、實家沒落の後落魄して餓死する話。酒喰ひの息子が母の異見も聞かず泥醉して、親の臨終に會ひ得ず後悔する話。嘶の點取に凝りすぎて親の咲をよそに出家した男が、後、世の中戀しくて還俗したが不孝坊とて指彈された話。これらの說話は巷の噂として常に見聞せらるるもので、因果關係も凡庸なだけ必然的條件を具有して居る。

次に同じく現實的說話でありながら、偶發的事件によつてカタストロフに投入れられるものがある。遊蕩費に窮して、死一倍の借金をした擧句、親父を毒殺せんとして誤つて自ら死を招いた悴。情夫を語らつて我家に忍び入り父母を脅かして金錢を奪ひ、逃れる途中懸崖から落ちて死んだ娘。己が身持を苦に病んで自殺した兩親の屍を、葛籠に入れて三昧堂に急ぐ折、金品と見誤られて强盜の手に死ぬ男等の話は、この部類に屬するものである。こゝに現はれた因果の理法は前項に比して一層鮮明である。かゝる刹那的な、血に滲む悲愴な結果は、低級な人々の心情を激動するに有力なからである。この二樣の敍述上の差異は、文學的價値そのものを離れた一種の目的、卽ち群衆指導の敎訓的意義から見たものである事を忘れてはならぬ。

更に非現實的說話の方面を見るに、多くは「不孝」なる行爲の記述に乏しいものが多い。從つてそれ等の說話には「孝」なる道念以外の色彩が强烈に現はれて居る。親の言葉に反いて舟出した男が、鬼神の國に漂流する話は今昔物語に源流を搜り得べき神怪譚であり、親の遺言に反して長兄に乖いた不悌の弟が、夫の靈の告により事情を知つた嫂のために討れるのは、純然たる仇討物である。又、親を嗾かして旅僧を殺し、その金を奪はしめた小娘が、遂には主殺しの大罪を犯し、親諸共斬られたのが、僧を殺した七年目のその月その日であつたと云ふ因果話や、鎌倉八幡の案內者の子に、嘗て殺した油賣の怨靈が乘り移つて舊惡露顯する怪談物もある。この場合に於ける超自然分子は甚だ妥當を缺いて居る。手段として衆愚を威嚇し盲從せしむるのも、廣義に於ける敎訓とは牴觸しないけれど、「孝」なる中心思想を說くものとしては、むしろ邪

路に蹈込んだものと云はねばならぬ。

「孝」を對象とする因果應報の教理は、凡そ以上の三部類に包含せられると思ふ。

猶こゝにその中心思想に於ては、何等の距離も認められないが、說話構成上特殊の色調を帶ぶもの二三を擧げやう。

一、善惡二つ車。廣島生れの甚七、源七と云ふ二人が、遊蕩のために國にも住みかねて、岡山に流れて來たが、窮した末、野末の非人を語らひ一人づゝ片輪車に乘せて親の如く見せかけ袖乞をして歩く。思ひの外、貰ひもあるので、源七はそれを恩にして老人を勞つたが、甚七は歸ると足腰さすらせ食物は碌に與へない。甚七の方の老爺これを恨み、ある日折を見て源七にその身の素性を語つて泣く。源七も貰泣して勞はる。「かゝる時旅人と見えて馬乘物を釣らせ、用ありげに行む。此老人の面影をしばし見定め、橋本内匠樣」と取つく。これは眞の父子で長々の浪々の末、子は先知五百石に取立てられたと分る。そこで源七と他の老人ともく〳〵つれて東路を下り、甚七は乞食のまゝ殘つたが、後この事里人に知れて追拂はれ、遂にある雪の夜書寫の麓で冷たくなつ居た。

二、胸こそ躍れこの盆前。福岡の長八郎と云ふ妹婿と共に上方へ出稼に行つたまゝ歸つて來ない。留守居は窮乏を重ねて盆暮には、賣掛の人が庭に立並ぶさまであつた。ある年の六月佛壇も飾られぬさまに、母は身の置どころもなく悲しんだが、娘はそしらぬ顏に「身振に色科やりて」盆踊の眞似、母これを叱れば「雪駄投げつけて不斷の寢間へゆくを、母今は堪忍ならず手許にありし爪切とつて立たれしを」、緣組して半年とたたぬ嫁押止め、身の廻り質入して急場をしのぎ、追々の事に身道具敷銀は粉もなくなつて惜む色もなかつた。しばしあつて長八も婿も思ふまゝに仕合して歸つて來た。母の物語に妹は家より追ひ、聟には他より嫁を貰つて、二組の夫婦、家富み榮えたと云ふ。

三、眞にその人の面影。松前に二人の兄弟があつた。母が死んである淋しい雨の

夜、亡き妻が庭にあり〳〵と現はれた、兄は悲しんでかき口説いたが弟は半弓執つて切り放つた。と妻は消えて年經た狸が死んで居た。人々は弟の剛勇をほめたが、國主は兄に賞を賜ひ、弟を追放した。その理由はたとへ變化にもせよ假りにも母の姿に弓を引くと云ふ事はないと云ふのであつた。

以上の三篇に現はれた題材は人物の對照を用ひ、これによつて孝德を一層熾烈に表現せんとしたのである。而して最後の一篇を除いては、ある程度まで善玉惡玉の面影が窺はれる。いづれにも多少の作意の痕跡が認められるが、大體として世間竝の事件を取扱つてそこに教訓の意を的確に提示し、且幾分の興味をも喚び起さうとしたのである。

本朝二十不孝に現はれた教訓の意義は、これまでの論述によつて歸納せらるゝ如く、事件の結末によつて說明を試みんとして居る。孝の大本、人道の奧儀と云ふ道念の根柢から提撕する積極的方針をとらずして、善因に善果あり、惡因に惡果ありとの消極的教理によつて世人を訓誡せんとして居る。「世にかゝる不孝のもの、例なき物語、恐ろしや、忽ち天これを罰し給ふ愼むべし」と諭し「此藤助が身の難義は皆親の言葉を背きし罰ならむと思ひやりぬ」と敎へ、あるは「家榮え家滅ぶるも皆これ人の孝と不孝とにありける」と戒める。これ宛然後世の勸懲主義の頭目、瀧澤馬琴の口吻である。猶この好色本の巨匠は、女の貞操に就て、「總じて女の一生に男と云ふもの一人の事なるに、その身持惡しく去られて後夫を求むるなど末々の女の事なり、人たる人の息女は嗜むべき第一なり、緣結びて再び歸るは女の不孝これより外なし。もし又夫緣なくして死後には比丘尼になるべきが本意なるに云々」と說く。かゝる態度は啓蒙を主とする敎訓物には最も適切な方法で、さきに擧げた序文の一節の主旨と相合致するものと云つてよい。

最後に、讀過の際の印象の斷片を、明暗兩側に亙つて附記し、この節を終らうと思ふ。

その明側には、構想の巧妙と云ふ事がある。この點に於ては、流石に群少作家の摸倣すべからざるものがある。例へば『我身を焦す釜か淵』に於て、大盜石川五右衞門の不孝を描くに、

さゝ波や大津の浦より矢橋に渡す舟翁の身は、比叡の山風の燈火と危く、入相の鐘聞けば、命の内外の氣遣ひ、俄に雲となり雨となる鏡山も人顏見えず暮れかゝり、旅人心の急けば、爰に一勢出だし艫を早めてなど聲々に賴めば、我老の波六十に餘れども今時の若者拙者が祖思ひもよらずと、諸肌ぬぎしに肩先より手首までの切疵空所もなき。

親を點出して、傷のいはれをと聞けば子の大惡に恨あるもの「子の代りに此親を死なぬ程切れ〳〵」とてこのさまと語る條。又『旋行の暮の僧にて候』の冒頭に「雪こん〳〵や霰こん〳〵と小袖にためて、里の小娘嵐の松蔭に集り、脇明の寒けき事は厭にず、夕暮を惜しむところへ、熊野參詣の旅僧、山々の難所を越えやう〳〵麓に下り、此童子の方に立より、呼吸もたえ〳〵の聲して人の住所は遠いかと、足腰こゝに立ちかねしを見て」小供は皆逃げ歸るあどけなさの中に、一人の娘「九歳なりしがおとなしく、今少し行けば我方なり、湯をも進ずべし」と道しるべするあたりの鮮やかな筆の跡。構想筆致二つながら眞に豐富なる天分を思はしむるものがある。

しかし、たま〳〵武士を描くや、彼が武家物と同じ缺陷をしらず〳〵の問に曝露して居る。これその暗側面である。『故き都をたちいでゝ雨』の篇に、落魄した浪人が餓死せんとする臨終にありながら、その子が窮乏のさまを親切な八百屋に打開けるを聞きつけ、「愚なり虎之助、知らぬ人に何を申すぞ、默れ、御所柿の良きは百につき何程か、鴨は番でいくら程か、その八百屋に問へ」と怒鳴る。これ一面から見れば武士の負けじ魂を現はしたものとも云へやうが、むしろ人間の至情を遠ざかつた虛僞の叫び、誇張の筆である。思ふに西鶴は一般民衆の立場から見て「武士」なるものは一種の變人であるとの見解を有して居たので、その結果、平民社會を洞觀した彼も、他方に於ては武家社會の皮相しか了解する事が出來なかつたのであらう。

最後に全般から見た作者の態度は如何。これは好色本に於けるが如く、作中の人物と共に沈湎惑溺するの主觀的色彩なく、全然作中の圏外に立つて世間を見下す客觀的態度である。卽ち作品の間からは、酸いも甘いも嚙みわけた五十老翁の分別顔が、にや〳〵と笑つて居る。讀者をぐい〳〵と道德世界に引張り込む力はなくて、唯さあ此方へ來るんだよとの手招きに過ぎない。伴いて來ないものは知らないよと云ふ態度に過ぎない。同じ敎誡でありながら、後世の勸懲主義の作品とは大に趣を異にして居る。野暮らしからぬ垢抜のした感じの漲るのはこれがためである。

第二節　「近代艶陰者」に於ける回避的生活

近代文學に現はれた回避的生活はかなりに廣い分野を占めて居る。濁穢の巷を脫離して、閑寂の俳味に生活した芭蕉の詩境はもとよりであるが、かの西鶴の好色世界も、近松の心中悲劇も、見方によつては回避的退嬰的と云ふ事が出來る。卽ち一は遊里なる特殊の世界に閉籠つて、活社會の潑溂たる境を忘れ、ひたすらに消極的な享樂に浸潤せんとし、他は一蓮托生を夢みて紛糾せる現世の羈絆から逃れやうとした。勿論、此等の回避退嬰は、一方に現實謳歌の執着心を俟つて初めて認識し得らるゝものである。

飜つて近代艶陰者に於ける回避的生活を見るに其等とは趣を異にして居る。そこには陰者なる語に絡んで直覺し得る、所謂世捨人の風格が著しい。しかし厭世の極、山に隱れると云ふ超世脫俗の普遍的隱者は極めて少なく、その多くは市隱である。その寡慾なる點に於て、恬淡なる點に於て、洒々落々たる風丰に於て、多少の仙骨を帶んでは居るが、列仙傳中に入れるには餘りに現實に執して居る。彼等を隱者的生活に誘致したものは通り一ぺんの悟道である。富貴榮達の賴み難きを知り、無常轉變の痛ましさを嘗めた結果である。唯、彼等は木實を喰つたり、歲月を忘却するまでには至らない。一切の形骸を土木視するとか、破笠裏に無限の靑嵐を盛るとか、一思ひに浮世に見きりをつけるには及ばなかつた。そこで市に隱れた。又それを以て眞の隱者と信じて居たのである。

最初の二卷に於ける說話の多くは、ある隱者が他を說得して市隱に導くと云ふ節である。市にある以上、對世間の關係は依然として易らない。彼等は自ら勞して自ら食を求めた。「草花を作つて市中に商ひ一生を送りぬ」とか「葛の根を掘て食ひこれを商つて寒を防ぐ」とかはその一例である。この思想は一種のトルストイズムである。自ら耕して自ら食への信條が、たとへ色調は弱くとも西鶴の作中に見るは興味深く思ふ。而して彼等は既に世を捨てゝ居る。捨てたのはその精神的方面で、物質界に於ては依然として繫がつて居る。從つて超俗的態度はむしろ變人の風格として映寫する。例へば『酒樂の鍬男』は毎日己が肩に替へて得た價を酒に代へて呑むときは、勇ましげに歸るが、價なき日は酒屋へも入らず淋しげに通る。この時呼かけて盃を出せば心の足る程呑んで、翌日は昨日の價を返却する、もし取らない時は捨置て歸るのである。此男は「日毎に片里を巡り歩きて農家の者に雇入れてその日を送る、もしまた貧家の野夫に雇はれし時はその價を取らず、常にまどしき人の耕作を助けて富貴に近づかないのである。

五卷に亙る隱者の風丰には、種々の樣姿があり、中には世を蹈晦した戰國武士の面影も見えるけれど、ほゞ上述のやうな者のみである。而して題名の示すが如き艶陰者なるものは殆んど見當らない。僅かに『嵯峨の風流男』の章に「栖む興つくれば都にゆく、時にふれて舞妓に戯れ舞童と遊ぶ。しかれども彼に愛を享くる心なく、富貴にれる心もなし(中略)循々として行き循々として歸る」とある外、一二この風尙が見られるのみで、艶の字は甚だ謂はれないものとなつて居る。强ゐて解釋すれば艶陰者とは、酸も甘いも嚙みわけた隱者の意味ともとられやう。しかしこれは單に艶の一字によつて世間を眩惑し、佑らんかなの商賣氣と見るのが妥當であらう。

思ふにこれらの題材は全然空妄を描いたものでなく、序に示すが如く作者が諸國遍歷の際に見聞した社會相の一面と考へられる。

更に編述の體裁及び特質に一顧を與へたい。

前述の如く最初の二卷は、一が他を說得する形式の下に敍述せられ、場所は三都に於ける巷談が主となつて相錯綜して居る。而して第三卷は京大阪を、第四卷は東海道筋を、第五卷は中國筋をそれ〴〵舞臺として一個人の話柄のみを取扱つて居る。從つて全體として見る時、何となく物足りない。此均齊の缺如は短篇集とは云へ、同じ中心思想の下に成立して居る以上、やはり締釘が一本拔けて居るやうに思ふ。

もし全篇としての印象の最も顯著なものを擧げるならば、理智的要素の過剩である。文學的內容としての智的要素は、情緖を喚起せしめ得る範圍に於てのみ肯定せらるゝものである。智から美への問題が圓滿に滑り込めばよい。しかしこの要素が、極端に跳梁する時、文學の域から脫して了ふ。

（卷三、都のつれ夫婦）

手自事を調べて食ふ時は、形は動けども心は定まらず、心定まれば神安し、神安き時は何をか愁へん。憂なき時を德と云ふ、世の勞を盜まず。無德の者は世の勞をぬすむ。此故に形は靜かなれども心動く。心動けば氣騷がし。氣騷しければ神安安からず。かくして何處を樂と云はん。

長りて以來物と爭ふ事を知らず、人を恨むる事を知らず、人を懲らかす事を知らず、財を求むる事を知らず、命の惜しき事を知らず、死の來る事を知らず、貧の恥づる事を知らず、一世の利をも知らず。然れども分を知つて分を樂しむもの也（卷四、目籠の翁）

の類は應接に遑がない。これらは皆隱者に限らず、凡ての人間に共通なる精神修養の方策である。欲望私念の境界から擺脫する道程である。作中の主人公に就て云へば、夫子自らの處世法の告白である。かゝる理致勃萃の抽象論があまりに多く連なると、一面敎誡の意味が强めらるゝに反して、情味が無くなつて來る。艶陰者がその題名に似合はず偏狹な說敎じみた感を與へるのはこれがためである。

更に文章に就て云へば、右に擧げた例はその特質の一を語つて居る。卽ち妙に調子づいた漢文脈が幅をきかして居るのである。その他を見るも、和語や漢語や、詩句の散文化されたものが雜然として居る。

漸く夕陽影沈んでは扇なくしてもがなと思ふ頃、雨一しきり薄吹く風、茅蜩ます露、萬の蒼涼しき折から（卷二、花葉の翁）

其間一里に過ぎ、雲玄妙に磯砂明なり、兩岸の苔蘚綠々として胡摩の清風目をうち、遠帆の漁舟、沙鷗の飛ぶかと疑ふに（卷五、菊の翁）

の如き例は必ずしも蚤取眼で搜索するに及ばない、單に美辭麗語を臚列しやうとしただけで、甚しく生硬幼稚な筆致と云はねばなるまい。又漢語に傍訓するに古語を以てその嫻雅を衒はんとした風さへ見える。

饗應　寥亮　侍婢　偏愛　雅

の類はこれである。後世の雅文小説の面影がこゝに見られるが、それに比しては甚だ蕪雜である。

〃　來西鶴の諸作を見て來た眼には、この近代艶陰者の一篇はまづ西鶴らしからぬと云ふ感を喚起する。刊行の日附を見るに貞享三年丙辰歳春良辰とある。この年は好色本中の歴卷五、人女を物し、更に對象の世界を移して本朝二十不孝を書いた年である。少なくともこの二作の筆致と比較して文情の差異の著しさを思ふ。今、艶陰者の筆が西鶴でないとの確證を提供し得ないから、暫く在來の如く、彼の作として眺めやう。併したとへ作者が自己の體驗と緣遠い方面に、作品の中核を置いたにせよ、餘りに拙劣であるとの感じは依然として存在する。吾人は西鶴の全作を通覽して、こゝに題材の異色を認めると共に、彼の駄作のこゝに在る事をも是認しなければならぬ。

第三節　「懷硯」の對象たる奇談異聞

神風の伊勢の宮居に、日向なる橘の里に、大江戸の花の上野に、播磨潟室津の磯に、所定めぬ旅枕を驚かした奇談異聞の數々から、「或は恐ろしく或は可笑しく或は心にとまる人の咄を莖短かき筆して旅せぬ人に、」とかきとめたものを懷硯五卷とする。

懷硯は貞享四年の刊行で序によれば花見月と云ふ。彼が武家物を公にしたと同年

で、次で筆を染めた町人物との中間に入るべきものである。而してその内容を見るに武家物の流を汲むもの町人物の色彩を帶ぶるもの、または好色本教訓物の亞流と目さるゝもの等、種々なる系統が見出さるゝ。しかし全體としては、二十不孝に於けると等しく、現實と非現實との二樣式に截然たる區劃が出來る。現實的傾向のものをかりに世話物と云ひ得るならば、殘る非現實的傾向のものは怪異物の名の下に一括するを妥當とする。

世話物に現はれた對象の世界は云ふまでもなく當代に於ける世相のさまゞである。『後家になり損ひ』には、物欲に誘はれて破滅に陷る人間の弱點を曝露し、『明て悔しき養子の銀箱』には、なき物をある顏して互に欺き合ふ結婚政策が招く痛ましい破綻を描く。出奔した男が、他國でかせぎためた金を土產に歸鄉の途次『照をとる晝舟の中』で、つい賭博の仲間入して、無一文になる話には、抗すべからざる頽廢的衝動の悲哀を語り、殊勝らしい賣主坊主の『見て歸る地獄極樂』の物語は、誑惑され易い衆愚の世界を語る。これは『仁王の門の綱』の主人公が、洪水のために流れた仁王の片腕を拾つて、鬼の腕と思ひ込んだ話と共に單純にして蒙昧なりし時代の反影であらう。

以上は略々町人物の風趣を帶ぶものであるが、更に武家物の範疇に入るべきものを搜るならば、その說話の根本基調は意氣地である。途上の無禮者を切つたのも、逃れ入る若侍を裏路から落して長持にかくしたやうに見せかけ、追手を食ひとめた娘も、共に武門の意地である（長持には時ならぬ太鼓）。衆道の交ある士が、疱瘡のために醜くなつたのを棄てず、剩へわが顏に痰つけてまでも永く契つたのも意氣地である。（人の花ちる疱瘡の山）。又闇の夜に嘲弄せられ、その人分つて後切死するも、戀人の死を知ると共に尼姿となるのも武士道の氣慨である（比丘尼には無用の長刀）。この氣慨は啻に武士のみならず、浦に漁どる水人の子にまで現はれて居る。『案內知つての昔の寢所』はその著しいものである。

久六と云ふ男、思はぬ難に漂流して、一年近くなつてから漸く我家に立歸れば、妻

は夫に別れて髪を下す覺悟のところを、いろ〳〵と異見されて無理やりに入婿を定められたその翌朝であつた。「しどけなき枕のさまに、髪も昔よりは美しくて、此浦の美人なるものをと、少し自慢心して添臥の夢驚かせば、女興をさまして泣き」出す。仔細を聞けばこれも因果。「久六分別して、先づ舟吹流されて奥の海にゆきし難義を語り、其後心靜かに女を刺殺し、」婿討つて捨て、その身も及に倒れた。これを讀んで直ちに念頭に浮ぶのはテニソンの「エノック、アーデン」である。唯結果に於て一は基督教思想を根柢とする浪曼的戀愛物語となり、一は儒教思想を所縁とする近世武士氣質の横溢する説話となつた。

この世話物に於ける教訓は極めて輕い。人の女房に難癖つけ、離縁せしめた五六人が、その詭計露はれて當の男に斬込まれ、仲裁が入つて各々女房を離縁してけりをつける『水浴せば涙川』でも、六人組の盗賊が、ある道心者の許に忍入つたとろ、餘りに主人の洒落なのに各々懺悔をする『大盗人入相の鐘』でも、唯「此類の惡口云ふまじき事なり」とか、「誠に善惡二つの入物ぞかし」と云ふのに過ぎない。もしそれ、男裝して戀人を口説く『御代の盛は江戸櫻』の一章に至つては宛然五人女のおまんの亞流で、他の諸篇とは全然基調を異にするものである。

更に非現實的方面を見るに、因果應報を中心とせる怨靈説話には、自然に教訓的意義が含まれて居る。無辜の罪に虐殺された腰元二人が、主家に祟る『誰かは住みし荒屋敷』も、墮胎を業とした者の娘が、その新枕毎に幾千の嬰兒の靈が集るので離縁され、親は死して鱸となり、子は發心して尼となる『文字すはる松江の鱸』も、又誤まつて殺した飼猫の靈と、欺かれし男の死靈に苦しめられる女を描いた『氣色の森の倒石塔』も、要するに人を疑ふな、僞を云ふな、善根を施せとの謂に外ならぬ。云ふ所は世上常に見る惡德を戒しむるにあるが、これらの諸篇の特色は、その道學的口吻が極めて低く、具體的例證を放下したのみで讀者の判斷に任せ去つたところにある。

かゝる怨靈説話を除いては、單なる怪異譚が殘る。飼猿が人眞似して嬰兒を行水さ

せやうとて熱湯に入れ死に到らしめ、その申譯に兒の墓前で自刄する話（人眞似は猿の行水）。それ〴〵緣談を厭つた男女二人が、計らず同時に二月堂に參籠して祈願をこめ、曉の夢に神より長枕を得、目さめて二人の間にあるのを見、互に寄ひ合ひ、寺僧の中裁は媒介となり、思はぬ緣を結ぶ話（枕は殘る曙の緣）。信太の森で多くの怪異の隱し藝を見物する話（椿は生立の手足）。足柄の山奥で、孝の德によつて仙女となつた人に逢ふ話（鼓の色に迷ふ人）。これらの說話には、挿話として異分子を有するものもあるが、濃厚なる超自然的色彩に塗抹されて、遂に怪異譚となり了せて居る。

かくの如く內密容を精細に攻究すれば、種々の傾向、雜多な情調を具備して居るけれど、要するに前記の二樣式に包含し得るのである。その素因として、世話物的樣式は作者自身の趣味と創作過程とに據り、怪異的色調に關しては、當代の百物語、怪談系小說の影響反映を思はねばならぬ。而してこの傾向は後の諸國物語一派の作品を聯想せしめるのである。

附言。寶永初年の作と思はるゝものに筆の初ぞめ五卷がある。作者は今西鶴とあるが卷頭の「出雲の國女物語」「善惡二つの堺町」の二篇が目新らしいだけで、內容は懷硯にある短篇の大部分を順序を換へて列べたまでのものである。この附加せる二篇の文致は甚だ見劣りせらるのは剽竊改竄の不德を敢てするものゝあつた事を示すと共に、一面には西鶴歿後の盛名をも物語る證左となるのである。

第四節　裁判物としての「本朝櫻陰比事」

本朝櫻陰比事五卷は元祿二年の刊行である。その內容は當時に於て噂話の材料となつた裁判沙汰の聞書であつて、名法官板倉所司代の事蹟を語る板倉政要を粉本としたらしい。しかしこゝに誌された凡てが事實とは思はれぬ。むしろ傳說化せられたもので、事實と共に飜案に成るものが多いと見るべきであらう。而して凡ての說話は「昔都の云々」を以て初まり、第一話の如きも「昔都の町に」を冒頭として物語に入り、そ

れ以前の數行は全篇の總敍と見らるべきものである。卽ち

それ大唐の花は甘棠の陰に召伯遊んで詩を歌へり。和朝の花は櫻の木かげ豐に歌を吟じ、此時なるかな御代の山も動かず、四つの海原不斷の小細波靜かに、王城の水清く、流の末の久しき一人の翁あつて、百餘歲になるまで家に杖つく事もなく、善惡二つの耳賢く聞傳へたる物語、今の世の慰草ともなりて心の風に亂れたる萩も薄も眞直に分れる道筋の廣き事、筆の林にもなかなかに書盡すして殘りぬ。

これ明らかに棠陰比事（慶安四年刊）の飜案なる事を語るものである。されば上記の二書をつき交へて、これに當時の巷說を加味したと云ふを穩當とする。

一體公事沙汰なるものは、世相の一面には相違ないが、これが說話の中心となる時、多くは新聞の社會記事的敍述に陷り易い。從つてそこに藝術味を見出す事は困難である。この場合、讀者の興味は判官の態度なり推理なり論斷喝破なりに存在する。如何にして罪人を發見するであらうかとの探究的感興を唆られる。而して犯罪者の服刑に至つて、漸くほつとする。作者も亦お白洲の情趣とか罪人の心境とかに留意せずして、一向に判官の明智勇斷をあらはすところに注意を向けやうとして居る。從つて判官なる人は、常に超人的天分によつて誇張され擴大されて、殆んど神人の體型を具へる事が多い。これ近世に於ける裁判物一般に通ずる特質である。

櫻陰比事に於ける御前卽ち京都所司代の法斷も亦全然このタイプに欲つて居る。先天的の烱眼と時代の高壓的斷決とによつて、微に入り細に亙つて爬羅剔抉を恣にして居る。かくてお白洲に引出され、これと目星をつけられたものは、一片の恐嚇的言辭でもつて直ちに恐れ入り、容易に白狀して判者の明敏を鮮明に證據立てる。これは所謂裁判物が、世相に現はれた罪惡を描くとか、人生の暗黑面を曝露するとか云ふ方面を打忘れて、たゞある一個の法官の偉大なる才能を中心興味として居るからである。同樣の說話が、有名な判官の逸話として、そのいづれにも流布せられて居るのは、その證左であらう。例へばかの名奉行と云はるゝ大岡越前守の裁決を題材とせる大岡政

談の巷説と、櫻陰比事との説話と全く同型なるものが、二三にして止まらないのは、その一端を物語るものである。

太閤は秀吉、黄門は光圀、滑稽は一休と曾呂利、名裁判は板倉と大岡と云ふやうに、相場の決まつた因襲的勢力が嚴存しては居るけれど、要するに裁判物に於て判官そのものを中心とするのに、動搖は生じない。櫻陰比事も亦この色彩に浸染したものである。

かくの如く、説話の中樞は判官にあり、訴訟の原因は凡て簡單な動機によつて構成なせらるゝを常とする。その葛藤に於ても極めて單純である。例へば『仕掛物は水になす桂川』では、ある男が桂川を流るゝ長櫃を拾ひ上げ、多人數呼び集めて何であらうと蓋を開けば、中には髑髏五つに女の黒髪が亂れて居た。これは芝居に仕組んで評判を取らうとの根膽で、四條河原の狂言師の仕業であつた。拾上げた男は、豫て騒ぎ立てるやうに頼まれたのである。それを早くも所司代のために喝破されると云ふ筋である。『鯛、鮪、鱸、釣の目安』では、魚賣が掛金のとれぬのに迷惑して、銀高及び相手の名を書かずに三十八ヶ所とのみして訴へたのを、相手は坊主と見込み、裏判を押して魚屋に與へ、今時の世間寺皆醒き坊主と笑つたなど、勿論見方によつては、世態人情のさま〴〵を推察し得るけれど、作者はむしろ時代を描く事に留意して居ない。

今、その事件の素因を擧ぐるならば、いづれの世にも免れ難い色と慾との二筋道によつて展開せられて居ると云ふ事が出來る。しかし通り一遍の色と慾とであつて、とり立てゝ云ふ程の事もない。否、むしろ家常茶飯事をば、殊更に尤もらしく、鹿爪らしく、物々しく、宛も判者の思ふ壺に當嵌るやうに作つてあるために、不自然の感を起すものさへある。時には判官の考慮、焦心をも、その結果だけを敍したがために、此種の物語が保つ、本來の主旨を外れて徐りに索漠たるものもある。とにもかくにも判官の喝破によつて結末に到達するものが、大部分であるが中に、唯その五六のみ訴訟人の内省考察の結果によるものが含まれて居る。これは特に中心基調から見ての反

逆者であるが、全體の單調を破ると云ふ點から見れば自ら異つた感じを得られやう。

最後に、判官の明晰な頭腦と、透徹せる判斷と、鋭敏な觀察とが、最も顯著に打出されて、よく作品の意義を闡明して居るもの一篇、『大事を聞出る琵琶の音』を雛型として擧げる。

加茂の夕涼に、ふとした喧嘩で、討たれた北國侍の遺子が、敵討のため上洛したが、相手が知れないので困惑して居た。所司代不憫に思ひ、喧嘩の砌、相手は皆手を負つたと聞き、先づ京の外科醫を召し集めた。中に一條に住む醫者、先月十二日の夜四つ前、壬生の庄屋からとて急に呼ばれ、籠に乘つたが「茂(しげ)の笹原より大勢駈け出て外より細引かけて、東へ行くかと思へば南のやうの時もあり、さま〳〵千鳥がけに一筋道、覺えぬやうに唯夢の如く」なつて都を離れ三里許りも行つたと思ふ頃、ある邸に着き六人の手負を療治したが、二十日餘りは外出は勿論、固く口禁めされたと申立てた。何か氣附いた事はないかと問へば、鳥の聲喧しく啼いて山里らしかつた事、明窓から高い山が見えた事、月の影さす隣の方にある夜琵琶の音のした事、二十三日の夜をこめて、かの高嶺の邊りに群集の聲がした事等を語る。これで處は嵯峨のうちであらう。二十四日の曙の人聲は愛宕詣の人であらうと推察して、更に京の琵琶法師を召し、嵯峨の邊にて琵琶の會はせぬかと問ふた。ある法師が折々さる浪人に招かるゝと云ふにより、それから尋ねこみ、その隣家も浪人であるが、病中の由でこの節は鳴物遠慮のため休んで居ると云ふ事を知る。更に嵯峨の里人を召喚して聞くに、「歴々の浪人衆と見え五月の初めより借座敷し、毎日御遊興と見えしが六月中頃より御病氣と沙汰して召使侍衆も出で申されず」と云ふ。扨はこれに違ひなしと、かの兄弟に知らして仇を報いしめたと云ふのである。

ある型を初めに作つて、それに當嵌めて行つた樣子はあるが、兎に角、推理を働かして漸層的に進渉して居る精緻な結構と云はねばならぬ。この種の巧緻は櫻陰比事中、他には見られないもので、かの布置脚色を重要視する讀本作者の興味を惹いたのも

當然である。山東京傳の優曇華物語中の醫者誘拐の一挿話はこれにヒントを得たものらしく、全く同巧異曲の物語である。猶最近の谷崎潤一郎が祕密に於て目かくしされて俥を駈られる心境を描いたのは、直接關係はないにしろ、等しくこの推理に對する興味を覘つたものである。

かく櫻陰比事、幾多の說話の中には、精彩を以て免すべきものが二三あるけれど、多くは描寫の精粗一ならず、雜駁に流れ、且文體は他の諸作に比して甚しく見劣りせられる。この作がやゝもすれば西鶴の筆であるまいとの批評を蒙つて居る素因は、ここにある。しかし作者に對する疑義は、全く根據のない推論で、元祿期に入つてからの西鶴の筆が漸次荒んで來た事は、彼が創作を年代順に檢すれば一目瞭然たる事であらう。所詮、櫻陰比事の如きは別に項目を設けて說く程の作品ではなかつたかもしれない。

第七章　所謂西鶴本に就て

西鶴の創作は、以上章を追ふて述べ來つたもので、その重要なのは略々盡されて居る。この外西鶴の二字を書名に冠らした所謂西鶴本數種がある。これらは孰れも西鶴歿後の刊行で、中には後人の僞作が含まれて居る。この點に關して聊か管見を述べて見やう。

先づ書目を年代順に列記すれば、西鶴置土產（元祿六年）、西鶴織留（同七年）、西鶴俗つれ〴〵（同八年）、西鶴萬の文反古（同九年）、及び西鶴名殘の友（年代不明）、西鶴諸國咄（同上）の六篇である。

一　置土產

「此全部五卷の書は、先師の書捨置かれける反古の中より出でたるを、書林何がしせ

ちに乞ひて長き形見にもやと云へるに、跡は消えせぬとよめるも哀れ思ひやられて彼に與ふものなり」とは、西鶴の弟子北條團水が置土産の卷頭に敍するところである。これによつてまづ此書の由來を知る事が出來る。

その內容を檢するに、凡てこれ所謂色道の二みちかけて、一時は大盡と謳はれた分限者が、限りある財貨を蕩盡しつくして、今日の日も過しかねる悲慘の境遇に落つる物語である。而して作者のこれを敍述するや、好色本に現はれたやうな豪奢にして寬濶な、刹那の享樂に凡てを沒却する、忘我の境地を描かずし、てむしろ顧みがちに何物かを掛念する態度が見える。卽ち作者は作中人物と同化せず、ある距離を置いて評價する分別臭さが認められる。この點に於て、町人物と色調を同じうするものと云ふべきである。否むしろ町人物の一種と見るべきで、かの二面生活の面影は明らかに把握せられる。

あるは「さすが名高き大盡の、幽かなる身となつて四季の小紋の襲小袖も大變して、千種色の木綿布子の身狹にして借屋住居の哀」なる身となつても、內部衝動の抑制は思ひもよらず、僅の代を手にするや直ちに浮れ心となり、「舟賃なくて拾ひ草鞋の步行路、中食なしに」歸るのを何とも思はぬのである。あるは又、父祖傳來の家藏を人手に渡しながら、歌舞の菩薩の面影忘られず、さゝやかの資本に「すこしの餅屋せしが、見世に懸けたる暖簾の紋に梅鉢をつけて」そのかみを偲ぶのである。かくの如くこゝに現はるゝ幾多の淪落の男の全生命は、生の享樂と肉の憧憬とにある。人世の價値は、その愉悅の程度によつて司配されるのである。さりながらこの世界この境地を描く作者は、時に訓誡的口吻を洩らして狂奔的な情熱に一掬の冷水を灑ぎかける。ここに於て主人公の行動は純然たる享樂主義を離れて一抹の陰影を落す。そこで敎訓物らしい色調が滲み出して來る。好色本よりも町人物に近いと云つたのはこれである。

猶一言すべきは置土產獨有の特質が認められる事である。それは身請された遊女が、零落した大盡と貧苦の中に世話女房として、甲斐々々しく暮すと云ふが如きもの

で、在來の好色本、町人物に見かけなかつたところである。これは絶えず繰返さるゝ島原や難波の太夫が實在の人物であつたと同じく、或は往々市井の噂に上つた當時の好話柄であつたと思ふ。

最後に云ふ。置土產の內容文章共に他の西鶴の諸作に比して何等の遜色がない。否、時には前述の傑作と伍して優越の感の伴ふものさへある。しかのみならず歿後引續いての刊行と云ひ、かたゞ〳〵西鶴の遺作たるを信ずる旨を書き添へて置く。

附言。寶永五年の江戸の版本に風流門出加增藏と云ふ五卷物（挿繪は奥村政信）がある。十二の短篇から成つて居るが、最初の「親は後家江戸下り」一章の外は置土產と悉く同一である。西鶴の諸作が歿後改題新版された一例で、一面江戸小說界の不振を語るものである。

二　世の人心

本朝町人鑑と共に織留の一部を構成するものである。前者がある着眼點を中心として纏つて居るのに反して、世の人心はそこに現はるゝ主調もなく目的もなく、雜然と思ひつき〳〵書き止められた觀がある。織留の名は編輯者が便宜上一纏めとしたので、內的契機は認められない。吾人も亦便宜上、町人鑑のみとつて前に論じたが故に、こゝには世の人心四卷に就てのみ一言する。

大體から云へば世の人心の對象も亦町人生活の一面を語るものである。而して何處の誰某の事實を描いたと云ふよりも、たゞ漫然と世相の一般を敍述したのが多い。卽ち古今に於ける商人の心づかひの變遷とか、奉公人の使ひ方、見わけ方、あるは當代の奉公人氣質と云ふやうな事を初め、世渡りの法、質ぐさのさま〳〵。要するに時代生活に於ける處世法の釋義を多少具體的に述べたまでゞある。且これらの談議の中には、身分相應に身の振方をせよとて、ある官女が第三者の眼から町人生活を羨み、自ら進んで町人に嫁して失敗した話や、神佛の信心よりも心の持方に氣をつけよとて、妹

が苦勞性のために姉よりも老けて見ゆる話を織込んで、五十老爺が孫に教へるやうな調子で、縷々として說き來り說き去つて居る。そうかと思へば、突如として遊蕩兒の耽溺生活のみを描く。在來の西鶴の作品が短い說話の集合である事は云ふまでもないが、そこに何等かの中心點があつて、かくの如く不統一な編述のものはない。而してこれらの題材は既に西鶴が一度筆にしたところで、この場合いづれもお浚へと云ふ體である。しかもその敍述に於て甚だ見劣りせらるゝものが認められる。一體に西鶴の作は晩年程下り坂になつて居るが、世の人心に於ては特にこの感が深い。これらの點から或は後人假託の書ではないかとの疑も起るのである。更に想像を許すならば本朝町人鑑の端本にこれだけを附加して、織留の一篇を成したものとも云へやう。

三　俗つれ〴〵

友がいまはの際に、その母を託したにも拘らず、酒に前後を忘却して遂に餓死せしめた禪僧。醉に乘じて妻の髮を切り醒めて悔ゐた男。飛ぶ螢に自己告白を大聲にわめく芝居者。さま〴〵の境地はありながら、底を叩けば、弱い人間の本能が頭を擡げる。皮一重奥には頽廢の脈搏が高く打つ。たとへその間には孝德に無生物も感應する話とか、婚姻の夜、婿の頓死に一念發起した娘がその後、家のために養子を迎へさせられたが契をかはさず、父母の沒後二人ともに出家した話とか、宗教的色彩を帶ぶ强い信念を題材としたものがあるにしても、これらは油に浮く水滴である。

俗つれ〴〵一篇の物語るところは爛壞と惑溺との社會相である。時代の主潮を形作る享樂生活の半面である。かの『嵯峨のかくれ家』に住む好色男が、日本國中に人を派しての美女狩は、その極端なるものであらう。この說話はまづ序を置き、再度の美女搜索を效せんとするや、章を改め、山城大和二國の物語のみを誌したのは、尻切蜻蛉の感があるが、これやがて遺稿と見せかける猾手段ではあるまいか。吾人はこの一事を以てするも、化けそこねの狐の尾を見つけた心持がする。加ふるに說話は雜駁、行文

も亦精彩を缺いて居る。

要するにつれ〴〵の名に背かぬ、しまりなき短篇集で、もし西鶴の作とすれば、なくもがなの悪作たるを免れない。

四　萬の文反古

旅に商ひする身の、故郷の節季が心にかゝつて、細々と云ひ送る才覺な親爺があれば、後先見ずの陀々羅遊びに手代達から、隠居させらるゝどら息子がある。敵に巡り合ひながらうつかり取逃す武士が居れば、花の芳野に道心となつたものゝ、さすがに浮世戀しく少人の肝煎をたのみ越す坊主が居る。これらは既に西鶴の諸作それ〴〵に取扱はれた題材で、今更とり出して云ふ程もない。

しかし萬の文反古は一名世話文章とも云ひ、名の示すが如く凡ての說話が書簡から成つて居る。この點に於て在來の規範を擺脫して、その特色も亦內容より形式にある。而してその消息たるや、拜啓に初まつて草々頓首に終る典型に陷らず、實に自由奔放の體を以て、委曲よく錙珠を分つの慨がある。時には手紙なる本體を忘れ感興に乘じて純然たる敍事に走り、思ひついたやうに「申候」とつける條々が見うけられる。併し大體として手紙の書き手たる人（說話の主人公或は第三者）の心持が明細に現はれて居る。要するに萬の文反古の長所明側は、この形式と文情とにある。

されど、如何にしても見逃すべからざる批難は、各々文章の結末に數行の附書がある。これは一篇の解說とも見るべき作者の說明書で、最も露骨に現はされて居る。一例を示せば

此文を考て見るに、道に背きし、銀袋をぬすみ、人の命を失ひ、その因果目前に報い出家せし弟の方へ浮世の恥をあらはし、たよりに人に賴みて書おくると見えたり（代筆は浮世の闇）。此文の仔細を考みるに、此男の手前を仕損ひ兄にも談合なしに江戸へ下ると知れたり、何國にても今の世、金が金を儲ける時になりぬ。朝夕その覺悟してそれ〴〵の家業精に入るべし、な

い所には一匁もない物は金なり。日本國の金銀の集り瓦石の如く見えし江戸より僅か十匁あまりに手づまり、長々と無心申越すも未だ兄弟のよしみなればなり、他人方へ錢一文の事にても云ひ難し、世は大事なり（百三十里の所を十匁の無心）。

概ね此類である。かゝる解說はむしろ無くもがなと思はれる。讀者は本文に於て既にこれだけの感得を享受すべきである。かゝる說明的表現は藝術的價値から云つて意義の淺いものである。特にこの場合の如きは全然疣贅と云はねばならぬ。

この暗倒面はともかく、文彩構想共に西鶴が從來の作品に比して遜色のないのみか特異あるものである。しかし織留に編まれし二篇の未定稿が世に公にされて後、この完璧とも云ふべき遺稿が偶然發見せられたとは首肯し難い。かの着想は西鶴のもので、行筆は弟子のものとの判定のあるのも、かゝる消息を憶測したのであらう。今日の所、確然たる論據はないにしても吾人は西鶴ならぬ才人の筆になつたものとの感じを抱懷するものである。

五　名殘の友

名殘の友四卷に見ゆる二十七話は同じ調子を以て貫かれて居る。その調子なるものには二つの色彩があつて、笑話系統の落ちを經とし、俳諧師或は俳に遊ぶものゝ逸話を緯とする。かの醒醉笑一流の笑話に現はれた趣味好尙が著しく目立つて見える。

琵琶を知らぬ村人が、詮議の結果これは神代の秤の家なるべしと云ひ、武藝自慢の武士が宇治川を騎渡して佐々木梶原を氣取る時、物洗ふ女が嘲つて、でもあの時は向ふ岸に敵が大勢居たと云ふ話。又淡路に日和見に巧みな老婆があつたが、ある人船頭等のために重寶と肥後の國に伴れて歸り、時雨の後の日和を見せたらば、淡路千光寺山は何處に見える、あの山の雲行を見ねば日和は分らぬと云つた話。かつぎ屋の亭主が元旦に歳の內にて泣く聲がすると云ふ附句を夢に見て打嘆く處に、ある男が貧乏神大黑天に叩かれてと上を附けたので大に嬉んだ話。この機智と哄笑と諧謔との間に、

輕いユーモアが流れて居るところは、浮世草子と云ふよりもむしろ假名草子に屬すべきものと思ふ。

この書の序には北條團水が「洛陽を去つて七年、西鶴の草庵を守る。西の夜跡は消えせぬ記念の反古の中より一書を得たり」と云ひ、卷末にはわざ〳〵

西鶴一生涯のうちにあらゆる事を連ね出す覺書一册あり、終焉まで書き漏したる事多し、かれこれ二册を筆藏と自號して自筆のものなり、近日板行の願ひ庵主に請ふものなり。

と書肆の廣告文まで添へてあるが、却つてくさい感じを惹起すのみである。大體から享ける印象も西鶴ならぬ心持に左袒する。

六　諸國咄

西鶴諸國咄は一名大下馬と云ふ。序にもしらるゝ如く、諸國奇談集である。刊行の年代が不明であり、且西鶴の作品中にあつて例のない特殊のものであるがために大方は西鶴の作として認められて居る。これは西鶴崇拜を根柢とする好意上の解釋で、純批判的の論斷ではないが、內容に於て多少の證左が認められる。

第一に形式から檢すると、在來の伎とは大に趣を異にして居る。

初、公事は破らずに勝つ。　奈良の寺中にありし事　此段智慧

二、見せぬ所は女大工。　京の一條にありし事　此段不思議

と云ふ體裁でかくの如きものが、四卷に亙つて二十二話を算する。

而してその內容は、或は怨恨因果を說き、或は仙人隱里を語り、十中の八九は奇異聞を綴つたもので百物語の系統を引いて居る。西鶴が在來この百物語や怪異小說の影響をうけた事は、好色本を初め各種の著作に散見するところである。彼が現實謳歌の大旆を翻した作家でありながら、この方面にも意外の根强さがある。

更に文章を見るに他の諸作と大なる徑程が認められないのみならず、精細なる筆致の似通へる節も多い。かの「赤襌襠かきたる火神鳴の來て、この程は水神鳴ども若氣

にて夜這星に戯れ、あたら水をへらして思ひながらの日照なり、各々手作の牛蒡を送られたらば追付け雨を請合ふと申す」の如き、悪ふざけは文脈に作者の風丰さへ想見せしめる。しかしこれとても、時代一般に瀰漫した頽廢的氣分と云へばそれまでゞある。要するに西鶴と見らるべきプロヴビリチーの多い作品とだけは云ひ得るし、よし作者の問題を離れても、百物語系統に於ける秀れた作品と云ふ事が出來る。

上述の外小夜嵐物語十冊(元祿十一年)、西鶴傳授車(正德五年)等數種があるけれど文體に於て趣向に於て樣に依つて胡盧を描く摸倣剽竊の作品で、こゝに一々論述を要しないものばかりである。

かくの如く彼の歿後、數多の所謂西鶴本のあらはれたのは、偏に彼の名聲の籍甚たりし事に歸因する。而してこれに賴る門弟の糊口と、出版業者の欲望とが絡み合つたのである。されば中には眞面目な遺稿編纂の趣旨に基くものも一二はあつたらうが、多くはこれ醜惡なる根膽と奸譎なる手段とによつたものである。しかしこれらの背景から一歩退いて、作品そのものを眺めて見るも、置土產を初め文反古、諸國咄に優越と異色を認め得るの外、他は實質に於て一顧にも値しないものである事は、却つて西鶴を毒するものと云はねばならぬ。

第八章　西鶴が創作の藝術的價値

第一節　文學的内容としての諸要素とその特質

道を開くに荊棘を切り巖石を穿つは當然である。時には懸崖も避けねばならぬ、深淵も渡らねばならぬ。わがゆく道の一すぢと念じながら、思はぬ障害に計らぬ迂路も餘義なくされる。西鶴が創作過程を振返つて眺める時、恰度この感がある。巣立ちした計りの文學界に、浮世草子の廣い世界を齎らした彼も、ひたぶるに自己の本領に邁進する事は出來なかつた。官憲の壓迫と民衆の倦怠とは、幾度か彼をして轉々せしめた。好色本から武家物に移り更に町人物に變り、その間には往々にして教訓啓蒙を口にした。奔放淫縱の舞臺は變じて才覺理財の境地となつた。昨日遊蕩三昧の茶屋酒に入浸つたどら息子は、今日しも算盤膝に小首傾けた分別老爺となりすまして居る。この變遷推移の間にはそれ〴〵の異色があるが、一貫して顯著なるは、その現實的傾向である。

この現實的傾向は、好色本にあつては遊蕩となり、武家物にあつては義理となり、町人物にあつては貨殖となつた。而して此等は悉く自己の體驗か、然らざれば自己を圍繞する世界の消息であつた。さきにも指摘した如く、西鶴は想像力が貧弱であつたがために、自己の生活を遠ざかるに從つて、その生氣を失つた。これに反して、天賦の觀察力は、峻烈鋭敏を極め、感覺によつて體得し得るものには遺漏なからしめんとした。それ故に町人の世界は最も鮮明に描き出され、彼等が生活の兩側面を形成する遊蕩と貨殖とに關する記述は、元祿町人の時代精神を的確に把握したものと云ふべきであつた。しかも彼等の生活そのものは、現實に執着し現實を謳歌し、あらゆる手段と方法とによつて、現實の享樂を味はんとするにあつた。而して作者自身も亦この渦中に喘ぐ一人であつたのである。現代の世相を描く、必ずしも町人に限らない。然し熾盛な感興と强烈な洞察とによつて、ある社會相を赤裸々に點出するには、先づ

手近いところから初めるのが常である。武士を描いてその眞相を寫す能はず、農民生活には一顧すら與へなかつた西鶴が、その町人物に於て、(町人の對象としての遊里描寫に於て)效果を收めたのは、作家と閲歴との密接な關係を語るものであるまいか。

町人生活に於ける最大要素は、云ふまでもなく經濟問題である。彼等の全生活は、この問題を中心とした渦卷に過ぎない。かの才覺と云ひ分別と云ひ遣繰と云ふも、經濟問題に向して立つた時、發せられる現實の叫びである。百萬貫の分限とか紙子一枚とか呼ぶも、凡て生々した切實な人生の聲である。對象をこの境地に求めた彼の創作が、現實的色彩を以て横溢するのは、もとよりそのところである。

更に人性問題に移る。性欲は人間の本能である。而して、この本能に人爲的の裝飾を施して、加工的に美化せんとした當代の遊廓は、彼等から除くべからざる歡樂鄕であつた。而して階級制度の時代にあつては、自由の風はこゝばかりに吹いて居た。權力の下に伸びる事の出來ない町人、しかも勃興した新時代の一能力者たる町人が、その新鋭の氣魄を洩らすは、この鄕以外に求められない。こゝには肉の歡樂がある。生の愉悅がある。蕩兒と遊女とに纏はる情と意地と達引と手管とがある。これを包含する氣分は慣習を生じ、慣習は更に情趣を生んで、一種の典型的な遊里情調が瀰漫した。この情調は、所謂歌舞の菩薩を安置した下界の喜見城を現出し、花やかな現實界の極樂たらしめた。低級にして物欲以外に何物をも認めなかつた人々は、爭つてこゝに趨つたのである。西鶴の好色本はとりも直さずこの事實を筆にしたので、その現實的傾向の顯著なるのは自然の數である。

かくの如く西鶴が創作に現はれたる現實的傾向は、自己中心を基調とする直接經驗に典據を有して居る。多少彼に緣遠い武家社會の消息を傳ふるものも、描寫の巧拙はともかく、亦巷談口傳の手近い處に題材を求めて居る。要するに濃淡の差こそあれ、現實の姿は、彼が作品全體に漲る、大なる特徴と云はねばならぬ。

然らば非現實的傾向は、毫末も認められないかと云ふに、決してそうでない。非現

實的傾向、換言すれば超自然的分子は凡ての作品に於て隨所に散見せられる。然しそれは單に部分的敍述に限られ、全般の色調に異彩を齎す程强烈なるものではない。且宗教的迷信の强い時代の影響によつて、それらの超自然もある程度までは、現實的事件として取扱つて居るやうに見える。從つて超自然に對する作家の態度が、主觀的であるか客觀的であるかは問題にならぬ。この故に時代を背景とする西鶴の信念と、文壇に於ける怪異小說の系統と、この二ヶ條を以てその典據を提供し、かゝる幽靈怪異の超自然分子が、この現實謳歌の作家にも認め得る事を指示するに止めやう。

（近世の怪異小說は萬治二年の御伽物語の流れを汲み、更に支那稗史の飜案になる淺井了意の御伽婢子に於て一時期を劃した、而してその前後に當つて此方面の創作界を見るに、一方には御伽婢子の新彩に驚異の目を瞠つて、直ちにその後へに從ふ一派があり、他方には百物語の系統を享けた怪異小說の流れがあり、遂に相交錯して甚だ隆盛を極め、時代の迷信と反映して、文壇の一分野を占めて有力であつた。西鶴もこの思潮に幾分の影響を蒙つたのである。）

次に智的要素の方面を見るに、道德的題材を主とした敎訓物は勿論の事、町人物も亦一種の敎訓小說である以上、そこに滲透する氣分に幾分の訓言的口吻が見える。この智的情操に訴ふるものは、好色本を離るゝに從つて年代と共に著しくなつて居る。かの本朝若風俗に於て在來の記述法に一變化を來し、支那故事の引用と古聖賢の格言とによつて、己が資材にせる中心思想を裏書せんと試みた。これらは讀者に、ある一種の因襲的な理解を豫想したもので、その抽象的言辭そのものに力があるのではない。そこに情熱の愉悅もなく、直下の快感もない。讀者がよつて享くる面白味は、理智に訴へて後、心の底に浮ぶ面白味である。武家物に現はれた道義や、町人物に於ける才覺も皆これである。されど西鶴は徹頭徹尾、格言や俚諺を以て能事畢れりとするやうなきざな道學者流でもなく、干乾びた人間でもなかつた。童蒙を啓發するに當つて、百の說法よりも一の實例の價値のあるを知つて居た。故に一の觀念を抽象的に記述する事は力めて避けて居る。彼はその敎訓的色彩を帶ぶ凡ての小話にあつても、具體的

に世上の出來事を描いた。たとへ時にそれらの小話に、上辷りな報告的記述に過ぎないものがあつても、大體に於て、理智のみに頼らなければならぬものは見當らない。從つて智的要素はそれだけ薄弱と云はねばならぬ。しかし未だ彼には、自己の思索と民衆への教誡とを一團として說話そのものに打込んで、その把握を讀者に一任するの態度に出づる事は出來なかつた。說話の中に於てあからさまに訓言を與へなければ、何となくおちつきがなく、腹の蟲が收まらない。こゝに時勢の姿が見える。時代の新人もやはりどこか囚はれたところがあつた。更に人事的要素の領域に入れば、超自然界の消息を傳ふる以外、全く現實を離れて居ない。卽ち喜怒哀樂の人世劇の幾多の場面は、悉く現世に執した作者の體驗そのものである。この點に於て西鶴の描ける世界は、人事的要素卽ち現實界の諸相を物語るものである。さきに西鶴物の特色として擧げた現實的傾向なるものは、とりも直さずこゝにあつては人世の葛藤を寫す「凡て」であつて、文學的內容としての人事的要素はこれに盡されて居るのである。

文學的內容としての四種のうち、猶感覺的要素を餘して居る。感覺的要素は先づ單純なる感覺機能によつて體得する、觸味嗅の劣等感覺から、視聽の高等感覺に至るまで、五彩陸離として人目を眩惑する世界に初まる。而して更に內的作用に立入り、心理的機能の助けによつて、あらゆる情緒は交互錯綜し、諧調と旋律とによつて玄妙なる美意識を喚起して、こゝに文學的內容としての職能を全うするのである。

かくて外界の美に感應する自然描寫と、內面の動搖とを現はす心的敍述とは、相俟つて內容の充實を示すのである。しかしこの感覺と情緒との纏絡による文學的內容は、强ちに西鶴に限るものでない。凡ての藝術品に通ずる普遍的事項である。故に今こゝには、その一々の實例を引用して說明する勞と煩とを避ける。

けれどその異彩として、喧囂たる是非の的となつて居る一點が猶存して居る。云ふまでもなく閨中祕事の大膽なる直寫で、この原始的感覺が强烈なる色調を以て現はされて居る事である。世人の多くが西鶴と云へば直ちにこの點を聯想する程、顯著なる

事實である。惱ましくも華やかな感觸の幻惑、肉體と情炎との柔らかな曲線美、紅燈の影に潛む夢と嘆きのシンホニヤ。凡てが遊戯的衝動に基く官能の手觸りである。この感覺は謹嚴なるべき武家物にも、若實を生命とする町人物にも、絶えず現はるゝところで、好色本にあつてはその基調は全く此處にある。年代を逆に趁ふて進めば、この華麗艶冶の世界の消息は、次第に濃厚强烈を增して來る。さきに性欲生活と好色本の世界との交渉を述べた時、西鶴の官能描寫は大體から見て、その情調氣分を重んじ、その對象たる遊里の寫實に於て、藝術的の匂ひが漲つて居ると說いた。然しこの眞摯なるべき匂ひを裏切つて、時々醜穢にして熾旺なあるものが曝露される。赤裸々なる性交の直寫卽ちこれである。たとへそこに言語上の隱微と着筆の曖昧とが、ある程度まで存して居ても Saufen und Huren の譏りは免れまい。この點に於て、深く彼のために惜まねばならぬ。世の西鶴崇拜者の多くが、この場面までも看過するのみか、却つて賞揚するの態度を持するのは、所謂ひいきの引倒しと云ふべきものであらう。先きにも云つたやうに、よし、かの性交描寫の部分を抹殺して了つても、藝術品としての價値は寸毫も毀損せられない。

思ふに西鶴辯護の聲は、畢竟かの發賣禁止に對する反抗の叫びに過ぎないと思ふ。もしかゝる場所に慣用せらるゝ○○の部分に植字して、何等の感じ（劣情挑發のみを云ふのではない）も起さないものは、いしあたまにあらざれば泥人形であらう。所謂高潔なる聖賢も亦この意味に於て何等かの感想を抱く筈である。

吾人は更に一言したい。禁賣問題と性交描寫の批難とは自ら別問題である。禁賣が道德對文藝の問題たるは勿論の事である。當局が風敎に害があると考へた以上、發賣を禁止するのは策の當然であらう。しかし作品の實質を精査して、法の適用と斷行とを更に徹底的にして貰ひたいと思ふ。卽ち作品と讀書圈との關係に留意を要する事である。この場合に就て云へば、それは西鶴の讀者なるものを考察に入れて貰ひたい。源氏物語を初め古今著聞集、宇治拾遺等の複刻を、平然として眺め得る現代日本が、

西鶴のみに酷なるは甚だ片手落ちの處置と云はねばならぬ。そこに言語解釋上の難易と云ふ問題はあらう。しかし元祿時代のこの種の作品を了解し得るものは、比較的高等な教養を經た智識階級の人であらねばならぬ。換言すれば、西鶴を讀み得る者はその描寫に醜穢な部分のあるがために、趣味を誤られて流俗に墮するやうなものはない筈である。もしあつてもそれは寧ろ例外に屬すべきで、世上紛々の事、例外までに介意する事は出來るものでない。なまじいに○○を附したり、禁賣して一般民衆に好奇の眼を見張らしめるのは、全然藪蛇的方策と云はねばならぬ。名のみ聞いた人が、西鶴と云へば全く春本作者の如く思惟するのはこれがためである。かくて私かに禁本を搜索して、劣惡の趣味を漁らうとする風敎の害は、こゝに至つて初めて萌すのである。

吾人の筆は計らずも感覺的要素に關聯して禁賣問題に流れた。しかし西鶴の作品の對象として文學的內容の諸要素を觀察する時、よつて享ける感じは以上の諸點で盡きて居ると思ふ。唯一々例證を以て證明しないのは煩雜を恐れるためと、且は作品の評隲に於て、その都度、これらの諸點に觸れて來たためで、こゝには單にその抽象論を以て總收とした次第である。

第二節　西鶴の文章

——形式より見たる特質——

浮世草子に於て、近代小說に一時機を劃した西鶴は、この內容を盛る形式に於ても亦在來の風格を一變した。一代男が兩樣の意味から、エポックを成した事は彼のために大なる强味であらねばならぬ。

在來の小說に使用せられた文章と云へば、平安朝の貴族文學の流を汲む御伽草子の幼稚なる雅文か、支那稗史の臭味を脫却しない生硬な文體であつた。いづれも模倣か不洗錬かの範圍を出でない、因襲的典型的な死文字が多かつた。たとへそこに二三、新らしい文體を創始せんと試みたものがあつたにしろ、未だ大成の域に到達するには

あまりに遠かつた。この間にあつて從來の雅文派を消化して、そこに日常生活と緊密な關係にある俗語を加味し、所謂雅俗折衷なる一文體を創翔すると共に、俳諧に於て洗錬せられた簡淨洒脫な風韻を添へて、こゝにすつきりとした肌觸りのいゝ、しかも生々した彈みのある新體を建設した功は、文章史上煙滅すべからざる偉蹟である。

吾人はこゝに文章史を說くのではないから、その變遷推移の跡を詳敍する事は敢てしない。しかし小說の價値が、半ば文章の力にある事は、今更贅々を要しない明白の事實である。西離の小說にあつては、特にこの感じが深い。むしろ西鶴に對する興味は文章そのものと云つても差支ない位であらう。

さきに各作品を論評するに當つて、出來るだけその風格を忍ばせるために、原文の引用を敢てした。これからの少なからぬ文例によつて、西鶴文が如何なる姿態をなして居るかは略ぼ推測するに難くないと思ふ。依つてこゝにはその特質とも云ふべき要點に就てのみ總括的に述べる。

先づ局部々々に入つて考察しやう。

一、助詞省略。これは所謂てには拔きの一體で、從來西鶴文の摸倣者が宛もその骨髓であるかの如く思惟したところである。それだけ目に立つ事も甚しい。

お夏清十郎に思ひつき、それより明暮心をつくし魂身の中に離れ。（五人女）

われ賴まれて文書くからは、いかに心なき相手なりとも恐らくは此戀思ひのまゝに請合ひ文章つくせしうちに、いつとなく亂れて。（一代女）

時の間の煙死すれば何ぞ金銀瓦石には劣れり。（永代藏）

日頃の大臣よろしく捌き置がるゝと見えて大座敷わたし亭主內儀が入替り輕薄數をつくし。（一代男）

の類で助詞を省略したがために、文章に何となく彈力性が加はり片言らしく聞えながら捨て難い趣がある。調味で云ふとおつとかひこついとか云ふ部類のもので、文品に缺けるところがあつても、粹な句法である。柳の五衣に檜扇翳す端麗（もでやか）さはないが、湯

上りのちらし髪の風情がある。浮世草子の題材にはふさはしい文趣である。

二、短句法。ぽつ切れの斷敍法や、名詞止めの句法がこの中に含まれてゐる。

六月中旬に御所柿を好み、此有樣華淸宮もかくやと思はる。曉風殘月、夜の冷み、今思へば夢。（一代女）

古今武士の鑑、刀は鞘に收め、御代長久、松の風靜かなり。（武道傳來記）

並木櫻の影に通町の中橋邊の何某、噪ぎ歌の四五人、頭を振つての手拍子、何れか當世男ならざるはなし。（懷硯）

殘つたものとては鶴菱の下若一つ、是も破れ時になりぬ。今一つ欲しや。（一代男）

禮場の朝風茂の草、蓬々と石佛はありしまゝにて立歸る。あら恐やの。（二代男）

長短の章句、相錯落して無限の詩趣が掬みとられる。かゝる手法は律語上の制約から來たもので、思ふに彼が前半生たる俳諧の修練に、その源泉を發したものであらう。

三、省筆。前の二項に連關して猶省筆の著しさが人目を惹く。これは敍述上言語を出來るだけ節約して、しかも情趣に於て却つて饒多なるを思はしめる。これも一面俳味を偲ばせる手法である。

本朝遊女の始まりは江州の朝妻、播州の室津より事起りて今國々になりぬ。朝妻にはいつの頃にか絶えて、賤の家淋しく島布を織る。男は大綱を曳いて夜日を送りぬ。（一代男）

上方へ立退きしに、七里半の道中にて時ならぬ大雷神、鳴り落たるとも覺えず行くに、萬太郎をのせたる馬ばかり殘りて口曳男立歸り、此不思議を語りつける。（本朝二十不孝）

城下より當年九つと申す小坊主を抱へ、……ある夕暮端居して後より團扇の風をあてさせ、心の儘睡られしが、骸ばかり殘りて此首なき事を驚き。（新可笑記）

「今國々になりぬ」との敍述の大膽さ。賤が家淋しくの以下には歌舞の歡樂の巷が、一朝桑滄の變によつて、摯實なる田園に化し去つた世相を背景に描いて簡潔の妙を極めて居る。又「馬ばかり殘る」人は震死を示し、「此首なき」には小坊主の仇討を香はせたのである。

色々詮議するに、いよ〳〵見えぬに極まりければ、竹島覺悟してこれ武運のつき、一分たゝぬ所なれば相手とるまでもなし。自害をさしとめ、後にのりたる侍の申せしは此刀の有所、某の推量大方は違ふまじ。（武家義理物語）

の如きは「相手とるまでもなし」の次に、竹島が自害せんとする動作を入れて見なければ文意は通じない。これらは省筆の甚しいものである。

この種の省筆と共に、古典に現はれた成語、或は當代の俚諺を引用し、しかもそれを悉く誌さずして、他は見る人の見るに任せたものもある。

程なく祝儀取急ぎ、樽杉折の山をなし、島臺の裝ひ、相生の松風、吉野は九十九まで。（一代男）

は世之介は百までとの心を含ませ、

吉歌に聞えし御侍みやぎの野の萩山勝五右衞門と云へる男。（武道傳來記）

は古今集の「御侍御笠と申せ宮城野の木下露は雨にまされり」の歌から一轉し更に萩の名所と云ふところから掛詞を用ゐたのであり、

人の家にありたきは梅松櫻楓それよりは金銀米錢ぞかし。（永代藏）

は兼好法師の「つれ〴〵草の文句から外らしたのである。これらは省略法と云ふよりも、省略したところに潑溂たる奇才を仄めかしたのである。

以上の諸點を總括すれば雄勁簡明の文趣に富むと云ふ事になる。從つて文脈に云ひしらぬ彈みがついて勢のいゝ力强さが湧いて來る。彼の題材のあるものが優柔艶冶のだらしない情味に浸潤しながら、齒切れのいゝきび〳〵した風趣を現はして居るのは、一方にこの文體が基因するのである。

この敍述法は西鶴の文章中、主要なる特質として幾多の摸倣者を出した。明治になつても西鶴復活の聲につれて、硯友社の人々を初め、幸田露伴、樋口一葉等この風格に私淑するものが多く認められる（殊に尾崎紅葉の如きは文體のみならず、一代女を摸して、伽羅枕を作つた）。かくてこの新味ある筆法も陳腐となり舊套となり、今や亡骸の如き面影を止めるに過ぎないが、創始の功は長へに沒すべからざるものである。猶西

鶴一個人の文章發達の徑路に從へば、大體に於てこの筆づかひは、年と共に減じて行つた感がある事を申添へて置く。

更に筆をすゝめて全般からめ眺やう。

簡勁にして彈力性に富むこの氣のきいた文體を、內容と結びつけて考へる時、吾人は印象的なる評語の最も緊切なるを覺える。

彼は一篇の說話を構成するに當つて、その場面を鮮明に的確に描き出さんと試みたその結果、讀者の享受する印象は頗る强く且鮮である。一代男や一代女に現はれた色戀のシーンは、凡てこれである。きれ〴〵なるべき說話の配置賦色も、この印象的構成法に素因があると思ふ。中にも渾然として連絡あり照應あり、採るべきをとり捨つべきを捨てゝ顧みない態度の顯著なのは五人女で、この長所が水際立つて現はれて居る。この印象的場面の配置と共に、表現法にあつても印象的なるを忘れてはならない。西鶴の作品を通じて印象的氣分の饒富なるはこの複式印象の結果に外ならぬ。

かのお七の放火を敍して

少しの烟立騷ぎて、人々不思議と心がけ見しにお七が面影をあらはしける。これを尋ねしに、包まずありし通りを語りけるに世の哀とぞなりにける。

と云ひ、又お夏が櫻狩の花見幕に

蟲齒の痛むなど、少し惱む風情に袖枕取亂して、帶はしやら解けそのまゝに、數多のぬぎ替小袖をつみ重ねたる物かげにうつゝなき空斯心にくし。

の如きは、この傾向の行詰つたところである。

かく天馬の蹄が大地に印するやうに、局所々々に力强く痕跡を殘す印象的筆致に纏綿して、精緻なる聯想の働がある。

人は皆烟の種、富士の山はげしき風病はやりて難義を駿河の町にくすし隙なく、旦那寺の間を叩き無常はいつを定め難し。（本朝二十不孝）

折節春雨の夜桃林に、追ひ出し浴衣一つに辛らやの姿、烏羽玉の取揚髮は白き筋なき瀧と流れ

て、木蔭を宿の枝泄る雫に泪を爭ひ、春の夜の夢ばかりとも詠みしに今宵は秋の夜とも思はれ、惜しまぬ曙は深く尙頻りに車軸して、行く水の流れほど身の淺ましきはなし、うたかたの今にも命の消えるに山川の音もせぬかと嘆く。（二代男）

身は限りあり、戀はつきせず、無常はわが手細工の棺桶に覺え世を渡る業とて錐鋸のせはしく、飽屑の煙短かく難波のあしの屋をかりて天滿と云ふ所からすみなす男あり。（五人女）

夫よりは夫婦一つの川舟に、竿さゝせて行ては歸る仇波の身は浮草の花に誓へ、咲て萎るゝ限りと螢を石火の明方に見なし、名殘の座敷も妻女一所に別れ、假にも枕は見ざりき。（新可笑記）

古典に慣用せらるゝ緣語、掛詞、或は枕詞、或はパロヂーの類で、所謂文字上の因襲的聯想が主要分子となつては居るが、多少の新味は汲とるに難くない。しかも文字の裏に潛むその場〳〵の情調が明らかに浮上つて居る。この內容と形式との融合せる長所も是非認めてやらねばならぬ。

暢達自在なる用筆の働きは往々にして譎詐變幻、端睨すべからざるの境地を拓く。簡潔雄勁を特質とする西鶴の文が、時に淸泉の滾々として湧き出づるが如く、白雲の岫を出でゝ止まざるが如く、縷々として續き、舒々として連なる偉觀を現出したのはこれが爲である。從つて簡勁は變じて緻密となり、斷敍は化して緜連となつた。好色本に於ける遊里情調、町人物に現はれたる貨殖趣味はこの文調を最も鮮明に現はして居る。

今、文例として少し長いとの煩ひはあるが幽婉にして悲愁の哀調を奏でた五人女のうちお夏及お七の最後の條を引く

何事も知らぬが佛、お夏淸十郎が果敢なくなりしとは知らず、とやかく物を思ふ折ふし、里の童部の袖引連れて淸十郎殺せばお夏も殺せと唄ひける。聞けば心にかゝりて、お夏、育てし姥に尋ねければ返事しかねて涙をこぼす。さてはと狂亂になつて生きて思ひをさしよよりもと子供の中に交はり音頭とつて唄ひける。皆々これを悲しく、さまぐ〳〵とめても已み難く、間もな

く涙雨ふりて向ふ通るは清十郎でないか笠がよく似た菅笠が、やはんほゝのけら〳〵笑ひ。美しき姿いつとなく取亂して狂ひ出でける。或時は山里にゆきくれて草の枕に夢を結べば、そのまゝにつき〴〵の女も自ら友亂れて後は皆々亂人となりにけり。清十郎年頃語りし人どもせめてはその跡殘しをけとて、草芥を染し血をすゞき戸を埋みてしるしに杉柏植ゑて、清十郎塚と云ひふれし世の哀れはこれぞかし。お夏夜毎にこゝへ來りて弔ひける。そのうちにまざ〳〵と昔の姿を見し事疑ひなし。それより日を重ね百ヶ日に當る時、塚の露草に座して守り脇差を拔きしを漸々に引止めて只今空しうなり給ひて樣なし、誠ならば髪を下させ給ひ末々亡き人を弔ひ給ふこそ菩提の道なれ我々も出家の望と云へば、お夏心を靜め皆々の心底察してともかくもいづれも指圖は洩れじと、正覺寺に入りて上人を賴み、十六の夏衣けふより墨染にして朝に谷の下水を結びあげ夕に峰の花を手折り、夏中は毎夜灯をかゝげて大經の勤め怠らず、有難比丘尼とはなりぬ。（五人女、――卷一、お夏）

此女思込みし事なれば、身の窶るゝ事なくて毎日有りし昔の如く黑髪を結せて美しき風情。惜しや十七の春の花も散々に、杜鵑まで總鳴に卯月の初めつかた、最後ぞとすゝめけるに心中更に違はず、夢幻の中ぞと一念に佛國を願ひける心ざし、さりとては痛はしく、手向ぞとて咲遲れし櫻の一本持たせけるに、打詠めて「世の哀れ春吹く風に名を殘しおくれ櫻の今日散りし身は」と吟じけるを、聞く人一しほに痛ましく其姿を見送りけるに、限ある命のうち入相の鐘つく頃、品かはりたる道芝の邊にして、その身は憂き烟となりぬ。人皆いづれの道、烟は逃れず。特に不便はこれにぞありける。それは昨日、今朝見れば塵も灰もなくて鈴の森、松風ばかり殘りて旅人も聞傳へて只は通らず、回向してぞその跡を弔ひける。さればその日の小袖群内縞の切れ切れまでも世の人拾ひ求めて、末々の物語の種をぞ思ひける。（五人女、卷三、――お七）

秋濤の描き難いのは萬人の認むるところである。景に情を寄せ、情に景を托する境地は凡筆の盡す能はざるものである。五人女に現はれたる上記の場面の如きは、景情雙絶と云ふも蓋し溢美ではなからうと思ふ。

然しながら、日の當るところには屹度影が翳す。纖細巧緻の方面に於ける着筆が、

單に物品の陳列に終つて何等の詩興をも喚起しない弊が伴ふ。

人の見知る程の大臣は、肌着に隱し緋無垢、上には卵色の縮緬に思入れの數紋、帶は薄鼠の紡織、羽織に吳絽服連、黑きに縞天鵞絨の裏をつけ、町人拵え七所の大脇差、少しそらしてあい鮫をかけ、鐵の古鍔小さく、柄長く金の四日貫打つて鼠屋が藤色の糸、平印籠に色革の巾着、瑪瑙の二つ玉、唐木細工の根附、扇も十二本、祐善が浮世繪、小菊の鼻紙、運齋織の袋足袋、中拔の細緒を履き、大草履取に笠杖持たせて名ある太鼓のつゞくこそ暗がりにして御女郎買と知るぞかし。（二代男）

吾人が先きに風俗資料と呼んだ描寫は卽ちこれで、作者の興味は想像するに難くないが、讀者はこれによつて部分的描寫の送迎に忙殺されて生きた通人の姿を髣髴する事は出來ぬ。

これは單に一例に過ぎぬが遊里描寫に於ても少なからずこの種の敍述がある。かくの如きは藝術上の所緣と對象との關聯を誤用したのであつて、却つて印象の朦朧を齎らすのである。

當世貌は少し丸く、色に花櫻にして面道具四つの不足なく目は細きを好まず、眉高く鼻の間せはしからず次第高に、口小さく齒並あらくとして白く、耳長みあつて緣淺く、身を離れて根まで見えすき、額はわざとならず自然に生えどまり、首筋立のびて後毛なしの髮、手の指はたよわく長みあつて爪薄く、足は八文三分に定め、親指反つて裏すきて、胴間常の人より長く、腰締まりて肉置たくましからず、尻つきゆたかに。（二代女）

は、同じ筆法を以て理想の女の肉體に及ぼしたのである。これによつて絕世の美女の仇姿が眼前に現はれて來たならば奇蹟である。このゆき方は後世、曲亭馬琴一派に行はれ、更に明治になつても尾崎紅葉等の所謂寫實主義作者には珍重されたものであるが、要するに文章上の低級趣味である。

立戻つて、景情の纏絡に關し猶一言すれば、その才藻に任せて奔放の筆をやつたものがある。

浪は枕の床の山、露はるゝまでの亂れ髪、物思ひせし顔ばせを、鏡の山も曇る世に、鰐の御崎の逃れ難く、堅田の舟よばひも、もしや京よりの追手かと心の玉も沈みて、長らへて長柄山、我が年の程も爰にたとへて都の富士にも足らずして頓て消ゆべき雪ならばと幾度袖を濕らし、志賀の都は昔語りと我もあるべき身の果ぞと一入悲しく龍灯のあがる時、白髭の宮所につきて神祈るにぞいとゞ身の上は悲し。（五人女――おさん）

さて遙かの旅なれば、路銀はあるかと互に巾着紙入搜せば五人の中に金子一兩三分、銀が九匁錢二百、昔は田町の露にもさて、今大切な銀なれば、隨分始末の夜をこめて日數重なる山を越え、橋の浮舟隙の駒、松の葉末を走りゆく。印の竿は降り埋む、雪に聲ある里とへば福井の町に棟高き、小林仁兵衛殿に尋ねゆき。（二代男）

の如きはこれである。讀誦すれば西鶴が淨瑠璃作者としても決してその名を辱めぬだけの詩筆々有して居た事が分る。しかし、かゝる筆致は興味中心の物語には已むを得ない事ではあるが律語と散文とを混用したものとして、この場合むしろ排斥すべきものである。

暢達自在の筆勢の往々にして釀すべき文章上の暗側面は、上記の明側と共に注意すべき特質の一を作成して居る。

次に指摘すべきは一種のウイットの閃めきである。西鶴に於けるこのウイットは、機智と云ふには少し強く、皮肉と呼ぶには穩かに過ぎる。又哄笑でもなく駄洒落でもない。輕い意味の人生觀、低い程度のユーモアである。

獨り寢られぬまゝに身を一萬兩持になつて先づ普請からして、人もあまた置きて花月を請出して、遣手にも宿にも小判の花を降らして、京から妾を置きて、物の靜なる向島に下屋敷二百人前の淺黄椀、三町許りの牡丹畠を拵へ我が家の自由は花車に乘つてあるき、鼻も人にかませ月も夢見て居て剃らせ、油火見ずにと胸算用すれば、一萬兩も二年まではなし、三萬兩の分限になつて見て思ふまゝに遣つて見るこそ心ながら可笑しけれ。（二代男）

の如き蕩兒の心理を的確に把持したもので、作者の社會觀をほのめかした一種の穿ち

である。この態度を一局部に縮めて、しかも精緻なる洞察と鋭利な批判を放つたものは

御所かつぎの取まはし、薄色の絹足袋三筋緒の雪駄、音もせずありきて、わざとならぬ腰のすはり、あの男めが果報と見る時、何かしたゞ〳〵一物をいふとて口をあきしに、下歯一枚ぬけしに戀を覺しぬ。（五人女）

程なく色里の門口につきてすぐには入かね、暫く立休み、揚屋より酒取に行く男に立寄り、此御門は斷りなしに通りましても苦しうござりませぬかと言ひければ、彼男返事もせずおとがひにて敎へける。さてはと編笠ぬぎて手に提げ中腰かゞめてやう〳〵に出口の茶屋の前に行過ぎ。（永代藏）

の類である。かの二代男に現はれた蕩兒の一人が國許からの狀を見て「太夫は無事か、親爺は懲りたかおふくろは泣いて居らるゝか」と云はしめたのも作者の觸るれば切れるやうな鋭い觀察力が現はれて居る。而してかゝる筆致からその批判的態度を除いても、零碎的短文の中に渾然たる情味が汲まれるし、又批判の方面のみを强度にあらはす時は、敎訓物に屢々あらはれたやうな寸鐵的警句となるのである。

忍びて後に立廻り名乘りもかけず打つ太刀、夕日に移りて輝く影に驚き避け給へば。（武道傳來記）

夜や八つ頃なるべし常香盤の鈴落ちて響きわたる事暫くなり。（五人女）

は前者の例で

用心し給へ國に賊、家に鼠、後家に入婿、急ぐまじき事なり。（永代藏）

人の心程變り易きはなし、靜かなる浦に家の風を吹かし、浪の噪しきも身を修めぬが故と、世間より指さるゝは口惜し。（二十不孝）

はその後者に屬するものである。

この敍事の間に作者自身の批判や諷誡を挿む形式は隨所に散見するところで、西鶴文の一特質とする事が出來る。

菊の節句より先きに逢はし申すべしといへば、樽屋いどゝかし燃ゆる胸に燒付け、かゝ樣一代の薪は我等つゞけまゐらすべしと、人は長生のしれぬうき世に、戀路とて大分の事うけあふは可笑し。（五人女）

何ぞ隱し男する女、うき世に數多あれども、男も名のたつ事を悲しみ沙汰なしに里へ歸し或は見つけてさもしくも金銀の慾にふけて曖にして濟まし、手ぬるく命を助くるが故に此事を止み難し。世に神あり報あり隱しても知るべし、人の恐るべき此道なり。

かゝる敍述法が永續する時は情趣の涸渴を來し往々にして藝術の埒外に逸し去る事もあるが西鶴の批判訓戒は、しかく强烈でない。たゞ彼の創作が後年教訓的口吻の著しくなるに從つて、文情のふくらみがとれて漸次枯淡に傾いた事は爭はれない事實である。

或は簡勁と呼び彈力性と名づけ、或は暢達自在と云ひ機智の閃めきと號するも畢竟これ才華喚發せる文藻に外ならない。而してその適度を脱却した時、彼が學殖上の不足と結びついて、こゝに文法を無視した破格の文體が出來上つた。破格の文體に對して吾人のとるべきは、善惡是非の問題でなくして風格の問題である、情趣の問題である。天才の文章は常に文法を超越する。文法とは方便のもので、絶對の權威はない。故に巨人の文は創造を生命とする。西鶴も亦この範疇に入るべき文章の創始者であつた。

文章上の破格の程度は、作意の本旨が汲みとられる範圍であらねばならぬ。面白味はこゝにある。もし破格なるがために、意義の不明を來したり、他意に了解せられては、既に瑕瑾の領域に踏込んだものである。西鶴文の破格はこの兩面に亙つて居るが、比較的前者に屬すべきものが多く、從つて面白味に富むの結果を齎らして居る。中にも著しいのは人稱の桁外しである。卽ち一文章中にあつて主格がいつの間にか移動して居るのである。

心の程を見定め、其年の十二月二十五日さも閙がしき折節、今日こそ忍べとの御内證、さる揚屋

にいつより早く御出あつて待ち給ふこそ嬉しく、上する女に心を合せ小座敷に入りて語りぬ。如何に思召しけむ火燵の火消させて折柄の烈しきにこれを不思議に思ひながら數々譯もない事して興ある所へその日のお敵、權七樣お出と呼びつぎぬ。少しも急かず火燵の下へ隱れけるこそ最前に思ひ合せて賢き御心入添くてたとひ燒け死ぬるとも爰ぞかし。彼男不思議の立つ樣に別の事もなき文持ちながら臺所へ逃げられしを男追駈け見る見せぬの爭ひ、しばし暇入るうちに世之介は裏へ拔道ありける。（一代男）

これは一代男世之介が夕霧に忍ぶ折、鞘當筋の權七が不意に來たところで、困點の場所は主格たるそれ〳〵人物の動作が、文脈上相纏絡して居るのを示したのである。この場合破格なるがために倉皇たる姿態さへ偲ばれて、云ひしらぬ妙味が湧いて來る。かゝる破格の例は蚤取眼で穿鑿するまでもなく、隨所に散見せられる。但し意味の捕捉に格別困難がないと云ふまでゞ、破格なるがために特殊の興味を起さないのも多い。

次に自他の混用に就て一言する。

ある角力狂の若丹那に困りぬいた一門が、內談して嫁をとらした後の敍述に

祝言事すみて後一度も部屋に入る事なく首尾の惡きを嘆き乳參らせて育て上げしに此事言はせければ男盛りに力落しては口惜し。

とあるのは主格の省略と共に自他の混淆を來して文脈が撚れて居る。これは訂正しても情趣に變りのないものである。更にこの方面を一歩進めると

一、さてはその宮樣に似たとは何處か似たと戲るゝいづれを申すべきや、一として生寫し。
一、世のむつかしき女に逢はぬが此德何に換ゆべし。
一、笠に扇は何忍ぶぞかし。

の類となる。云ふまでもなく「一として生寫ならぬはなし」「何にかは換ゆべき」「笠に扇は何忍びてぞ」とあるべきで、屢々使用されし「をかし」「爲せし」の假名づかひや誤法と共に些細の留意によつて訂さるべきものである。

上述の諸特質を包含せる文體を以て、西鶴は元祿時代の現實社會を縱横に描破した。かくて勁拔と優艶と簡明と細密と、絡れつ縺れつ、合ひては離れ、離れては合ひ、或は濃艶の世界を描き或は慘苦の世相を寫し、面のあたりに展開する現實の樣姿を捕捉した。自然を敍してはよくその核心を捉へ、超自然を筆にしては凄愴の氣肌に迫る。理智を語れば才華閃めき、滑稽を述べては好謔口々衒く、而して筆端一度官能に觸るゝや、微妙なる神經はこゝに顫動して、蠱惑の力美を恣にするのである。

たとへそこに二三の瑕瑾缺陷はあるにしろ、創意と新味との隨所に横溢せる文章は、時代を劃した點に於て、群少作家を凌駕した點に於て、更に當代初め後世に幾多の崇仰者摸倣者を出した點に於て、まさに史上の偉觀と言はねばならぬ。

かの近松の文章を、櫻散りゆく春の入江とすれば、西鶴の文章は村雨過ぎし落葉の山である。かれには、しつとりとした華やかな淡愁と悠揚とがあり、これには痛ましい沉寥と切實とがある。一は詩化せられたる美の旋律を語り、一は隱しきれぬ現實の相を露はす。もしそれ近松の彩管縷々として絶えず、しかも描き出す賦色、よく豫感に映じ來る事、宛も溶々たる大江の一眸千里、遠山を含み長汀を洗ひ、晝夜を分たざるが如き姿ありとすれば、西鶴の落筆の變幻極りなきは、岩に激し谷に咽び白を沸し藍を湛へて、折れつ曲りつ峽間を急駛する奔流の如きものであらう。

第三節　批判の聲

「批評そのものよりも批評せられた作品の方が、後世に至るまで、より多くの讀者を有するであらう」とは、メレシュコフスキーがイブセンの非難者に向つて放つた言葉と聞く。一藝術家に對する批判の聲が、毀譽褒貶のいづれにあるにせよ、歷史の浪に從つて幾百歲の後までも上下せらるゝは、畢竟、作家そのものゝ大を語るものである。わが西鶴に於ても、元祿の昔より大正の現代に至るまで、幾度か是非の論議を提供して居る。今その重なものを略說して最後に結論に及ぼうと思ふ。

西鶴が存世中に於ける華やかな讃嘆の聲は、歿後直ちにその反動として强烈なる批難の聲と一變した。その重なるものを梅蘭堂の元祿太平記とする。この著者は先づ大阪者の口を籍りて、當代に於ける西鶴流行熱の一端を洩らした。

まことに西鶴こそ、わけの聖なりける。西鶴なくなりて、ぬれの文とゞまれり。されば難波のよしあしにつけ、和文發明におるては、西鶴にまさる作者はあらじ。

次で京の者をして直ちに反駁せしめ

そなたは難波の住人として、西鶴ひいきのあまりにほめ過したる言樣かな。勿論西鶴が輕口ぬれ文の發明、諸國に聞えてその身ほまれをとるに似たれど、譽れは譏りの基とかや。もとより西鶴文盲にして書法を知らず。その證據には好色一代男世之介の島わたりの段にいのこづちと午膠と別にかけり。午膠の和名をいのこづちと云へば、名は二つあれども本一種也。西鶴の心にはいのこづちと午膠とを別の物ぞと思ふにや。かやうに世俗まで辨へたる事さへ考へぬ西鶴なれば、まして其外の事とるに足らず。あるは曾子の言葉を孔子の語となし、枕草子の文を源氏物語に讓りたる事多し。凡て西鶴が作れる草子には小大のあやまりあらずと云ふ事なく、ひたすら片言をのせずと云ふ事なし。

と論じ、更に筆をすゝめて、西鶴が「娑婆にありし時、身にもかゝらぬ世の人の方便を誠に取りなし藁を燒きし科」によつて、阿鼻地獄に墮在して苦患する狀を描いた。

この墮地獄一件は既に元祿十年刊行の西鶴冥途物語（五冊本）に於て取扱はれたもので、元祿太平記はこれを蹈襲したのに過ぎない。しかしこゝでは彼が存命中、池野屋なる書店から好色浮世躍と云ふ草子の稿料を取り、茶屋遊びに消費して原稿を渡さなかつたが、冥土で池野屋とばつたり出逢つて大に凹む事をも敍して居る。

要するに元祿太平記の批難は、西鶴の無學を指摘し且人格上の缺陷を書きつらねたものである。全體から見て一方西鶴の長所を認めながら、ある魂膽のために誹謗の聲を放つたかの如く感ぜられる。

同じ年、都の錦は御前御伽婢子に於て

とかく假名物は西鶴流にしたゝめ給へ……西鶴が時代は野卑な言葉計り云ひふれて一盃宛は啜りけれど今時その手は喰はぬ粹同士云々。

と云つて居るが、これも西鶴を當代の大立物とし、更に自己紹介を試みた書であるから、純正の批判ではない。むしろ、これより先きに出た元祿十二年板の今日の昔が

是等の發句なりと、一生を夢裏に迎れる淺ましし、渠は此筋の野人にして論ずるに足らず。

とて先づ彼が俳境の凡俗趣味を痛罵し、進んで

剩へ晩年には好色の書を作りて活計の謀としたる罪人、志あるもの誰か惡まざらん。

と明らさまに慷慨の氣を漏らして居る方が、藝術批評の的は外れて居るが、世論の一端が見えて興味がある。

これら上記の諸書に於ける西鶴排斥の口吻はいづれも文學的價値の批評とは頗る緣遠いものばかりである。

しかし、かの墮地獄を點出した想意は、卽ち當代の好色本流行に對する批難であつて、風敎問題から見た道德的私議と云ふ事が出來る。吾人はこれによつて社會思潮の一面を覬覦し得るのである。

以上を當時の批評とすれば、近代後期の江戸文學爛熟期たる文化文政時代を代表するものは、燕石襍誌に記した瀧澤馬琴の評言である。

此人(西鶴)肚裏に一字の文字なしと雖も、よく世上に渡りて戯作の册子數多著はし、一時盛名を高うせり……人々今日眼前に見るところにして滑稽をつくす事は西鶴より初まれり。さはれ、もはら遊廓のよしなし事をのみ綴りて、其書猥褻なりしかば世の譏を免れず。身まかりて後に攝陽の梅菌堂の諸藝太平記(編者註、――元祿太平記の誤りらし)と云ふものは西鶴地獄巡りと云ふ事を作り設けて甚しく嘲弄してけり。然れども其書を見れば西鶴に及ばざる事遠し……戯謔も思ひより出でざるはなし。遊里洞房の癡情などは親しくたちふるまふに非ずとも知り易きものなれば筆に任し其趣を盡すときは作者のこゝろざま推量られ德を傷くるものなるべし云々。

かくの如く、第一に無學を擧げ更に內容に牴觸してこれを評價し、梅蘭堂の筆力に一針を加へて暗に西鶴を賞し、最後に作家の品性と取材の範圍に及んで居る。あまりに簡明ではあるが、先づ批評らしい批評である。勸懲の大旆を頭上高く飜した道義的意識の强烈を標榜した馬琴が見解として、尤もらしく首肯せられるではないか。

降つて明治時代に入つては馬琴一流の理想主義の反動として坪內逍遙氏の小說神髓が現はれた。こゝにまづ文學的革命が行はれ、寫實主義の謳歌と共に西鶴復活の聲が文壇に瀰漫するに至つた。その前後に亘つて、鶴西是非の論議は喧々囂々を極め甲論乙駁底止するところを知らなかつた。この頃の論爭を一々こゝに云ふ必要はあるかも知れないが、その煩は避けたい。唯その一端として明治二十八年頃に出た島村抱月氏の西鶴論（風雲集所載）の一節によつて、斯般の消息を覗ふよすがとする。

日本文學史の著者（三上、高津兩氏）は西鶴を評して「深遠なる學識あるにあらず高雅なる思想を有するにあらず。その作いづれも猥雜卑陋にして後世識者の譏を免れず」と云ひ、好色五人女の飜刻者は「さはれ西鶴は一個の詩腦を蓄へしが故に、閭巷の些事を見るも凡そ眼に觸るゝもの凡て自家の詩材に供へしかど彼は小說家にも物語作者にもあらねば、元より彼の手腕をもて京傳及馬琴と比ぶべくもあらず。彼が述作は足利時代の小話を一轉し分明に一種の浮世草子派なるものを起し小說世界の一紀源を開きしかど悉く端物にして廣く人間を觀察せしも社會の一部に過ぎず殊に性情を面白く寫せしも其變化流轉する所以を詳かにせず、深く世態と人情との關係する處を說明せしにあらず、又最高の理想あつて是を人事に寓せしにあらず。されば小說家としてこれを尊ぶこと頗る疑はしく、京傳馬琴以上にあるべくも思はれず、思はれざるも彼が價値は毫も減少せざるなり」と云ひ、また「西鶴と芭蕉とは以て元祿時代を代表すべし、共に厭世家にして高く超然たりしが、西鶴は放縱に流れし故に唯俳諧に滿足せずして其奇才を驅つて卑猥なる社會を毫も假借するところなく、有りのまゝに描寫して獨り樂み、獨り笑ひ、一般の我が文學者と同じく、社會的觀念は微塵もなく破天荒の浮世草子はひたすら色道の隱微に渡りき」と云へり。その他彼を樂天的と云ふものあり、彼の理想を粹の一字に留むべしと論ずるものあり。知らず西鶴の眞價畢竟幾何ぞ云々。

右の論述によつて當時に於ける諸家の見解も略ゝ會得する事が出來る。されど廬山の向背、峯となり巒となる。一にその立脚地が異るがためである。中には西鶴の俳味と芭蕉の俳境とを同一視するが如き雜駁な所論も見えるけれど、要するに西鶴が作品の長所短所は論難の間に明晰に指摘され曝露されて居る。崇仰の色眼鏡を除き、憎惡の薄紙を避けて、淨玻璃の面に反映せしめた時、そこに絶對的の價値とは程遠い、明暗兩側面を具有する作品なる事は、冷靜に觀察するものゝ何人も氣付くところであらう。

こゝに注意すべき一事がある。最近、文學史研究の發達につれて漸く彼の全般批評を聞く事が出來たが、在來に於ける西鶴批判は常に好色本をのみ對象として論議せられて居た。現代にあつても、西鶴と云へば直ちに好色本を聯想せしむる一般的傾向は、勿論かの禁賣問題がこゝに導いたのであらうが、所詮は、その論爭の契機はこの範圍を出でないやうである。

されば西鶴批難者は、まづ好色本の題材と文章造句の卑猥を擧げ、辯護者の多くは活社會の實相を描寫する點に於て寫實の本義ありとし、卑猥なる筆致に關しては或は人間の醜惡を描くものとし、或は他より類似の作品を拉し來つて、暗に西洋近代文學と共通の一面あるを示して、唯一の味方とせんとするものゝやうである。好色本の題材としての遊里描寫に就ては既に述べた。この點は當代の社會制度に着眼すれば、何人も强ちに排斥すべからざるを了解するであらう。否むしろ觀照的態度の如何によつては、人情の極致はこの里以外に見られなかつたとも云へる。但し、その猥雜な章句は如何にしてもその辯明に苦しむところである。唯西鶴のために買つてやるべきは、道義のやかましい時世にかゝる淫佚の文辭を敢てした不羈洒脫の襟懷である。しかし年と共にこの態度は改められたが、或は却つて思はせぶりに陷つた弊もある。當時にあつて非難せられ、今日尙發賣禁止の厄に逢ふのは、文學と道德との差をこゝに說くまでもなく、西鶴の筆の辷りかたが餘りに極端に走つたからである。吾人は重ねて斷

言する。かの隨所に散見する祕戯の細寫を抹殺するも決して西鶴の價値に影響するものではない。

もしそれ、近代の自然派文學を引合に出して辯護せんとする者があるならば、それは西鶴の文辭の巧妙に眩惑せられて、菽麥を辨せざる者の言ふ事で、夫子自らの koi-yas（色情狂的遺傳を有する一種の精神病者）なる事を告白するものである。而して西鶴に現はれた肉欲描寫と近代文學に於ける性欲生活との間に大なる溝渠がある事は、既に指摘したから再び贅説しない。

因に云ふ。近時西鶴の諸作の一二を現代文に書き直し、或は飜案して市に問ふ者のあるは、估らんかなのためか、然らざれば不眞面目な遊戯衒動に基く述作に過ぎない。これ一にその頽廢的氣分の共通に歸因するのである。

以上、章を分ち節を重ねて、縷説した西鶴の創作を通じて、その價値と認め得べき要項のみを列記すれば

一、作品創始的にして一時期を劃せる事。
二、直接經驗を基調とする寫實なる事。
三、從つて活社會の世相が鮮明に描出せられ居る事。
四、文章も亦創始的なる事。

である。

わけて文章にあつてはその特色は初期にあつた。年代に從つて枯蒼と云ふよりも想泉の渇涸せる傾向が著しい。紅紫瞭亂たる好色本の妖艶と、嘸銀のやうな底光りのある町人物の澁味とを除けば、殘るところは彼のために氣を吐くに足らぬもの計りである。

而してその道程は、內容にあつても形式にあつても、絢爛より平淡に入るの趣は爭はれない。栢には兩面ある。織り出す唐草模樣の優麗に魅惑せられて、その裏を忘れてはならない。明暗二側はあらゆる創作につきまとふものである。西鶴にあつても亦

長所のために短所を糊塗する事はできぬ、短所のために長所をも唾棄するは猶更であらう。

思ふに、彼が天才的詞藻と燃犀的洞觀と相俟つて、元祿の時代を活潑々地に躍如せしめた功績は、特筆大書して文藝史上に縷刻せらるべきである。しかし永刼不滅の人間の記錄として見るには、彼の作品は未だ遠い。要するに彼れ、井原西鶴は時代に生き時代に死した大なる作家であつた。

補遺

西鶴の摸倣

西鶴の創作全般に亘つて一通りの論評を試みて來た私は、ある一つの問題に就ては可成觸れてゆかない態度をとつた。それは常に大作家の後に起るべき事實、卽ち「後代文學に及ぼせる影響」これである。しかし問題が大きいだけに、今その史的關係を闡明すべき餘裕がない。それで個々の問題として比較的範圍の廣いもの、又摸倣のあとの明らかなもの二三に就てのみ解說して、幾分の補遺に充てたいと思ふ。

一　「一代男」の類本とその末流

藪蔭に生ふる筍の、春の土を跳返す幾本も、糺せばもとは同じ根である。西鶴の手によつて浮世草子が建設せられてから、その追蹤摸倣を敢てするものは夥しくあつ

た。わけて好色本の流れを汲む作品は長く續いて、一代男の亞流と目さゝるゝ作品はかなりに多い。今その直系たるべき數種の作品に就て解說し、そこに磅礴する中心思想をも顧みたい。

西鶴が好色本の初作は云ふまでもなく一代男である。而して二三種同類の物語を殘した彼は、早くも他方面に開拓の歩を進めて行つた。然るに世人の鑑賞は全く好色の世界から脫離する事が出來なかつた。これは幾多の一代男の後繼者が現はれて、相應の喝采と仰望とを恣にして居るのを見れば、思半ばに過ぎるであらう。

その第一に擧ぐべきは浮世榮華一代男である。最初の外題は好色四季咄と云つて貞享年間（日本小說年表には貞享四年）に出た。後、元祿六年に上述の如き一代男の名を繼ぎ、同十一年には好色堪忍記、正德三年には浮世花鳥風月と改めて居る。この四度の改題刊行が如何に當代の人氣に投したかを現はして居る。

一篇の趣向は、江戸生れのある男がふとした動機から、淺草觀音の境內にある業平の祠に詣でゝ色道の榮華を祈る。するとある日の夢枕に

汝が身に應ぜざる願ひ叶ひ難し。前生にしてまんざらの戀しらず。此道にもとづける程なければ神のまゝにならざり。然れどもこれ深く嘆くも痛まし。是を與へけるぞと金銀珠玉を鏤めし花笠を渡し給ひ己れに具らぬ榮華なれば耳に聞き目に見るより娛みなし。

とあつた。そこで隱れ笠の忍之助と名乘り、諸國の戀を見盡し聞盡すと云ふ筋である。

作品の對象世界は町人及び武家の奧向で、遊里には筆を着けて居ない。當代のものとしては珍らしく新機軸を出さんとする作者の考慮が偲ばれる。而してこれらの世界の消息は女性の內生活、特に性欲生活を中心としたもので、人間の醜陋な方面を大膽に描寫して居る。勿論、醜なる人生の半面を曝露してそこに戰慄と悲哀とを感得せしめると云ふものでなく、作者はたゞふざけ半分の遊戲的衝動から筆をとつた事は明ら

かである。描く人も描かるゝる社會も、偸安と歡樂とに浸染した太平の逸民であつた。所詮、當代人の理想境の斷面を、蟲眼鏡的に誇張して寫し出したので、その描法も惡寫實に陷つて如何かはしい方面にまで墮在して居る。これは云ふまでもなく西鶴の暗倒面を繼承したのである。かくて展開し來る幾多の場面は皆ちぎれ〳〵の斷片的說話で忍之助は說話々々の單なる連鎖に過ぎない。卽ち一代男世之介と同じく一種の傀儡的人物として取扱はれてゐる。從つて作品の興味は場面々々特有のものである。かの放縱なる町女や淫蕩な武家女の生活には、そこに誇大と强調とを免れないにしても、女性の弱點にある程度までの理解が現はれ、人間性の深味が幾分滲み出してゐる。この作品の身上は此處にあると思ふ。

猶一言すべきは隱れ笠の傾向である。かくれ簑かくれ笠の話は元來異國趣味のものであるが、古來醇化せられて日本傳說の一領域を占めてゐる。しかも榮華男はこの背景の上に、支那稗史に見える隱身術によつて後宮を亂すと云ふ說話をも、その儘取り入れてゐる。但し、忍之助なる主人公の行動は、ある點に關して封じられて居た。卽ち見聞きする事のみを免されてゐるので、凡て傍觀的態度に出ねばならなかつた。換言すれば如何なる場合にも性の飽滿は免されない。こゝがこの作者の私かに新味として誇つたところであらう。例へば美しい娘のある家に隱身で忍込み、決りかけた養子の缺點を擧げる。それを二三日つゞける。その家では聲のみ聞えるので眞の神佛の御告と思つて緣談を中止する。而して明日これ〳〵の風體の男が店先を通るがそれこそ理想的の養子だと告げる。翌日隱笠をとつて現はれ、神から授つた養子として迎へられる。たゞ新枕に際して、封じられてる事を今日だけ免して貰ひたいと觀音さんに祈るが一向聞屆けられぬ。そこで「つらさは秋の小夜嵐、又笠かぶりて足早に此程は御雜作(おぞうさ)にあひましたと云ひ捨にしてどちらへか」立去つた。好色の心はもとのまゝで肉身のみが封じられて居る。大袈裟に云へばこの心身の矛盾に惱むさまが哄笑を誘起するので、作者の豫期も讀者の興味もこゝにあつたのであらう。

榮華一代男なる題名は云ふまでもなく一代男の聲名によつて改題したものである。而して序文に松壽軒西鶴の異名を見るがこれが却つて西鶴らしくなく思はせる。一體西鶴の好色本は全般に亙つて署名がない。唯それを見るのはこの篇と眞實伊勢物語との二篇でこれあるために疑念を挿ませる。しかし文體作風から云へば悠揚な調子と巧緻な敍述とによつて、輕々と運ぶ印象的な筆づかひは、一代男や一代女を聯想せしめる。たとへ西鶴でないまでも餘程よくその、こつを呑込んだ才人の手に成つたもので、好色本中の一佳作たるを失はない。

この書の趣向は當代に於て目新しく感ぜられたのか後世に及ぼした影響は甚だ强く、八文字屋本の魂膽色遊懷男を初め、榮華遊二代男、同三代男、同世繼男、色道修行男、同後日男、等の類本が續出し、引いては江戸期の黃表紙や滑稽本にもこの趣向を學ぶものがあつた。

寶永五年版の風流吳竹男も亦同じ流れを汲むものである。風流の二字を冠らせたのは當時好色本の一分野として、隆運に乘じた風流草子の感化によるものであらう。しかし風流草子が古典文學に結緣して一新體を作成したのと異なり、吳竹男は遂に單なる一代男の末流に過ぎない。

ある町家ののら息子甚吉が遊蕩のために勘當せられ、淺草に露店を張つて居るうち、さる後室の目にとまり男妾となる。後室が臨終の遺言によつてその侍女と夫婦となつたが、持つて生れた地金でまた遊び初め、夫婦別れをして日光へ行く。日光の僧房で念者の事から刃傷沙汰に及び、江戸に出て武家奉公する。こゝで殿樣夫妻の寵遇をうけ腰元と婚儀を結ぶ。一方親父は息子の行末を苦にし六部になつて廻國に出掛けたまゝ歸らない。後を託された手代が、いろ〳〵搜索した果、ふと甚吉に邂逅する。こゝで遺產を受け勤勉なる町人となりすまして繁榮するに終る。

かくの如く境遇が走馬燈のやうに變化して所謂獻立があまりに多い。しかもそれが

緊密なる因果關係の上に成立して居ないから取材の混雜を思はしめる。多少の說明はあつても放蕩息子が日光で戀敵を打とめる手際や、武家奉公の際に經書の講義は不調和の甚しいものである。又日光山の緣起めいた敍述や遺產相續後、昔馴染の遊女の眞心をためす條の如きは疣贅の感が深い。その上主命で腰元との婚姻が二度まで出て來るのは場合が異なるにせよ拙劣な行方である。大體から見て好色本の世界たる淫蕩生活を初め、武家物の一面に觸れ町人物の題材をも提示して居るが、そこに緊縮すべき緒くゝりがない。思ふに西鶴本のあらゆる方面を纖合せ取つくろつて一篇を構成した寄木細工のやうな作品である。卽ち時代の片影を斷片的に表現したと云ふより外に意味がない。たゞ當時文壇に漸く動きそめた新機運——脚色ある作品をものする風——と相通ずるものがあるのが、とも角も取柄であらう。

序文に見える武江忍岡のほとり飯山氏錦裝と云ふのは單なる序者か又作者であるか不明であるが、同じ年、武江忍岡某作にかゝる關東名殘の袂と出版書肆も同じく畫風も同じところから見れば或は當時多少知られた作家ではあるまいか。因にこの書の版元は江戸駿河町泉長兵衞で當時の東都にもこの種の書の行はれた事が推測されるのである。

吳竹男より二年遲れて風流永代男が現はれた。この表題は寬濶平家物語と呼ぶのが正しく、京之助色盛なる主人公の享樂生活を描いたものである。題名の示すが如く當時の風流草子の影響が甚しく鮮明である。豪奢のさまを平淸盛に擬したのが寬濶平家の名ある所以であるが、內容は純然たる好色本で、一代男世之介を父とする京之介は「天和の始、神無月二十七日女護島へ渡り再び歸國なければ、かの出船の日を命日として今年三十六年に相當るにより」とて法會を行つて居る。その馬鹿遊びの一例は

昔より酒に醉ひしものはあれども菓子に醉狂するはなし。我試みに醉て見せんとて、饅頭一つを銀五百目に申つけて、さすがに都の商人二言と申さず請合ひ翌日饅頭一つ、七八人して舁込

みける。その眺め富士の山を臺に載せたるが如し。

の類である。而して遊興の度を過ごしたがために妖相異形、蛸蟹の姿となつて安藝の宮島に發生したと云ふ。これは不健全な社會の風潮に對する諷刺と見られない事はないが、要するにこれも亦面白半分の遊戯的文字たるを免れない。

西鶴の一代男の結果は行衛不明に終つて居る。その後を享けて筆をつけたのが和漢遊女容氣五卷である。この書は安永二年の再刻本に榮世華繼男と改題し題簽には「一代男後日譚」とある。題名の示す通り一代男の後を引くと共に、榮華一代男をも顧みて居るのである。

内容を見るに世之介の後日譚は第一卷に限られて居る。女護島に渡つた世之介は島の女王、玉夫人と配して榮華を極める。そのうち王妹潤底女と語らひ夜陰に乘じて島を逃れ出でんとする際、追手の女軍にとり圍まれ、世之介初め七人の末社は遂に命を殞す。(このあたりは何となく今昔物語卷五にある「僧伽羅の話」を思はせる)。

この一段に描かれた女護島は、ともかく日本以外の國土と云ふ漠然たる思想の下に取扱はれて居る。樓閣重疊、玉の甍と云ひ、虹の梁、金銀球玉を鏤めたる階と云ひ、堆朱の香盤、瑠璃の香爐、唐絹の裝束、雙鬟の童女と云ふが如く、作者は想像の翼の伸せるだけ伸ばして異國情調の豐溢を示さんとした。併しこれらは當代の人々が既に唐土とか龍宮城とかに就て具象化して把握して居たもので、讀者の想像と一致する點に於てのみ效果があつたであらう。且風によつて孕むと云ふ傳説や隣國裸切島の女王が奇策を弄して男を奪はんとして失敗する挿話を以て更に珍奇な色調を添へて居る。さりながら女護島の敍述も、底を叩けば島原難波、あるは長崎の遊里情調と何等の徑程が認められぬ。

第二卷に入ると舞臺は一變する。小舟の中に潛伏して居た潤底女は波に搖られ〳〵て肥前平戸に漂着し、世之介の忘れ形見を生み落しその身はこの里の土となる。その

時長崎一官、一名奇妙の半平と云ふ男が赤子を拾ひ取つて養ふ。かくて年十七になつたが何よりも渡世のたつきに迫られ「飴をねり覺えて長崎三官飴となづけ浦々を賣廻るに極めて外の飴より和かにして堅うないと評判し、直ぐにその名に呼びて加藤内三官飴と普ねく世上に名を」知られた。養父が歿してから大阪に出て偶然さる大盡に「世にも似た男があるかな、われら一家の二代男世傳の若盛りそのまゝ」と認められ、素性を洗へば世之介の落胤、世傳とは繼兄弟と知れ、降つて湧いたやうに世傳の跡目をうけ世繼之介と改める。

この卷に於て、世之介の遺兒が日本へ再び渡る趣向は、全く近松の國姓爺の影響で、鄭成功父子の事蹟を踏襲したものである。本書を一名色道極錢也と云ひ人物に加藤内など呼ぶのを見ても、この間の消息は明かである。而して第三卷以後は一躍大盡となつた世繼之介の放縱なる歡樂生活で、一代男以後幾度が繰返された場面が、多少の趣を換へて現はれて居るのに過ぎない。

かう見て來ると此作品の中心興味は云ふまでもなく島渡りの一條にある。從つて世之介後日譚が重要分子となつて、世繼之助の生活は普遍的な遊蕩の埒外から出でず、甚だ月並なものとなり終つて居る。しかも後半の三卷は世繼之助に關するもので一篇の主要人物たるを失はない。卽ち構成上緊密なる核心のない作品と云はねばならぬ。この點は仔細に考察するに從つていよ〳〵その傾向の顯著なるを覺えしめる。例へば第二卷で半平が遊女を欺いて古金襤の蒲團を捲上げるところ、第三卷で世繼の妾が女裝せる男と通ずる紛紜、又は第四卷から五卷にかけて世繼と狎妓との關係やら、その妓を手代に遣して後の一騷動は、呼應對稱を以て紛糾せる說話の絲を縋まし、かなりに複雜な仕組の上に立つて居る。特に最後の段の如きは讀本のそれを思はしむる程、因果關係が濃密である。しかしこれらに於ける世繼之助は、むしろ客體となるか或は全然無關係なものとして現はされて居る。故に全體の結構として見る時は說話のわたし込みに精粗が著しく目立つて、均齊整正の趣が甚しく缺乏して居る。以上の理由で

私は和漢遊女容氣の價値に多くを囑望する事は出來ない。而してこの書の創作年代に就ては最後の節に「今年の冬は又世之介の三十三回忌、竝にその作者二萬翁西鶴法師が二十五年忌、一所に都に弔ふべし」とあるから見て西鶴歿後二十五年卽ち享保二年、とは確かに云へないまでもその頃の作と推定せられる。作者の名はないが時代から作風から、江島其磧ではあるまいかと思ふ。

以上の數篇は一代男の類本のうち重なものだけに就て述べた。これらは皆題意のみならず內容に於てそれ〴〵繼承するところがあつた。しかし浮世草子の世界は既に動搖しつゝあつた。張本人西鶴すら早くも武家物町人物と目さきを換へて自己の道をつき進んだ。彼に刺戟せられた好色本作者も幾多の新趣向を凝らさねば讀者を繫ぐ事は出來ない。何等かの新味、意表に出づる工夫は期待され囑望されつゝあつた。こゝに於て風流の名の下に古典と結び傾城の名に隱れて俗眼を眩惑しようとした。この大勢の間に介在して猶好色本一流の惡寫實のみを生命とした一派の作品がある。例へば貞享三年の色里三所世帶五卷、同七年の眞實伊勢物語三卷、元祿六年の好色小柴垣五卷等はこの種のものである。特に前二作は西鶴の筆として一般から認められ、ある人は「あくまで藝術的作品にしてこの作者の人格にある程度を加へた」と評したが、どの點を捕へて云つたのか判斷に苦しむのである。文辭こそ好色本中に優秀な位地を占め得べきであらうが、露骨なる性欲描寫の連續は決して作者の人格を云々すべきものではない。小柴垣の作者には醉狂庵の署名があるが何人か不明である。いづれ太平の世に蠢めく、いたづら者の筆のすさびであらう。この傾向が一歩蹈出せば、もはや春本の領域に入るので、時代の頽廢を裏書する史料とはなるが、決して藝術を以て云爲すべきものではない。

二　當代の教訓小說に於ける西鶴の反影

教訓小說の目的が啓蒙開發にあるのは云ふまでもない。作家は自己の立場より一段低いところに世間を置いて掛る。卽ち作家對世間の關係は前者に一種の優越感が伴はなければならぬ。從つて作家の創作的態度如何によつて說法となり諷諧となり輔導となり又皮肉ともなるのである。西鶴の創作中にあつて本朝二十不孝の如き教訓味の明確なるものは勿論、町人物も亦この傾向が著しい。これらの作品から、當時の作家や後代の人々が享けた影響は廣く且深いものであつたであらう。しかしそれを一々的確に闡明してゆく事はこゝには免されない。故に今は當代の作品の中から代表的と思はるゝもの二篇を擇び、單に西鶴模倣の痕を指摘するのみに止めず、作品の基調にも及ばうと思ふ。

その一として月尋堂の今樣二十四孝を擧げる。

月尋堂は北京散史、また篆書にて看花齋と讀まるべき別號あり、又用心記の序には「定延狂書」「廉長」の押印あれどもまだその通稱を考へず、其作は多く京都の書肆より出版せられ、北京散人と號するによりて考ふるに或は洛北の某所に住へりし人なるべし。畫家などの例によれば號の頭字に月の字を有するは多くは桑門の人に屬す、そも〳〵月尋堂は俗なるか僧なるか、看花と云ひ月尋と云ふ、いかさま世塵をさけて風流を望むの意ならんがさるにても看花齋とは餘りに通俗過ぎたる號と云ふべし。思ふにその頃さる寺の住持などの世を忍ぶ戲れの名にや、よし歷々なる僧籍にある人ならずともたしかに長明兼好のあとを慕ふ世捨人、彼は松雲子了意の徒ならねば、恐らく西鶴が流れを汲む隱士なるべし。（列傳體小說史）

彼の作風から見れば右の推測は妥當なものと思はれる。彼の著作を見ると、寶永年間の刊行たる今樣二十四孝、兄弟善惡車、子孫大黑柱を初め、歿後の出版武道眞砂日記、世間用心記等皆教訓物に限られて居る。この點は暗に作家の素性人物を物語つて居るやうである。

さてこゝに論ずべき今樣二十四孝は、寶永六年の刊行で、その題名が示す如く支那

傳說の二十四孝を粉本として居る。且、淺井了意の太和二十四孝の後を追ふと共に西鶴の本朝二十不孝を裏返しに行つたものである。而してその密接な關係が西鶴のそれにある事は注意せねばならぬ。

此作に現れた社會相を見るに、各方面に起つた事實をば「孝」によつて抽出し、「孝」によつて總括して居る事は云ふまでもない。しかし二十四話を通じて見る「孝」なるものは甚だ特殊な色調を帶んで居る。親のためならば他の道義は凡て蹂躙しても構はないと云ふ態度が說話の主人公に著しく見える。親の困厄を救はんがために寄託金を消費する男があれば、火事場泥棒を敢てする侍が居る。又緣遠い主人の妹の弱點をつけこんで金を捲き上げ、親のためにしたと思つて居る下男もある。これらは皆、後日その罪を謝するの態度に出ては居るが、要するに西鶴の永代藏などに現はれて居た一種のマキアベリズムである。これは「孝」なる道義的觀念に絕對的權威と價値とを附與した結果に外ならないが、かくの如きは完全なる道念の發露とは云はれない。「孝」の色彩を顯著ならしむるに、或は效果があるにしても、啓蒙を目的とする敎訓的物語としては、甚だ偏頗な性格を描いた事になる。しかも作者はこの種の行動をも許認するのみか、剩へ賞讃の語氣さへ洩らして居る。かくの如き道德的不具者の行爲が、人格活動の善良なるものではないのは勿論の事で、作品の本質上、大なる缺陷と云はねばならぬ。私は更に親のためとの理由の下に、白人となり遊女となつて、婦女の貞操を泥土に委する、當代の觀念に就ても考慮の餘地があると思ふ。これは今樣二十四孝のみに限られた題材でなく、江戸時代に於ける社會の活問題であり、且文藝上には幾多の類型を發見する。彼等の心理や、その根柢にある儒敎思想に幾分の理解は持ち得るが、私はそれ以上に、人間の個性、種族の至醇を尊重するものである。從つて婦女の貞操に絕對値を認めるから、かの一群の子女の行爲の如きは道學的痳痺にかゝつた病的現象として排斥したい。

孝なるものが、一面沒我の上に立つ犧牲的精神の發現である事は云ふまでもない。

こゝに現はれた所謂孝子の心情は皆この點から出立して居る。「八年の恨は夢の尺八」に於ける仇討、「養老酒德の門」に於ける老母に對する夫婦者の孝養は、困厄と貧窮の痛苦をよく凌駕して後、幸福の順境に到達する徑路を示し、教訓物として最も妥當のものであらう。これが更に昂じると、親の愚を隱さんために、己れも暗愚の眞似をして親の歿後その英資を發揮した者、（天下一番の大たわけ）。養母の横戀慕を諫めんために斷根した男、（我が思ひは炙の皮切）の方面にまで外れるのである。この種の思想は孝としてはむしろ脱線の氣味である。もし夫れ、遊興中にても必ず一度は父母を省する遊蕩兒（竹に生るゝ鶯大臣）や、神鳴嫌の父を持つた悴が、今宵こそ忍べと戀仲との約定の夜折からの大雷雨で、このヂレンマに懊惱の末、戀をすてゝ孝に走る（千世を一夜の神鳴）の如きに至つては、作家が眞面目にその孝德を讃美するだけ馬鹿らしく感せられる。これらはむしろ或る特殊の人情を捕捉した作家の技能のみを買つてやるべきであらう。かくの如きは他の遊里趣味の說話と共に、嚴肅なるべき訓蒙の書にも時代の陰影は爭はれないと云ふ事實を語るものである。しかしこの反側に立つものに、ある長者の庶子に生れた棒手振の六兵衞が養家の恩義に感じて百萬分限の相續を斷々乎として跳ねつける「一萬兩に換ゆる糠籌」。先代の恥を身に徹した男が、いつかな當の家に頭を下げぬ「相手向ふ位牌の喧嘩」の二篇がある。これは優柔なる社會の半面に又剛直不撓の意地のあつた事を示すものであらう。

他の特質としてはこゝにも怪異分子の跳梁がある。猫が恩返しとする、鶴が出る、火の玉が飛出して仇の在家を教へる、死んだ嫁が姿を現して姑を煽ぐ。此超自然の現象は一方に又因果物語の流風を交へた。見知らぬ人の幽靈にその母の保養を託せられ、遙々尋ねると別れて程經た眞の母であつたり、京に歸つてある白人と契り、その母に逢つて見ると己が實母で、女は亡き兄の妻であつたりする。もし說話とその先蹤に就て一二を拾へば「竹に生るゝ鶯大臣」のうち毒藥を調じた悴が狼狽の極、自ら仰いて死ぬのは、二十不孝の「今の都も世は借物」から脱化し「新鶴石」で雲の間の怪物

が亡主の作り聲するのを下人が射落すのは、同じく二十不孝の「ほんにその人の面影」と同巧異曲と云ふべきである。

今様二十四孝は右の如く種々の社會事相を備へて居るし、これを結ぶ「孝」の觀念も甚だ多樣なるため自然その色調は模糊たるものになつて了つた。序に於て「郭巨が子を埋む無分別」などゝ暗に支那に於ける孝道の見解に非難を加へて居るが、月尋堂自身の「孝」に對する觀念も理解も不徹底な點に於ては互に徑程がない。しかし低級な當時の讀者によつて作家の豫期せる希望は滿たされたであらう。

文章に就て一言すれば

過ぎ來し秋の末より妻女伏し病みて、ちりの鏡に面痩せを恥らひ、次第に元氣衰へ、針藥の驗、あだに、惜しや二十三歳、梅の花さへ未だ見ぬ枝に、比翼の鳥の翼を離れて十二月二十六日の夜の雪、春より先きに消えし命、哀れや。（卷一、世の人の鏡山）

戀の國に飛ぶ螢、風ちりて一脚の村雲、ふり出す雨は竿竹に等しく、濡れて厭はし忍ぶ夜の仕合せと心に嬉しく、行惱むも面白きに、とゞろきの神、ひしやり〳〵ごろ〳〵と東西の分ちなく、いくつか響き渡りて落ちかゝる空の氣色、孫太郎、親父の事思ひ出すに……（卷四、ちよに一夜の神鳴）

の如く西鶴摸倣の痕跡が至るところに指摘せられる。先きに擧げた說話の先蹤と云ひ、これと云ひ、又題名と云ひ、この作品が西鶴の後塵を趁つたものである事は否定し得ないであらう。

その二としては北條團水の日本新永代藏を擧げる。これもまた、題名、說話、文章の諸點に於て西鶴の遺風の蔽ふべからざるものである。

この作は正德三年版で作者の歿後二年にして世に出でた。標題の示すが如く日本永代藏の流れを汲むもので、その描ける世界も亦永代藏の埒外を出ない。商機に對する細心精緻な用意と、業務に於ける勤勉眞摯な態度とを推讃し奬揚し、これに關するさ〴〵の物語を集めて批判の種、教訓の材としたのである。

その云ふところ説くところは他の教訓物と殆んど軒輊すべからざるものであるが、此作家自身の口吻をかりて、町人の心得とも云ふべき箴言の二三を拔萃すれば

ひすらこき人の立身出世したるためしなし、商人は隨分手堅く律義にすべし、一旦は如何にも手ぬきのなるものなれども、一代する家業に疵をつけられ、得意相手なくなり自然と身代潰るるものなり。（卷三ノ三）

よき事も續かぬ物と思ひ、銀もうけのある時節に仕末第一にすべし、仕合の向ひたる時に一のし延さざれば、一代大身代には得ならす、又左前なる年はよく〳〵心を靜めて萬事出過ぎぬやうにして肩のよき人に竝んで商の思入れをすべし。（卷三ノ四）

の類である。かくて貨殖の道をいそしみ、長者分限の域に到達するのが商人としての彼の理想であつた。彼はこゝに幾多の才覺者の逸話を臚列して、敎誡ともなし指針ともなさんと試みた。しかし世上には正道を踏むもののみでない。むしろ商略上の權謀術數の奇を弄して得たりとするものが多い。「當世見かけの商人ありて人をなづくらんために、町の衆を舟遊びに誘ひ、琴引女を呼びよせ、女房の一門をいさめ、初鮎、淺瓜のはしり直段かまはず見せさきにて買取り」ながら、しかも「人の物借らるゝ程は借込んで帳面こしらへ、身の取置きをあぢにもくろみ、四分にあたらぬ分散してさらりと萬をすます調義、さりとは手をさし出してする盜人にもまさりし人心、油斷あるべからず」とあるが如き、當代一部の商人氣質を曝露したものであらう。

又、「下人一人も使はず、丹那と云ふ者もなく、朝夕も通盆なしに女房の盛手をひに腹ふくるゝればとて、本望と思ふは腑甲斐なき事ぞかし、これを無念と思はゞ片時も家業に油斷すべからず」と云ひ「町人は親の讓りをぬく〳〵と懷手して貰ひ、生れながらの分限者と云はるゝは、さのみ願はしからず、何とぞ身一代に稼出して、その榮を子孫に殘す人ぞ有がたく目出度けれ」と云ふが如き作者が努力奮鬪を生命とした町人觀を覗ふ事が出來る。

更に彼が傾倒せる商人の面影を見よ。

艱難苦勞をしてもうけてためて、我に讓られしに、われいまに親仁の代より身代を引請けて金一萬兩え延ばさず、しかれば不孝の第一、冥加恐ろし。われも親仁の如く一生に二萬五千兩もうけし後は、遊樂に金一歩などは使ふまじき物にもあらず、まづそれまでは一錢のあだ遣ひ、身にこたへて恐ろしと申されぬ。この志誠によつて八右衞門一代に三萬兩の金子を仕出來し都合五萬五千兩を一子八右左衞門に讓られて、隱居の後、京にて山本掃部を招き、一夜遊興の初めにて、是又一生の收めとて、河東に集る機嫌とり等を殘らず召し寄せ金子百疋つゞ、しかも折紙つけて送られける、人はかくてぞ誠の遊びと云ふものなり。（卷六、第一、金子の折紙、正直な伊勢の商人）

高遠なる理想でもなく深奥なる談理でもない。作者が誘導せんとする境地は眞率にして摯實なる商戰の巷であつた。從つて彼の町人觀も機略の養成法も共に常人の思惟し考慮する範圍から遠くない、至つて平凡なものである。思想が平凡なだけに當代の商人に取つては最も切實な感がある。しかしこれを創作として見る時、その表現法に留意しなくてはならぬ。この結果より見れば新永代藏の敍述は抽象的論議が餘りに多く挿入せられてゐると云はねばならぬ。一篇毎に說話の筋はありながら、むしろこれによつて御談義をするの傾向が著しく目立つ。敎訓物が時に、通俗倫理に流れ易い弊を明確に現はしたものと云へる。

作者は敎訓味の主調を强めんがためか、露骨なる勸懲主義の因果話を少なからず織込んで居る。「六十餘州、紙の來歷男」では、友の妻を竊みその家を橫領した男が、盲目となつて乞食にまでなり下るを敍し「佛の箔を削る貪欲の飽」では、京の眞如堂の請取普請に不正を働いた大工が男盛りに無病の腰ぬけとなつた事を語る。又主人のものを掠めとつた人の、子供（兄妹）が互に密通したために老の身を入水する「百人一首を八十八の手習」や、寺の資堂金を着服した爲に狂ひ死する「錢の穴より天道の惠」等は皆因果應報の理によつて衆俗を敎化せんとしたものである。

致富の要訣、貨殖の方針を示すのを積極的敎訓とすれば、この勸懲的態度はまさに

消極的と云ふ事が出來る。作者はこの二面より商賈を敎導啓發せんと試みたのであつた。かく多少の特質を把持するとは云へ要するに永代藏と規を一にし路を同じうするもので、未だ敎訓物としての新開拓を此處に求むる事は出來ない。しかのみならず先人の作品の題材をそのまゝに流用した點も間々見受けられる。一二の例證を擧げるならば「正直は一端の木綿商」に於ける岡屋が浮世小路の隱し宿で、隣座敷に耽溺する江戸の手代と賣女とのさゞめ言から、端なくも商機を察し、卽座に京に上つて買占めるのは西鶴織留卷一の「津の國のかくれ里」と同一說話である。唯、一は東國の大風によつて米價騰貴を察し、一は將軍家の慶事によつて卷絹の需要を知つたと云ふ、品物の差異のみである。（又「十二の銀藏に鷄の空音」は旣に幾度か取材せられた淀屋事件で、この標題の如きは正しく寶永二年錦文流の栄（からなし）大門屋敷に現はれた金鷄傳說である。）これらは猶、その關係が明瞭であると云ふのみで、團水が換骨奪胎の趣を認め得ないでもない。しかし「內儀の笑顏は二十五間の家」（卷二、第三話）に於ける敦賀の老舗彌三右衞門が家構へ、暮しざま、及び客あしらひに關する敍述は西鶴の永代藏の「舟人馬方鐙屋の庭」（卷二、第五話）のそれと、全然同一で、趣向文章の剽竊を非難されても仕方がない。その他はそれ程でなくても、西鶴の諸作から流用した辭句は所々に散見せられる。かの「火燵松千貫目の翠」の中で商人の愼むべき事、なすべき事を項目にして擧げたなども、永代藏に見えた「長者丸」の處方を蹈襲したものに違ひない。

新永代藏はかく西鶴の摸倣改竄の跡が著しい。取材の範圍、表現の方法に於ても亦在來の町人物敎訓物から多く凌駕して居ない。從つてこの一篇は團水の作としては或は佳作の一であらうとも、まだ史上の傑作を以て免す事は出來ない。

團水の事は第七章「西鶴本」の章に於て多少述べたが、彼の略歷に就て一言する。俳家奇人談によれば「難波俳林の一人にして、はじめ椎本才麿が門人となり、白眼居士と號す、生涯淸貧を樂しんで阮籍が操を守りき」とある。彼と西鶴とは同じ談林風

の俳諧によつて、結び付けられたらしい。彼が西鶴の門人として、歿後創作界に重きをなしたのはむしろ先師の遺德に據るもので、當代に於ける西鶴黨の一部民衆から得た、隋勢的喝采の下にあつた爲であらう。彼はまた鳳城團水とも誌し、滑稽堂主人、團粹然和尙とも號した。寛文三年に生れ正德元年正月四日、四十九歳を以て生を終つた。おぼろ〳〵引くべく胸の月淸しとはその辭世である。

三　江島其磧が作品に現はれたる西鶴の詞章及び說話

享保時代に於ける小說界の一人者、八文字屋本の作家として聲望を一身に集めた江島其磧は、寛文七年京に生れた。彼の生家は名代の餅屋であつた。戰國の末、京極通り誓願寺前に大佛餅屋とて繁昌した家があつた。丁度豐臣秀吉が方廣寺に大佛を作つてからは、餅屋がその方に出來たので、この家は柳の馬場に移つた。しかし年來の商賣の御蔭で富裕なところから、その子孫は自ら豪奢に流れた。其磧も亦この遊蕩の血を享けて生れた一人であつた。（其蜩庵の翁草による）。彼は時代の陶醉的氣分に嗾かされて、若い頃は耽溺の群に投じて浮華な日を送つたらしい。彼が八文字屋のために初めて筆をとつたのは元祿十二年であるが、その以前にも松本治太夫のために淨瑠璃をも作つた。しかし彼の名聲を擧げたのは八文字屋自笑と結託してからであつた。

彼の作風は時代によつて變遷してるが、「傾城物」にあつては三味線物、談義物を創始して一世を風靡し、「氣質物」にあつてはその聲譽を壟斷して長く範を明治文學に及ぼし、「時代物」にあつては當時の淨瑠璃歌舞伎と結んで結構脚色を重要視するの風を慫慂した。その評價に於ては功罪兩面を包含して居るが又一代の大家たるを失はない。而してこゝにその史的推移の跡を顧みると、傾城物は好色本の一支流であり、氣質物は町人物敎訓物の繼承である。而して時代物の間には武家物の反影が認められる。卽ち其磧の源流は西鶴まで遡り得ると云ふ事になる。今こゝに取扱はうとするの

は、其磧の作品の評論や、內質上の史的關係の考察ではない。たゞこの場合は單に彼が西鶴から得た詞章と說話とを明示するに止める。いはゞ、批評でなくして、形式上のあら搜しである。要するに其磧の西鶴摸倣の程度が最も簡明に捕捉せられる便宜上の行き方に過ぎぬ。

美しいと見る襟あしの、流るゝ汗に白粉が溶けて、赤黑い素肌をあらはすのは、興ざめの限りである。情趣の豐かな、潤ほひの深い筆と眺めた其磧の詞章に、はた題材に先人の作の剽竊摸倣のあるのは、彼が當代作家の群から優越して居ただけに一入こころ惜まるゝ。

この傾向は創始の名を恣にする氣質物に於て最も甚しい。今は直ちに例證を以て、その程度の幾分を示さうと思ふ。

二十前後より商賣やめ、無用の竹杖おき頭巾、長柄の傘さしかけさせ世上構はず豐かなる顏付、いかに己が金銀遣うてすればとて天命を知らず。人は十三歲までは辨へなく、それより二十四五迄は親の指圖をうけ、其後はわれと世をかせぎ四十五迄は一生をかため、遊樂する事に極まれり。（世間子息氣質、卷一、第一）

は、日本永代藏卷三「祈るしるしの神の折敷」の一節と二三の句法の前後はあるが全然同一である。

古代は緣附の首途には親里の別れを悲み、泪に袖をしたしけるに今時の娘、おとなしく、仲人をもどかしがり、身拵を取急ぎ、乘物待兼、尻輕に乘り移りて、悅喜鼻の先きにあらはなり。（世間娘氣質、卷一、第一）

の文は、好色一代女卷一「老女の隱れ家」の章そのまゝで「今時の娘さかしくなりて云云」とあるのを改めたのみのである。又、

闇になる夜を待つて裏の高塀を越え、身を捨てゝ通へば、娘も戀より大膽になつて猿戸の鍵を盜み出し、人知れず我が寢間に引入れ、二人が命をかけて二世まで變るな變らじと互に小指を食

切り、其血をひとりに絞り出し、娘は男の肌着に誓紙かけば、男は女の下着にかき交して、後には戀の詞もつきて物言はず、泪に更けて別を惜しみ次第に募るは此道の習ぞかし。（世間娘氣質、卷四、第三）

の一聯は武道傳來記、卷二「思入吹く女尺八」を借り來つたもので一字の增減もない。更に浮世親父質、卷四を見ると「兵法を樂しむ陽氣親父」が浪人者の宅へ脇差の錺代を取りに行つた時、留守居の妹が

此着物をその代にとつて下さりませ、仕立てゝから昨日今日、二日ならでは肌につけず、これで御不足ならば帶も進せませうと、ぐるぐゝと解いて投出し、さし當りて銀子もなければこれにて御堪忍と涙ぐみて丸裸と成つて紅の二布計りになりしその身の美しさ……白髮金時からつりとるやうな親父も、じたゝと振ひ出してそもやそも、これが取つて歸らるゝものか風がな引かうと思うてかの着物とつて着せし……

は、かの一代女が縫仕立屋をして居る時、越後屋の白鼠が掛金をとりに來た「墨繪浮氣袖」（卷四）と同巧異曲とするにも、餘りに類似が甚しい。又、卷五「老を樂しむ果報親父」の中に

宵の月見しに空定めなく時雨れて、軒の松、無用の嵐を音づれ、釣灯籠の搖ぐを誰かはづせとありしに野菊かいどりして御意に從ひ灯籠を下して歸る面影、何となく肅やかに惡からぬ身ぶり、東育ちの女には尋常なるやうに御心うつりて後帶の端とらへて我に言ふ事ありと口早に仰せられしを何の御用やら知りもせずして勿體ない事をとて逃げんとするを抱止められしが緣のはじめ……

の詞章は末句を「帶はほどけて後に殘り、その身の褄重ね疎に、數多の女部屋に逃込みしは氣疎かりき」とすれば直ちに武道傳來記卷一「毒藥は箱入の命」の野澤と云ふ女の條となるのである。

以上の數項は斷片的章句、及び挿話の敍述としての別證を擧げた。而してその出典が悉く西鶴に出て居る事は、むしろ人をして啞然たらしめる。

次に掲ぐるは説話全體か、少くとも話説の骨子となるべき部分の類似である。この種のものとしては先づ四ヶ條を發見する。

一、子息氣質卷二、「大力は身の疵、身體投げた相撲取形氣」は本朝二十不孝卷五、「無用の力自慢」から。――力が減るとて花嫁を淋しがらせた男、遂に力自慢が昂じて宮角力に出て投飛され片輪者になつた話。

二、子息氣質卷四、「欲故に禍は身に引懸る虎落形氣」は懐硯卷二「後家になり損ひ」から。――頓死した人の、妻や兄弟が慾から早速形見分けとして、各自せしめた時に、その人が息を吹き返し、皆々眞情のない事が露はれて不首尾になる話。

三、娘氣質卷三、「物好の染小袖、心の英は咲分けた姉妹の娘」の前半は、俗つれづれ、卷二、「まことのあやは後に知らるゝ」から。――婚禮の晩、婿の頓死に無常を感じた娘、家のためとてまだ、入婿を迎へたが新枕の夜、有爲轉變の理を説いて契をこめず、父母他界の後、共に出家した話。

四、娘氣質、卷五、「傍輩の惡性、うつりにけりな徒娘」は本朝二十不孝卷五「胸こそ踊れ此盆前」から。――ある家の兄息子と妹婿とが他國へ商賣に出た留守、嫁が眞心もてよく姑に仕ふるに反して、實の娘は不孝の數々を重ねる。男達が歸國して娘は勘當せられ、婿には他から嫁をとる話。

而してこれらの内、布置結構の摸倣は全般に通じた事であるが、文章の點では原文の儘のと、幾分の改竄を施したものとがある。特に後者には却つて文情の見劣りするやうになつたものさへある。試みに、

桃や柿や梨の實。是ぞ蓮の葉商。七月十三日より諸一門の聖靈……家竝に世に亡き魂祭る業の哀は秋こそまされと一入物悲しく、過ぎゆかれし夫の事思ひ出して露に泪に兩袖の湊、難波橋筋に福岡屋の五右衞門後家とて。（其磧、娘氣質）

をとつて

桃や櫻や梨の子。是ぞ蓮の葉商。七月十三日の曙夕暮は麻柯の燒火して世に亡き魂を祭る業の

哀は秋なり。露に涙に兩袖の湊、筑前の國福岡の町はづれに。（西鶴、二十不孝）

と對照すれば、斯般の消息は了解せられるであらう。

猶、富淵役者氣質を檢する時は、上の卷「名殘の人形は物言はぬ鴛鴦の池」は西鶴名殘の友卷四「小野の炭燒、かしらも消え時」に、下の卷「野郎隱、蔭に身を打こむ道頓堀」は同じく名殘の友卷五「入齒は花の昔」と一字一句の差異がない。而して後者はまた、風流曲三味線の中にも取入れて「竝の岡の隱れ家」と題して居る。因に、も一つを拾へば、私が其磧第一の傑作を以て見る商人軍配團の中にある。卽ち卷三、「渡世の品玉、見せぬ所が知慧の種」で大家の主人が臨終に際し、三人兄弟を呼んで經濟上の窮迫を告げ、世間を瞞着する手段として、無い金の分配を遺書として分ち與へ、後はよきにと云ひ置いて死ぬ話は、本朝二十不孝卷二「親子五人仍書置如件」の前半と同樣である。たゞし軍配團では三男の才覺によつて再興する事になつて居る。

この外にもこの種のものがあるかも知れぬ。私は讀過の際氣づいた箇條だけをこゝに記した。かくの如きは其磧が作家としての輕重を問はるべき重大な問題である。藝術的良心のある作家の斷じてすべき事でなく、更に道義の缺如さへ思はせる。しかし一歩退いて考へて見れば、嚴肅なる詰責を與ふる事が的はづれの見解かも知れない。時代も餘り距たらぬ西鶴の諸作から題材のみならず、辭句まで丸ぬきにして知らぬ顏をして居るのは大膽か、のんきか、何れにせよ、この世の中を盲目にしてかゝつた大まかな態度に、むしろ可笑味をさへ誘起する。從つて彼が道念の癇癖を叫ぶにはあまりに張合が無さすぎると思ふ。

* * * * * *

かう書いて來ると明治文學に於ける西鶴復活の氣運を看過する事は出來ぬ。當時の一批評家は「紅葉は西鶴の才を有し、露伴は西鶴の氣を得、一葉は西鶴の趣を得た」と評したと聞く。しかし露伴と一葉とが西鶴に仰いだ點はむしろ形式上に多く、想形ともに攫取したのはかの硯友社の人々であつた。特に明治二十五年頃の紅葉であつた。

當代の西鶴復活はこれらの作家が私淑に基因するには違ひないが、その原動力に至つては文壇の趨勢が然らしめたのである。草創期の思想動搖が靜謐に歸する時、そこに文化の根源を搜らうとする風の生ずるは歷史の語る常である。江戸初期に古典攻究の自由精神が勃興したのと同じ意味に於て明治改新の後に古文藝復興の思潮が橫溢したのである。明治十八年小說神髓によつて開眼せられた寫實主義の風潮は古典文學の回顧と共に元祿期の西鶴に至つて一先覺を見出した。加ふるに當時、新文體の創始に關する懊惱が計らずも西鶴の雅俗折衷體に遭逢してこゝに理想に近いものを把握したのである。かゝる趨勢に乘じて最も西鶴に接觸したのが紅葉であつた。

この意味に於ける紅葉の代表作は伽羅枕（二十四年）と三人妻（二十五年）とであらう。前者が一代女の摸倣とすれば後者は一代男中のエピソードである。これらの點を仔細に檢すれば幾多の異同が認められるが大體として、しか斷言し得ると思ふ。これらの比較評論は、他日の機にゆづり、こゝには唯、西鶴摸倣者の跡を尋ねて時代を下れば明治文學史上の一時期には尾崎紅葉の半面があると云ふ事のみ提示するに留めて置く。

西鶴の研究 終

附錄

西鶴年譜

寛永十九年（一　歳）　西鶴浪華に生る。

○明正天皇卽位十三年。將軍家光。○如儡子の「可笑記」刊○熊澤蕃山（二十四歳）再び中江藤樹の門を叩く。

正保元年（三　歳）　○後光明帝御卽位○松尾芭蕉伊賀に生る。

慶安元年（七　歳）　○中江藤樹歿す○契沖（十一歳）僧となる○新刻大藏經成る。

△英、ヘリックの詩集「ヘスペリディス」出づ（一六四八）。

慶安三年（九　歳）　○岩佐又兵衞歿す○幡隨院長兵衞殺さる○淺草寺再建。

△哲人デカルト歿す（一六五〇）。

慶安四年（十　歳）　○「棠陰比事」刊行○家光薨、家綱繼ぐ○由比正雪の亂。

△佛の散文家フェネロン生る（一六五一）。

承應二年（十二歳）　○近松門左衛門生る○松永貞徳歿す。

明暦元年（十四歳）　○後西院帝御即位○鈴木正三歿す○市井兒童の紙鳶を禁ず。

同　三　年（十六歳）　○山岡元隣の「誰が身の上」刊○新井白石生る○貝原益軒（二十八歳）山崎闇齋に學ぶ○林道春歿す○徳川光圀大日本史編纂に着手す○江戸丸山火事。

△ミルトン「パラダイス、ロスト」起稿（一六五七）。

萬治元年（十七歳）　○伊曾保物語刊○室鳩巣生る。

同　二　年（十八歳）　○「御伽物語」刊○朱舜水歸化す○初めて清酒を製す。

寛文元年（二十歳）　○「小倉物語」刊○鈴木正三の「因果物語」刊○榎本其角生る○僧隱元黄檗宗を開く。

同　二　年（二十一歳）　○曾我自休の「ゐぐち」物語刊○伊藤仁齋（三十六歳）堀河塾を開く。

同　三　年（二十二歳）　○靈元帝御即位○正三の「二人比丘尼」刊○野中兼山歿す

同　四　年（二十三歳）　○如儡子の「百八町記」刊○了意の「堪忍記」再刊○初めて蕎麥を賣る。

△英、ドライデンの悲劇「印度女王」出づ△佛モリエールの喜劇「ル、タルチューフ」出づ。

同　五　年（二十四歳）　○西澤一風生る。

同　六　年（二十五歳）　○了意の「御伽婢子」刊○荻生徂徠生る○八文字屋自笑生る○英一蝶（十五歳）狩野の門に入る○芭蕉（二十三歳）遁

世す○山鹿素行を赤穂に配す。

寛文七年（二十六歳）

○江島其磧生る。

△ミルトン「失樂園」出づ△佛のラシーヌの劇「アンドロマック」出づ。（一六六七）

同十一年（二十九歳）

○了意の「浮世物語」再刊○伊藤東涯生る○本朝通鑑成る。

延寶元年（三十二歳）

△英のドライデン桂冠詩人となる（一六七〇）

椎本才麿、西鶴が俳諧の門に入る。

同二年（三十三歳）

○檀林全盛。

△モリエール逝く（一六七三）

西鶴住吉社頭に二萬吟をなす。

○北村季吟「枕草子春曙抄」成る。

同四年（三十五歳）

○芭蕉深川に幽居す○狩野探幽歿す。

△ミルトン逝く△ラシーヌの劇「イフィジェニー」出づ（一六七四）

俳書「柾木葛」刊。

○「萬葉集代匠記」成る○雨夜の友（小扈）刊。

△獨宗教詩人バウル、ゲルハルト逝く（一六七六）

同五年（三十六歳）

俳書「大矢籔」刊。

△哲人スピノザ逝く（一六七七）

同六年（三十七歳）

俳書「博多百合」刊。

○甲府綱重薨○江戸地震。

△英のバンヤン「天路歷程」刊△佛のド、ラファエット夫人小說「クレーヴの王女」刊（一六七八）

延寶七年（三十七歳）

「西鶴五百韻」刊。「杉やき集」刊

○芭蕉初めて宗因を見る○石清水放生會再興○越後騒動裁斷。

△獨、第二シレジア詩社の頽廢詩人ホフマンスワルド逝く（一六七九）

○光圀「扶桑拾葉集」を獻ず○狩野永納「本朝書史」を著す

○四代家綱薨じ、綱吉繼ぐ。

△英、オットウェーの悲詩「孤兒」出づ（一六八〇）

俳書「後大矢數」刊

○「浮世物語」三版成る○護國寺を武藏大塚に建つ○僧鐵眼大藏經を刻す。

△西班牙の劇詩人カルデロン逝く（一六八一）

同　八　年（三十九歳）

天和元年（四十歳）

同　二　年（四十一歳）

「好色一代男」成る（十月）

○「さんげ物語」（七人比丘尼の再版）出づ○西山宗因歿す

○山崎闇齋歿す○木下順庵召さる。

「好色二代男」刊。

貞享元年（四十三歳）

○芭蕉「のざらし紀行」出づ○書籍出版の禁令を分つ○木庵寂す。

△佛、戲曲家コルネーユ逝く（一六八四）

同　三　年（四十五歳）

「好色三代男」「同一代女」「同五人女」「近代艶陰者」「本朝二十不孝」成る。

○近松の處女作「出世景清」出づ○「諸國心中女」出づ（この作、西鶴の筆と云ふものあれど吾人これを信ぜず）○新井白石（三十歳）木下順庵に見ゆ。

貞享四年（四十六歳）「男色大鑑」「武道傳來記」「武家義理物語」「懐硯」成る。
○東山天皇御即位○百三十年間中絶せる大嘗祭行はる○
生類憐愍の令出づ。
「日本永代藏」「色里三所世帯」「新可笑記」成る。

元祿元年（四十七歳）○四書直解刻成る○この頃より犬を殺傷して刑に觸るゝもの多し。

同二年（四十八歳）△バンヤン逝く（一六八八）
「本朝櫻陰比事」「一目玉鉾」成る。

同三年（四十九歳）○芭蕉「奥の細道」出づ○北村季吟江戸に召さる○鈴木味右衛門始めてうどんを製す。

同四年（五十歳）「眞實伊勢物語」刊。西鶴を西鵬と改む（俳諧團袋序）。
○淺井了意歿す○熊澤蕃山歿す○岡清兵衛歿す○土佐光起歿す。

同五年（五十一歳）「世間胸算用」成る。
○東大寺大佛開眼供養○湊川楠子の碑建つ。

同六年（五十二歳）西鶴この年八月十日に歿す浪華寺町誓願寺に葬る。「西鶴置土産」刊。

附錄西鶴年譜終

西鶴の研究
定價金貳圓六拾錢

大正九年二月二十日印刷
大正九年二月廿五日發行

著作者　鈴木敏也　東京市麹町區飯田町一丁目二番地
發行所　株式會社天佑社　電話番町(長)一一七九番　振替貯金口座一〇一二八番
發行者　日岐久次郎　東京市小石川區諏訪町五番地

印刷所　友文社　東京市神田區三崎町三丁目一番地
印刷者　楢山定吉　東京市神田區三崎町三丁目一番地

天佑社刊行書目

圖書出版　株式會社　天佑社
東京市麹町區飯田町一丁目二番地
電話番町一一七九番
振替東京一〇一二八番

注意

近來小包郵便の遲着紛失等頗る多きを以て之が紛失を避くる爲め送本は全部書留を以てする事とせり、送料には右書留を包含しあるを以て御諒承を乞ふ

田中王堂氏著　（四六判箱入定價一圓七十錢送料十五錢）

四版

徹底個人主義

論壇の權威を以て推さるゝ王堂氏が個人主義の徹底を闡明せるものにして、論理明晰、思想高邁、實に時代思潮の精華なり。文明の歸趨を知らんとする人士は是非一讀を要す。

佛文豪ゲルモン原作　石川餓庵氏譯　（四六判箱入クロース本定價一圓卅錢送十五錢）

再版

小說　神人問答

神と若き人との問答に托して辛辣皮肉を極めたる新人生觀を說き、異教主義的宗教の祕密を道破し花の如き美人を點綴して熱烈なる戀愛を點綴したる奇小說也。

中村吉藏氏著　（四六判箱入定價一圓六十錢送料十五錢）

再版

戲曲集

白隱和尙。肉店。金力世間。小山田庄左衞門

中村氏が藝術的にして同時に實演的たる戲曲家として新人第一人たるは世既に定評あり。本書は劇壇の新機運を暗示せるものにして脚本として讀めば更に又別個の趣味あり。

田山花袋氏著　（四六判箱入定價一圓卅五錢送料十五錢）

再版

湖のほとり

紀行文大家として有名なる花袋氏の最近の紀行文を集めたるものにして清新の情調と流麗の行文は眞に讀者をして恍惚たらしめ、身自ら山川澤沼に遊ぶ思ひあらしむ。

正宗白鳥氏著　（四六判定價一圓五十錢送料十五錢）

新刊

烈日の下に

現下小說壇の最高級に立てる大家として、筆致愈渾熟し、觀照益透徹し來れるは白鳥氏也。氏の最近小說の傑作の精粹を輯めて敢て江湖にすゝむ。

文學博士　大類伸氏著　（四六判定價一圓八十錢送料十七錢）

新刊

現代世界の史的觀察

本書は史學界の新權威大類博士が世界の發展を歷史的に顧して現代の形勢を觀察したるものにして、所論多種多樣、大戰終局に際し特に必讀を要する眞書也。

岡本綺堂氏著（四六判箱入定價一圓四十錢送料十五錢）

再版

歴史小說 玉藻の前

日本古來の傳說に最も面白くして興味ある玉藻の前のロオマンスを文壇の大家綺堂氏が絢爛の筆を以て新しき立場より描寫したるものにして美しき繪卷物を見るが如し。

文學士（臨川）中澤重雄氏著（菊大判箱入定價二圓送料十五錢）

新刊

新しき科學

本書は科學者として又文學者として有名なる著者が最も非常なる速力を以て發達を遂げたる科學を叙述したるものにして一面に於て近世科學發達史と稱し得べきものなり。

文學士太田善男氏著（四六判美本定價一圓六十錢送料十五錢）

再版

信仰の哲學

廿世紀の劈頭に於て最も天才的哲學者として世界に承認されたるキリアム・セームスの信ずる意思を、充分の理解と忠實とを以て飜譯したる眞書也。

文學博士坪内逍遙氏著（四六判箱入定價一圓四十錢送料十五錢）

再版

逍遙劇談

文壇の泰斗逍遙先生、内外劇文學に於ける最新の研究結果を發表せらるゝ、いれも苦心の長論文にして劇文學の精髓を說破せるものなり。

谷崎精二氏著（四六判箱入定價一圓七十錢送料十五錢）

再版

地に頬つけて

近時文壇に淳測たる元氣を盛り返し來れる谷崎精二氏の傑作を集めしものにして其着實の上に圓熟を加へ來れる作風は、令兄潤一郎氏の作品に對照して更に面白し。

廣津和郎氏著（四六判箱入定價一圓七十錢送料十五錢）

新刊

握手

最近文壇の潮流一變せんとする時に當り俄かに傑出し來りしは和郎氏也。鋭く人生の暗面を剔抉する程に一味清新の人情味を穿ちて至誠の靈性を寓する所、他に比儔を見ざる作風也。

米國大統領ウイルソン氏著代議士關和知氏譯（菊半截箱入美本定價一圓送料十五錢）

九版

新自由主義

平和の盟主として輿望の中心たるウイルソン氏が赤心を吐露したる名著にして立論雄大、思想高邁新思潮の大勢を豫見して最高標準を道破せる豫言的獅子吼也。

與謝野晶子氏著（四六版箱入布表裝美本定價一圓四十錢送料十錢）

三版

心頭雜草

歌人として女流評論家として第一人の盛名ある著者が、戰後の新時代に入るに當り、特に其覺悟を述べたる詩篇及感想を集めたるものなり。

吉井勇氏著（四六判箱入美本定價一圓三十錢送料十五錢）

三版

百人一首物語

本書は從來の陳腐なる解釋を脱して新たなる一生面を拓きたるものにして其歌を詠じたる動機及歌意、其の詠者の傳記等を物語りて詳細を極む。

高須梅溪氏著（四六判箱入定價一圓六十錢送料十五錢）

四版

ふらんす革命夜話

華麗の文章を以て有名なる高須梅溪氏が氏一流の叙情的散文詩風の筆致を以て、悲壯なるフランス革命の眞相を、小說よりも面白く書き下したるもの也。

谷崎潤一郎氏譯（四六判箱入定價一圓十錢送料十五錢）

新刊

ウインダミーヤ夫人の扇

英國文豪オスカア・ワイルドの代表的傑作を日本文壇の鬼才谷崎潤一郎氏が飜譯したるものにして其華麗にして情味深き練達の筆は原作の妙味を充分に傳へて毫も餘蘊なし。

文學博士三宅雄二郎氏著（菊半截箱入定價七十錢送料十五錢）

新刊

眞善美日本人

明治傑作叢書の第一編にして、三宅博士が日本人の長所美醜を解剖し批評し、曾て一代の論壇を震撼したる傑篇也。久しく絶版となり居りしを新版刊行して一大記念塔を紹介す。

英國ウイリアム、ルキュ氏原作（三六判箱入定價一圓十錢送料十二錢）

新刊

露國革命まで

皇帝が惨殺せゝ露國革命の日來はゞ何。露國宮廷の內幕、敵國に通ずるの大臣、貴婦人社會の腐敗を流麗の筆を以て藤邑峰雄氏が飜譯したるもの也。

岩野泡鳴氏新著（四六判箱入定價一圓八十錢送料十九錢）

新刊

非凡人

大膽に、赤裸々に男女の性格を描寫する手法の冴えは泡鳴氏獨得の世界にして必ず終り迄讀破せずして止む能はざる底の傑作は悉く收めて本書にあり。

文學博士吉田熊次氏著（菊判大形本定價三圓三十錢送料十九錢）

四版

輓近教育問題の研究

教育學の泰斗吉田博士が多年の蘊蓄を披瀝せられたるものにして篇を分つ事五、曰く教育原論、授論、訓育論、教育評論、雜論。更に章を數十に分てる大册なり。

岡本綺堂氏新著（四六判美本定價一圓八十錢送料十五錢）

新刊

繪絹

技倆、容貌共に優秀なる二人の閨秀畫家を主人公として繞ゆるが如き藝術上の姉妹愛を描き、現代的畫家の裏面を暴露して紆餘曲折を極む。

本間久雄氏新著（四六判箱入定價一圓五十錢送料十五錢）

新刊

現代の婦人問題

著者婦人問題の研究に沒頭すること多年、本書は『蘊蓄を傾けたるものにして、あらゆる婦人問題を論じて委曲を極む、世界の新趨勢に着目する人は是非本書を一讀せざるべからず。

與謝野晶子氏新著　竹久夢二氏畫及裝幀（四六版美本挿畫入定價九十錢送料十五錢）

新刊

行つて參ります

閨秀歌人として第一人の盛名ある晶子女史が其優しき心をこめたるお伽噺なり。挿畫は有名なる夢二氏の筆になれるものにして內容と相待つて面白き優美なる書物なり。

片上伸氏著（四六判堅牢裝幀定價一圓六十錢送料十五錢）

新刊

思想の勝利

世界の生活組織が一變せんとする時に當り、デモクラシーの思想的意義を闡明し、文藝思想上の新精神を高唱して熱切透徹を極むるものは本書なり。

谷崎潤一郎氏著（四六判美本定價一圓六十錢送料十五錢）

三版

小さな王國

現文壇に於て小說界第一人者たゞ最高の地位を獨占せる谷崎潤一郎氏の傑作を集めたるものにして、芳醇美酒の如き魅力ある氏の最近の業績は本書に於て見るを得べし。

幸田露伴氏著（菊半形箱入定價七十錢送料十一錢）

新刊

風流佛

明治傑作叢書の第二篇にして露伴氏が今日の盛名あるは此作を以て始まる、本篇は實に氏の出世作にして明治文壇唯一の傑作として江湖に喧傳せられたるもの也。

村松梢風氏著（三六判箱入定價一圓五十錢送料十七錢）

新刊

梢風物語

情話物語の新進人家として名聲噴噴たる氏の傑作を輯めて剩す所なし、蓋し小說以上の面白味と小說に見る能はざる別種の趣味を感得すべし

中村星湖氏新著（三六判形箱入四百七十頁定價一圓七十錢送料十五錢）

新刊

失はれた指環

著實なる作風と眞摯なる人生觀察との上に於て現文壇の一角に異彩を放てるは中村星湖氏の傑作を網羅したる本小說集は文壇の新聲として必讀の價値あるもの也。

石井柏亭氏序文及裝幀　尾崎楓水氏　藤澤水處氏譯著（寫眞版十葉解說付定價一圓七十錢送料十錢）

新刊

增補 浮世繪の印象

本書は浮世繪汎論として世界的名著たる原著に浮世繪研究の權威たる著者が精研該博なる增補を施し、たるものにして恰かも浮世繪大辭典たる觀あり。

河井茗醉氏著（四六判形彩色美本定價一圓送料十五錢）

新刊

少女對話 鈴蘭の花

醉著氏の愛讀する讀物として、非常に面白きものなるが之に尙面白き歷史物語を加へて一册としたるものなり學校の演藝會等に使用せば優美にして詩的なる材料となるべし。

小杉天外氏著（四六判定價二圓三十錢送料二十三錢）

新刊

紫系圖

無垢の身を投じて女魔の群のに入り、翠帳紅閨の裡に幾多の波瀾を惹起し、榮華の夢未だ覺めずして展轉反側裡に戀を失ふて泣く。女優生活の裏面を描寫して艶麗を極む。

小川未明氏著（四六判箱入定價一圓七十五錢送料十五錢）

新刊

惱ましき外景

深刻なる人生描寫に獨得の手腕を有する未明氏の傑作集にして、骨を刺すが如き筆と、辛辣なる觀察とは文壇他の作家に於て見るを得ざる處也。

田中王堂氏著（三六判箱入定價一圓五十錢送料十七錢）

新刊

國民哲學の建設

論壇の權威、王堂先生、國民哲學の建設を提唱せらる、生の深遠にして高邁なる思想は此一卷に收められて陸離たる光彩を放てり。

近松秋江氏著（三六判美本定價一圓六十五錢送料十九錢）

新刊

祕密

濃艶にして清楚能く婦人の纏綿たる情緒と男性の執着深き戀心とを描破するに巧みなるは秋江氏の獨擅也。本書は其多色の最も鮮かなるものを輯めたる傑作集也。

廣津柳浪氏著（菊半形美本定價七十錢送料十三錢）

新刊

紫被布

當年硯友社派の驍將として有名なりし柳浪氏が最も會心の作として明治文壇に喧傳せられたる傑作也。明治傑作叢書第三篇として江湖に推薦す。

馬場孤蝶氏新著（中判定價金一圓五十錢送料十五錢）

新刊

鬪牛

文壇の書宿、悠然として文學社會諸方面に涉り縱談橫語を爲す。肉鳴り骨動く『鬪牛』の壯烈篇を始めとして該博の知識庫を開いて喃々低語に無限の情趣を藏し、或は蕭然たる態度哲理を談ず。老練の論議、輕妙の老筆、蓋し尋常作家の到底企及し能はざるもの也。

島村民藏氏新著（四六判美本定價一圓六十錢送料十五錢）

再版

現代文學に現れたる兩性問題の研究

本書は近代歐洲文學を通じて見たる男女兩性問題の研究にして諸家の作品を經とし多數哲人の思想を緯として諸家の作品を經とし多數哲人の思想を緯として『未遠の女性』『人間』として『個人』としての男女『異性』として男女『性』に對する『性的戀愛』と結婚『子供』の諸項目の下に異性に對する近代人の精神爭鬪の破壞と建設、現實の理想を組織的に文明史的に討究敍述したる先人未著手の新研究なり。

相馬泰三氏著（四六判箱入定價一圓五十錢送料十五錢）

新刊

隣人（短篇集）

寥々の小篇に無量の辛苦を捧げ若くして既に名匠の俤ありと稱せらるゝ作者が最近の執筆に係る短篇十九篇を集む、本書は實に氏が流血の結晶にして文壇の珍たるべきもの也。

宮地嘉六氏著（大判美本定價一圓六十錢送料十五錢）（勞働小說の先驅）

再版

煤煙の臭ひ

世界の大烽火たる勞働問題は今や我國に於ても白熱して火花を迸らしつゝあり、而も能く其核心を把握して此を生命化せる勞働文學は未だ現はれず、此時身を勞働階級より起して親しく其體驗を活寫せる宮地氏の創作集出づ、勞働文學の先聲は始めて此一篇に鳴り響けり。

新刊

解放の教育

西宮藤朝氏新著（四六判形箱入定價一圓八十錢送料十五錢）

世界改造の聲は天下に充滿す、然も改造なるものは人類の新しきカルチュアに依るにあらずんば成立せず、從來の教育にては到底此重任を全うする能はず、茲に於てか新しき教育の必要起しる一切の陋習より解放したる新しき教育を力説したるは本書なり。著者は曾て『子供の感情教育』を著して洛陽の紙價を高からしめたる思想界の新人也。

新刊

小說 颱風

萬造寺齊新著（中判定價一圓八十錢送料十五錢）

見よ驚くべき新人の新篇、突如として出頭するや颱風の如し取むる所の五篇、薩南の海角に育つて都門に學び、多感多情早く孤獨の生活に辭引弄されたる一青年の自叙傳なり。愛と憎みと率直なる反抗と何ぞ此人間性の矛盾の悲痛苛酷なるや。屢々躓き跌て絶望と重れて而かも調和統一の境地に憧れ止まず、既に平和なる生命の曉色なる遠望に、如此は實に現代の青年に共通する自己改造の苦悶動搖にあらずや。

再版

晶子歌話

與謝野晶子夫人著（四六判定價一圓五十錢送料十五錢）

與謝野夫人其熱と香味に富む才筆に由り、新たに短歌の作法を細叙して、特に象徴的短歌を鼓吹し、併せて師友及び夫人自身の優秀なる作例を講じて歌壇近時の常識主義、客觀主義、擬古主義の流行に反對し、專ら新理想主義、新熱情主義、新浪漫主義の創造を高唱せらる、大正の短歌之に由つて再び純叙情詩の花園に四季永の芳の薔薇を開かんとす。世の短歌の作者と讀者とは速かに『晶子歌話』一冊を手にせられよ。

マーテルリンク原著
木村莊太氏斯譯（菊半形箱入定價一圓送料十錢）

新刊

彼岸の光り

未曾有の大戰を終りし世界が歴史の批評をなすに先つて聞かんと欲する啓示と豫言と慰藉と審判等を文豪マーテルリンクが詩人の燃ゆるが如き言葉に依つて叙述されたるものは本書也、人は此書に依りて死に克つ彼岸の光りに接し得べし。

ベルトラント・ラッセル原著
高橋五郎氏譯（六四判定價一圓六十錢送料十五錢）

五版

社會改造の原理

社會改造の大原則を考究せる不朽の寶典は果して何處にか需むべき、福田德三博士の推稱して止まざる英國の大家ラッセルの代表作たる本書の完譯は、此渾沌たる思想界の新太陽として渴仰すべきものなり。

アナトオルフランス原著
和氣律次郎氏新譯（定價一圓二十錢郵送料十三錢）

新刊

エピキエラスの園

社會主義的大文豪としてトルストイ以後の近代文明批評家としてアナトオルフランスの雷名は今や全世界に轟く、其思想の直髓と其文華の精神は此有名なる代表作中に輝けり。

田中貢太郎氏新著（定價一圓四十錢送料十五錢）

新刊

月の夜語

新にして興味の饒多なる。最も多數の讀者を有する點に於て文壇の偉觀として稱揚さるゝ亦故なきにあらず、今や魯迅創作小說に慊らざるの聲起れるの際敢て本書を江湖にすゝむ。

近藤經一氏新著（四六判箱入美本定價二圓三十錢送料十七錢）

新刊

第二の誕生

熱烈悲慘なる戀愛の經過を、摯實大膽に描寫せる大長篇にして『白樺』誌上に連載せられ新人の新傑作として喧傳せられたるものなり。

中村孤月氏新著（四六判箱入美本定價金一圓五十錢送料十五錢）

新刊

子供の喜ぶ新知識

子供の觀てある以上は、新しい事を知りたがる子供に對してそれを滿足さしてやらねばなりません。本書は子供の知りたがる新知識數十項を詳しく說明して、少し大きくなつた子供は直接讀み得るやうに面白く書いたものであります。

平塚雷鳥女史新著（四六判箱入定價一圓六十錢送料十五錢）

新刊

婦人と子供の權利

新婦人の第一人者たる著者が當今社會改造の激動中にありて、其想念々奇警に、觀察愈々透徹、特に婦人と子供の爲に其感想を披瀝せらる。『青鞜』の昔より文名一世に高き女史の近業は悉く收めて本書にあり。

エレン・ケイ原著
原田實氏譯（四六判大册定價二圓四十錢送料十八錢）

三版

戀愛と結婚

個人的戀愛が結婚の道德的基礎たる眞理を力説して一切の因襲を破り、在來の習俗と戰ひ新しき人類の幸福なる世紀を產まんとする世界婦人界の指導者たるエレンケイの最大代表作の全譯也。

ストリンドベルヒ原著
三浦關造氏譯（菊半定價一圓四十錢送料十二錢）

新刊

新生の曙

世界的文豪の最大傑作と謳ぜられ現今の聖書と呼ばるゝ『青卷』の完譯にして其新人生觀、新人道觀を披瀝して之を趣味深き日常の談話に托したるもの、一語一句悉く寶玉の如し。

佐藤春夫氏新著（中判絹裝美本定價一圓五十錢送料十二錢）

新刊

美しき町

詩藻の豐富と纖細の觀察とを以て天才の稱を擅にする新大家佐藤春夫氏が近什を集めたるものにして全卷藝術的芳香を以て充され、收むる所の各篇悉く是れ無韻の詩なり。

中澤臨川氏新著（四六判定價一圓六十錢送料十五錢）

再版

正義と自由

卓拔の識見と犀利の眼光とを以てクロポトキン、マルクス、ラツセル其他あらゆる社會主義を批判し、社會改造に關する諸說を論駁し、其缺點を指摘して痛切を極め、其勝れるを擧げて正義と自由とを主張し、確固たる社會改造の基調を闡明せらるゝ名著也。

終